
恋月桜花 ~巫女と花嫁と大和撫子~

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋月桜花～巫女と花嫁と大和撫子～

【Zコード】

Z9045W

【作者名】

南条仁

【あらすじ】

まさに現代の大和撫子にして、神社の巫女である和歌。彼女に一目惚れした元雪にある縁談が持ち上がる。初恋の君、和歌との結婚条件は彼女の実家である神社を継ぐこと。運命の相手。互いに惹かれあう元雪と和歌。特別な縁が結び付ける、一目惚れから始まる関係とは？和風ティストなラブコメディ！

序章・特別な縁（えにし）

【SHIDE・終元雪】

色鮮やかな舞い散る桜、涼やかな風が吹いている。桜の木の下で、子供の男女が仲良く遊んでいる。小鳥のさえずり、子供たちの楽しそうな声が響く。

「しーちゃん。それは何の踊り？」

「ゆき君。これは巫女舞だよ」

「舞？踊つひとつ？」

「うん。次のお祭りのための巫女舞の練習をしてたの」

幼いながらも舞を踊る少女に少年は魅入られていた。

「すー」「しーちゃんは踊るのが上手なんだね」

「でも、大変だよ。いつも練習していてもお母様に怒られるの。私は神様のために舞を踊る、巫女になるんだって」

「みー」「それって、すーじの？」

「うん。お父様は巫女は誰にでもなれるものじゃないって言つてた」

ふたりはこの日、初めてあつたばかり。

すぐに仲良くなり、楽しく遊び、思い出を作つていた。

「しーちゃんは将来は巫女さんになるんだね」

「うんっ。頑張つてなるの」

子供たちにとつてはそれは何気のない日常の出来事。
でも、それは2人の記憶に刻まれて、遠い未来に“思い出”になる。

ふたりはそのまま、神社の本殿の方へと移動する。

「この神社にはね、縁結びの神様がいるんだって」

「縁結び?」

「大切な人と一緒にずっとといられるようにお願いすると叶えてくれるの」

2人は同じ事を願つた、互いに好意を抱きあつたがゆえに。
口に出さずとも、隣の相手ともつと一緒にいたい、と。

「えへへっ」

笑いあう子供たち、子供ゆえに純粹な願いを込めて。
それは縁。^{えにし}

人と人の不思議な繋がり。

幼い頃に数回だけ出会った少年と少女。

運命で結ばれるように、数年の時を経て再び出会う事になる。

俺は柊元雪（ひいらぎ もとゆき）。

元雪なんて言つ、ちょっと古風な名前の高校2年生だ。

それは暑い夏がせまりくる、初夏の事だった。

例えば、毎日が同じように見えて、良い日もあれば悪い日もある。

良い事も悪い事も日常の中において、突然起るものなのだ。

「……あのさ、きつくなない？」

「す、すみません。私は大丈夫です。でも、貴方が……」

「いや、俺は大丈夫だよ。これだけ人がいると女子にはキツイよね」

満員電車の中で、俺は両手を扉の方に当て、少女を守るような形で大勢の乗客からの圧迫に耐えていた。

「休日だものな。土曜日の夕方だとこんなものか」

正直に言えば、かなりキツイ。

満員電車の圧迫は身動きが取れないものだ。

でも、目の前にいるのは細い身体をした女の子。

俺がどけば、すぐにでも押しつぶされてしまいそうな可憐な少女だ。

先に言つておくが、彼女は俺の恋人でも何でもない。
見ず知らずの他人、偶然乗り合わせただけの少女だ。

ただ、偶然に俺の前にいて、放つておけずに俺が守る形になつて
るだけ。

あと少しで、人が大幅に減る、つまり、多くの人が降りる大きな

駅が近づいている。

聞けば、この子も俺と同じ駅で降りるらしい。

俺が降りる駅はその次の駅なので、なんとか頑張ることにした。それにして、女の子とこんな距離に近付けるのは久々だ。中学の時のフォークダンス以来だね……思いだして自分が悲しくなった。

今の高校に入つてから全然、女の子に縁がないからな。

「…………うつ…………」

小柄な少女は恥ずかしそうにうつむいている。

香水の匂いだろうか、ほんのりと香る花の匂いが鼻孔をくすぐる。女の子独特の匂いだ……ハツ、いかん。

ついつい変な事を考えてしまつ。

このまま痴漢扱いされたらまずいので余計な事は考えないようにする。

「んつ…………」

後ろから押されて少女と身体が少し密着する。

頑張れ、男として何とか耐えろ……あらゆる意味で。

互いに会話もなく、だが、互いの存在を意識し続けていた。それは時間にしたら、10分程度の事だったのかもしれない。だが、俺たちにとつてはものすごく長い時間に感じた。

「…………ふう」

やがて、大きな駅につき大勢の人々が降りてくれたので、俺たちは圧迫から解放される。

じつちの扉が開かなくてよかつたな。

扉から手を離して、少し距離をとると、少女は俺に頭を下げる。

「「」無理をさせてしまいました。ありがとうございます」

「いや、別に。大した事はないし」

顔をあげた彼女はとても見目麗しい女の子だった。
ホントに美少女という言葉の似合ひの子だ……。
俺は綺麗すぎる容姿に彼女から目を離せずにいた。
真つすぐな長い黒髪は艶やかさですら感じる。

お淑やかな印象を抱く外見、スッと背筋を伸ばし姿勢もいい。
多分、育ちのいい、良いところのお嬢様なんだったのは見て取れた。

残り1駅、俺たちはわずかな時間を揺れる電車内で会話する。

「今日はいつもより人が多かったから大変だったね」

「電車が事故で止まっていたそうですよ。その影響だと思います」

「へえ、そうだったんだ」

それでこの混雑ぶりだったわけだ。

……それでも、本当に容姿端麗、まさにその言葉が似合ひ。
雰囲気的にきらきらと輝いてさえ見える。

「私、男の人ってあまり良いイメージがなかつたんです。どちらかと言えば苦手ですし。特に電車内では男の人に何度も痴漢されかけたこともありますから。でも、貴方はとても優しかったです」

「あ、あはは……」

男としては苦笑いしかできない。

俺は痴漢じゃないよ？

ホントだよ、そこだけは信じてほしいよ？

心の中で焦るが、少女は俺を責めているわけではないようだ。

「貴方みたいに良い人もいるのだと思いました。親切心のある人でよかつた。男性に安心感を抱いたのは初めてです」

「ただの偶然だよ。あのままだと危なかつたから、放つておけなかつただけ」

「くすっ。貴方はとても本当に優しい方なんですね」

「こりと微笑まれて俺はドキッとする。

笑顔が魅力的な可憐な美少女。

まさに大和撫子を絵に描いたような感じ。

今時いないよね、こんなお淑やかな女の子。

だが、それ以上に強く感じるのは……俺たちは初めて出会った気がしないのだ。

まるで、ずいぶん前から出会ったことがあるような、特別な違和感はなんだ……？

『まもなく です、お降りの際は……』

残念なことに電車の中で降りる駅の名前が告げられる。
わずかな沈黙。

自然に俺たちばかりともなく見つめ合ひ。

「…………あつ…………」

「…………」

なぜか両者ともに視線をそらせずにいる。頭を何かで殴られたような衝撃^{インパクト}。

“一目惚れ”。

そんな言葉があるのだと、俺は思い知る。

今、目の前にいる大和撫子に惹かれているのを自覚する。やがて、互いに恥ずかしさから同じタイミングで視線をそらす。

「あ、あの……今は……その」

彼女は見つめ合ってた事に何か言い訳をしようとする。

「え、あ、うん……」

そして、俺もまた都會の言い訳を思いつけずにいた。少女に見惚れていたのだと正直に話す事も出来ず。

「あはは……」

ただ、2人とも恥ずかしさで顔を赤らめるしかない。他人からみれば、なんて初々しいんだと呆れるだろうが。

「本当にありがとうございました」

結局、そのまま電車から降りると、彼女は一礼して去っていた。普段から女の子に縁のない俺だが、ちょっとした良い出来事だつ

た。

「ホント、可愛い子だったよな」

くっ、名前でも聞いておけばよかつたなあ。

美少女とお近づきになれるチャンスだったかもしれないじゃないか。

なんて、ちょっと下心を出しそうになる。

ぜひとも、また偶然でもいいので再会したものだ。

偶然の出会いとは言え、彼女に心惹かれている自分がいる。

「ちくしょう……せめて名前だけでも、聞いておるべきだった

後悔というか、惜しい。

まあ、どうせ一期一命、もう会う機会はないだろうけど。

「また会いたいな

俺は夕焼けの空を眺めながら、そんな事を呟いていた。

運命なんて信じていなかつた俺だが、この時ばかりは運命を信じたくなつた。

第1章・突然の縁談

【SIDE・柊元雪】

夕方の満員電車で可憐な大和撫子と出会った。
滅多にない美少女との心の触れ合い。
俺はかなりいい気分で家に帰った。

「ただいま～」

リビングにいたのはソファーアで新聞を読む親父だった。
長い口髭が特徴の親父はゆっくりとこちらを向いた。

「おう、元雪（もとゆき）か、おかえり。どこかに行つてたのか？」

「ちょっと友達と遊んでた。あれ、親父だけ？母さんは？」

「母さんなら、今日から2日ほど麻尋ちゃんと旅行に行くと言つて
おつただろ？」

「そりだっけ？また旅行か。楽しそうでいいよなあ

母さんは旅行好きなので出かける事がある。

うちの親父は従業員80名ほどの町工場の社長だ。
主に自動車の精密部品を作つてゐらし。

会社の技術力は高いようで、日本はもとより世界各国からも注文
がくる精密部品だそうで、この不景気でも潰れずに、それなりに儲
かつてゐるらしい。

「今、誠也が弁当を買いに行っている。お前はいつもから揚げ弁当でいいのだな？」

「うん。それでいいよ。から揚げ弁当は量が多いからね」

買い出しに出てる誠也（せいや）といつのは俺の兄だ。
そして、母さんと旅行に出かけたのは兄嫁の麻尋（まひろ）さん。
兄貴が結婚して数年、一緒にこの家で暮らしている

嫁と姑つてのは仲が悪いものが定説だが、うちの場合はめっちゃ

仲が良い。

男2人の兄弟なので、母さんは娘が欲しかったらしく、すこく麻尋さんを可愛がっていて、麻尋さんも母を慕い、今のところ良い関係を築けているようだ。

たまにふたりで旅行なんて言うのもあるくらい。

残された男3人で弁当生活つてのも何度目かのことだ。

「たまには親父と母さんのふたりで旅行とかないわけ？」

「母さんと旅行に行きたいが、最近は麻尋さんの方が仲がいいからな。嫁と姑の仲がいいのは悪い事ではあるまい」

その兄貴は親父の後を継ぐために工場で働いてる。

ちなみに、俺は将来、その工場で働く事は考えてない。

うちの親父も兄貴さえ工場を継いでくれればいいようで、俺には強制していない。

大学も職業も、自分の好きなように将来を決めるつもりだった。

「そうだ、元雪。お前、自分の将来を考えてあるか？」

「な、なんだよ。急に真面目な話か？別に特に今は考えてないけど

？」

「なりたい夢とかないのか？その年で夢も希望もないとは……」

「これと書いて、なりたいてのはないかも。あと、希望へりこあるつてのー？」

親父に言われるまでもなく、自分の将来を考える事はある。でも、これと書いた夢があるわけでもない。可愛いお嫁さんがいて、子供がいて、その家族を養うために適度に稼ぐ。

そんな普通の日常を望んでいるだけなのだ。

「ふむ……元雪、お前、恋人はいなかつたな？」

「うぬれことよ。どうせ、俺はモテないよ、悪かつたな」

「我が息子として顔は悪くないぞ。昔のワシにそっくりなになぜにモテない」

「あもつー。親父に容姿を褒められるとなんか嫌だ。精神的に気持ち悪い」

親父は「お前は女子高生の娘か」と嘆かれる。

誰が娘だ、ていうか、俺の容姿は間違いなく親父ではなく母似だ。

「なるほど、性格が問題か。はあ、それじゃモテんわな」

「親父から言わると何か嫌な気持ちになる。俺に彼女がないのが悪いか。余計な御世話だ、放つておいてくれ

「いや、今回こそこれが重要なんだがな」

「ん? 何だよ、親父。俺に恋人がいないのが何か問題があるのか?」

「ちよつと良い話があつてな。息子よ、お前に……」

親父は何かを話そうとした時、玄関の扉の開く音がある。リビングに帰ってきたのは弁当の入った袋を抱える兄貴だった。

「ただいま、父さん。弁当を買つてきたよ。おや、元雪か。おかげ

り

「うひっす。兄貴もおかえり」

タイミング良く帰つてきたのは兄貴だった。

俺の兄貴は26歳、俺とは歳の差もあるが頼れる兄貴だ。

「麻尋さん、また母さんと旅行だつて? 大事な嫁さん、母さんに取られてるよ、兄貴」

「仕方ないさ。麻尋もずいぶんと母さんを気にこなてるからね。無駄な嫁姑問題に泣かれずにすんでいいだけマシや」

「ふーん。やうごうものなのか?」

「結婚して一番問題なのは互いの相性、2番目の問題が嫁姑問題だと父さんも言つてたしな。なあ、父さん?」

「……つむ、そうだな。母さんにもそれで少しばかり苦労させたか

らなあ。余計に麻尋さんを可愛がりたくなるんだろうて。良い嫁さんをもらつたな、誠也」

「どこか遠くを見る目をする親父。

「うちでも今は亡き祖母と母さんの間で、かつてはバトルがあつた様子だ。

他人同士が結婚すると言つ事は、それも仕方のない事なんだろうか。

「まあ、仲良き事はいってことだ。それより夕御飯にしよう。元雪、これでいいか」

美味しそうながら揚げ弁当。

兄貴は買つてきた弁当をテーブルに並べていく。

「あ、そうだ。親父、話つて?」

親父は「話は夕食後にしよう」とソファーアを立つ。

「一体、何を話すつもりなのやら?」

そして、男3人、弁当を囲みどこか寂しい夕食を終える。

兄貴は飼い犬の散歩をするために再び外へと出かけしまう。

俺と親父は食後のんびりとした雰囲気で、改めて先ほどの話をすることにした。

「ん……茶が美味しい」

おっさんくさいが、食後は緑茶を飲むのが落ち着く。

親父の真似をしたのが始まりで、最近では自分の好みの緑茶もある。

湯のみに入れたお茶をすすりながら俺は親父に尋ねる。

「それで、俺に何の話があるんだ、親父？」

「いきなりだが、元々……結婚する気があるか？」

「 ぶはつー？」

思わず、お茶を噴き出してしまつ。
け、結婚……誰と誰が！？

「お、親父、今、何と言いました！？」

「ぐああ、汚いぞ。結婚だ、結婚。いきなりだが、と前置きしたはずだ」

「こきなりすぎるわー！」

突然の事に驚くしかない。

親父は[冗談を言つ口調でもなく、茶をする。

「そう、驚くな。彼女のいないお前には良い話だと言つただろひつへ」

「うぐつ。で、なんで結婚の話？」

「ワシの旧友、もとい飲み友達に一人娘がいてな。奴はその子の婿にふさわしい男を探しておるそつだ。そこで、我が息子にして彼女

「くつ、恋人居ない歴」人生つて言つな。まだ16年しか生きてない歴

「くつ、恋人居ない歴」人生つて言つな。まだ16年しか生きてない歴
いつ

うーん、親父の友人つて……誰だろう。

無駄に交友が広い親父だ、俺の知らない人なんだろ。

「結婚つて、俺はまだ学生なんだが?早すぎない?」

「分かつてある。心配せずとも、相手も学生だ。まだずっと先の未来のことだが、将来的に関わる話でもあるのでな。まだ学生の方が話の都合がいい」

「は?どういうこと?」

意味が分からずに尋ね返すと親父は説明をしてくれた。
俺はお茶を飲みながら落ち着いて話を聞く事にした。

「友人は神職をしておるのだがな。街の東の方にある大きな神社の神主で、いわゆる跡継ぎを探しているわけだ」

「あー、あのでかい神社か。縁結びで有名などころだろ。知ってるよ

ちなみに俺は七五三で行つて以来、滅多に行くこともない神社だ。
場所がちょっと遠い上に、初詣くらいなら別の近い方の神社で済ませるからだ。

「神職っていうのは大学を出て、資格を取らなくてはいけないそう

だ。それに、一人娘との結婚の条件は神社の神主として継いでくれる事らしい。まあ、それ以外に条件らしい条件もないそうだがの」

「へえ、跡継ぎってのはどこのでも問題になるものなんだな」

ほほ、神社に縁のない俺にとっては神職に資格が必要な事も知らなかつた。

神社に行くのは大みそかと初詣、あとはお祭りの時くらいだもんな。

「一人娘と結婚する相手は神社の跡を継ぐのが条件つてわけか」

「うむ。だから、元雪にも最初に聞いただろ。なりたい夢はないかつて」

「なるほどね。ちなみに聞くけど、相手の子は可愛いのか？」

そこ重要、話の内容次第ではちよつと考えてみてもいい。

「とても可愛いぞ。気配りもできて、優しい子だからな。それにスタイルもいい。お前の好きそうなタイプだ。彼女の年齢は元雪のひとつ下くらじか」

「おおひ……マジですか」

「神社の神主なんて仕事は楽ではないからな。中々、奴も婿候補が見つからないらしい。どうだ、息子よ。少しは興味を持つたか」

親父の言葉に俺はちよつと悩んでみる。

「どうだろ。あんまり結婚とか考えた事もないし」

「当然、相手もいないお前には関係ない話だからな。我が息子ながら何と嘆かわしい」

「ひるむことよー? 余計な事はいいんだってば」

「うちの会社は誠也が連いでくれるので安心だが、どこでも跡継ぎに悩むものだ。とはいって、あつた事のない相手で話を考えろって言うのも無理だろ? どうだ、お前も興味があるのなら、一度会いに行くか?」

親父の提案は“彼女いない歴”＝“自分の人生”＝“16年”的俺には魅力的に思えた。

話を聞いて、相手と会つてみるのは悪い事ではない。

「実際に話を聞いて考えてみるだけ、なら

「やうか。そいつてくれると思つて、既に明日、会つ予定にしておる」

「ナンデストー? 早すぎだらつーあと俺の意見は無視か! ?」

「どうせ、お前にことだ。可愛い子と言えど、条件はともかく会いたがるだろ?」

さすが俺の親父だ、子供の考えなどあつさつと見抜いていたらしく。

「まあ、お前の将来だ。よく考えてくれ。明日、会つ事でいいんだい。

な？」

親父に改めて問われ、俺は「いいよ」と頷いて答えた。
俺の人生、女に全く縁がないのだ。
ちょっとくらい縁つてのに触れてみたかった。

第2章・美しの君

【SIDE・柊元雪】

「Jぐ普通に生きてきた俺に漫画のよつな展開が訪れた。高校生にして縁談が持ち上がってきたのだ。

そんなのはどこぞの御曹司やお嬢様の世界だと思っていたのに。俺はその日の朝からどうにも落ち着かないでいた。

「な、なあ、兄貴？ 髮型、変じやないか？」

「ん？ 普通だが、少しワックスをつけすぎじゃないか？」

「うう。だつてさあ、こんな気にしてたことがなくて」

朝から鏡の前で自分の髪型を気にするなど、俺は乙女か。そんな俺を兄貴は笑っている。

「元雪でも、そんな風になるんだな。父さんから聞いたよ。もしかしたら、結婚するかもしれない話がお前に来るとはな」

「まだ俺自身、結婚とか考えてないけどや。会つてみるだけ会つてみたいんだ」

どんな相手か分からぬが、こんなチャンスはないだろう。

「兄貴は麻尋さんとは職場結婚だつたよな？」

「僕の方が彼女を気にいつてね。麻尋も、僕の想いに応えてくれた。

良い妻だと思つていいよ。人の縁は思いがけないところで結ばれる事もある。確かに、会つだけ会つのもいい事だらう。それで、お互に気にいれば良縁になるのだから

「うふ…… そうだよな」

少しの不安と大きな期待。

とはいへ、相手のあることだ。

向こうの子に気にいられなくては、この話も意味がない。

「 そう言えば、元雪は何度か会いに行つた事があるんじゃないのか？」

「誰に？」

「 その相手の子にだよ。椎名神社の娘さんだろ？ 元雪は小さな頃に何度か父さんに連れられて行つたはずだ。昔だつたかな、お前から神社で可愛い女の子と仲良くなつたと言つ話を聞かされた事がある。10年ほど前だつたか」

「 そりなのかな？ あんまり記憶にないけど」

子供の頃の記憶なんてほとんど覚えてない。

「 ははっ、元雪もまだ幼かつたからな。仕方ないか」

小さい頃つて特に気にもしないで遊んだりするからな。

親父の知り合いの子なら遊んだこともあるかもしねれない。

それから車で親父に連れられて椎名神社にたどり着いた。我が家からだと車で5分程度の距離にある神社だ。休日だからか、駐車場には何人もの人の姿がある。

「へえ、案外、はやつてるんだな」

「他の寂れた神社と一緒にせぬ方がいいぞ。ここは、縁結びの神様としてそれなりに名の通った神社だからな。休日ともなれば、参拝客も多い。お前は同じ町に住んでいて全然知らんのか」

「同じ町だからってここまでくることはほとんどないからさ。神社になんて来ないよ」

「わざわざ、ここまで来る用事はこれまでなかつたのだ。

「……縁結びの縁もなさそうだしの」

「今、余計な事をいつた！？」

「まあいい。こっちだ、ついてこい」

親父は神社に繋がる階段を上つていいく。
思つていたほどキツイ傾斜ではない。

「おおっ、ここが椎名神社か。……見事に女人が多いね

境内には何人の女の人たちで賑わいを見せている。
さすが縁結びの神様ってだけはあるな。

「昨日のパワースポットブームで縁結びに来る人がさりと増えたと椎名も言つておったわい。今時の若い女子にも人気があるそつだ」

「ふーん」

俺の視線の先には巫女さんを発見！

白と赤のコントラストが眩しい巫女服を着ている。
いやつてマジマジみると巫女さんつていいよね。
清純つていうか、見てるだけで癒されるわ。
それに……さすが巫女さん、可愛い子ばかりですなあ。

「ええい、元雪よ。巫女に見惚れてる場合ではないぞ」

「だ、誰も見惚れてないってのー？」

「にやけた顔で言えるセリフではない。このむりつけ。巫女萌えは後にしておけ。先を急がねばならんのだ。家を出るのが遅かつたから約束までの時間もない」

それは昨日も夜遅くまでお酒を飲んで起きたのが遅かつた親父のせいだ。

俺は巫女さん達を満足に眺める事も出来ずにその場を去る。

俺たちが向かうのは神社の本殿ではなく、そこから離れた家のある方だ。

『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた札の道を抜けた先。古いお屋敷がそこにはあった。

「屋敷?ここ?の神社って広いんだな。神社もあれば屋敷まである」

「そりや、代々数百年も続く神社から。ほら、入るぞ」

親父は呼び鈴を鳴らすと中から男の人が出てきた。

「来てくれたか、柊。待っていたぞ」

「つひの親父と違つて真面目そつな感じだ。

「つむ。ちゃんと息子を連れてきたぞい。ほら、元雪。挨拶をせー」

「どうも、柊元雪です」

「大きくなつたね、元雪君。昔と比べて見違えるほどだ」

彼は笑いながら俺を見ていた。

どうやら、俺とは初対面ではないらしい。

「えつと?」

「覚えておらぬだろ、元雪は。子供の頃に何度もここに連れてきてるのだがな」

「うう、あんまり覚えてない……」

兄貴の言つとおり、俺はここには何度も来た事があるらしい。当然、このおじさんとも会つているんだろう。

「ははつ、そりだうね。僕は椎名哲治(しひな てつざる)。今はわざわざ来ててくれてありがとう。娘は既に奥の部屋で待つているよ。柊、彼に話はしているんだう?」

「婿探しの件、ちゃんと伝えておるわ。騙して連れてきてはおらん」

「そうか。たすがの終もこうこう話は筋を通すかな」

「いやいや、こいつのことだ。騙して連れてきたら後で暴れであること、ないこと、母さんに秘密を暴露されるからの。親子だからと言つて、結婚話を勝手に進めるわけにもいかぬ。まあ、来ぬと言つても来させんつもりだつたがな」

「結局、連れてくる気満々じゃないか。

ちなみに親父の弱みは嫌といつほど知つてるので、何かあれば母さんにチクろう。

「元雪君。うちの娘は少し気が弱いというか、そう、人見知りをするくせがあつてね。少しばかりキミを困らせるかもしない」

「大人しいだけだろうに。ああいのは元雪の好みの範疇だから気にせんでもいい」

「人の好みを勝手に言うな。大人しい子は好きだけど」

どちらかと言えば俺の好みは大和撫子な女の子なのだ。
椎名さんに連れられて奥の部屋と案内される。

そこにいたのはひとりの女の子。

和服が似合じそうな子で、綺麗な姿勢で畳に座っている。

「……えつー？」

だけど、俺が入つてくると女の子は思わず驚いた声をあげた。

その声には聞き覚えがあつたのだ。

俺はハツとしてその子の顔を直視する。

「……あつ

煌めくほどに綺麗な漆黒の髪。

清楚な雰囲気を持つまさしく現代の大和撫子。

その表現にピッタリと似合つ女の子。

「キミは……」

もう会えないと想つていた。

初恋の君。

やつ、彼女は昨日、俺が電車で出会った女の子だった。

「キミは、昨日の女の子だよね？」

「……は、はこ、やうです。昨日お世話になつました

驚いた顔をしながらこちらに頭を下げる女の子。

その生真面目と言つか、礼儀正しい彼女は昨日の少女だった。
まさか、また会えるなんて思いもしなくて俺は本当にびっくりした。

「おや、ふたりは会つたのを覚えてたのかい？」

おじさんは不思議そつに俺たちを見比べる。

「い、いえ、そうではないです。お父様にもお話をしたでしょう。
昨日、混雑した電車で私を助けてくれたのが彼なんです」

「ああ、昨日話していた電車で助けてくれた男の子のことか

「偶然とはいって、こんな形で再会することは思いませんでした」

「彼女はほにこいつと俺に微笑みを向ける。
やべえ、とても可愛い……。

「息子よ、鼻の下が伸びておるだ。それにやけ顔を何とかせい。ワシはどういう事情が分からぬが、2人は知り合いだと語りつ事でいいのか?」

「はい。困っていたところを助けてもらつたんです。まさか、おじ様の息子さんだつたなんて」

「ふむ……元雪め、地味にフラグを立ておつて」

「つむさこ、俺も知らなかつたんだつての。
ひつちだつて驚いてるんだ」

とりあえずは俺たちは向き合つて座る事にした。

「はじめまして、ではないか。あらためて、自己紹介するよ。俺は
柊元雪だ」

「私は椎名和歌（しいな わか）です。本田はよく来てくれました」

和の歌と書いて、和歌と読む。

名前まで大和撫子、ザ・古風つて感じがする良い名前だ。

俺も人の事は言えない古風な名前だけだ。

大人しそうな彼女はこちらをジッと見つめている。

この子が俺がもしかしたら、結婚するかもしれない女の子。

そう考えると胸が高鳴る。

一目惚れしていた少女との再会。

これがいわゆる“縁”という奴なんだろうか。

第3章・再会と結婚条件

【SIDE・柊元雪】

偶然の再会。

いや、これは偶然ではなかつたのかもしれない。

まさに縁結びの神様の力！と、思わず叫びたくなる。

偶然が重なれば必然と呼ぶくらいだからな。

俺の縁談の相手は満員電車で俺が助けた女の子にして、一目惚れの少女。

超絶美人な大和撫子が今、目の前にいる。

「……マジかよ」

椎名和歌さんという名前。

あの子との再会を望んでたが、いうなるとは予想外だ。

それは彼女もそつらじしく、軽く視線をうつむかせている。

俺と向き合いつように前に座る和歌さん。

「ふう……」

俺は緊張しながら正座をする事に。

親父は様子を見ているだけで、話はおじさんが進めていく。

「元雪君。今日は来ててくれてありがとう。話だけでも聞いてもらいたい事があるんだ」

「「」の神社の後継者の事ですよね？」

「そうだ、今の時代、どこの神社も後継者は少なくて。特に男子の跡取りのいない神社はどこも困ったことになっている。神職なんて言つのは辛い事もあるし、大変な仕事な上に、少し事情も特別な職種だからね」

俺も軽くネットで調べてみたが、まず、神職になるには資格を取るために大学に行かなくてはいけないらしい。

実家が神社で、その息子つていう場合は大学まで行かなくてもいいようだが。

大抵は神社とはその親族が引き継ぐものだそうだ。

椎名さんのように娘しかいない場合は婿探しをするつていうのもよくある話らしい。

「キミくらいの年齢でいきなり婿だ、結婚だ、神職になれ、なんて言つのは難しい話かもしれない。だが、こちらも色々と事情が大変でね。急かもしけないけれど、元雪君にも考えてもらいたい事なんだ」

大体の事情は分かつた。

だが、それ以前に俺には腑に落ちない点がひとつあるのだ。

「あの、事情は分かつたんですけど、ひとつありますか？」

「なんだい？」

「……和歌さんの気持ちというか、その、意思はどうなんでしょうが？」

「2人は初対面ではなかつたが、まあ似たようなものだしね。元雪君としてはいきなり結婚つて言うのもどうかとも思うかい？」

「いえ、そう言ひ事ではなくて」

それもあるが、俺が言いたいのは彼女の意思なのだ。
親の神社を継ぐ相手の婿を探す。

その行為は理解できるが、彼女の意思なのかどうか。
俺みたいな男がいきなり婿だ、どうのとか話になつて嫌がつては
いないのか。

それが気になつてた。

「椎名よ。とりあえず、ふたりで話をさせてみればどうだ? 元雪も
まだちゃんと彼女と話をしておらぬ。あとは若い一人に任せてつと
言つ展開がいいのではないか? この元雪も何やら混乱してあるよう
だしの」

「なるほど、当事者同士の問題にもなる、か。どうだい、和歌?」

「……私も、彼とお話がしたいです」

和歌さん……。

そんなわけで、俺と和歌さんは部屋を出でてふたりつきつで話を
することになった。

彼女とふたりつきついて、緊張するな。

部屋を出た和歌さんは案内したい場所があると俺を誘つ。

「いらっしゃりです」

再び、屋敷の外に出て、彼女は神社が見える所まできた。

「元雪様には、この神社を見てもらいたかったんです」

「うん。いい感じの神社だよね。人の数もそれなりにいるし」

寂れ切つた神社はパワースポットではなく、ホラースポットだからな。

古い歴史もある神社の家に生まれてきた和歌さん、この縁談も、その家の宿命みたいなものなんだろうか。

俺は軽く深呼吸してから彼女に本題を切り出す事にした。

「それにしても、まさか、キミが今回の話の相手だなんて」

「私も驚きました。縁談の話も、そうですが、元雪様も驚いたでしょ？」

「あ、うん。あと、別に様づけはいらないんだけど？」

「ダメ、ですか？」

他人に様付けが口癖なのだろうか。

和歌さんがそれでいいのなら、俺が反対する気はないが。こんな風に様づけされるのなんて、慣れていないけどな。

「ううん、それでいいや。えっと、聞きたいのはさ、和歌さんの気持ちなんだよね。こんな風に神社の後を継ぐ相手と結婚しろとか言われて、それでいいの？」

「……はい？あ、違います。少し勘違いされてるみたいですが、このお話は私がお父様に頼んだ事なんです。無理やり婚姻させられるわけではありません」

「おや、俺が思つてた事と違うのか？」

「神社を継ぐ相手と結婚というのは家柄的に有無を言わざずとか考
えてたのだが。

彼女は長い髪をそよ風に揺らす。

「私はこの神社が小さな頃から大好きなんです。縁結び、人と人の
絆を繋げる神様の祭られている神社です。皆さん笑顔でここを訪
れる、この場所が好きなんです」

「人気らしいね。パワースポットとか、呼ばれてるらしいじゃない
か」

「そうみたいですね。私は大好きなこの神社をこれからもずっと続
けていきたいんです。でも、お父様がいなくなれば、この神社もそ
れまで。後を継いでくれる人がいなければ終わりです。私自身が宮
司になるのも考えていました」

女性の宮司ってのは珍しいが、いることはいるようだ。

だが、狹き門には変わりなく、大抵は婿を取るものだそうだ。

「それで、結婚つて話になるわけか」

「はい。お父様も気にしてくれていて、こういう形で元雪様に話を
聞いてもらつ事になりました。元雪様にしてみれば、いきなり結婚
や神職を継げと言われても戸惑つだけですよね」

「まあ、驚きはしたけど。ねえ、和歌さん。それはキミの意思なんだ？」

「私の意思です。この神社を継いでくれる相手と結婚したい、それが私の願望なんです」

手段のための方法、それが結婚という行為。

古くから、お家のためだとか、会社のためだとか、様々な形で結婚って言つのは繋がりの“意味”を持っているものだ。

大変だろうけど、そもそもその家に生まれてきた宿命みたいなものだ。

綺麗事ではなく、現実として仕方のない事でもあるんだろう。

「縁結びの神様だけ?」
「うう、御利益とかあるの?」

「はい。古くから参拝される方のたくさんの縁を結んでこられたようですよ。今でも、ここに参拝して良い縁に出会えたと言う方がお礼に参られますから」

俺も高校入試の時は学業の神様の神社に親父と一緒に参拝したつけ。

信じる者は救われる、というわけじゃないが、神に祈りたいこともあるわな。

「でも、その夢を相手に背負わせるのは辛く思います。神社の神主はやりたいと言う方は本当に少ない職業ですから」

「やりたいと言つて出来る仕事でもなさそうだし。そういう人、おじさんに知り合いとかいなかつたのかい?」

同じ職種というか、神職をしているのならシテや知り合いくらい、いないのだろうか？

「お父様の神社関係の知り合いでは既婚者だったり、後継が決まつていたんです。交友関係が広い方ではないので」

なるほど、そこで身近な知り合いを頼りに誰か婿候補を探すことになつたわけだ。

結婚条件が“神職を継ぐ”というだけなのはそれが理由か。

「もちろん、信頼に足りうる方である事は当然の事。その話を聞いた終のおじ様が息子を紹介してくれると言つてくれました」

よくそこで俺を紹介する気になれたな、親父。

どうせ酔っ払つていて、適当に返事したのではないだろうか。
うん……その可能性の方が高いだ。

「酔つた勢いだらうなあ。あのさ、うちの親父はよくここ来るのか？」

「はい。お父様の飲み友達で、よくいらっしゃいますよ。おじ様は面白い方ですよね」

あれは面白いこと言つたか……つーむ。

人を驚かせたり、他人で楽しむことが好きなのは認めよ。それが面白いかどうかは、当事者としては迷惑でしかないのだが。小さい頃からあの親父に色々とされて、良い記憶も悪い記憶もあるので微妙だ。

「でも、おじ様のおかげでまた貴方に会えました」

「和歌さん……」

「お礼を言いたかつたんです」

そんなに大したこととしたつもりもないんだけどな。

「私は男の人は苦手な方でした。今回の縁談も、お父様からおじ様の息子さんと会う予定を聞かされて正直戸惑っていたんですね。婿になつてくれる人は必要でも、男の方が苦手なのは仕方ありませんから」

「……そうなのか」

「でも、貴方に会い、考えは変わりました。どんな方であれ、実際に会つてみて、お話をしてから判断するべき」となんだった

「俺が聞かされたのは昨日の夜なんだが……既にもう朝から決まつていた話なのか。

親父め、大事な話なんだからもうと早く話しておけつての。

「ふふつ。でも、実際に会つて驚きました。まさか、その相手こそ、本当に元雪様だったなんて。……私は大好きなこの神社で、大切な人と一緒に生きて生きていくたいんです。それが私の幼き頃からの夢でもありましたから」

和歌さんは静かに想いを言葉にする。

とても素敵な笑顔を浮かべる彼女に俺は魅入られてしまつ。

「それがキミの夢なんだ？」

「はいっ」

大好きな人と、好き場所で生きてていきたい、か。
それこそが、彼女の夢であり希望でもあるようだ。
俺でもいいのだろうか、その夢を共に歩むのは
……

。

【SIDE・柊元雪】

自分の夢なんて、これまでまともに考えた事がなかつた。漠然とした未来、適當な人生、普通の日常。

可愛い恋人でもてきて、楽しく暮らせればいい。

そんな男の願望くらいは抱いていたが、実現する気配もなし。何の目標も目的もなく、ただ生きてきた。

これからもそれが続くはずだった。

運命の相手である、椎名和歌と出会いつまでは……。

「大好きなこの神社で、大切な人と一緒に生きていきたいんです」

彼女は真つすぐな目をして、そう言つたんだ。

その言葉に俺は、思わず口走つていた。

「……それは俺でもいいのかな」

「元雪様……？」

「そのキミの夢を叶える相手は俺でもいいのかな」

大した夢もなく、なりたいものさえもない。

だけど、今、目の前にいる和歌さんと一緒に生きていくたい。

たつた16年ちょっととしか生きてない子供が何をと思うかもしない。

この子と一緒に生きてきたい。

俺の人生で初めて、強い想いが芽生えたんだ。

「……も、元雪様？」

「俺つてさ、神様なんてあんまりよく分からなくて、知識もない。けれど、それはこれから勉強して覚えていけばいいのかな？それで大丈夫？あ、俺ももちろん頑張るからさ。ただ、俺……靈感とか特殊能力もないからお祓いとかちゃんとできるのか心配だけね」

「だ、大丈夫です。今からでも問題はありません。それにお祓いに靈感とかは要りませんから！？」

これは俺の人生で初めてかもしれない決意。

俺に夢を語る和歌さんが、自分の中で特別に思えた。

いや、違う。

もつと前からだ……あの時、初めて出会つてから俺は彼女に惹かれていた。

“一目惚れ”っていうのは、本当にあるのか。

たつた一度会つただけの相手を好きになる事なんて……自信がなかつた。

でも、今なら言える……自覚してた気持ちを認めよつ。

一目惚れだが、俺は和歌さんが好きなんだ。

「あ、あの、元雪様つ。お願ひがあります……」

彼女はそう言つと、俺の顔を綺麗な瞳で捉える。
緊張しているのか、顔を赤らめて恥ずかしそうな表情を浮かべる。
やがて、彼女は消え入りそうな小さな声で言つた。

「お願いです。元雪様、私の傍にいて欲しいんです」

「　いいよ。それがキミの願いなら」

俺は、彼女にはつきりと頷く。

それが俺の意思だった。

「え？　あ、あの、これからもずっとって意味ですか？　いいんですか？」

彼女は思わず俺に詰め寄る。

うわあ、びっくりした顔も可愛いな。

「和歌さんは眩しいな。ちゃんとした夢があつて。俺にはそう言うの、全然なかつたから。だから、はつきりと夢を語れるのが羨ましく思えた」

夢を抱けるって言うのはいいことだ。

ちゃんとした明確な目標がある、それだけでも生きる意味が違う。

「この神社、多くの人が来ている。縁を結びたいと願う人達、結ばれて感謝する人達。和歌さんが好きなのは、この人達の見せてくれる笑顔なんだよね？」

「はい。縁結びが成就した、そつ言ってくれる人の笑顔が好きなんです」

「俺も縁つてのを感じたんだ。昨日の事から始まって、こんな形で再会して……」

「私もそうです。だつて、一日惚れしていた人がいきなり目の前に現れて驚いたんです」

彼女はハツと氣づいて口を押さえる。
その言葉を俺は逃さなかつた。

「今、一田惚れつて言つた?」

「う、うう……それは、その……」

「本当にやうなんだ?」

和歌さんは顔を真つ赤にさせて「はい」と頷いた。
俺なんかに彼女が好かれるなんて、「冗談じやないか?

「電車の中で助けてもらつた時に、見つめ合つてしましましたよね。あの時、私は感じたんです。まるで初めて会つた気がしない。この人の傍にいたって。私は恋なんてした事がありませんでしたけど、それが恋だと思いました」

初めてあつたきがしないか、一応、幼い頃に会つたことがあるらしいけどな。

でも、そう言つのも違う、何か特別な物を俺も彼女も感じていたのだ。

「名前も性格も何も知らないのに、好きだつて思えたんです。魂が惹かれたんですね」

「魂が惹かれたか。面白い表現を使つね

一田惚れつて言つのは言葉で説明できないけども、不思議な感情だよな。

あの電車で見つめ合っていた、あの瞬間。俺たちは互いに一目惚れしていたのか。

名前も全く知らない相手なのにや。

「……変でしょうか、元雪様？」

「いや、変じゃないよ。俺も同じなんだ。俺たちは同じ事を同じ時に感じていたんだよ。和歌さん、俺も一目惚れだつたんだ」

「え……？そ、そんなの……本当ですか？」

「嘘なんて付かないわ。いつも、再会したのも何か特別な物を感じるよ」

俺の言葉に彼女は「互いに惹かれていたんですね」と嬉しそうに笑う。

あの日、あの時、あの瞬間。

俺たちは出会い、たつた一目で互いに恋をして……再び巡り合つた。

映画やドラマの世界のように、ひとつつの流れとして、今の俺たちはここにいる。

「改めて言つよ。俺は和歌さんが好きだ」

「は、はー。……私も、元雪様が好きです」

彼女の告白に俺はドキッとしてしまつ。

女の子に「クられるつてこんな気持ちだったのか。

「……好きです」

白い肌、頬を薄桃色に染める和歌さん。

互いにまだ会つて少しの時間しか経っていないのにな。こんなにも強く惹かれあうなんて不思議としか言えない。それでも、“想い”って言つるのはそういうものなんだ。人が人を好きになるのに時間なんて必要ないんだって。目と目が合わさつた、それだけでも人は好きになる。

「元雪様、私の事は和歌つて呼んでください」

「和歌……本当に良い名前だよね」

俺は和歌を自分の腕の中に抱きしめていた。

華奢な体を優しく抱きよせる。

女の子をこんな風に抱きしめる事ができるなんて思わなかつた。

「これが男性の身体……元雪様の身体は温かいですね」

「和歌はとても良い香りがするな」

「元雪様は香水の香りは嫌ですか?」

「ううん。女の子って感じがして俺は好きだな」

あまり強すぎる香水は嫌いだけどな。

たまに電車とかに乗つてると度が過ぎたキツイ香水をつけてるおばさんがいる。

ああいつのではなく、ほんのりと香る程度なのがいいのだ。

それにしても、女の子はこんなにも抱き心地がいいものなのか。

「……可愛じよ、和歌」

「は、恥ずかしいです、元雪様」

照れる和歌は俺をビリビリかしそうな可愛さだ。

「俺、女の子を抱きしめるの初めてだからさ。初めての相手がこんなに可愛い女の子で本当に嬉しいよ。一田惚れ同士で、運命で結ばれている気がする」

「運命はあるんですね。そのような不思議な縁が……」

「これは縁むすびの神社だからな。
まさに縁を結びし、神の居る場所。

そんな不思議があつても、全然、不思議じゃない。

「あらあ、初々しいわねえ。高校生くらいかしら」

「私もあんな風に良い縁にめぐりあいたいわ」

ちらつと周りの人達の視線が気になるが関係ない。
今の俺たちの幸せはかけがえのないものだ。

「ですが、元雪様。よろしいのですか?」

「何がだい？」

「この神社を継ぐところです。私と結婚すると悪い事は、この神社を継ぐという事になります。無理に夢を背負わせたくないんですね」

「いいよ。大変だとは思うけどね。これから慣れていけばいいんだろうし。どんなに大変でも、それは和歌の夢なんだろう？俺は和歌の隣でその夢を実現させたい。俺が和歌の夢を叶えてあげたいんだ」

「この先、苦労するかもしない。

一時の想いに人生をかけるのはどうかと思うかもしない。

そんな事は関係ないんだ。

どんなものを天秤にかけても、俺は今のこの想いを大切にしたい。だつて、俺が断れば、和歌を他の誰かに取られるかもしないのだから。

そんな事はさせない、彼女を俺だけのものにしたいんだ。

「俺は和歌の望む未来と一緒に生きたいんだ」

「元雪様……嬉しいです。そんな風に言つてもらえるなんて……う
つ……」

小さな嗚咽、和歌の瞳には涙がこみ上げていた。

「わ、和歌？ど、どうした？俺、変な事でも言つたか？」

「……ぐすつ、じ、じめんなさい。嬉しくて、つい……私、今、自分の想いが間違いではなかつたと確信しました。一目で惹かれあつた想い。私は元雪様と出会うために、生まれてきたんだって」

「それ少し大げさだな。でも、人の縁つてそういうものかな。俺もそう思いたい」

俺は和歌の瞳に溜まる涙を指先でぬぐう。

「泣かないでくれよ、和歌。俺は和歌の涙より、笑みを見せて欲しい。可愛い笑顔をさ」

「も、もひつ。元雪様つて……お言葉が上手ですね。私を喜ばせすぎです」

お互いに強く抱きしめ会いながら、互いの存在を実感しあう。
一日惚れから始まる恋愛、かけがえのない存在なのだと想いあつ。
俺たちはこの時、自分達の“運命”に出会つた。

第5章・結婚宣言！？

【SIDE・柊元雪】

一目惚れでも、人は人を好きになる。
その思いに偽りはなく、俺は和歌を好きだと言つ気持ちに溢れていた。

『自分の人生なんだから、よく考えなさい』

俺の母さんが言いそうなセリフだ。

よく考えた結果、俺は和歌と結婚を前提とした交際をすると決めた。

一度つきりの人生、好きな相手と一生暮らしていければいい。
人生で初恋が最初で最後の恋になるなんて幸せだと思つ。

「元雪様、こちらが本殿と拝殿になります」

和歌は俺を神社の案内をしてくれていた。
人々でにぎわう拝殿、立派な建物だなあ。

「おー、賽銭でも投げて挨拶しておこうか

これからお世話になるのだ、神様にも挨拶しておかねば。

俺は賽銭箱に財布の中にある5円玉を取り出す。

良いじ縁（5円）がありますよ、という願掛けでよく使われる。

意図したわけでもなく、100円でも放り込んでちょっとはカッつけたかったが、あいにくと財布の中には5円しか小銭がない。

さすがに学生の身で千円札を放り込むわけにもいかない。

「くすり……良いご縁がありますよつこ、ですか？」

「いや、もう良いご縁には出合つてゐるけど。小銭がこれしかなくてね」

和歌は「元雪様も面白い方ですね」と笑う。

……親父と同等扱いされるのはやめて欲しいなあ。

俺も将来、あんなふうなおっさんにはなりたくない。

別に親父が嫌いなワケではないが。

俺は賽銭をいれて拝むと、隣の和歌はそんな俺をジツと見つめていた。

「私も、お礼参りをしておいた方がいいかもしませんね」

「お礼参り？」

「はい。私もいいご縁がありますよつこ、と願つてましたから」

そう言って彼女も参拝をする。

「元雪様という、良いご縁をくださった事を感謝します」

和歌は手慣れた様子で一拝一拍手一礼をする。

さすが、神社の巫女さんだな……すごく様になつていて。拝殿から離れて、彼女はご神木に案内してくれると喜づ。本殿からは少し離れた道を歩く。

「人の想いとは不思議な物ですね、元雪様。これから話す事を変な

事だと思わないでください。私、なぜだか元雪様とは初めて会った気がしないんです」

「それはさつとも言ってたけど、本当にそつ思つ? 僕もなんだよなあ」

違和感というか親近感と言つか……。
なんだか初めて会つたとは思えない。

「お父様から聞きました。私達は昔、一緒に遊んだ事があるそつです。でも、私は覚えていないんです。『めんなさい』

「いや、俺も『めんな。俺も覚えてないんだよ。互いに小さかったし、仕方ないよ』

和歌はホッとした顔を見せる。

意外とその事を気にしていたのかもしれない。

俺の方だけ覚えていた、とか逆の立場だと申し訳なさもあるからな。

……覚えてなかつたのが俺だけじゃなくてよかつた。

「元雪様もそうなんですか?」

「……そういうものだる。でも、俺の兄貴は、俺は10年ほど前に俺に神社で女の子と遊んでたつていう話を聞いたことがあるつて言つていた。多分だけど、それなりに楽しく遊んでいたんじやないかな

だが、それとも違う感覚で俺たちには特別な何かあるよつて思つ。

「けれど、そういう懐かしいともまた何か違う気がします」

「もしや、前世で一緒にいたとか？前世では夫婦だったとか？」

「ふふつ。だとしたら、また一緒になれた事を嬉しく思います」

「そうだな。でも、実際にそうかもしれないぞ。こんなにも出会ってすぐに愛しあえる関係になれたんだからさ」

俺は前世とか信じるタイプではない。
でも、そんな特別な縁が俺たちの運命にあるような気がした。
目に見えない特別な力。
惹きあうものが何かあったからこそ、俺たちは出会い恋をしたんだ。

「こんな不思議な縁があつてもいいんじゃないのか？」

和歌の手を俺はそつと握る。

「あつ……はい」

純粋な彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめる。
和歌つて本当に可愛すぎる。

恋人ができるつてこういう感覚なんだな。

初めての恋愛に俺は浮かれ気味になりながら、目的の木を探す。

「それで、『神木つてどれなんだ？』

「こちになります。あの大きな木がそうです」

和歌の示す方には巨大な桜の木が立っていた。

樹齢は数百年と言つたところか？

さすがはご神木、威厳がありそうな大木にはしめ縄のよつなもの
が巻かれている。

「こ」の神社が建てられた頃から、ご神木として「こ」にあるそうです

「立派な木だな。今は夏場だからただの葉っぱの木だけどさ。春になつたらすごい桜が咲いたりするんじやないのか？これだけの木だと良い桜が咲きそうだ」

「はいっ。とても綺麗な桜ですよ。桜の季節には巫女舞をしたりするんです」

和歌は軽く舞を踊る真似をする。

「……巫女舞？」

「神事の際には巫女が舞を踊つたりするんです。うちの神社では年に数回くらいありますね。巫女舞を綺麗に踊れるようになるのに苦労しました」

「ぜひ、その時には見てみたいな」

きつとそれはとても素敵な舞なのだろう。

「その機会にはぜひ、元雪様に見せますね」

その時、俺の視線に入ってきたのは大木の横にある石碑だった。
古びたその石碑に俺は何となしに近付く。

「ここの石碑は？」

「それはこの神社に伝わる、とある悲恋と云つか、縁のお話があるんです。そのお話をもとにになつた方々の供養のための石碑で……あの、元雪様？」

俺は特に気にすることなく、その石碑に触れる。だが、しかし。

「…………うつ…………！」

身体がビクッ と震える感覚が全身を突き抜けた。舞い散る桜の大木……神社……満月……そして、燃え盛る炎……。脳裏に一瞬、よく分からぬ光景が過ぎ去る。

「…………俺は…………前に、ここに来た事が…………ある？」

今の感覚は、一体、何だ……？

幼い頃にも似たようなことがあつた記憶が……あれは確か……。

「元雪様?どうかなさいました?」

「い、いや…………うつかり、石碑に触つたら口ケが手について気持ち悪かった」

「もうつ。元雪様、これはそんなに触つていいいものではありませんよ?」

和歌にまた笑われてしまう。

俺も苦笑いを浮かべながら「手を洗いに行こう」とこの場を去る
ように促す。

何だらうなあ、この変な感覚は……？

ハツ、まさか……俺、石碑に呪われた！？

うつかり触つてごめんなさい！？

心の中で謝りながら俺たちは一度、親父たちの所に戻る事にした。

屋敷では、親父とおじさんは昼間からだと言つたのに酒を飲んで
る。

透明な液体の入ったコップが親父の前に置かれていた。

「親父、車で来てるのにお酒を飲んだのか！？」

「はつ、なめるなよ、元雪。ワシもさすがにそんな真似はせぬわ。
これはただの水だ、良い天然水があると椎名に勧められての。お前
も飲むか、美味しいぞ」

「なんだ、ただの水かよ。紛らわしい。良い水はお茶にして飲むな
らしいけどね」

俺たちは2人の前に座ると改めて話をすることにした。

「元雪様に神社を案内してきました」

「ふたりともおかげり。元雪君、どうだい、うちの和歌は？」

「少しほ話をしたか？元雪は奥手だからな。結婚とはいからくとも、
これから何度も会う程度には仲良くやるがよいわ」

「そのことなんだけれど。あのさ、親父、おじさん。話があるんだけど……？」

俺は深呼吸をひとつしてから和歌の方を向く。
俺の隣に座る和歌はゆっくりと頷いた。

「なんだ、まだ和歌ちゃんじ、話もできておらぬのか？いかんのう、
そんな消極的な態度では……あれだぞ、草食系男子とか呼ばれる男
子には我が息子としてなつてくれるなよ？男は常に肉食系、積極的に
攻めてだなあ」

「親父、まともな話だ。ちゃんと聞いてくれ」

誰が草食系男子だ、俺だつてやる時はやるつての。
「こにはちゃんと宣言しておかないとな。

俺と和歌の意思を2人に伝える。

「……親父、おじさん。俺と和歌は結婚を前提に付き合いたいと考
えていいる」

ふたりとも驚いて開いた口がふさがらないと言つ感じだ。
特に親父は唖然として金魚みたいにパクパクとしている。

「和歌と話して決めたんだ。俺は和歌が好きだ、その夢を叶えたい」

この縁談話を組んだ、彼らが反対するとは思えないが、わずかな
沈黙に俺は緊張していると和歌が俺の手に触れる。

「元雪様、『心配なさらないでください』

それだけで気持ちが落ち着いてくる。

俺はこの子が好きなんだ。

和歌を大事に想つ気持ち。

互いの想い、その意思は変わらない。

一目惚れだろうが、俺は和歌を好きになってしまった。

そして、俺と和歌は添い遂げる約束を交わしたのだから

。

第6章・許される関係

【SIDE・柊元雪】

一日惚れから始まる俺と和歌の恋愛。

俺はついに親父たちに結婚宣言をする事にした。

頑張れよ、俺……覚悟を決める。

「親父、おじさん……俺は和歌と結婚を前提に付き合いたいと考えている」

俺の突然の発言に驚くふたり。

無理もない、だつて俺たちも驚いてるんだから。

出会つてからまだ30分も経つていない。

それなのに、いきなりこんな話をされたら誰だつて驚くよな。

「……元雪」

「親父、俺は本気だ。本氣で、彼女と……」

「すまん。よく聞いてなかつた、もう一度言つてくれ」

「聞いてんかつたんかい！？」

そこでボケるな、本氣で怒るぞ……」口からは本気なんだよーっ！
親父は大笑いをしながら、いつもの雰囲気で言つ。

「冗談だ、冗談。なるほど。子は親の知らぬ間に成長するもの。ワシが知らぬうちに、生まれてからずっとヘタレの元雪も大人になつ

たか」

「おい、待て、親父。誰が生まれついてのヘタレだ。親父、俺を過小評価しそぎ」

「……それにしても、元雪と和歌ちゃんがいきなり互いを受け入れるとはな」

「本題に入る前に俺がヘタレってところを、まず否定して…? 俺はヘタレじゃない」

「冗談なのか、本気なのか親父の態度に俺は脱力する。くつ、いつものごとく遊ばれているのか、俺。

……いや、何だかんだで変な緊張感は抜けた。

どうせ、親父の事だから何も考えていないだらけだけど、ここは感謝しておくか。

俺は気持ちを切り替えて、ふたりに話をする。

「親父、俺も本気で色々と考えた。和歌の気持ちとか、いろいろと考えた結果なんだよ」

「ふむ、結論をこんなにも早く出すのは想像外だったがな。ワシの予想だと、あと一度は顔を合わせる必要があると思っておった。和歌ちゃんは元雪でよいのか?」

「……はい。元雪様がいいんです。元雪様でなければ、ダメなんです」

「和歌……」

椎名のおじさんも俺たちの態度をジッと見つめる。もちろん、今すぐにつてわけじゃないけども、俺たちは結婚したい。

和歌の夢を叶える事が俺の夢だから。

「元雪君。僕としてはその結論は嬉しいが、本当にいいのかい？最初にも行つたが、和歌との結婚は神職を継いでもらうということだ。楽な仕事ではないし、それを引き継ぐという形で押しつけてしまうことも心苦しさもある。本来ならば、制約もなく純粋に和歌と付き合いたいんだろうけどね」

「分かっています。ですが、俺も本気なんです。俺は和歌が好きになりました。彼女が望む夢を叶えてあげたい」

きつかけは一目惚れで、互いの事はまだほんとど知らなくて。でも、運命は俺たちの間にはあるんだと確信できる。

俺の目を見ていたおじさんは納得したような顔を見せる。

「……この数十分の時間の間に、2人の間には何か特別な事があつたようだ。神主という職業柄、僕もいろんな人を見るけれど、偽りなき想い合つふたりに見える。まったく、和歌のそういう姿を見ることはね」

「お父様……私は元雪様を慕っているのです」

「そつか。和歌がそう感じるのならその気持ちに従いなさい」

和歌に対して笑顔を浮かべるおじさん。

良い人なんだろうな。

うちの親父は自慢の口髭を撫でながら、

「若さにまかせての勢いつて嘗つのもありますだが。だが、それもまた良し！勢いとは若さの特権よ。勢いあまつて出来ちゃった婚も若さゆえのことだ」

「それは昔の親父だ！」

俺の母さんは18歳の時に、できちやつた婚で兄貴を産んでいる。ちなみに親父は当時、25歳だったらしいが、その当時には若さ抜群の女子高生だったはずの母さんと、どうして付き合つていたのかという、その事には我が親の事なので触れたくない。

親父が勝ち組だったとか認めたくないし、そりや、いつの亡き祖母さんとも嫁姑問題で揉めるわな。

「親父はまず自分の若さゆえの過ちは認めろ」

「はははっ、言つよつになつたな。若さゆえの過ちは年老いて悔いるものよ。まあ、そのおかげで立派な跡取りである誠也が生まれたのだ。反省はせぬがな。それよりも、我が息子よ、ワシも子の成長、嬉しく思うぞ。若さとは無限の可能性を秘めておる。元雪、それでよいのだな？」

「……可能性？」

「そうだ。お前には今、選択肢がいくらでもある。自分の好き勝手に生きるフリーター、眞面目に働いて社会の歯車となるサラリーマン。好きな夢を追い求めるのもいいだろ。元雪が選ぶのは、それらの選択肢ではなく、神主になるということか」

和歌と結婚するためにはその選択肢を選ぶ必要がある。

俺の将来をどうするのか、様々な未来の中でも俺はこの生き方を選びたい。

「うん。俺は和歌と一緒に生きる事を選ぶ」

「好きになるのは2人には惹きつけるものがあつたといふことかのだが、結婚というのは、お前が思つてはいるよりも難しいものだと分かつてあるか?」

「それなりには分かつてはいるつもりだ」

「焦る事もないんじゃないか。2人にはこれから時間もあるんだから。神社の事もおいおい、覚えてくれればいいし」

おじさんが俺に向き合い、静かな声で言った。
それを見た親父もお茶を飲みながら、

「ふむ。確かに。まだ始まつたばかりの一人、結論を急くものでもないか。今は互いに想いを寄せあい、愛を育む時間か。元雪よ、お前の想いは本物か?本当にこの話を進めて良いのだな?」

「ああ。いいよ、俺も本気だから」

「……元雪様。その気持ちが嬉しいです」

俺は和歌に笑いかけると彼女は静かにうなずいた。

「お父様、おじ様……私も本気なのです。元雪様を一目で好きになりました。一目惚れという言葉以上に、私達の間には何か特別な縁を感じています。ただの想いではないのです」

「俺もだよ。それに、これは自分で決めた事なんだ」

「運命を感じたというのなら、それを信じてみるのもいいだらう。元雪が決めたと言つのなら、ワシもとやかくは言わぬ」

親父はゆつくつと和歌さんとおじさんと頭をさげた。

「和歌ちゃん、椎名……ふがいないかもしけないが、元雪をよろしく頼む。これでもワシの大事な息子だからの」

「親父……」

この時、俺は初めて自分の父親の存在というのを強く感じた。普段は酔っ払い、人を面白おかしくからかうだけの親父のイメージしかなかったが、こんな風に思つてくれていたとは……。

親であることの意味というか、親父を見直したつていうか、考え方直させられた気がする。

「和歌もすっかり気に入つてるようだね。元雪君、こりゃりんとうろしく頼むよ」

「これにて無事に縁談成立、というわけで、これから酒で乾杯でもするかの」

「……待てい！？だから、車で来てるんだから酒は飲むなあ！？」

「ちつ。ケチくさい息子だの。せつかくの祝い酒なのに。口うるさいのは母さんの悪い癖だ。それに似るとは嘆かわしい。元雪め、最近は本当に母さんに似てきおったわい。あれだぞ、息子ならば父親

「似るべがだらひ」

「うちが心配してやつてゐるの」と、ケチくせごだと、舌打ちまじでしゃがつた！？

くつ、親父を少しでも見なおした俺がバカだつた。
親父はこういつ適當な人だと言つのに……ホント、俺は母似でよ
かつたと心の底から思つ。

「ふんつ。親父にだけは絶対似たくなー」

「へすつ。元雪様とおじ様は仲がよろじいんですね
「和歌？」これのどいを見ればそう思つわけ？全然、仲よくないから
……険悪でもないけど」

「どうですか？私から見れば、おふたりはとても仲がいいように見えますよ？」

「へ、うーん……そりなのかな？」

「元雪よ。和歌ちゃんに甘いのはよいが、尻に敷かれるたあとあと
苦労するぞ」

「うぐつ。親父にだけは心配されたくない」

そんなこんなで、俺と和歌の関係は認めてもらえた。

これから、ゆっくりと時間をかけて関係をしっかりと築けていけ

たらいいな。

……と、話がまとまつたと思ひきや、この縁談に大反対をする人がひとりいた。

「 いざやあ～つ～!？」

その日の夜、親父の叫び声がリビングに響く。

「ひ、鬚を引っ張るな。伸びる、ワシの血縁の鬚が伸びる、ちぎれるー? 駄々々々、何をするんだじゃー! ?」

「やつちが悪いんでしょ。何を勝手に息子の縁談を決めるのよー。?」

1泊2日の温泉旅行から帰ってきた母さんに事情を説明したら、予想通りの襲撃を受けた親父。

帰ってきたら俺の結婚話が……そりや、びっくりするよなあ。一緒に行って来た兄嫁の麻尋さんから温泉土産のまんじゅうをもらつたので、その光景を眺めながら食べる。

「これ、美味しいね。麻尋さん、お土産ありがとう。旅行は楽しかった?」

「温泉は楽しかったわよ。お肌もすべすべ。触つてみると、あと、私はおまんじゅうってあまり好きじゃないのよね」

「あずきが苦手なんだっけ。」しかし、クリーム味らしによ。これなら大丈夫なんじゃない？」

「あー、ホントだ。これなら食べられるわ。甘さ控えめだけば美味しいね、ユキ君」

なんてこいつ、ほのぼのとした会話を麻酔せんとしていると、母さんがいきなり俺に抱きついてくる。

「うぐおー!? しまり、何だよ、母さん?」

「元雪へ、旅行から帰ってきたら突然に結婚するつてビックリなの? 騞されているんでしょ?」

俺は親父の方を見ると皿邊の長めの匙をべしゃべしゃにされて、ぐつたりとしていた。

「わ、ワシは、元雪を騙してなどおいらたの……」ここには自分の意思で決めたのだぞ!?

「貴方の言う事なんて信じられないもの。させ、元雪の意思なんて無視して、勝手に縁談を決めたんでしょ?」

「親父、全く信頼されてねー……それって夫婦としてどうなんだろうなあ。」

「あのや、親父を弁護するわけじゃないけど、俺も勝手に決められたわけじゃないから。母さん、俺、好きな子ができた。和歌つて言う、とても可愛い子なんだ。俺は彼女に運命を感じてる。彼女の夢を叶えたいから、神社を継ぐって話になつただけ」

「……結婚とか神社を継ぐとか、そんなに簡単に決めていいわけないじゃない！運命なんてそんなのただの幻想よ。私もこの人と結婚した時は運命で結ばれてるのね～っとか本気で信じてたけど、それは悲しい幻想だつたわ」

「うわあ、ばっさりと言っちゃったよ……。

でも、この両親はこう見えても、何だかんだんと仲が良いのでフオローはしなくて良いや。

それよりも大事なのは母さんを納得させることだ。

ここで反対されたら、せつかくの和歌との話がふいになってしまいう危機が訪れる。

親父め、ちゃんと話を母さんにも通しておこしてくれよ。

「母さん、今度、和歌を連れて来るからぞ。和歌に会つてから判断してよ。とてもいい子なんだよ」

俺はちらつと麻尋さんを見て、「援護よろしく」と田で合図する。麻尋さんは母さんのお気に入りだ、フォローしてもらつと心強い。彼女は頷いて俺の味方をしてくれる。

「ユキ君が好きになつた相手なら、会つてみるのもいいんじゃないですか？実際に会えれば気にいるかもしませんし。会わずに反対するのはユキ君も可哀そうですよ」

「そう？麻尋がそう言つのなら会つだけでもいいから。いい、元雪。あまりよろしくない相手だったら、その縁談も破棄させるからね？私は貴方の心配をしているの。大切な息子の将来を心配しない母親なんていないのでから」

「うん、それは分かってるんだけどね。……あと、そこの親父。こつそりと逃げ出そうとするな！」

誰のせいでも、こんな危機になつてていると思つてるんだか。物事は何でもスムーズに行くとも限らず、母さんという一択の不安の火種は残つてしまつた。

始まつたばかりの俺と和歌の関係、大丈夫だよなあ？

【SIDE・椎名和歌】

もしも、この世界に運命といつものがあるのなら。
私、椎名和歌はきっと、この瞬間に運命に出会ったのかもしれない。

元雪様に出会えた、この時に。

休日に出かけた帰り、事故のせいで混雑する電車内。
押しつぶされてしまうかもしれないという恐怖すら感じる。

「……あつ……！？」

そんな私を助けてくれたのは、見も知らずの男の人だった。
両手を電車の扉につけ、私の身体を背中から抱きしめるような形
でかばってくれる。

そのおかげで、私はこの状況で圧迫感を抱く事もなく、楽な姿勢
でいられた。

「キミ、大丈夫？」

「は、はい……大丈夫です」

「女の子だと、満員電車でこれはキツイよね」

人々のじつた返す車内で、その男の人は私をかばうように守つて
くれている。

年齢は私と同じか、少し上くらいで、優しそうな顔立ちの爽やか
さを感じる男の人。

見も知らない相手に向けられる優しさは本物だと思つ。

私は若い男性が苦手な方で、こんな風に密着された事なんてない。それでも、それに嫌悪感を感じないのが自分でも不思議だつた。

「……どうかした？俺、変な所にでも触つちやつた？」

「い、いいえ。そんなことはないです」

間近で見る男の人の顔。

彼はとても真っすぐな瞳をしていた。

『まもなく 駅です。お降りの際はお荷物のお忘れなきよう……』

車内のアナウンスに私は小さく安堵のため息をつく。

大勢の人気が降りてくれたおかげでずいぶんと楽になる。

「すみません、ご迷惑をおかけしました。大変だったでしょうか？あ
りがとうござります」

満員電車の中をずっと私を守るよつとしてくれていた彼にお礼を
言つ。

彼は照れくさそうに「別に大したことじやないから」と笑う。

「…………」

改めて男の人を見て、私は胸がなぜか高鳴る感じを覚えた。

今までそんなことはなかつたのに……。

男性を見て自分が何かしらの反応を示す事はなかつた。
彼が特別だつてことなの……？

「あ、あの……ううつ……」

何か話かけようとしたけども恥ずかしさから何も話せない。お互いに見つめ合う形で時間だけがゆっくりと流れ。やがて、私達は自分達の降りる駅につき、電車から降りた。彼との何だか名残惜しさすら感じながら別れ、私は帰路につく。

自分の家までは駅から自転車で15分程度の距離にある。自転車に乗りながら私は彼のことを意識していた。

「男の人にもいろんな人がいるんですね。男性にあまり印象は持っていないませんでしたけど、とても爽やかな男の人でした」

独り言をつぶやきながら、彼の笑みを思い出し、何だか不思議な気持ちが胸に溢れる。

この気持ち、未だに体験した事のない想い。

「……何なんでしょう、この気持ちは」

私にはよく分からない。

それが何の気持ちかも分からないけども、彼の優しい笑顔だけは忘れられずにいる。

惹かれている。

そんな言葉が脳裏をよぎる。

「「」の私が……男の人に惹かれている? そんなことか、……あるはずない、でしょ?」

そんなことはない。

思わず否定しても、否定しきれない自分がいる。

「こんなにも強く心に残るなんて……本当に不思議な気持ちです」

「和歌、何が不思議なの?」

「ふえ? お、お母様?」

気がつけば田の前には私のお母様が立っていた。

私の実家は戦国時代から続くと言われる椎名神社という神社。表参道とは違ひ、裏の方には私達が住む家への道がある。お母様も同じく、自転車から荷物をおろしている最中だった。

「いつもみたいに、ぼや~つてしていると転ぶわよ?」

「お母様、私はそこまで子供ではありません」

「ホントかしら? 和歌はどうじつ娘な一面があるからね」

「もうひ、お母様ったら……私も今年で16歳、子供扱いしないでください」

あと少しで私の誕生日、晴れて16歳になれる。

一般的には女性が結婚できる年齢で、私にとつては意味のある年齢になる。

「子供扱いとドジを心配するのはまた違うわ。それより、何を悩んでいたの？」

「べ、別に悩んでいたわけではなく、先ほど、とても優しくしてくれた人がいて……その人の事を思いだしていただけです」

「へえ……もしかして、男の人？」

お母様に指摘され、再び彼の笑顔を思い出して私は顔を赤く染める。

「……そ、そうですけど。どうして分かっただんですか」

「何となく、かしら。和歌がそんな風に反応するなんて初めてじゃない？相手はどんな人なの？カッコいい男の子だった？」

「や、やめてください。変な風にからかわないでください」

私とお母様の関係は他人からよく姉妹みたいだと言われる。
それだけ普段から仲はいいけれど、それゆえに、こうなると私はかなわない。

お母様は「ふふつ」と悪戯っぽさを思わせる微笑をしていた。

「何ですか、お母様？」

「和歌も女の子なんだって思ったのよ。もちろん、和歌は可愛らしい自慢の娘で十分に女の子らしいけども。貴方、今まで異性に反応を示す事はなかつたじゃない。だから、もしや、実は女の子が好きなんじゃないかって」

「ち、違いますっ！？私はノーマルな趣向ですから、そんな誤解はしないでください」

確かに異性は苦手だけども、だからと言って同姓に好意を抱く趣味は持っていない。

「そんなに慌てて否定しなくとも。ただの冗談よ

「うう……お母様は時々、意地悪です」

「あら、可愛い娘をからかっただけなのに」でも、貴方から男性の話題を聞くのが少し嬉しくて、ついからかってしまったの

優しい微笑みを向けるお母様に私は先ほどの出来事を語る。

短時間の出来事、特別と言えるほどの事かどうかはわからない。でも、私にとつてはわずかな一瞬でも、初めて男性を意識した瞬間だった。

話を聞いてくれたお母様はゆっくつと私の頭を撫でる。

「よく聞いて、和歌。きっと、それは“恋”よ」

「は、はい？恋？」恋つて、そんなはずないじゃないですか

「どうして？彼に惹かれている、と自覚しているのでしょうか？」

「それは、そうですけど。たった一度、しかも、數十分の間の事なのに……だからって恋なんて結論は……少し唐突というか、安直といつか、変だと思います」

初夏の訪れを感じさせるような夕暮れの日差しを浴びる。

家まで続く木漏れ日の道を2人で歩きながら、お母様は優しい声で言つ。

「――一目惚れ、つて言葉があるのを和歌は知つているかしら?」

「……言葉くらいは知つてますよ」

「人はね、たつた一目でも人を好きになる事があるのよ。その人を一瞬で好きになつて、胸に強い想いが生まれる事もある。和歌はきっとその男の子に恋をしたのよ」

「私が……恋を……?」

忘れられない想いが生まれる……。

目を閉じれば、あの時の男の人の笑顔がすぐに思い浮かぶ。
この私が一目惚れ……名前も知らないあの人を……好きになつたの?

「まだ自覚が足りてないようね」

「――これがホントの恋かどうか、分からないですから」

「くすつ。それは違いないわ。だつて……」

お母様は私の頬をそつと指でつづく。

「だつて、その男の子の話をしていた顔を和歌の顔は、恋をしている女の子の顔だったもの。今もいい顔をしてるわよ?」

「……なつ……あ、うう……」

お母様に「和歌に好きな子ができるなんてねえ」と家までの道、からかわれ続ける。

私は一目惚れをしてしまった、らしい。

その想いを抱いた相手に2度目の再会があるかどうか分からぬのに。

あの人名前を知りたい、あの人にもう一度会いたい。

そう、思つてしまふ自分に気付いた時。

私はその瞬間から、自分が恋をしているのだと自覚したの。

家に帰るとお父様が私達を玄関で出迎えてくれる。
どうやら、彼も今、帰ってきて来た所みたいだ。

「おかえり、和歌」

「ただいま。お父様も今、帰ってきた所ですか？」

「ああ。今日は忙しくて。この時期に忙しいのは珍しいけどね」

神主をしているお父様は今日は朝から忙しかつたらしい。
大安吉日には結婚式が何組か重なることもある。

椎名神社でも月に何組かの結婚式が行われる。

縁結びの神様として、この付近では知られる神社ゆえに人気もある。

「そうだ、和歌。例の件なんだが、本当に進めてもいいのかい？」

る。

例の件、と言われて心臓がドキッとしてしまう。

それは私の宿命と言つてもいい事柄だった。

私は早い時期に結婚相手を探さなければいけない。

大好きなこの神社を存続させていくためにも……。

一目惚れなんとしても、あまり意味はないのだと忘れていた。

「無理にしなくともいいのだよ? 何も私の代で終わると決まつたわけでもない。急いで、後継者を決めなくても……」

「いいのです、お父様。これは私が決めたことなのですから」

それは私が幼い頃から決めていた、ある意味、覚悟のよつなもの。大好きな場所を守り続けていくために、自ら選んだ運命。

「 私は椎名神社を継いでくれる男性と結婚すると決めているのです」

それこそが嘘偽りのない私の願い。

だから、私は……誰かに一目惚れなんてするだけ、辛くなるだけなのに。

第8章：願いを叶えて

【SIDE・椎名和歌】

私は自ら決めた事がひとつだけある。

「そうだ、和歌。例の件なんだが、本当に進めてもいいのかい？」

それは、結婚する相手の条件のこと。

「はい。私も16歳になりますし、早い時期に決めた方がお父様も気が楽でしょう」

椎名神社には後継者候補がない。

どこの神社でも同じ問題で悩むことがある。

後継者問題、あとを誰が引き継いでくれるか。

大抵は息子だつたり、親族だつたりする。

特別な職種であり、資格も必要な富司の成り手は限られている。

それゆえに、神社の存続の鍵となるのが後継者の存在だ。

実際に今の時代は寂れて、富司のいない小さな神社もそれなりにある。

そんな場合は他の富司が掛け持ちをしたりしているケースも多々ある。

私の父も、10を超える他の小さな神社などの富司を兼任している。

後継者がいれば、この神社はこれからも守つていける。

幼い頃から私は大好きな神社を守りたいと思つていた。

大好きなこの場所で、大好きな人と一生を暮していきたい。

けれど、それは現実には……そう単純な物でもない。

私自身、異性が苦手という事もあり、話自体もまったく進んでいなかつた。

高校に入学しての初めての夏。

よつやく、その話が本格的に始まろうとしていた。

「こればかりは相手のいる事だから難しいのは確かだよ。和歌、無理せずに決めて欲しい。僕はそれだけが心配だ。好きでもない相手と結婚してまで、この神社を継いで欲しいとは僕は思っていないのだよ」

「心配してください、ありがとうございます。お父様の気持ちは嬉しいです。けれど、これも私の運命……。私が決めたことですから。良い縁があればぜひ、お話を進めて欲しいです。覚悟はとうの昔に出来ていますから……」

恋愛の有無に関わらず、良い縁があるのなら、私はそれを受け入れれる。

そう考えていた、今日という日が来るまでは……。

どうして……私は……あの人に出会ってしまったの。

一睡惚れをしてしまった彼の顔を思い出すたびに胸が締め付けられる。

「これは恋をする」との痛みなの?

「和歌?」

「なんでもありません」

「そりゃ、疲れているのならまた後で話すが?」

「いいえ、私にお話があるのでしきう。大丈夫ですか?」

どうして、このタイミングで話を切り出してきたのか。

それはきっと……お父様が相手を見つけてくれたに違いない。
お父様は少し不安そうにこちらを見ていた。

「その件だが、実は柊の息子さんを紹介してもらう事になつたんだ

「柊のおじ様の？ 息子さんがいると聞いたことがありますけど、確か
か息子さんは結婚されていたのです？」

柊のおじ様はお父様の古い友人で、この家にも時折やつてくる。
とても面白く明るい方で、雰囲気のいい人だ。

そして、彼の息子さんは数年前に結婚しており、彼の話にも出で
くる事がある。

「いや、それは長男の誠也君の事だな。柊には次男の子がいてね。
高校2年生だから、和歌よりひとつだけ年上になる。会うだけでも
会つてみるかい？ さすがに、彼も事情が事情だし、すぐに結婚とい
う話にならないと思うけどね」

私の悩みはこの問題の難しさもある。

ただ単に私との結婚という一点のみの問題ではない。

神社の神主になる、という私の夢を押し付ける事になるのだから。
最初から富司になる気がある人ならばいいけれど、そう言つ事の
縁遠い方ならば、「はい、分かりました」と受け入れられる事でも
ない。

きっと、その彼も「戸惑つに違いない。

「……はい。の方はかまいません。柊のおじ様の息子さんならば、
会つてみたいですね」

「そうか。彼の名前は……元雪君といつ

す”と古風な名前だと、いつ印象を受けた。

和歌なんて言つ名前の私が言える立場ではないけども。少しだけ親近感がわいてくる。

「はじまりの雪、ですか。素敵なお名前ですね」

「僕は実際の彼に会つた事はないけども、終は和歌には相性がいいんじゃないかつて言つていたよ。それで、話は急になるんだが、明日はどうだい？」

「明日、ですか？」

早い方が良いには違ひないけども、急な話だと思う。

「分かりました。心の準備はしておきます」

でも、先延ばしにしても意味はないので、私は頷いて答えた。

「それでは、この話は進める事にしよう。……和歌。神社を思う気持ちは良い事だけど、キミの人生もまた大切なことだ。自分の事も考えるんだよ」

お父様にそう言われて、私は頷けなかつた。

……頷いてしまえば、きっと、私はその話を断つてしまいそうになつたから。

私は夕食後、自分の部屋で思い悩んでいた。

脳裏に浮かぶのは2人の存在。

ひとりは一目惚れの彼のこと。

そして、もう一人は……明日、会う事になる元雪様のことだ。

前者はただの憧れ、後者は現実の問題。

どちらも今日と言う日に訪れた私の縁の相手。

「……縁とは不思議なものですね」

私は窓の外から見える景色を眺めながらため息をつく。

神社は高台にあるので、そこに併設されている私の家からもよく

景色が見える。

街の色どり豊かな光の色、綺麗な夜景を部屋の窓から眺める事が出来る。

「元雪様、か。どんな人なんでしょう」

柊のおじ様のようなタイプなのかな。

怖い人だけではなければならない。

どんな相手であれ、この話を進める以上は結婚を考えなければいけない。

相手が私と条件を受け入れてくれる事が前提条件ではあるけども

……。

私も相手に望むのは……。

「今はただ、元雪様が良い人である事を望むだけ……あの人のよう

に」

夜景に向けて放つた自分の本音に、私は嫌悪感を覚えた。

「私は……なんてことを……」

誰かの面影を会つた事もない人に對して重ねようとするのは失礼だと思った。

元雪様は「神社の後継者と結婚したい」という私の我が儘に巻き込む形になつてしまつたというのに。

他人と比べる事は私は好きではない、それなのに。

「良い人と言えば、彼が思い浮かぶなんて……一日惚れなんてしなければよかつた」

ダメだ、今の自分は思つてている以上に精神的に参つてているらしい。

「はあ……」

お母様はこの気持ちが恋だと言つた。

私は今、それを痛いほどに自覚させられていたの。
結婚相手になるかもしれない相手ができて、明日会つ予定もあるのに。

心では別の人々の事を一番に強く考えてしまつてている自分がいる。

私が好きなのは……あの人なのだ、と。

神社を継いでくれる人と結婚するのは私の夢。

そのはずが、私はどうして……こんなにも彼の事を考えてしまうの。

「せめて、一夜だけでも、彼だけを思いたいのに……」

純粹に、初恋の彼を想い、眠る夜が欲しかった。
結婚の話はせめて、数日後にもらいたかった。

明日会う予定の元雪様には失礼だけども、私はこの初恋の気持ちに浸りたかったの。

「あつ……」

気がつけば、瞳の端に薄つすらと涙の雫が溜まっていた。
私はそれを慌ててぬぐう。

「どうして……恋とは辛いものなのでしょう」

人が人を想う事、15年生きてきた私が初めて味わう、恋の痛み。
私は今、名前も知らない初恋の人を思い浮かべている。
明日には現実と向き合わなければいけなのに。
その相手が私にはいるのに、幻想を求めてしまう。

「ごめんなさい、元雪様。明日、貴方に会うまでは、私は……」

私は一言だけ彼に謝り、部屋を出た。

「本当に一夜だけの夢を、見させてください」

今は元雪様の事を忘れて、初恋の人の事だけを考えさせて……。

深夜の神社、誰もいない静まり返った境内……。

時折、夜中に参りに来る人がいるけども、今日はその様子もない。

「私自身、縁結びの神様に祈る事はなかつたけども……」

私はここにきてくれるたくさんの人々の笑顔が好き。
縁を求めて、願つて、それが成就した時の喜びを見せてくれる人々が好き。

「神様……私にも……特別な縁が欲しいと思うのは私の我がままで
しょうか」

拝殿に座りこむ私はただ小さな声で呟くことしかできなかつた。
この場所で、日々、たくさん的人が祈りを込める。
その願い、その思い、私は……今、改めて感じる事ができた。

「……」

私は子供だつた……私はまるで何も理解していなかつたのだと理解した。

恋愛とは単純ではない、それゆえには悩み、神に祈り、願いを込める。

「一目惚れした、あの人にもう一度会いたいです」

今宵はただ、あの人だけを想つ。

「彼を好きになってしまった私は……どうすれば……」

私は神様に自分の想いを、本音を呴き続ける。

明日、元雪様に私はどんな顔をして会えばいいの。

初恋に悩み苦しむ自分の姿に……私は本当に自分が子供なのだと
思い知つた。

第9章・恋愛成就

【SIDE・椎名和歌】

神社を守りたいがゆえの縁談。

それは私が小さな頃に聞いたお父様の言葉がきっかけ。

『和歌は女の子だから、跡取りにはなれない。神社の将来を考えなくてはいけないな』

それはとてもショックだつた。

私だけじゃこの神社は守れないなんて……。

巫女はずつと続けられる職業じやないし、私には神社を継いでくれる男性が必要だったの。

幼い頃から決めていた事だから、例え、一日惚れ相手がいたとしても曲げられない。

私が自分で決めたことだもの。

そして、運命の朝が来る。

緊張に加え、色々と考え過ぎて、昨日はあまり眠れずについた。

「……和歌、今日は縁談なんですか？」

「お母様……はい、お父様がそう言つてました」

「縁談はいすれと思つてはいたけど、このタイミングで？昨日、一日惚れ相手をしたばかりなのに、本当にそれでいいの？」

お母様も分かっているはずだ。

小さな頃から決めていた私の意思は変わらない事を

「はい、ずっと前から決めていた事ですから。私はこの神社を受け継いでくれる方と結婚したい。心配なさなくても、無理に慌てて決めたりはしませんから」

「……本当に？」

お母様はこういう時は鋭い。

もしも、相手が私の結婚条件である「神社を受け継いでくれる」と言ってくれたら、私はきっとその相手を断らない。よほどの事がない限り、その相手を受け入れる。

「和歌が大事な物を守りたいって気持ちは分かるわ。だけど、和歌はもつと自分の事も大事にした方がいい。私は神社より貴方の方が心配よ」

ぎゅっとお母様は私を抱きしめて呟いた。

彼女の優しさに私はすぐ心が楽になる。

抱えていた不安が少しだけ消えた。

「ありがとうございます。ほら、お母様。今日は出かける予定なのでしょう。私の事はいいので、そろそろ出かけてください」

「いきなりなのよね。こんな大事な話をすぐに決めちゃうなんて…」

…

お母様は以前から予定があつたために、出かけなくてはいけない。傍にいて欲しい気持ちがあつたけども、仕方なかつた。

「今回で決まるとも限りませんから」

「そうよね。いきなりってわけじゃないもの。やつくりと決めたらいいわ」

あくまでも相手次第だけど、と私は心の中で呟いた。

「でも、良い人だつたらいいわね。和歌が好きになれるような人である事を私は祈っている。和歌にとつての良い出会いを期待しているわ」

「……私もそう思います」

良い出会いである事を祈る。

私にもその気持ちは理解できた。

不安と期待が入り混じる縁談。

そして、その縁談は思いもよらない再会になる。

「俺の名前は柊元雪、よろしくね

運命と言つ言葉があるのなら、私は今、この瞬間に使いたい。そんな事を私は本氣で思つた。

私の縁談相手として家にやつてきたのは……。

「元雪様が……あの時の男の子?」

その彼こそ、私が一日惚れをした男の子だった。

嘘だ、こんなこと……奇跡としか思えない。

元雪様と一目惚れの男の子が同一人物なんて、想像すらしていかつた。

私が一夜の間、抱えてた不安は一気に消し飛んでしまう。

こんな偶然があるの？

うん、これは偶然なんかじゃない。

特別な縁だと断言できる、運命の出会いだった。

そして、それだけじゃなくて。

「……俺は和歌さんと一緒に生きていきたい。キミの夢を叶えたい」

私の夢、私の事を理解してくれて、受け入れてくれたの。元雪様に初めて会つて感じた優しさ、それは本物だった。

私は元雪様が好きなのだと自覚する。

この気持ちこそが恋愛なんだって……。

「俺も誰でもよかつたわけじゃないよ。和歌が相手だから、結婚したい。夢を叶えてあげたいって。俺も和歌が好きだから」

そう言つてくれた元雪様。

私の瞳から流れるのは嬉しい涙。

神様が与えてくれた素晴らしい出会いに私はただ感謝していた。

互いに告白をしあい、想いを認め合う事ができた。
その後は元雪様とふたりだけで神社の境内を散策する。

「それにしても、広い神社だなあ」

私の好きなこの場所をもつとよく知つてもういたかつたからだ。
彼に神社を案内しながら、私は質問をしてみる。

「元雪様は椎名神社に来た事は？」

「んー、七五三以来だなあ。それ以来はここに来る機会もそんなに
なくてね」

「そうなんですか？」

彼の話だと初詣はもつと近い神社に行つていたみたい。
今日と書つ日に出会わなければ、私と会う可能性なんてほとんど
なかつた。

これは神様が与えてくれた縁に違ひない。

「ここから先は森になつてゐるんだ？」

「はい、この向こうには「神木があるんです」

「そう言ふば、ここは森は大きいけど、ここも神社関係の土地なの
か？」

ここは神社の場合ほこの付近の山のほとんどが先祖から受け継が
れている。

「そうですね。この鎮守の森は椎名神社の土地になります」

「ちんじゅの森？」

不思議そうに元雪様は尋ね返す。

そうか、一般の人はあまり知らない事なのかも知れない。

「はい。鎮守の森です。元雪様、大抵の神社には森が一緒にあるでしょう？」

「……そう言えば、そうだな。思いつく限りの神社のどこにも森がある。あれ？ 何でだろ？ 今まであまり気にした事はなかつたけども」

「それを鎮守の森と言つんです。神社の周りある森のことですね」

私達が今いるこの場所も鎮守の森と呼ばれる場所だ。

樹齢数百年の「」神木を含め、古くからの自然が残されている。

「何で神社と森はセットなんだ？」

「それは、神社と森には深い関係があるんです。元々、神様と言つのは古い時代からこう言つた神域と呼ばれる森を信仰していたのです。自然崇拜、特別な森林には神様があられる場所と言つ事で礼拝していたんですね」

「つまり、最初に神社ありきじゃなくて、信仰された自然の森の方が最初にあつたってこと？ その森を礼拝しやすくするために神社が建てられたのか？」

「はい。そうなります。古くから神聖な森があり、その場所に神社が建てられました。そして、その場所を覆うように残された森は特別な森として、鎮守の森と呼ばれているんです。だから、どの神社にも周囲を覆うように森が残されているんです」

今の時代では都会でも数少ない森林に触れられる事のできる場所。鎮守の森は周囲が開発されても触れる事を良しとしない。神聖な場所ゆえに、今も多くの自然が残されている。

「そつか。それで、街中でも神社の場所だけには森があるわけだな

「この神社の場合は山全体が鎮守の森になっていますけどね」

森だけがポツンと残り、周囲が建物だつたりる光景も珍しくはない。
それはそれで、とても寂しい気持ちになる。
自然が消えていく現代でも、鎮守の森にだけは手をつけて欲しくない。

「元雪様、こちらがこ神木になります」

この神社のこ神木は桜の大樹。

樹齢は数百年、この神社が建てられた以前よりあつたらしい。

「古い木だなあ。この木の桜はまだ咲くのか?」

「はい。まだ咲きますよ。春になると、とても綺麗な花が咲いています」

夏場は虫が多いので、あまり近づくには近づきたくないけども。

「……おや、こつちの石碑は何だ?」

元雪様が気付いたのは古い石碑。

その石碑には少し悲しい恋の話が残されている。

戦国時代にこの椎名神社は今のような大きな神社になった。

そのきっかけとなつたのが、この石碑に名前が刻まれているお姫様。

かつて、この地を治めていた大名の娘である、紫姫あかねひめ。

今もこの神社に伝わる彼女の恋の物語がある。

「……その石碑は昔のお姫様の伝承でんじょうがあるんです」

「へえ、そうなんだ……あつ……！？」

一瞬、驚いた表情を見せる彼。

元雪様はその石碑に触れて何かを感じているよう見えた。
どうかしたのかな？

「……元雪様？どうかなさいました？」

「いや。ひとつかり、石に触つたら、手にコケが……気持ち悪い」

「もうつ。元雪様つたら驚かせないでください。何かあつたんじゃ
ないかって思つてしましました。手を洗いに行きましょう」

「悪いね。あはは……」

でも、去り際に横田で石碑を見つめる元雪様の姿はどうか気にな
る様子に見えたの。

私は気になりながらも、その場を立ち去る事にある。

「……俺、ここに来た事があるよつた気がする」

ポツリと独り言のように呟いた元雪様。

私達はまだ知らない。

これもまた、私達にとつての縁であったことを

。

第10章・恋人は巫女

【SIDE・柊元雪】

俺は朝、目覚めたベッドの上で昨日の出来事を思い出す。

「椎名、和歌か……」

初めて好きな女の子ができた。

俺は和歌が好きなんだ。

「こんな気持ちを女の子に抱く事になるなんてね」

誰かを強く意識するのも、誰かをこんなにも愛しく思うのも初めての経験だ。

自分のことながら、どこか運命的な物を感じてしまう。俺たちは再会して、結婚を前提に付き合う事になった。目に見えない特別な何かが結び付けてくれたように。

「……しかも、同じ学校だつたなんて驚いたよ」

昨夜に電話で連絡をとると、なんと和歌と俺は同じ地元の高校に通っていたらしい。

彼女は高校1年生だから、これまで会う接点はなかつたからな。けれど、同じ学校と言うのはこれからも会う時間を増やせる意味ではすごくいい。

恋人になるまでは一気に加速するように決めてしまった。でも、後悔はしていない。

和歌との関係はこれからもっと深めていけたらいいな。

「……と、あんまりのんびりもしていられないか」

和歌の事を考えると、こつもの朝食を食べる時間を少しずぎていた。

俺は急いで制服に着替えると、リビングに向かう事にした。

「おはよー」

リビングには母さんと麻尋さんが仲良く朝食を食べている。

「元雪、遅いわよ。はやく朝ごはんを食べちゃいなさい」

「悪い。ボーッとしてた。あ、麻尋さん。おはよう」

「おはよー、ユキ姫」

朝食の準備は既に終わり、親父と兄貴は仕事場である工場へ行ってしまっていたようだ。

現在時刻は朝の7時前。

うちの家族の朝はちょっと早い。

7時には親父、母さん、兄貴は工場の方へ出勤してしまつからだ。家に残るのは兄貴と結婚して仕事をやめた麻尋さんだけだ。

「それじゃ、私も行つてくれるから」

「うん。こつてらつしゃい」

「麻尋。いつも大変だと思うけど、あとはよろしくね」

「はい。お任せください」

俺と麻尋さんが笑顔で母さんを見送る。

「なんて言つたか、麻尋さんも大変だよね？」

「わつ? って何が?」

「忙しい母さんの代わりに家事全般を担当するとか。兄貴のお嫁にきて毎日大変だ」

「うちの家事はほとんど麻尋さんがしてくれているのだ。

炊事洗濯、掃除やら……それが嫁に来ると言つ事の大変さなんだわい。

「今は家族経営の工場なので、母さんも朝食以外はほとんど家事をする時間がないし。

そつ言つ意味では麻尋さんの存在はすごく助かっている。

「んー。お掃除も料理も私は大好きだから別に苦ではないわ。ユキ君、それくらいは結婚したら普通のことだし、世の中には、姑問題で悩む人も大勢いるみたい。私の友達もそうだもの。でも、うちのお義母さんはすごく優しい人じゃない」

「まあ、そつなのかな? 麻尋さんを気にしているのもあると思つけどね」

「私はあまり実家と仲が良くない分、こうこうのが家族なんだなあつて思えるの。誠也さんと結婚してホントによかつたつて思つていわ。可愛い弟もできたしね」

「……あはは」

俺も綺麗なお姉さんができて嬉しいです、とは面を向かって恥ずかしくて言えないが。

ホントに麻酔さんができると、我が家は雰囲気もよくなつたと感づ。

「それにしても、コキ君も結婚を決めるなんて早いわよねえ。まだ高校生でしょ？」

「あー、うん。俺の場合はひとつ事情が違うし」

和歌の実家である神社を継べるのが結婚条件だから仕方ない。

「親父たちの話だと、俺たちもすぐに結婚するわけじゃないから」

「やつなの？」

「俺はまだ16歳で、全然結婚できる歳じゃない上に、俺が正式に神社を継げるようになつてからだから、まだ当分先だよ」

まあ、婚約と書つ形にはなると思つけどな。

俺もまだまだ結婚なんて言葉は実感がわいてこないので。

「神職の大学を卒業してからひととかじりへ」

「やつたじやない。その子、可愛い子なんでしょう？美少女とお付き合つこでいい、恋愛できるんじゃないの、コキ君？」

「よかつたじやない。その子、可愛い子なんでしょう？美少女とお付き合つこでいい、恋愛できるんじゃないの、コキ君？」

麻尋さんにからかわれながら俺は照れくさくなる。
そう言つ意味では俺も美少女な恋人ができたんだよな。

「その女の子、二つ家に連れてくるの?」

「母さんの事もあるから、今週末くらいにはつて思つてる」

「そつかあ。私も会えるのを楽しみにしてるわね」

「実際に和歌と会つて、氣にいつてくれると思つてんだけど」

今の俺の悩みと言えば、和歌との結婚を反対する母さんのことだ。
あの人を説得するのが大変だ。

そして、その事を和歌に伝えなくてはいけない事が今の俺には悩
みだつた。

「何事も、スマーズにすすんじゃ話が面白くないじゃない」

「いやいや、そこはスマーズに通つて欲しい所だよ」

「くすり。それも愛の試練だつて思つて頑張ればいいじゃない。頑
張れ、ユキ君つ」

麻尋さんに応援されて、俺は苦笑いを浮かべる。

「こゝは頑張るしかないんだよな。」

俺はそのまま、朝食を終えると自転車に乗つて家を出た。

いつも学校に行くために使う道とは少し別のルートを通り、和歌のいる神社へと向かう。

この神社によつても、さほど学校に到着する時間には変わりはないはずだ。

ただいまの時刻は7時半。

神社に到着した俺は和歌を迎えにきた。

『できれば、一緒に登校したいです』

電話で話した時に、一緒に登校しようと和歌と約束したのだ。

「この階段を登ればいいんだよな」

さすがにこの神社もこんな朝早くからは人通りもない。

俺は階段を登り始める事にした。

周囲を森に囲まれた神社では爽やかな朝の空気を感じられる。

「和歌の家にまで行つた方がいいのかな」

そう思つて、境内に入った俺は真つ先に目に入つたのは白い上衣と紺袴。

いわゆる巫女装束を着ている和歌が掃除をしていた。

可愛いとは分かつていたが、ものすごく巫女服が似合つてゐる。

清楚っぽい大和撫子を絵に描いたような和歌にぴったりだ。

彼女に見惚れないと、和歌が俺の姿に気付く。

『……元雪様！？』

「うん。おはよう、和歌。掃除中だつたんだな」

「おはようございます、元雪様つ。お早いんですね」

「ほり、時間も決めてなかつたし、和歌の事情も分からぬからさ。
早めにきただけだ」

巫女をしているとは聞いてたので、掃除をしたりするんだひとつと
は思つていた。

「掃除をしていたのか？」

「ええ。これから本当の巫女さんがやつてきて掃除をするんですけど
ども、私は学校がありますから。この境内の掃除だけをさせてもら
っています」

「境内だけでも大変だろ？」

「いいえ。他の場所の方が大変です。木の葉っぱなんて掃除しても
しきれませんから。紅葉の時期とかはすぐ大変ですよ」

「そうなんだ」

「あ、すみません。急いで支度をしますね」

巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻る。巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻る。巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻る。巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻る。巫女装束のままの和歌は慌てて家に戻る。

「いいよ、慌てなくとも。まだ時間はあるんだからさ。和歌、ゆつ
くり準備しておいで。俺が早く済ませたんだ。ご飯も食べてないん
だろ？俺はその辺を歩いているからさ」

「……元雪様。ありがとうございます。好意に甘えさせてもらいま
すね」

嬉しそうに微笑する和歌。

俺は掃除を終えて立ち去る彼女を見送る。

「……巫女姿が可愛くて良いな」

彼女がいなくななりポソリと俺は呟いた。

恋人が巫女属性の男はこの日本にどれだけいるだろうか。

俺つてば勝ち組、勝ち組？

和歌の可愛い魅力をまたひとつ発見した気がする。

「さて、待ってる間に散歩でもするか」

俺は適当に森の方へと歩いてみる。

この間、気になつた石碑の所にでも行つてみるか。

「えつと、確か……鎮守の森だっけ」

鎮守の森に入ると樹齢数百年の桜の巨木がある。
その横には小さな古びた社と石碑があつた。

「以前、ここに来た事がある氣がするんだよな。なぜか分から
んけど」

俺はこの場所を知つてゐる氣がする。

昔、椎名神社に来た時の事を身体が覚えていんんだろうか。
よく見ると石碑には何か文字が刻まれている。

古い石碑なので読みづらいが『紫姫』と書かれていた。

「えっと、なんて読むんだ?……むらさき、姫?」

「……違ひ。紫と書いて、『ゆかり』と読むのだ。以前にも教えたはずだがな」

「あ、そりなんだ。紫姫(ゆかりひめ)って書いてるんだな……え?」

俺は誰かの声に驚いて背後を振り向くと、少女がそこに立つていた。

どいか不思議な魅力を感じさせる、和服を着た美少女。

「久しいな、柊元雪。まさか、またここに来るのは思わなかつたが」

「キミは一体……? どひして、俺の名前を?」

初対面のはずの女の子がなぜ、俺の名前を知っているんだ?!

第1-1章・もつ一つの再会

【SHIDE・柊元雪】

和歌を迎えに朝早くから椎名神社にやつてきた。
そして、鎮守の森に置かれている石碑の前で俺は謎の美少女と出
会う。

「久しいな、柊元雪。 まさか、またここに来るのは思わなかつたが」
彼女は俺の名前をなぜ知つているのだ？
「

「キミは一体……？」ビックリして、俺の名前を？

凛とした強い瞳、肩までの長さに整えられた髪。
どこか和歌と似てゐるような、不思議な印象を受ける美少女。

「お前が昔、自分で名乗つたではないか。さすがに名前くらい覚え
ている」

「へ？俺とキミは初対面だろ？俺たち、会つたことがあつたつけ

俺には田の前の少女が誰なのか分からぬ。
初対面のはずだが、どうやらそうではないのか？

「……あの時の記憶がないのか。ただ、忘れてゐるだけか。どちら
にせよ、柊元雪は私を覚えていないということだな」

「毎回、フルネームで呼ばないで。元雪で良いから」

「……柊元雪。まさか、お前とのよひつな場所で再会するとはな」

「うわあ、無視ですか……マイペースな性格なんだろつた。
ていうか、俺の方には全く覚えがないんですけど。

こんな美少女に会つたことは……和歌以外にあるのだろうか？」

「こんな場所で、ね？」

「あれだけの事があつて、もう一度ここに来る事もないと思つて
いた。また来るのはただの学習能力のない馬鹿か、それとも……引
かれてしまったのか。どちらにしても、よくないな。柊元雪はここ
に来るべきではなかつた」

少女は警告する口調で俺に詰つ。

「ここは自然豊かで、静かで良い場所だと思つけどな。

「キミは過去に俺と会つたことがあるのか？」

彼女は呆れたような顔を見せるため息をつく。

「ある。だが、お前が忘れているのなら、それでもよい。気にする
な」

「余計に気になるつての。子供の頃に会つたつてことか？」

「さあ、どうだろつたな」

彼女はもう答える気はないのか、適当にはぐりす。
ただ、説明するのが面倒だつて風にも見えるけど。

「ふーん。それでも、よく俺だって分かつたね。子供の時なら見た目も成長してるだろ」

俺が忘れているのはきっと彼女が成長しているからだ。
そうに違いない、と思つ……。

「人間の魂には色がある。お前の色は昔と変わらず、濁つた灰色をしていて。お前みたいにどんよりとした灰色の魂の色を持っている人間は中々、いないからな。一目で分かつたよ、お前は終元雪だと」

「俺の魂の色ってどんよりと濁つた灰色なの…？」

せめて、赤色と、青色とか普通の色であつて欲しかつた。
ていうか、魂に色とかあって、それが見えちゃうの？
つまり、この少女は……いわゆる電波系つてやつですか？
いや、靈感持ちというべきか、どちらにしろ、不思議ちゃんには
変わりない。

「別に悪い事ではない。お前は特別ゆえに、他人とは少し違う。そもそも、魂の色など凡人には見えない。気にするな」

「灰色って言われたら気にするよ。全然、いいイメージに思えない

「心配するな。魂の色が灰色であるその意味も良い意味はないからな」

よけいにダメじゃん！？

よく分からぬが、この電波系美少女は俺の事を知つているようだ。

少女はまるで人形のよつに、感情があまり顔に出ない。

「あのや、キーナの名前は？」

「お前はモノ覚えが悪いんだからな。一度も駄乗らん」

「えーーー？ セめて、名前へりひこだらう」

「終元雪に駄乗るのは気がのらぬ」

彼女はぱいっと俺から視線をそらす。

「気が乗らないってそんな理由かよ」

「このクールビューティーめ、ちょっとお高くとまつてませんか。だが、言われてみれば、どこのか彼女に懐かしさのよつなものを感じる。

それを思い出せないのは……俺がモノ覚えが悪いせいだらう。

「……ホントに何も覚えていないのだな」

なぜか、ふいに彼女は悲しそうな顔を見せる。

「覚えてないなら、これ以上は何も言つまい。一度は言わぬ。この場所には不用意に近づくな。それがお前のためだ」

「この」神木の付近つてことか？

「やうだ。出来る事なら、この椎名神社そのものに近づくのをやめろ」

電波系美少女は俺に警告を発する。

だが、その警告を俺は聞くことなどできない。

「それは無理だな。俺は将来、和歌と結婚する約束をしているから
だ」

「……お前が“あの子”的結婚相手だと？」

初めて、彼女に人間らしい驚いたような表情が浮かぶ。

「それが運命だと叫うのか。だとしたら……それは危険だな」

「運命？俺と和歌のことか？あと、危険ってどういって？」

確かに俺たちの再会は運命的だつたけど、それとはまた違う意味
に聞こえる。

「その運命がお前をどこに導くのか。悪い運命ではなければよいが
……」

意味深に呟く彼女は、興味をなくしたように俺に振り向く事なく
立ち去っていく。

「あつ、おいつー……行つちやつたよ。あの子は何者だったんだ？」

和歌の関係者か、椎名神社に用がある近所の子とか？

「過去の俺と会ったことがある、か。どこでだらうな？」

ミステリアスな少女との再会（？）。

俺は狐に化かされたような不思議な感覚で、森から出る事にした。

「うーん。あんな子に会ったことってあったかな」

俺は階段の所で和歌を待ちながら思い出す。

「……と言つても、思い出せるほど、ここでの記憶はないんだよな

この神社に来たと言つても、さほど何かした覚えがない。

それは和歌も同じだと言つていた。

もしかして、それ意外にもあるのか。

あの場所で俺とあの子が出会ったことが？

「それにしても、あの子……ものすごく綺麗だつたな」

多分、同年代だろうが、あれだけの美人はそうはない。
和服も似合つていたし、言いすぎかもしないが、人間離れした
容姿というべき美人つぶりだった。もちろん、俺の恋人である和
歌もかなりの美人だから。

うん、和歌の方が性格もいいし、あの女の子みたいにワケの分か
らない子じゃない。

ホント、何か不思議な子すぎて俺は付いていけませんでしたよ。

「綺麗だった、つて誰ですか？」

「げつ。わ、和歌？」

「お待たせしました。元雪様」

「気にしないでいいよ。俺が早く来すぎたのが悪いんだし。和歌はいつもほこのくらいに学校に出るのか？」

時計の時刻は7時45分。

俺も学校に出ようとする時間帯だ。

「はい、そうですね。ここからだと学校までは10分くらいですか」「う

「それじゃ、行こうか

「……綺麗なのは女の子の話ですか？」

和歌が小さな声で呟くのを俺は聞き逃せなかつた。
もしかして、気にしてる？

「え、えっと、その……和歌の巫女姿があまりにも綺麗でびっくりしたな、と」

「え？ あ、えつ……わ、私の事なんですか！？」

色白の肌がすぐに赤く染まる。

可愛いですよ、この子。

俺の恋人はマジで可愛いので困る。

そして、話は何とか誤魔化せそうだ。

「元雪様に褒められると嬉しいですね」

「和歌は純粋で可愛いと思つぞ」

「純粋ですか？」

今時いないつてくらいに和歌はピュアなタイプだ。
その純真無垢な所に惚れていると言つてもいい。

「なあ、和歌……ちょっと聞いてもいいか？」

「はい？何でしちう？」

俺はあの子の事を聞いてみよつと思ったが、彼女の一言が気になつていた。

『その運命が悪い運命ではなければいいが……』

悪い運命つて何なんだよ？

俺と和歌の関係に何か意味でもあるつて言つのか。

「元雪様？どうなさいました？」

「和歌には兄妹とかいないのかなつて。お姉ちゃんとか妹とか？」

「いえ。私は一人っ子ですよ？」

「そつか。変な事を聞いたな」

不思議そうな顔をする和歌に俺は誤魔化すように笑みを見せた。
和歌の兄妹でもないとしたら、あの子は誰なんだ？

どうして、彼女は朝早くからあの場所にいたのかが気になる。

「……魂の色、か」

少女は俺の魂の色が灰色だつて言つた。

スピチュアルだけ……人にはオーラがあつて、それぞれの色があるつて話を思い出す。

彼女にはそれが見えてたのかな。

なぜに俺の魂の色がどす黒い灰色なのかは分からぬけどさ。まあ、ただの電波系な可能性もあるけどな。

俺はもう深くは考えずに、和歌の事を考える事にした。

「今度からはこちらの道を使つてくださいね。毎回、階段をのぼるのは大変でしょう。こちちは家族が使うための道です」

屋敷の裏手にはそこまで自転車で来られる道があった。
次からは素直にこちらを使わせてもらおう。

地味にあの階段の上り下りはキツイのだ。

朝から和歌の顔を見られて幸せな気分になりながら、どこか引っかかる想いをする。

もしも、次にあの子に会えたなら……せめて名前くらいは聞きたいで。

第1-2章・愛ある日常

【SIDE・柊元雪】

和歌と一緒に登校して、玄関の所で学年が違うので別れた。可愛い恋人と登校するだけなのに、こんなにも楽しいモノだったとは……。

人生とは実際に経験してみないと分からぬ事が多いな。

「……柊、何をにやけてるんだ?」

教室で友人の黒沢（くろさわ）に話しかけられた。
黒沢は気の合う友人で中学の頃から仲がいい。

「なあ、黒沢つて彼女いたつけ

「彼女?今はB組の女の子と付き合つてるけど、何で?お前が女性の話題なんて珍しい」

「実はさ、昨日、俺にもついに恋人ができたんだよ。年下の女の子でな」

「マジで?へえ、意外だな。あんまり恋愛に興味なかつた方だろ?」

言つておくが、興味がないわけじゃない。
俺も年頃の男だからな、女の子に興味くらいはある……男趣味でもないぞ。

けれど、和歌に出会つまでに人を好きになつた事がなかつたのは事実だ。

「その子は可愛い子なのか？」

「それが聞いてくれよ。めっちゃ、可愛い子なんだよ。もう、マジで最高。真正銘の大和撫子だぜ」

「まあ、お前がそういうなら可愛いんだり。今度、紹介しり

「おう、会ってびっくりするなよ？ホントに可愛い美少女なんだ

恋人がいるって言つ事はいい事だ。

友達との話題にもなるからな。

今までは聞かれる側だったが、今は話せる側になれた。いろんな事で心が満たされる、その感覚が幸せだと思つ。

「でも、柊が恋人を作るのも不思議な気がするな」

「そうか？」

「だつて、今まで誰かと付き合つて才前でやめてだろ？」

「……いやあ、そんなことはないぞ？」

俺には縁がなかつただけだ。

そんなに女の子の知り合いもいながらな。

「本人には自覚なしって奴か。何度か女とうまいきかけては終わりつてのがお前だつたんだがな。肝心な所でダメになるつていうか。中学の時からそつだつただろ？」

「つむつむ。やうなのか？俺は無自覚のフラグブレイカ　だったのか？」

「そーいうことだ。恋人が出来たって言つなら今度こそ、その縁を大事にしろ」

言われなくても大事にするけどね。

和歌との出会いなんて、本当に運命的だつたからな。黒沢と話をしていたら、担任教師がやってくる。

「おまえら、わざわざ席につけ。HR始めるが。あと、今日は席替えするからな」

もうすぐ二月、新たな席で俺も学校生活を送る。俺はくじで選ばれた新しい席に座る。

「おー、柊が俺の後ろなんだな」

「窓際で一番後ろってのはいい席だぞ」

俺の前の席には黒沢が座つてゐる。

何気に頭のいい黒沢と近い席なのは色々と教えてもらひえるからラッキーだな。

後ろの位置は久々なので俺としては嬉しい。

「……あれ？俺の隣の席は誰もいないのか？」

ふと、隣を見ると空席だった。

「あー、その子か。今日も休みだな。篠原（しのはら）さん、2年

になつてから学校に来てないらしいから

「篠原さん？ そんな子、このクラスにいたっけ？ イジメで不登校とか？」

あまりクラスの生徒に興味もなくてよく知らない方だが、不登校なら話くらいは聞いた事があるはずだ。

「イジメじゃない。昔から病弱で身体が悪いそうでな。学校を度々休んでたそうだ。学校側も事情を配慮して点呼とる時に名前を呼んだりしないからお前も知らないんだろ」

「へえ、病弱ってのは大変だな」

「俺は1年の時も同じクラスだったから知ってるが、1年の時は出席日数ギリギリには来てたんだ。優げな印象の美人な女の子だったよ。だが、2年になつてからはまだ來ていない。噂だとこのままだと出席日数が足りないから留年するかもって話だ」

「残念だが、病弱っていうのは、どうにもならないからな」

篠原さんか。

お隣さんの彼女が復帰する事を祈るつ。

昼休みになり、俺は黒沢に昼飯を誘われたが断る。

恋人ができたら、そっち優先しちゃうのは仕方ないよね？

いつもの日常から一転、俺も愛のある日常に変わろうとしている

のだ。

「元雪さんのはずだが。和歌〜?」

待ち合わせていたのは学校の屋上だった。
快晴の空の下で昼食を食べるのもいい。

昼休憩に解放されているこの場所は、景色も綺麗なために食事を
とする生徒も多い。

「あつ、元雪様。」つちです

既に屋上に来ていた和歌と同じベンチに座る。
俺は母さんの作ってくれている弁当を食べる。

「和歌も弁当なんだな。自分で作ったりするの?」

「いいえ、これはお母様の手作りです。私も料理はしますけどね」「朝も忙しそうだからなあ。巫女の仕事つてお掃除がメインな
わけ?」

巫女というイメージではいつも境内をホウキで掃除している感じ
がする。

「メインではありませんけど、朝の日課のよつなものです。清掃は
巫女のお仕事のひとつなんです。人が訪れる神社はいつも綺麗にし
なくてはいけません」

「他にはどんな仕事があるんだ?」

俺は弁当の卵焼きを食べながら彼女に尋ねてみる。
巫女と言えばあの可愛らしい衣装しか思い浮かばない。

でも、実際はいろんな仕事があるんだと思つ。

「そうですね。例えば、お守りやおみくじとかを作つたりしますね。
メインの作業というのであれば、お札作りでしょうか」

「お札?」

「はい。祈祷用のお札です。うちの神社の場合、巫女さんの主な
お仕事ですね」

お札作りとは地味に大変そうな仕事だな。

「あとは巫女の役目といつか、巫女舞を踊る人もいます。私も神事
や祭礼の時には巫女舞を舞う事もあるんですよ」

巫女舞……その響きに俺は何だか聞き覚えがあつた。
遠い昔、どこかでその言葉を聞いた気がする……。

『きれーな巫女舞だね。しーちゃんは将来は巫女さんになるの?』

小さな女の子が頑張って巫女舞を踊る姿。
脳裏によみがえる光景。

ぼんやりとしか思い出せないが、巫女舞と言つキャーフォードがきつ
かけで思い出す。

「そうだ、しーちゃんだ」

「しーちゃん?誰ですか?」

「和歌、そうだよ。俺たち、前に会つたことがある『』

「え？ え？」

と、言われても和歌の方は「？」と疑問な様子だ。食事を続けながら俺たちは順を追つて話す。

「思い出したんだ。昔、巫女になりたいって、巫女舞を田の前で踊ってくれた女の子がいた。それが多分、和歌だと思う」「

「私は幼い頃から巫女舞の練習をしてました……私なんでしょうか？」

「うん。間違いないよ。その時に女の子の名前を俺は『しーちゃん』って呼んでいたんだ」

和歌は年齢が俺よりも低かったこともあり、覚えてないかもしれない。

俺の記憶ですか？ まあ、さうとしか覚えてないことだからな。

「しーちゃん、ですか？ でも、私は“し”なんて名前に入つてませんよ？」「

「和歌の名字は椎名だろ？ しいな、だから、しーちゃんって呼んでたんだと思つんだ」

「ああ、そつちですか。そつち事だったんですね」

俺はしーちゃんと仲良くなつて、巫女舞を何度も見た。

その記憶を思い出したんだ。

でも、あの時はもうひとり、俺たちの傍にいたよ'うな……。

『昔に自分で召乗ったではないか。柊元雪、その召前くらこは覚えている』

「うか、もしやその子が……あの鎮守の森で出合った女の子なんか？」

でも、もうひとりの少女に関してはほとんど思い出せない。

「元雪様は昔の私を覚えてるんですね。私の方が覚えてないなんて……」

「和歌はまだ5歳くらいなんだ。覚えてなくとも、仕方ない」

「それでも、覚えていたかったです。元雪様との思い出を」

軽く拗ねながら、和歌がそつと俺の手に触れてくる。
小さくて、細い指が俺の指に絡まる。

「元雪様の手はとても大きいですね。男の子の手です」

「和歌は女の子らしいってことよ」

「……元雪様はこれまで誰かと手を繋いだ事があるんですか？」

和歌はふと、そんな事を尋ねてくる。

「女の子といんな風に繋ぎあう事はなかつたかな。俺は誰とも付き合つたこともないし、恋をした事もなかつたからさ」

「よかつた……元雪様の初めての相手になれて」

女の子の口から聞くとちよつと別の意味にとらえてしまつのは俺も男だな。

和歌はホッと安堵の声を出す。

「そうだ、和歌。このタイミングで言うのもなんだが、今週末は空いてるか？」

「空いてますけど？」

「だったら、俺の家に来てくれないか？その……母さんが和歌に会いたいって言つてるんだよ。うちの母さん、和歌との話がいきなりでまだ認めてくれていらないんだ」

「なるほど。あまりにも話が突然だつたものですから、当然でしょうね。あら？でも、おじ様はこの縁談は家族も認めてくれているような話をてしませんでしたか？」

「あの親父の言う事は信じちゃいけない。仕事以外はホントに適当な人なんだ、でたらめばかり言つ人なんだ」

親父はマジで、あれでよく社長業ができると思つほどに適当な性格だ。

今回の事も母さんに話をしてくれていたらよかつた話だ。
和歌に会えばきっと母さんも気にいるはずだけだ。

……下手に問題がこじれるような事にはならないと思いたい。

「俺も和歌のお母さんに会つて話がないとな」

おじさんにはあったが、和歌のお母さんにはまだ会えていない。

「元雪様と素敵な恋人関係になれたんですって報告したら、お母様も会いたがっていました。ぜひ、会ってください。ふふつ、でも、こういうのつていいですよね。家族に挨拶するのも、されるのも……繋がりを深めていける感じがします」

俺は何だか照れくさくなりながら和歌と手を繋ぎあう。

その手の温もりを感じながら昼休憩が終わるまで他愛のない事を話していた。

第1-3章・初恋と意識

【SHIDE・椎名和歌】

「元雪様と恋仲になれてからの数日間はずいぶん満たされた日々が続いていた。

登下校と昼食を共に過ごす時間が楽しい。

彼と一緒にいる時間全てが愛おしい。

そんな風に考えてしまっている。

「和歌、本当に幸せそうね」

夕食の支度を手伝つているとお母様は微笑した。

「え？ そうですか？」

「うん。 最近の貴方はとてもいい顔をしているわ」

「……元雪様のおかげです。 の方は私を幸せにしてくれる人ですから」

私は野菜を包丁で切りながらそつと彼の名前を口にする。

「あら、親に惚氣？ 和歌もやるわね」

「 そう言つつもりではなくて。 お母様も元雪様に会えば分かります。 彼がどんなにいい人で、私を想つてくださつているか」

「 いつも家に連れててくれるの？ いつも和歌を家まで迎えに来てく

れでいるのに、紹介はしてくれないの？」

それは元雪様も緊張しているからだ。

改めて親に紹介と言つ形になると、互いに緊張してしまつ。

「近いうちにお母様に紹介しますよ。日曜日には私が元雪様のお母様に会いにいくことになつてゐるんです」

「私も向ひの相手側の二両親に挨拶したいのだけど

「それが……」

私は彼の事情を話してみる事にした。

元雪様の話では、まだ結婚と言つ話を彼のお母様は認めてくださいないらしい。

と言つても、深刻な反対という意志ではなく、どうやら今回の縁談はおじ様がひとりで承諾してしまつた話でおば様には話されていなかつたようだ。

勝手に話が進んでいたから拗ねてるだけだよ、と元雪様は笑つて言つていた。

「だから、もう少しだけ待つてください。お母様」

「…………やつひの事情なら仕方ないわね」

「あの、お母様？お母様は反対されませんよね？」

少しの不安を感じて私は質問していた。
彼のお母様のようこ、と思わず考へてしまつた。

「和歌が結婚を焦っていたのを心配していたのは事実よ？」

「……はい。とにかく、神社の後継者になってくれる人を探していましたから」

「くすくすっ。結婚に焦るなんてもつと年齢を重ねた人がするものなのになー」

焦りや余裕のなさ。

元雪様に出会う前での私にはそれがなかつた。
大好きな場所を守りたい、その一心だつたから。
それを両親に心配させていたのは分かつていたの。

「でもね、実際に元雪君と交際してからの和歌は目に見えて幸せそうなもの。私は反対はしないわ。貴方の好きなように、好きな人と生きればいいのよ」

「ありがとうございます、お母様……」

「相手が元雪君でよかつたわね。一目惚れ相手との運命の再会…ドラマティックな展開じゃない。和歌が羨ましいわ」

お母様にからかわれながら私は照れくささに赤くなる。

「運命の出会い。本当にそう思います。お母様はあの時、私は一目惚れをしていたって言いましたよね。あの日の夜、私は元雪様を想つていました。実際に翌日に彼本人と出会うなんて想つてもいなかつたのに」

「貴方の想いが通じて、神様が願いを叶えてくれたんじゃないの？」

だつて、和歌が守ろうとしているこの神社は縁結びの神様だもの。守ろうとしてくれている女の子の夢くらい叶えてくれてもいいはずでしょ？」

「縁結び、素敵ですよね。私は元雪様を好きになつて初めて、その意味を理解できた気がします。それまでの私は恋にあこがれる女子みたいなものでしたから」

縁結びを願う人々を見ていて、自分も恋をしたいと憧れていた。けれど、実際に人を好きになつて分かつた事がある。

それは……人の想いの重さ。

大切な人を想うのにはパワーがいる。

片思いの相手、新たな出会い……様々な想いを神様に願う。

「私は本当のところは何も分かつていなかつたのかもしれません」

「和歌……？」

「今なら分かる気がするんです。この神社を訪れてくれる人々の気持ち。様々な人が、いろんな想いを抱えてやつてくる、その気持ちにはひとつだけ共通するものがあるってことを……」

私は野菜を切る手を止めて、お母さんに向き合いながら言つ。

「大切な人と幸せになりたい……それだけなんですね」

「そうかもしないわね。もちろん、事情は異なるだろうけど、根本的な物はきっと同じなはず。幸せになりたいから人は神様に願うのよ」

「……元雪様が私は好きです。の人となら私は幸せになれるから」

だから、あの人と一緒にこの場所を守り続けたい。

私は愚かだったの。

自分の幸せも考えずに、ただ神社を守るだけじゃ意味がない。

その事を元雪様と出会つ事で、私は思い知った。

「なんだか元雪君に早く会いたくなつたわ。うちの娘が惚氣すぎて困つてゐるって」

「も、もうつ。お母様～つ！？」

「ふふつ。可愛い娘が好きな人の話をするのは楽しいものね。ほら、手が止まっているわよ。和歌、料理をしましょ」

「……はい」

私は再び野菜を切り始める。

「和歌もすっかり料理が上手になつたわ。昔はどんなでもないモノを作つてたのに」

「お母様、昔の事を言つのはなしですつ」

「はいはい。誰もが最初から上手にできるわけじゃないものね」

お母様に料理を教えてもらい、私もそれなりに料理ができるようになつた。

「和歌は手料理を元雪君に作つてあげないの？」

「はい？」

「手作りお弁当とかしないのって思つて。今時の子はそういうアピールとかしないのかしら。私がまだ学生の頃はそう言つのを作つてあげてた子もいたけども」

「元雪様に……」

「考えた事がないわけじゃない。

元雪様はいつもお弁当だから、私も作つてあげたいとは思つた事がある。

けれども、結局はその一言が言えないの。
聞いてみたいけども、作つてあげたいけども。

「元雪様から否定されるのが怖いのです。まだ付き合い始めて日が浅い事もありますから。今はまだ……自分から話題をふるのも大変ですし」

嫌われたくない、と思い、ブレーキをかけてしまつ。

当たり障りのない話題しか、私からはふる事が出来ない。

「和歌は男の子に慣れてないせいね。いい、和歌？もつと大胆になつてもいいのよ？」

「なれ、と言われてなれるものなんでしょうか？」

「そうねえ、和歌には少しハードルが高いのかもしれないわ。人に
我ままになつたりする和歌を母親の私が想像できないもの。我が娘ながら良い子過ぎるのも問題だわ」

「うう……」

お母様はふつと優しく私の頭を撫でた。

「だけど、元雪君ならそんな和歌をきっと変えてくれるわ。貴方は彼に甘えるのが好きでしょう？そのうちに、今よりも良い方に変わった和歌が見られる気がするの」

「お母様。でも、嫌われたりするのが怖いです」

些細なことがきっかけで拒絶されたらどうしよう。

「和歌……私は元雪君と会った事がないから彼を信じればいいと断言はできないけども、貴方が好きになつた男の子よ。甘えたり、我がまま言つたりしてもいいと思うの。好きな人に嫌われたくないって自分を押さえこんでしまうよりは、全然いいわ」

「そういうものなんでしょうか」「

「そのうち分かるわ。今は分からなくても、もう少し付き合いが長くなれば、どういう距離感が必要なのかも分かるはず」

人に甘えたりするのは難しい。

元雪様との交際で私の何が変わるのだろうか。
初恋ゆえの悩み。

私はまだまだ恋愛の経験値が足りていない。
そのまま料理を続けていると、携帯電話が鳴るので私は確認する。
着信相手は……“お姉様”からだった。

「……あ、はい。分かりました。すぐここ行きますね」

「どうしたの?」

「お姉様からです。冷蔵庫の奥にあるジュースを部屋に持ってきて欲しい、と」

「……はあ。あの子のことも、なんでも本気で考えないといけないわね」

お母様はため息がちに呟くと、冷蔵庫からペットボトルを取り出す。

私のお姉様は少し特別な方だ。

自分の部屋にこもって、滅多に外には出てこない。

私も食事やお風呂などの時くらいしか、顔を合わせるのもないし。

「あと、もうすぐ夕食だから降りてくるよ」とも言つて。あの子は和歌にしか心を許してないのも考え方のね」

「お姉様は不器用だから他人に気持ちをうまく伝えられないんだつて前に言つていました」

「あの子は、もう少し人に心を開くべきだと思つたの」

そう言つてお母様は微苦笑する。

私はキッキンを出で、お姉様の部屋に入ると、彼女にジュースのペットボトルを渡す。

「お姉様。こちらに置いておきます」

「……ああ、ありがとう」

「あと、もう少しでタコ飯ですかりコビングにきてくださいね？」

「ん……分かった」

お姉さまはこちらを見ずに生返事だけをする。

彼女の目は私を見ていない。

ううん、今のお姉さまは……現実すらも……見ていらない気がする。最近のお姉様は人が変わられたように感じる、昔はこんな人ではなかつた。

数年前から彼女はこうして、まるで天岩戸（あまのいわやと）に隠れてしまつた天照大神（あまたらすおおみかみ）のように、ずっと部屋に閉じこもつてしまつてている。

そして、私には何の力にもなれないことが悔しくも、悲しくもあつたの。

第1-4章・本氣の気持ち

【SHIDE・終元雪】

人を愛すると書いた事は、大変なことなのだ。
……と言つ事を人生16年にして考えはじめた今日この頃。
まだお前」ときが愛を語るなど早い、と親父に言われそつだが。
この俺にも愛の難しさは理解できはじめる。

「なあ、兄貴。今、ちょっといにか?」

仕事も終わり、家でのんびりとくつろぐ兄貴。
ひとりでお酒を飲んでいる兄貴に俺は質問する。

「どうしたんだ、元雪?」

「変な質問をするけど、恋愛ってなんだら?」

「ははっ。こきなり深い質問だな。元雪も戀に悩む年頃か」

変な質問にも関わらず、兄貴は真面目に答えてくれる。
俺はそういう兄貴の真面目な態度を尊敬している。
ちらりんぱらりんで適当すぎる親父の息子とは到底思えない。

「和歌さんと上手くいっているんだろう?」

「うそ。まだ付き合って始めたばかりだから」

「元雪の心配は、縁談を母さんが反対をしてこんなにかい?」

母さんの問題はそれほどは気にしていないのが本音だった。

俺が気持ちを強く持ち、説得さえすれば何とかなる気がする。

……ただ、こじれた時を考えるのは少し怖いが。

「ううん。母さんも話せば分かってくれるはずだから実のところ、そつちの心配はあまりしていらないんだ。そつちじゃなくて恋愛の方、俺は今まで無意識に恋愛をするのを拒んでいたらしい

よくよく考えてみれば、俺には何度か恋人ができる機会はあったかもしない。

黒沢に言われたのを思い出した。

結局、無自覚ながらも女の子と深い関係になる前に俺がそのフレグを折つてしまっていたかもしない。

「……俺って恋愛下手のかなって思うと、ちょっと不安になっちゃ。和歌が好きだから傷つけたくないって言つた。大事にしたいんだよ。運命的な出会いだったからこそ、逆に色々と不安もある

もしも、和歌相手にそういう恋愛下手な自分の悪い所が出てしまつたら?

……そうなる事を恐れてしまつ自分がいるのに気づいた。

「元雪は別に恋愛が下手なわけじゃないんじゃないかな?」

「え? そうか?」

「人の好意に気付かないほど、元雪は鈍感ではないだろ」

カラソウと氷の入つたグラスを兄貴はテーブルに置く。

「和歌と出会うために、俺は今まで恋愛をしてこなかつたとか？まさに運命…」

……自分で言つて恥ずかしいセリフだが、兄貴は笑いもせずに言う。

「運命論。人には決められた宿命があり、全ての結果はあらかじめ決まつている。まあ、人が信じる“運命”って言葉は都合のいい言葉でや、運命なんて言えばあれもこれも、特別だつて思いこんでしまうんだよ」

「え……？」

「俺があの子に会つたのは運命、惹かれたのも運命、恋をして結婚したのも全て運命。結果として運命なんてのはただの後付けの理由みたいなもの。自分にとつてのある出来事を特別だつて思いこもうとしているだけだ」

運命の出会い、強烈に惹かれあつたからこそ、そう思つてもうとしている。

和歌との事をすべて、運命だと結論づける事はよくない？

「ただの偶然の重なりが続いてるだけだとしても、運命と思えば偶然じゃなく、必然だと思つこむ。元雪。運命つて言葉に翻弄されるな。それは……意識すればするほど、抜け出せなくなる一種の暗示のよつなものだから」

思いこみ過ぎは危険つてことか。

「それに、恋愛って言つのは時に失敗したり、相手を傷つけてしまう事もある。そこから逃げるのはよくないと僕は考える。好きな相手だから大事にするのはいい。けれど、大事にしそうる事は返つて相手を傷つけることもあるんだ」

「やつらのものなのか」

「恋愛下手じゃなくて、元雪は恋愛を知らないだけだな」

まだまだ経験が足りてない、と兄貴は俺に微笑する。

「今は恋に悩め、弟よ。恋の悩みは人を大きく成長させることもある。今しかない青春時代を謳歌するといい。大人になつての恋愛は色々とワケが違うから、純粋な意味で恋愛を楽しめるのは子供の時だけだと思うよ」

「そつか。俺も考えてみる」

兄貴に相談して、少しは悩みも晴れた気がする。
だけど、兄貴は最後に真面目な顔をして言つ。

「……もしも、本当に元雪と和歌さんの間に本物の“運命”があるのだとしたら、それは何か因果があるかも知れない。でも、元雪、これだけは覚えておくんだ。この世には必ずしも、良き運命だけしかないわけじゃないことを」

兄貴の言葉に俺はある少女の言葉を思い出す。

『その運命がお前をビリに導くのか。悪い運命ではなればよいが……』

幸運の運命もあれば、不幸な運命もある。

運命つて言葉に翻弄されないよつてこしなくちゃいけない。

翌日の放課後。

俺は和歌の神社を訪ねていた。

実は今日、和歌のお母さんに挨拶しにきたのだ。
めっちゃ緊張するんですが……。

なんていうのか、じつ改めて挨拶するつて言つ形に緊張する。

「それでは、お母様を呼んできますね」

「あ、あッ……」

俺が通されたのは以前と同じ和室だった。

ホント、和歌の家は広いなあ。

部屋から見える日本庭園も立派なものだ。

「……」

俺は和歌が淹れてくれたお茶を飲んで一息つく。

お茶好きの俺としてはホツとできる良い味のお茶だった。
やがて、部屋にやってきたのは綺麗な女の人だった。

「貴方が元雪君ね？はじめまして、和歌の母で小百合さゆりです」

「は、はじめまして。柊元雪です」

「ふふつ。和歌からよく話は聞いてるわ」

穏やかそうな美人で、和歌はお母さん似なんだろう。
……スタイルもよろしいです、和歌の将来が楽しみになるくらい
に。

「あの、和歌は？」

「和歌には少し席をはずしてもらつたわ。私は貴方とふたりで話が
したいの」

小百合さんは俺に向ひて座る。

「そんなに緊張しないで。あの子がいると、恥ずかしがつてしまつ
から。和歌とは電車の中で知り合つたんでしょう?」

「……はい。初めて出会つたのは昔らしいんですけど」

「旦那から聞いたわ。小さな頃に柊さんが連れてきたんだって。そ
んな2人がまた出会うなんて素敵よね?当時のことを和歌は覚えて
いないようだけども、元雪君は覚えているの?」

「少しだけですけどね。和歌が巫女舞を踊つていたのを覚えていま
す」

巫女舞とは巫女が舞う踊り。

一生懸命練習していると言つていたつけ。

「そう……小さな頃からあの子には巫女舞を教えていたの

「小百合さんも巫女だつたんですか？」

「ええ、私も神社の巫女だつたわ。和歌は昔から巫女舞を覚えたがつていたの。あの頃はまだ踊りも拙いけども、頑張つていたわよ。それが今では立派な舞を舞えるようになつて……努力する子だからね」

小百合さんの話では今はとても綺麗な舞を踊れると言つ。今度の夏の神事の時に踊るらしいので見せてもらおう。

「元雪君は和歌を好きになつて結婚の条件を受け入れてくれたのよね？」

「はい。和歌は何かに悩んでるよう見えました。神社を守るために結婚を焦つてるって感じたんです。俺がここで頷かなれば、和歌は他の誰かを選んでしまうんじゃないかなって……だから、俺が彼女の夢を叶えると決めたんです」

その覚悟を決めた時、俺はもっと和歌を好きになれた気がする。

「和歌は生真面目と言つた、笑つてしまつほどに純粋な子でしょ？」

「いえ、その純粋さこそが和歌の良い所でもありますから」

「ホントに和歌は元雪君に愛されてるわね。元雪君。あの子はすごく大人しいけれど、ああ見えて頑固と言つた、一度決めたら曲げない所があるの。あのままだと、きっと、和歌は神社を守るためなら自分を犠牲にしても結婚相手を選んでいたわ」

「そこまで、ここが好きなんですか」

「和歌は椎名神社に特別なこだわりがあるみたい。それは両親である私達の想い以上にね……。だから、和歌が選んだ相手が元雪君でホントによかつたわ。大事な娘だもの。信頼できる人に任せたいと思つのは当然でしょう」

和歌は家族に愛されてるんだな。

小百合さんから「和歌をよろしくお願ひするわ」と言われる。

「……はい。頑張ります」

「ふふっ。それにしても、和歌もこんなにカッコイイ男の子と付き合うなんて、羨ましいわ。元雪君みたいな子なら和歌が一目惚れしても仕方ないかな」

「あはは……」

照れくさいなあ。

俺は小百合さんにからかわれてしまつ。

大人しい和歌とは違い、ずいぶんと明るい感じの人なんだなあ。

「……お母様、もういいでしょつか?」

「いいわよ、和歌」

和歌がこちらを向つように、部屋に入ると小百合さんは嬉しそうに笑う。

「お母様。元雪様はどうですか?」

「これだけ和歌を想つてくれるなんて、いい人を好きになつたわね」

「はいっ。元雪様は私にとつて大事な人ですから」

俺は和歌と自然に視線が交差して、見つめ合つ。

例え、俺たちの巡り合いが悪い意味の“運命”であつても、愛しぬけばいい。

もちろん、俺は良い運命である方を信じてるけどな。

「あら～。田で語るなんて愛しあつてる証拠ね。いいなあ……そう
いつ純愛つて」

小百合さんからも認めてもらえたことで俺も自信がついた。
あとは俺の母さんを説得すれば、縁談の問題はなくなる。
そつちはちょいと問題がありそうなんだがな。

第15章・炎の記憶

【SIDE・柊元雪】

熱い……。

身体が熱い、ここは……どこなんだ……。
気がつけば辺り一面が炎に包まれていた。

「なつ……？！」

驚いた俺は慌てて逃げ出そうとする。
炎に焼かれ燃えるのは古い建物のようだ。

「逃げないと……死んじゃう……」

だけど、まだ小さく、子供の姿の俺はその場から逃げだせない。
なぜか、一步も歩く事ができないんだ。
まるで足が石のように固まっているのだ。

「助けて……誰でもいい……俺を助けて……」

身動きのできない俺を容赦なく炎が迫る。

「……死にたくない……死にたくないよ……」

あまりの熱さに必死にもがきながら、俺は手を伸ばす。

「誰か……助けて……助けてっ！」

だが、立ちこめる煙の中、誰も助けなど来ない。

炎の海を田の前にして、俺は幼いながらに死を覚悟した。

「……あつ……」

どこからともなく聞こえたのは鈴の音色。

鈴のチリンッといつ金属音が鳴った、その時。

「 格元雪ッ！」

突如、俺の手を掴んでくれたのは一人の少女だった。
彼女は俺の手を掴むと、勢いよく自分の方へと引っ張る。

「熱いよ……痛いよ……」

「無事か？大丈夫だ、お前は……こんな所では死なせない」

燃え広がり、崩れ始める建物から彼女は俺を救おうとする。
少女の顔は煙でよく見えないが、俺はその少女に安堵感を覚えた。

「どうして、俺が……こんな田に……」

「……“運命”がお前を殺そうとしてる。だけど、私が殺させない
から

俺を殺そうとする運命って何だよ……？

「もつと、私が早くお前の“正体”に気づいていれば……こんなことになら……」

俺は途切れゆく意識の中で、ただ、その少女の手の温もりだけを感じていた。

……夢を見た。

ハッと起き上がった俺は寝汗でびしょじだった。

「はあ、はあ……夢、だつたのか」

何だか嫌な夢を見た気がする。

思いだせないが、気持ちが悪いほどに悪夢だつたのは分かる。俺は荒い呼吸を深呼吸をして落ち着かせる。時計はまだ朝の6時過ぎだった。

「いっ、痛ッ……なんだ?」

俺は突然、痛む右肩を押さえる。

そのままTシャツの端をめくつ、確認する。

「なんで今さういふのが痛むんだ?」

俺には生まれ持つて、右肩にあざがある。

直径1cmくらいの円の形をした “あざ”。

いつもはたいして気にもしないが、今日はそのあざが痛んだ。しばらく押さえていると、やがて痛みは和らぎ、消えていく。何だつたんだ?

「はあ……シャワーでも浴びていよ!」

俺は気にするのをやめて、ため息をつきながら、部屋を出た。

風呂場で、シャワーの水を頭から浴びる。

「……気持ち悪い、この感じはなんだ?」

未だに変な違和感がまとわりつく感じがした。

シャワーを浴びてから、俺はタオルで頭を拭きながらビングンビングに顔を出す。

「おはよー

キッチンでは母さんが朝食の準備を、リビングでは親父が新聞を読んでいた。

兄貴と麻尋さんはこの時間なら2人仲良く、愛犬の散歩をしている時間だろ。

「あら、今日は早いじゃない?」

「うん、ちょっと寝汗をかいたからシャワーを浴びただけだ

「こつも、この時間に起きてくれると助かるわ

「さすがにこんな早起きはできなこよ

俺の起床時間は7時前後でいつもより1時間も早い。

「それはいかんぞ、元雪。神職は早起きが基本だからの!」

親父が新聞を片手にそんな事を言った。

そういや、そうだっけ。

神職の仕事も大変だって言うのはそいつの事なんだよな。

「こずれ、椎名神社をつぐのなら、その辺も覚悟しておくとよ」

「あ、うん……そうだよな」

「余計な心配しなくていいのよ、元雪」

母さんは親父の言葉をたえぎるよつと黙つ。

「だつて、貴方は神社の家に婿入りなんてしなくていいの」

「げつ。わつちの意味でかよー?」

ひとつと笑顔を向ける母さんが怖い。

やばい、母さんの反対は本気かもしけない。
俺と和歌の関係がマジで心配になってきた。

「本人同士が納得済みなのにまだ母さんは反対してあるんか。元雪
が決めた覚悟に水を差すでないわ」

「何を言つてゐる。貴方のせいで、息子がこんな事になつてゐるの
よ? 何が覚悟よ」

「それを選んだのは元雪だぞ? いいではないか、可愛い嫁さんもも
らえて就職先まで決まるのだから。何を不満に思つかの」

白髪の髪を撫でる親父に母さんは呆れ顔だ。

「大問題よ。勝手にこの子の将来を決めないで。元雪も神社なんてよく分からぬ方向へ行かせるよりも、普通にうちの会社の方を手伝わせればいいじゃない。何が問題なの?大体ねえ、貴方がそんなことだから……」

言い争いを始めた両親に俺も小さくため息をつく。
ダメだ、俺の言葉を母さんには聞いてもらえそうにない。
母さんも、思い込みが激しい一面があるから困ったものだ。
今週の日曜日には和歌も来るし、そこで解決すればいいんだけどなあ。

「……テレビでも見てよ」

俺は適当にチャンネルを変えて、テレビのニュースを見始める。

「 今日の深夜過ぎ、廃ビルでボヤ騒ぎが起こりました。火はすぐに消防により消し止められ、怪我人はいなかつた模様です。警察は付近にいた少年グループに職務質問をしたところ、犯行を認めたために逮捕しました」

なんだ、單なる悪ガキの起こしたボヤ騒ぎだったのか。
誰も怪我人がなくてよかつたな。

「犯行動機について、少年達は廃ビルに集まり、数人で煙草を吸っていると火がモノに引火したと供述しており、警察はさらなる捜査を続けて 」

テレビでは現場の映像が映し出される。

火災を起こしたビルの映像、黒こげになつたコンクリートの一室が映る。

よく見る映像のはずなのに、俺は急に何とも言えない衝動に襲われた。

ズキッと胸が痛む、これは……なんだ……？

「おい、元雪? どうしたのか?」

親父に肩をゆすりれるが、俺は何も言ひ返せない。

熱く……燃え盛る炎……。

脳裏によぎるのは真っ赤な炎の海。

俺にとって嫌な光景が……あれは……どこの記憶だ?

「おーい、元雪? 大丈夫か、顔色が悪いぞ? ……ていつ」

「う、つざやあ! ? ひ、髭! ? 親父、てめえ、何をしやがる! ?」

親父の長い顎の髭が俺の頬を撫でる、その気持ち悪い感触に我に返った。

この親父め、俺に髭でダイレクトアタックしてきやがった。

「お前がボーッとしておるからじやろ。何かあったのか?」

「何でもないつーつう、気持ち悪い……次にやつたらその口髭を剃つてやる」

「お前はホント母さんに似てるの。母さんも、よく剃つてやると口にするわい。このワシの白髪の髭は数年の歳月を経て、よみがへく理想の形になつたものでな」

「だつて、鬱陶しいのよ。ダンディズムを目指してるのか知らないけども、その髭、貴方には似合つてないわ。むしろ、むさこから剃

ればいいのよ。髪なんて邪魔なだけでしょ」

グサツと親父に母ちゃんの容赦ない一言が突き刺さる。

「うぐひ。女には髪の毛とは分からんだり。中東では髪を生やしてこそ一人前の男だと言われてあるのだ? 立派な口髪こそ、男たるもののか? ノーマだ」

「うーには日本だからビーナドモいこし。母ちゃん。ひげそり持つてきて」
母ちゃんも乗り気で「つこにやつねやつ?」とひげ剃りを持つてくる。

それに親父は本気でビビりながら髪を刮りつとする。

「ま、待ていつ! ? 2人がかりとは卑怯なつーやめてくれー! 」

ちょうど散歩から帰ってきた兄貴がリビングにやつてきて「何?」
と騒ぎを傍観する。

「誠也、助けてくれ。母ちゃんと元雪がワシの髪に襲いかかろうとしておる」

「父ちゃんの髪を? たまには剃れば?」

「ガーンつー? 息子にまで見捨てられたー? ここにワシの味方はおらんのか」

ショックを受ける親父に兄貴は「冗談だよ」とフヨローする。

「ふたりともその辺にしてあげなよ。髪くらご父さんの好きにしゃせ

てあげれば?」

「兄貴、甘いぞ。親父が今、俺にした事は許されるものじゃない」

「ただの親子のスキンシップだろうがー…?」

「髭で頬を撫ではるのはスキンシップじゃない。それが許されるのはなあ、仲のいい父と娘の構図だけなんだよ。間違つても息子にするものじゃない」

「……お前、将来、娘にそんな事をしたら絶対に嫌われるぞい」

分かつてゐならするんじやねー。

そんな風に親父とバカ騒ぎをしてくると、俺は先ほどの事など忘れていた。

騒がしい朝の光景。

ただ、俺の中に何か嫌な悪夢の記憶が残されている気がした。それが俺にどんな意味があるのかは知らないけどな。

第16章・手作りのお弁当

【SHIDE・椎名和歌】

その日は朝から、私は自宅のキッチンで料理をしていたの。今日は早めに起きて、朝の境内の掃除を終えてきた。今、作っているのは朝食ではなくお弁当作りだ。

「……元雪様の味覚に合えばいいのだけれど」

昨日、元雪様と昼食を取つているとお弁当の話題になつた。

『俺はいつも母さんに作つてもうりつてるよ。でも、いつも中身が同じなんだよなあ』

『美味しそうですけど不満でも?』

『不満はないけどさ。たまには違う弁当も食べてみたいって言つた』

育ち盛りの元雪様は質より量と言う感じのお弁当だつた。それに少しばかり満足をしていない様子だつた。

私は思いきつて、彼に言つてしまつ。

『あ、あの、元雪様!……今度、私が作つてきてもよろしいですか?』

『?』

以前から、作つてあげたかつた。

自分の手料理をふるまつ機会があればと思っていたの。

『それってお弁当の事か?』

『は、はい。ダメでしょつか?』

『いや、和歌が作ってくれるなら楽しみだな。小百合さんも和歌の料理の腕は上手だから心配ないって褒めていたから気になっていたんだ。ぜひ、和歌の手料理が食べたいよ』

彼の期待、お母様もちゃんと後押しをしてくれていたんだ。

元雪様も快く許可してくれたので、今日は私がお弁当を作ることにした。

私の隣ではお母様が朝食作りをしているの。

「和歌?ひとりでお弁当を作る?」

「大丈夫です。大体の品に関しては元雪様から好みの味付けを聞いてきました」

「リサーーチ済みといつ」とね。そう言つ所は和歌は徹底しているわ

メモ帳に書かれているのは元雪様の好みだ。

昨日、さりげなく……とはいきかないけども、聞き出したの。

「卵焼きは……だし巻き卵がお好きみたいですね」

「元雪君は和風系とか好きなのかしら?」

「そうみたいですね。基本的には和風が好みらしいです。それに緑茶好きとも言つてましたから。私とも好きな緑茶の銘柄が似ていたので嬉しかったです」

「へえ～っ。それじゃ、和歌とはホントに気が合ひつわね？」

それは私も驚いた事でもあった。

好きな緑茶の銘柄でお話ができるなんて思いもしていなかつたもの。

そして、元雪様と味の好みが似ているのも、相性の良さがいい。

「ただ、今時の子がお茶の話で盛り上がるのもねえ？」

「うう、それは言わないでください。お母様。別にいいじゃないですか。」

「ふふつ。ホントに2人の相性が抜群なのね。運命の相手と思える相手じゃない？」

些細な事でも元雪様を知るたびに私は嬉しくなる。

この人と出会いのために私は生まれてきた。

それほどに深い愛情が自分に芽生えるなんて……数日前まで思ひもしなかつた

今では運命の出会いに感謝して、日々楽しく暮らせている。

元雪様に出会つてからといつもの、この数日間は私の日常は大きく変わつた。

その変化に戸惑いながらも、元雪様の傍にいる幸せを感じている。

「……和歌？ 恋人のお弁当に煮物とかはどうかと思うのだけど？ 和風すぎない？」

「でも、好きみたいですよ？ 煮物では特にサトイモの煮物が好物らしいです」

「本当に細かいところまでチェックしてるわね。我が娘ながらやるわ。そして、元雪君の好きなのがサトイモの煮物つて……美味しいけど。彼も古風ね」

お母様に笑われてしまった。

里芋の煮物、地味ながらも私も好きだ。

「いいじゃですか。元雪様は私に合う人なんです」

「そうね。和歌が自分のペースに合う人だと思うと理想的な男の子だわ」

元雪様の前では自然体でいられる。

私が無理に合わせる事がないからこそ、私は彼に惹かれ続けていた。

「……嫌いなものとかは聞いてるの？」

「はい。元雪様はエビが苦手みたいですね。珍しいです」

「ふーん。海老フライとかもダメなんだ？」

「エビは宿命の敵だと譲つてました。自称、エビアレルギーらしいですよ」

伊勢エビを化け物だと嫌うくらい。

でも、エビ以外は食べられないものはないみたい。私は料理をしながら、ふと、ある事を思う。

「……お母様、ありがとうございます」

「え？ 何が？」

「小さな頃から、私にお料理を教えてくれていたことです。おかげで元雪様に、自信を持つてお料理を作れますから」

「……こつでもお嫁にいけるように教えていたかいがあつたものね」

嬉しそうにお母様は微笑んだ。

私がこうして恥じることなくいられるのも、お母様のおかげだ。料理とは日々の積み重ねがモノを言つだけに感謝している。あとは、作ったお弁当が元雪様のお口に合えばいいんのだけども……。

昼休憩、元雪様と一緒に食事をする屋上はこつもより暑く感じる。

「そろそろ、夏になりかけてきたからな。暑くなつてしたら中庭の方へ行くか」

「そうですね。あつ、これがお弁当です。元雪様、どうぞ」

ふたりでベンチに座り、私はお弁当を手渡した。

「ありがとうございます。うわあ、ホントに女の子の手作り弁当だ……」

お弁当箱を見て、感嘆の声を上げる元雪様。

「普通のお弁当です。おおげさですよ」

「おおげさなものか。俺は女の子の手作り弁当を吃べるのは初めてなんだから。それが恋人の弁当なんて……つい最近まで想像もしてなかつたよ」

「お口に合えばいいんですけどね」

昨日のリサーチ通りならば、それほど味の好みは外さないと思う。彼はお弁当箱を開いて驚いた表情を見せる。中には完全に和風のお弁当に仕上げている。

人の好みにもよると思うけど、元雪様にはどうかな？

「おおっ、和風メニューだ。いいよ、和歌。どれも、すゞく美味し
そうだ」

見た目は気についてもらえたみたい。

問題は味の方だ、どう評価されるのか緊張する。まずは“だし巻き卵”。

元雪様はそつと口にいれる。

「このだし巻き卵、形もきれいだし、味もうまいし、まるで料亭の味みたいだ。……実際の料亭に行つた事ないけど」

「元雪様、そおれは褒めすぎですよ？」

「ホントに美味しいよ。和歌つて料理が上手なんだな」

よかつた、元雪様の口にあつたみたい。

問題は里芋の煮物、元雪様が好きだつて言つていた。

「おー、里芋もいれてくれたんだ?俺はこれが好きなんだよなあ

「元雪様が好きだと聞いたので。好きなんですか?」

「うん。ちょっと見た目は地味かもしれないけどね。俺は里芋の煮物が好きだぞ。和風な弁当の定番だけさ。うちじゃ、親父が里芋嫌いなんで滅多に出てこないんだ」

元雪様は里芋の煮物に手をつける。

煮物は味の好みが別れるから、彼の好みに合つているかどうかが難しい。

「ど、どひでじょうか……元雪様?」

「和歌……」

「は、はい?」

彼がこちらを向くのでドキドキと緊張してしまつ。美味しいの、不味かったの、どっち?

そんな心配をよそに元雪様は思わず言葉を告げた。

「和歌、好きだ。……俺と結婚してくださいー!」

「は、はいっ!……え?」

戸惑う私の手を元雪様はしっかりと握つてくれる。

「つて、結婚を前提で交際してるんだけどね。こんなにも和歌の料理が美味しいなんて驚いた。正直、ここまでとは思ってなかつたぞ。この里芋の煮物、最高だよ。これだけ美味しいのは初めて食べた」

「喜んでもらえて嬉しいです」

「俺の味の好みの直球ど真ん中。よく作ってくれたものだ。里芋にも味が染み込んでいて良い味だよ」

「……よかつたあ。煮物は得意料理ですけど、元雪様に味の好みが合つか心配だつたんです」

お弁当よりも元雪様から結婚という言葉が出た事が一番嬉しく感じる。

でも、里芋の煮物で告白されてしまつのは予想外。

「料理がこれだけ上手なら、結婚してからガホントに楽しみだよね」

本当に和風料理が好きなんだ。

「これからも、また作つてきましょうか?」

「和歌は朝の日課もあるし、大変だろ?でも、時々でいいから作ってくれたら嬉しいかな。おー、こいつの焼き魚もいい感じだ」

やつぱり、料理ができるつて言つのは男の子にとつては好感度があがることなのかな。

私達は楽しく食事を続けながら、元雪様の笑顔を見つめていた。大好きな人が自分の作った料理を食べて喜んでくれる。それが私の幸せになる。

「大和撫子つて言葉は和歌のためにある言葉だと思つぞ」

元雪様が食事を終えたあとに私の頭を撫でてくれる。

「ふふつ。くすぐつたいです、元雪様」

彼の指が髪に触れる。

私は幸せを感じていたの。

好きな人が傍にいて笑顔でしてくれる。

ただ、それだけで人は幸せになれるものなんだって。

「……元雪様、好きです」

「俺も和歌が大好きだよ。料理上手な子は特に好きだ」

「それじゃ、もしも、私が料理できなかつたら嫌われてしましますか？」

なんて言つ意地悪な言葉を返す。

それでも元雪様は惱む素振りを見せせず、「

「だとしても俺は和歌が好きだと思う。何かできないから嫌いになるわけでもないし。そんな事を言つたら、俺なんて和歌に何をしてやれてるのやら?夢を叶えるために頑張るけどな。それ以外にはあんまり自信がないし」

「元雪様は私の傍にいてくれるだけでいいんです。優しく甘えさせてくれるだけで満たされています。私は貴方を心からお慕いしていますよ。あつ、お茶もあるんです。どうぞ」

屋上で初夏の日差しを浴びながら夏の風を感じて、夏の訪れを感じていたの。

まもなく7月、もうすぐ本格的に夏がやってくる。

第17章・導かれた先に

【SIDE・柊元雪】

気がついたら、どこかに迷い込んでいたといつ経験はないだろうか。

人気のない道だつたり、森だつたり。

誰の気配もない、誰かの意思で惹きこまれたような感覚。

それは迷い道。

自分の意思ではないものに、引かれている。

どこに導かれるのかは分からぬ、その先に何が待つか。

「……あれ？」

いつもの朝のはずだった。

和歌と登校するために神社に来たはずだが、気がつけば俺は神社の階段にいた。

最近は和歌の家に直通で行ける通り道を使うのに。

何で俺はわざわざ正面の鳥居をくぐっているんだろう。

「寝ぼけてるのか？」

俺は自分に呆れながら、仕方なく、階段を登り始める。

いつもよりも、ひんやりとした空氣。

何の音が聞こえないほどに静寂が支配している。

階段の先には神社の拝殿が出迎えてくれる……はずだった。

「……え？」

そこには神社がなかつた。

階段を登り終えた先にあるのは、あの桜の「」神木だつた。
さあ、と風が森の木々の葉音を立てる。

「なんでここに来たんだ……？」

「ご神木まで歩いたつもりはないのに。
それにしても何か違和感がある。」

「石碑の横の社ってこんなに大きかつたっけ？」

石碑の横には俺の腰の高さくらいの小さな社が建っていたはずだ。
それなのに、今は人が入れるくらいの大きな社が建っていた。
俺の記憶にはない、こんなところがあつたのか。

「……こんなの初めて見たな」

和歌に案内された時には見つけられなかつたのだろうか。
俺は何となしに、その社に近付く。

「あれ？開いてる？」

社の扉は開いており、中に入れようつだ。

入つてはいけない。

俺の直感がそう告げた。

「……何だろ？、この感じは？」

俺は改めて辺りを見渡すが、人の姿も、いや、鳥すらも周囲には
感じられない。

こつもは感じられる生き物がいる気配がないのだ。

「あつ……」

だが、俺の足は自然に社の中へと引き込まれていく。
この感じ、どこかで……そうだ、ずいぶんと昔に同じような感じ
がした気がする。

あれはいつの事だつただろうつか。

「入つてみるか……」

俺が一步、足を踏み出した時だつた。
目の前に広がるのは赤い炎。
真つ赤な炎が田の前に広がつてゐる。

「な、ああ……あつ……」

刹那、身体を駆け抜けるのは恐怖。
この光景、どこかで見たような……夢……これは夢なのか。
だが、俺の直感がこれは夢ではないと告げる。
逃げないと……死ぬ。
それなのに、燃える社の中で身動きができない。

「ひー……あきつー。」

そんな時だつた、どこかで誰かの声がある。

「 格元雪ッ！—私の声を聞けッ！—」

チリンッ……！

少女の叫ぶ声と共に、大きな鈴の音色が響き渡る。

「……なつ……！？」

その瞬間、俺は頭を何かで叩かれたように意識が大きく揺れた。

「くつ……あつ……うわあああーー！」

意識をはじけ飛ばされた強い衝撃が襲う。

俺は薄らとした意識の中で気付いた。

炎に包まれながらこちらを睨みつける女性がいたのだ。

表情からは憎悪を感じ取ることができた。

そのまま、真っ白な光に包まれていく。

……気がつけば、俺は地面に座り込んでいた。

「うー、は？ うー、眩しい……太陽の光？」

周囲を覆っていた炎はどこにもなく、辺りに広がるのは森だった。
ご神木と石碑、そして、小さな社が俺の目の前にある。
熱かつた炎も、俺を睨む女性もどこにもいない。

「どういづ、ことだ？」

先ほどの光景、いや、あの大きな社すらもどこにもない。
そんな俺に背後からため息交じりに女の子の声が聞こえた。

「この大馬鹿モノがつ！ 杓元雪、お前は死にたいのかー？」

「ひつーー？」めんなさいつーー？……あ、あれ？ キミは確か……？」

俺を怒鳴るのは着物姿の女の子。

そう、以前にここで会った美少女がそこにいた。

「私は言つたはずだ、ここには近づくな、と」

「あ、うん……そななんだけどさ。気づいたらここにいて……いや、ここにいたんじゃない。ここに極めて近い、でも、どこか違う場所だった気がする」

言葉にできないが、ここではないかな気がしたのだ。
それに俺が入ってしまったあの大きな社も、ここにはない。

「……やはり、引かれていたか。まったく、厄介なことを。格元雪、
私についてこい」

少女は有無を言わせずに俺の手を引く。

「あつ、ちよつとー?」

「いいから黙つてついてこい。……ここはお前がいていい場所じゃない」

あまりにも真面目な顔をして言つので俺は頷いた。

俺を引っ張るように手を繋ぐ少女の手は、和歌のような女の子の手だった。

俺が状況も分からずにつれてこられたのは神社の社務所と呼ばれる場所だった。

本来ならばここで巫女はお札を作つたり、作業をしたりする場所らしい。

和歌が説明してくれた時は中まで入らなかつたが。

「ここならば問題はない。中に入れ」

「え？で、でも、ここって神社の関係者以外は立ち入り禁止じゃ？ていうか、何でキミはここへの鍵を持っているんだ？」

「私はここで作業をしている人間だからだよ。いいからまずは入れ。話はそれからだ」

着物の裾を翻しながら、少女は社務所の中へと入るので俺もついていく。

少女は俺の身体をあちらこちらに触れながら、調べ始める。

「どうも異常はないようだな」

「えっと、ありがとう、といふべきなのかな」

「別に助けるつもりはなかつた。だが、あちらに連れていかれたお前を放つておく事もできなかつた。あの場所でお前を殺されるわけにはいかないのでな」

「殺されるって、俺は死ぬ所だったのか？」

「冗談めいた口調だが、彼女は笑う事もなく淡々と「そうだな」と告げた。

俺はドキッとしながら苦笑いをするしかできない。いきなり死ぬとか意味が分からぬ上に、不思議体験したばかりなんだからさ。

「よく分からない場所に迷い込んだ気がしたんだ」

「幻想と現実。お前は今、さつき見たモノを信じられるか？あれは現実だつたか？」

「え？あ、いや、それは……」

ただの幻覚、白昼夢と言われたらそれまでな気がする。寝ぼけていたのか、よく分からぬけれど。

「少なくとも、あれは現実ではなかつた気がする」

「今はその認識でよい。柊元雪、私が都合よくあの場所にいるとは限らない。次も助けてやれるかは分からぬ。だから、あの場所には近づかないでくれ」

少女は俺の手を握り、お願ひをするよつて告げる。
無表情ながらも、俺を心配する素振りを見せてくれるとは意外だつた。

そう言えば俺の名前を知つていたり、俺の過去とも関係ある子なんだろうか？

「分かつた。出来る限り、そうする。けど、あれは一体？炎の光景と最後には女人が見えたんだ。俺に何が起きたんだ？」

「お前は、あの場所に強く引かれてしまつた。そして、私はお前を引きもどした。……まったく、お前の存在は危ういな」

「……引かれる？」

「詳しく話してもいいが、今のお前に理解するにも、時間がいるだ

彼女は時計を見ると、時間はそろそろ和歌を迎へに行かないといけない時間だつた。

……ちょっと待て、俺がここに来た時間とほとんど変わりがない？
どういふことだ、あれだけの事があつたのに、たつた数分の事だつて言つのか？

「柊元雪、次に万が一にもあの場所に引かれたら私の名前を呼べ。
私が気付けば助けてやれるかもしない。まあ、可能性は低いがゼ
ロではない」

「……それはどうも。で、俺はキミの名前を知らないんだけど？教
えてもらひえるか？」

少女は「ああ、そういうえば」と自分が前に言つた言葉を思い出し
たようだ。

前回に会つた時は彼女は気が乗らないと名前を教えてくれなかつ
たのだ。

「仕方ない。私の名前を教えてやるか。今度はちゃんと覚えておけ。
私の名は……」

「キミの名は？」

「私の名前はキヤサリンだ」

……きや、キヤサリン？
どうからどうみても和風美人な女子に似つかわしくない名前だ。
どこの外国人だよ、絶対に嘘だろ？

「ホントにキヤサリンなのか？適当に書つてないだろ？」「.

「終元雪、お前は失礼な奴だな。人の名前に適当と言つた。漢字で書くと“貴夜沙凜”と書く。今時の子供の名前だろ？」「.

「いやいや。どう見ても、当て字じゃん。まあいい。えっと、今日はありがとうございました。キヤサリン」「.

そんな俺に彼女はふと鼻で笑いやがった。
無表情は変わらずだが『本当に言つたよ、ここいつ』と言つた顔を
しゃがむ。

「お前、絶対にこの名前、本名じゃないだろ？！？」

「何を言ひ。私の名前にケチをつけないでもらおうか。次は助けないぞ」「.

ホント、変な女の子である。

でも、俺はこの電波系美少女、キヤサリンに助けられたのは事実らしい。

この時はまだ俺自身、何も自分の現状について理解できていなかつた。

俺と和歌、そして椎名神社に繋がりがあるなんじ」とも……。

【SHIDE・柊元雪】

どうやら、俺は危険な目に合つ所だつたらしい。

突如、俺を襲つた炎の幻覚。

そんな俺を助けてくれたのは以前にもあつた電波系美少女だつた。その名も、“キヤサリン”……漢字で書くと“貴夜沙凜”らしい。絶対に本名じゃないと思うけどな。

どう呼べばいいのか分からないので、キヤサリンと呼ぶしかないわけだが。

俺はキヤサリンに助けてもらつて、社務所から出よつとしていた。

「……そうだ、キヤサリンはここで作業をしてるひととは巫女さんなのか？」

「はあ、柊元雪。お前の眼は節穴か。この服が巫女服に見えるとも？」

また鼻で笑われたよ、おい……。

俺を小馬鹿にする生意気な態度はやめてもえらませんかねえ。

「あー、そーですね。ただの和服だよな

和服が通常の服装つて言つ子も珍しいけどな。

「私は巫女ではない。ただ、こりでおみくじを作る作業はしているがな」

社務所にはテーブルのようなものがいくつもあり、その中のひとつはおみくじを作ってるらしく、大量のおみくじが並んでいた。

巫女さんのお手伝いか？

「おみくじって言つのは、ボロイ商売だよ。靈験あらたかなものと言つ印象はあるが、所詮はただの紙に書かれた“結果”を引くだけのものだ。どうにでも解釈できる結果を見て、一喜一憂できるとは純粹なことだな」

「それを言つちゃお終いだる。神社側の人間が言つちゃいけないセリフだ」

「ちなみに、私は前にすべてのおみくじを大凶にしてやったことがある」

「マジかよー？」

「Jの子、ひどすきあるつー？」

「引いた女の子が『きやー、大凶ー』と驚きながらも、『逆に大凶の方が珍しいからいいんじゃないの？』とか喜んでいたな。まったく、こんな紙切れにJ利益もないって言つのに馬鹿らしい。大凶のくじを結ぶ姿は笑えたぞ」

「俺はそんなキャサリンを笑えねえよ。ひどい奴だな」

ちなみに当然のことながら、彼女は宮司のおじさんにはひどく怒られたらしい。

今は適当な配分でバランスよく、くじを作ってるから心配はないそうだ。

「余計な心配をせんな。そこのを疑うと、神社を信じられないだらう」

「所詮は神もおみくじも、占いも、全ては信じるか信じないかは本人次第だ」

「それを言われちゃ反論できない」

結局のところ、くじ運だって良いか悪いかは信じるかこと次第だからな。

「そもそも神自体が信じるかどうか問題な存在だ。別に神を信じるな、とは言わないが。まあ、私は八百万やおよひよの神の中で、ひとつくらいは信じてもいいと思つていい。ひとつくらいなら実在してもよそれでうだからな」

「おーおー、800万分の1ってどれだけ信じてないんだ」

「八百万は実際に800万という意味ではなく、数が多い事の例えなのだが。まあいい。信じている神がゼロではない。無神論者つてわけではないからな。都合のいい時に神を信じて得をすることがあれば信じる。人間とはそういう生き物だ」

キヤサリンはそう言って、俺に手元の紙を放り投げてくる。
俺は慌ててその紙を受け取った。

「とはいって、柊元雪にはそれをあげよう。良い運勢が出ることを期待するといい」

彼女が俺にくれたのはおみくじだった。

これでも気休め程度にはなるか。

「とつあえず、今日はゆつくりと休んだ方がいい。また日を改めて出会ひ事があれば色々と教えてやる。もう引かれないようにな……気をつけてな」

「キヤサリン……ありがと」

何だかんだで俺を心配してくれているんだな。

ただの生意氣な和服美人なだけじゃないようだ、見かけよりも良い奴かもしれない。

……あと、せめて本名を教えてくれたら嬉しいぞ。

「助かつたよ。また今度な、キヤサリン」

俺はキヤサリンに頭を下げて、社務所から出た。
巫女もどきのキヤサリンか。

近いうちにまた会いに来る事にしよう。

俺の身に起きていた事も知りたい。

眩しい太陽の光、俺はこの世界にいることを実感する。

「……別に変な世界がある事を信じたわけじゃないけどな」

不可思議な体験をしたのは事実で、それが夢か幻かは分からぬ。だが、あの炎の記憶は……俺の心に残り続けていた。

「あの炎の中にいた女の人は一体、何者なんだ?」

そんな事を考えながら和歌を迎えて行く。

お屋敷の呼び鈴を鳴らすと、すぐに和歌が出てきた。

「おはよー」やこます、「元雪様……あの、大丈夫ですか？」

僕のとすぐりに、和歌は僕の心配をする。

「え？ そんなに顔色が悪い？」

「……はい、そう見えますナゾ？」

「い、いや、実はちょっと寝不足でさ。昨日、夜遅くまでテレビを見てたんだ」

俺はとつやに誤魔化してしまつ。

和歌に余計な心配はさせられない。

それに椎名神社が関係しているのを知られると、彼女を傷つけてしまうのが怖い。

「元雪様、それは？」

「あつ。これはおみくじらしい。……そこを歩いていた巫女さんこもらつた」

「そつなんですか？ 顔色が悪かったからでしょうか？」

「ああ……どうなんだろうな」

俺はキヤサリンの事を和歌に尋ねてみる事にした。

「なあ、和歌。巫女の中に、キヤサリンって子はいるか？」

「さやさりん？えつと……巫女には外国人の方はいませんけど？」

「ですよねー」

分かつていたよ、キヤサリンが偽名で適当につけた名前だつてことはな。

それを眞面目にキヤサリンと呼んでた俺も俺なのだが。
からかわれただけか……はあ、本名が分かるまでは使うとしよう。

「でも、私の知らない方かもしません。巫女さんは何人もいますし。時折、新しい人に入れ替わつたりするので、私も全ての人を知つてゐるわけでもないありません。もちろん、お父様なら知つてゐると思いますけどね」

和歌も全ての巫女と知り合ひといふわけではないみたいだ。

「それで、そのおみくじはどうだつたんです？」

「そうだ。中身だ、今日の運勢は……」

俺は期待を込めておみくじを開いてみる……その結果は……。

『大凶』

「キヤサリーンツー？」

あの女、わざと俺に大凶のおみくじを渡しやがつた！
くつ、大凶かよ……ちくしょう……地味にショックだよ。

「あら、うう。でも、大凶でも、悪いことばかりではありませんから」

彼女は神社内にある“みくじ掛”に案内する。木に結び付ける所もあるが、この神社はこいつらのものがあるんだな。

「こちらに利き手と逆の手で結ぶと、凶も吉となるんです。災い転じて福となすって、言ひでしよう。元雪様、落ち込まないでくださいね？」

「……うん。和歌に励まされてちょっとは元気が出た」

大凶に書かれてたおみくじは恋愛運、好機を逃すって書かれているけどな。
信じる信じないは自分次第か。

俺は何だか朝からぐつたりと疲れていた。
教室につくと、すぐに机の上に伏せる。

隣の席を見ると今日も篠原さんはお休みのようだ。
友人の黒沢が俺に気付くと不思議そうな顔をする。

「ん? も、何か疲れてるな?」

「憑かれてたのかもな」

「は?……よく分からんが、朝から大変だったようだな」

さうにキヤサリンとの遭遇で余計に疲れたわ。

黒沢も黒沢で田をこすり、眠たそう顔をしている。

「そういう黒沢は眠そうだな？」

「昨日はネットゲームで戦っていたんだ。そして、ついに生きる伝説と出会つてなあ。もう、あの人はマジで神だよ。強すぎる」「

「生きる伝説、ネトゲの神ねえ。よく分からぬけど、やりこんでるプレイヤーのことか」

「そのネットゲームじや、生きる伝説って言われる名の知れた有名プレイヤーでさあ。昨日、偶然にも同じクエストと一緒に戦わせてもらつたんだ。いや、マジで強すぎ。あれだけやりこむのは何時間やればいいのや。良いアイテムもくれたけどな」

ネトゲの話など、今の俺にはどうでもいいのだが。

それでも、現実の話を聞いてるとどこか安心できる俺がいる。あんな非現実なことを体験すればちょっと気分もおかしくなる。

「……お前もパソコン持つてただろ？ ネトゲとかしないのか？」

「今は現実が忙しいからな。可愛い恋人と仲良くなる方が最優先だ」

「言つねえ。そんなに可愛い子なのか？ 恋愛に終がのめり込むとはな」

和歌の事は俺にとつての癒しだ。

彼女の笑みはどんな疲れも消してしまつ。

「誰もが見惚れる容姿端麗に性格はまさに現代の大和撫子。そりゃ俺の好物を作ってくれる料理の腕前も抜群。のめり込むなっていうのが無理だな。俺の嫁が可愛すぎる」

「……それ、現実の女の子の話だよな？それとも実は一次元の嫁？」

「違うわっ。失礼な。この子だよ、この子！」

俺は黒沢に携帯電話で撮った写真を見せてやる。

その写真は、[写ることを恥ずかしがる和歌の顔が可愛くて仕方ない。

「……確かにレベル高いなあ。お前、羨ましそう。これ、後輩の子か？」

「そうだぞ。しかも、俺の将来の嫁になる子だ。親も認めてくれている関係なのさ」

「それ、なんていう漫画の展開？」

「実際、漫画のような展開だけだ。出会いからすべてが運命的すぎるんだ」

俺と和歌の出会い、そして、これから……。

いろいろな意味でこれからは期待もある。

だが、運命的すぎるがゆえに、俺はどこか不安もあったのは事実だった。

第19章・恋月桜花

【SHIDE・柊元雪】

和歌と再会してからの1週間はめまぐるしく過ぎていく。
土曜日の今日は朝から俺は和歌の所を訪れていた。

ゆっくりと時間をかけて椎名神社を見て回りたかったからだ。
和歌に会う前に社務所をのぞいたがキヤサリンの姿はない。

……彼女にも聞いておきたい話があるんだけどな。

あの日以来、俺は別におかしな幻覚も嫌な夢も見ていない。

「お待たせしました、元雪様」

「和歌……今日は巫女姿なんだ?」

「先ほどまで、掃除をしていました。着がえてきましょうか?」

「いや、それでもいいよ」

むしろ、巫女服の方が和歌の魅力があがる。

……別に巫女萌えってわけじゃないけど、可愛いじやん。

清楚な印象をさらに印象付ける巫女服つてのは神秘的でもある。

「そう言えば、和歌は正式な巫女じゃないって話を小百合さんから聞いたんだけど、どういう意味なんだ? 巫女舞は踊れるけど、正式な巫女ではない」

「それは……私がまだ学生だからです。巫女とは、この神社に仕える者。私はまだ立派な巫女ではないので、お母様はそう言つたのだ

と思います。だから、いつして抜け出しても何も言われないんですね」

なるほど、今はお仕事ではなく、お手伝いをしてくると重い感じなのか。

巫女見習い、といふ言葉が近いらしい。

キヤサリンも巫女見習いなのだろうか、あれは巫女もどきな気がする。

「ふーん。 そうだ、和歌。 お祓いとかできる?」

「え? お父様ならできますけど、私はできません。 それに別に私は靈感とかその類のモノもありませんし。 靈感の鋭い人は色々と感じるみたいですよ」

「……例えば、魂の色が見えるとか?」

俺はキヤサリンの事を思いだして和歌に告げる。

『魂には色がある。 お前の色は薄暗い灰色だ』

キヤサリンは電波系で靈感がありそうだからな。 だが、和歌はふいに表情を曇らせてしまう。

「……見える方もいます。 私には見えませんけど、魂には人それぞれ、様々な色があるそうです。 どうして、ですか?」

「ん。 別に。 ただ、何となく気になつただけさ」

和歌の態度、俺はそれ以上は踏み込んでいけない気がした。

キヤサリンの事を知っているのかもしれないと思つたんだけどな。
俺たちがやつてきたのは拝殿。

普段は入れないらしいが、奥の方へと案内してくれる。

「こちらが本殿の入り口になります」

「本殿？」

「貴さんが参拝するのはこちらの拝殿ですね。本殿は一般の方々が入る事ができませんから。元雪様には本殿を案内するよつてお父様からも言われています」

一般的に拝殿っていうのは賽銭箱が置いてる場所であり、御神体と呼ばれる神様がいる場所こそが本殿らしい。

拝殿の奥の小さな社に入ると、神聖な場所と言ひ雰囲気が感じられる。

「元雪様にはまず、この椎名神社についてのお話をしましょうか。この神社の歴史は数百年前からあります。ですが、今のような神社になつたのは戦国時代の頃らしいです」

「戦国時代？織田信長とか上杉謙信とかの時代か？」

「はい。その戦国時代です。戦国乱世と呼ばれたその当時、有力武将の娘である、ひとりのお姫様がいました。名前は紫姫（ゆかりひめ）。彼女はこの神社に縁があり、やがて、ここに大きな社を建て、立派な今のような神社になつたそうです」

紫姫……ああ、あの石碑に名が刻まれていた名前だ。

紫と言つと覚えにくいが、ゆかりご飯のゆかりと言えば覚えやす

い……失礼だらうが。

「その紫姫の縁つて何だ?…どうして縁結びの神様?」

「紫姫様にはあるお話が伝わっているんです。私達は『恋月桜花』^{れんげつおうか}と呼んでいる古い恋のお話です」

「恋月桜花?」

「はい。元雪様、『神木があつた場所を覚えていませんか?』

思いつきり、数日前にひどいめにあつた場所だ。

嫌でも覚えてるが、和歌の前ではあの話はしていない。

「ああ。覚えているよ。石碑があつた場所だよな?」

「はい。その昔、椎名神社の本殿は小さな社があるだけの神社だったそうです」

和歌は伝承されている『恋月桜花』の話を始めてくれた。
時は戦国時代、戦が日本中、どこにでもあった時代。

有力武将の娘である紫姫は都に向かう途中に敵国の軍に捕縛されてしまつ。

その部隊を率いていたのは若き武将、赤木影綱（あかぎ かげつな）。

敵の奇襲により分断されていた本隊との合流までの間、影綱はこの椎名神社に陣を敷き、本隊を待つ事になつた。

捕らわれの身となつた紫姫はその3日間を影綱の傍で過ごす事になる。

敵国の姫と敵国の武将。

敵対する者同士なのに、紫姫と影綱は互いに惹かれあつてしまつ。3日後、本隊との合流寸前に、紫姫を奪還しようと、軍が影綱の部隊を包囲する。

突然の夜襲により、影綱の軍は退却をよぎなくされるが、その戦で不覚にも影綱は肩に弓矢を受けて負傷した。さらに胸に受けた矢傷が致命傷になり、影綱は紫姫に看取られて命を落としてしまう。

心を奪われていた紫姫は影綱の死にたいそう心を痛め涙した。その後、無事に都に戻れた紫姫は、影綱の死を悼み、椎名神社を新しく建立したのだ。

敵対同士と言う運命に翻弄されたふたりの悲恋。
紫姫は影綱との来世での恋愛成就を願つていたと言つ。
それが『恋月桜花』という伝承だった。

「影綱様と紫姫様は満月の綺麗な夜に一緒に夜桜を見たそうです。それがあの『神木』であり、恋月桜花の名前の所以になつています。悲恋ですけど、敵対する立場でありながら恋におちたというのは口マンティックですよね」

その話が伝わり、椎名神社は縁結びの神様として扱われているらしい。

縁結びの神様のおかげとはいえ、いろんな縁があるものだ……。

まあ、伝承なんて作られたお話の可能性もあるわけだが。
「この神社には影綱様が致命傷を受けた時の矢も残されているんですよ」

「古い弓矢が残つてゐるのか?」

「はい。この神社で大切に保管されています」

和歌はそう言つて、古い箱を取り出してくる。

「……こちらがその弓矢になります。古い矢なので触れないでくださいね」

「……へえ、これがそなのか？」

木箱に入っているのは古い弓矢だつた。
触ると壊してしまって、うなほどに、劣化はしているがしつかりと
弓の矢の形をしている。

「……あつ……」

「……元雪様？」

その弓矢を見た瞬間、俺は自分の肩に激痛を感じた。
火傷をしたように、じんわりと痛む。

「ど、どうがなさいました？も、元雪様、大丈夫ですか？」

「大丈夫だつて。良く分からぬけど、痛むだけだから」

和歌は木箱を閉じて片付けると医療品を取つてくると本殿から出
ていつてしまふ。

「……矢傷で亡くなつた影綱か」

俺は右肩を押さえながら呟いた。
やがて痛みも自然におさまつてくる。

「」の前もある場所が痛んだよな……何でだろ？

その後、心配してくれた和歌に湿布を肩に貼つてもらい、俺たちは神社を散策する。

キヤサリンからはご神木の方に近付くなと言われるので、あちらには近付かない。

「……なあ、和歌。あの石碑の横に小さな社があるだろ？」

「はい。ありますよ」

「他に大きな社があつたりするのか？」

俺の疑問に和歌は「大きな社？」と考える素振りを見せる。

「昔はありましたよ。けれど、10年くらい前に火災で焼失したそうです」

「火災つて火事か何かあつたのか？」

「はい。原因不明の不審火で全焼してしまったそうです。幸い、周囲に誰もいなくて怪我人はでなかつたみたいです」

今の社とは違う大きい方の社は10年前に火事で焼失した。
そうなると、俺が目撃したあの社は一体？

「元雪様はどうして、そのことを？……あつ、そうですよね。元雪様が昔、私と遊んでいた頃の記憶があるので、まだ社があつたはず

です。それを思い出したんですか？」

「……え？あ、ああ、そうそう。そうだよ。あんなに小さかったかなってね」

俺は和歌に誤魔化して告げた。

「元雪様との思い出、私も思い出せたらいいのに」

残念そうに呟く和歌。

「今から作ればいいじゃん。良い思い出を作つていこう」

「……はいっ」

気になることはいくつかある。
キヤサリンが言つていたように、俺とこの椎名神社には何か繋がりがあるんだろうか？

……。

元雪と別れた和歌はひとりで繁華街で買い物をしていた。

「あとは、カレーのルーを買うだけですね」

母親から頼まれたメモを頼りにスーパーに入らうとする。
そんな和歌の視線に入ったのは、元雪の姿だった。

「あつ、元雪様だ」

先ほど別れたばかりなので和歌は嬉しくなる。
彼に声をかけようとしたその時だった。

「……え？」

元雪の横には楽しそうに笑みを浮かべる女性がいた。
年上の美女と親しそうにする元雪を目撃した和歌は自分の目が信じられなかつた。

「元雪様……その横にいる女のは誰ですか？」

湧きあがる不安。
ショックを受けて小さく呟く和歌の胸に、ズキッと突き刺さるものがあった。

第20章・裏切りの涙

【SIDE・柊元雪】

ついていないと言えばそれまでだつたのかもしれない。
信頼が簡単に崩れることってのはよくあることだ。
些細なことで後に和歌が誤解するとも知らず。

恋月桜花の話を聞いた和歌と別れてからの帰り道。

俺は携帯電話にメールが入つたので、駅前のスーパーに向かう。

『暇だつたら、私の手伝いをしてくれない?』

メールの送信相手は麻尋さんだ。

俺はすぐにスーパーに行くと、麻尋さんと会流して特売の卵とお肉を買わされた。

どうやら特売の商品があつたらしく、そのための数合せだったらしい。

「助かるわ、ユキ君。おかげでふたつも安い卵が買えたし、お肉も良いのが買えたから。でも、よかつたの?朝から恋人さんに会いに行つてたんじゃないの?」

「和歌の家に行つた帰りだよ。麻尋さんはお世話になつてゐるから、手伝いくらいはする。他に買つものは?」

「あとは、懐中電灯と電池かな。少し待つていて。百均で買つてくれるわ」

俺に荷物を任せて、麻尋さんが百円ショッピングに入つてしまつ。

「懐中電灯？台風対策か？」

俺も適当に周りを見ると、見知った顔と遭遇する。

「お？なんだ、柊じゃないか」

「黒沢か。こんな場所で何やつてるんだ？」

「この先のショップでレジ打ちのアルバイトやつてる。前に言っただろ」

「せっかくの休日をアルバイトか？」

俺はアルバイトをしていないが、友人にはそういう事をしている奴もいる。

「ネトゲの課金費用だつたり、恋人とのデート費用だつたり、小遣いだけじゃ足りなくてな。こうやって地道に働いてると言うわけだ。使えるお金が増えるとやれることも多いから、案外、アルバイトも楽しいぞ。それで、お前は何をしてるわけ？」

「俺は美人な兄嫁と一緒に買い物の最中だ」

「あー。あの美人なお姉さんか。柊って何気に美人が周囲にいて羨ましい」

「いやいや、兄嫁だから。お義姉さん相手に何を期待しろ、と？」

麻尋さんは美人だが、兄貴の嫁さんなわけで、俺は弟扱いだから

な。

「兄嫁と言つ言葉には甘い響きの中にロマンがあるだろ?...背徳感と危険、その魅力がお前には分からぬいか?」

「何のロマンだ。良く分からん道を勧めるな

こいつは時々、俺の理解できない世界の話をするなあ。

黒沢はバイトがあるのですぐに行ってしまう。

だが、そんな俺たちのやり取りを見ていた人物が真後ろにいた。

「ふーん。兄嫁といつ言葉の響きにロマンがあるのねえ」

「げつ。 麻尋さん?」

「ふふつ。高校生だよね、コキ君も。たつきのは黒沢君でしょ。男の子の会話つて面白い。こつもああこつ事を考へてるの?」

「う、違つから。俺は別に変な田で麻尋さんを見てないし……」

俺は気まずくなつて足早に歩き始める。

う、ひつひつ時の麻尋さんはからかってモードになるからマズイ。

「はいはー。もうつ、コキ君は真面目だからかいがいがないなあ。こつこつ時は少しでもドキッしてくれないと面白くないわ。誘惑でもしちゃおつかな?年下の弟相手つていうのも楽しそうでいいかも」

「やめてください。兄貴に顔向けできないし……理性と戦わせないで

「あははっ。残念だね、私は誠也さんラブだから。でも、実際のところ、兄嫁属性の魅力って何なの？」

「さあね？ほ、ほら、細かい事は気にしないで。帰るよ、麻尋さん」

麻尋さんは俺の隣を楽しそうに笑いながら歩く。
明るい人ではあるのだが、悪戯っぽい一面がある。

義弟である俺をよくからかう。

それも、時々、ドキッときせる事を平気でしてくれるから困る。
兄貴と一緒にいる時は借りてきた猫なみに大人しいのに。

「麻尋さんってさ、兄貴のどこが好きになつたわけ？」

「んー。ビニがつて言われたら、社長の息子つてどーん？」

「ぶつちやけすぎだー？」

うちの会社を狙うとは麻尋さんは実は悪女？

こいつのまにか乗つ取り計画を実は立ててるのか？

「冗談よ、冗談。そう言つ所をふりかざさないつていうのかな。仕事でも、他の人と一緒に一生懸命に働いてる所が気にいつていたの。ほら、社長のボンボンつて仕事ができないくせに偉そうな人が多かつたりするじゃない」

「そつなのか？」

「らしいわよ。友達の会社では、立場を利用して女の子を……つていう人もよくいるらしいわ。そうね。誠也さんは真面目で優しいか

ら好きになつたのかな。彼に告白された時にすぐに受け入れられたのは、そういう所だと思うわ

「

「うむむ……眞面目な所が兄貴の長所だからな。そこを好きになつてくれる相手と言つのは麻尋さんと相性がいいんだひづ。

「ユキ君は恋人さんのどこが好きなの?」

「え? あ、いや……可愛いところかな。見た目もそうだけど、性格もすこしく可愛い上に俺を慕つてくれる」

「ふーん。可愛いから好きなんだ。だけど、ユキ君はある意味、勇氣があるよね」

「勇氣って何が?」

麻尋さんはふと立ち止まると俺の方を真つすぐに見て言った。

「初めての恋で結婚を選ぶのって勇気がいると思わない?」

「……それは、俺がそつしたって思ったから。和歌は最初から神社を継いでくれる結婚相手を望んでいたんだ。その夢を叶えてあげるためにも結婚っていうのは恋人になるより先に決めたことだから」

「結婚という二文字に俺は未だに自覚はない。けれども、いつかくる将来に期待ができるのはいいことだ。

「案外、喧嘩してあつさつと破局とか?」

「やめて…? 恋愛初心者の俺にひどい事を言わないで」

「「めん。冗談きつかったわね。ユキ君たちがあまりにも純情路線で何だか羨ましくて。そういうピュアな関係つて今時ないから。実際のところ、どうなのがなって……」

初めての恋をした相手と結婚したいと言つた時は男だろうが、女だろうが、別に不思議な事じやないと思つんだ。
結婚つて言葉をすぐに言えるのは、俺がまだ子供だからかもしれないけど。

「私はユキ君を応援するわ。明日、お義母さんとの対面でしょ? 覚悟はできてるの?」

「それが問題だ」

最後の関門つていうか、俺と和歌の関係において重要な局面を迎える。

唯一の反対者、うちの母さんを説得しないといけない。

当初は何だかんだで実際に会えればあっさりと受け入れてくれる気がしてた。

だが、しかし……親父が火に油を注ぐような言動ばかりするから、母さんの方もかなりかたくなな態度を示している。

……このまま、うまくいくのか心配になつていてる。

「お義母さんも、ユキ君を本当に心配しているの。誠也さんと私の場合はすぐに受け入れてくれたけどね。うまい方向に話を持つていけばいいと思うの」

「うぐつ。俺には兄貴ほどの話術がまざない」

兄貴の場合は本当にすげーくちがつまくて、呆気ないほど簡単に麻尋さんを認めさせた。

「元々、同じ職場の同僚つていうことで母さんが彼女のことを知っていたのも大きかったと思うし、兄貴もそろそろ結婚してもおかしくない年齢だつたからな。

それに比べて俺はまだ学生なつえに、将来が神社を継ぐと言つた話で、母さんとしては気軽に〇〇Kを出していくことだらう。

「自分の息子が婿に行くのは気になるだらうか?」

「婿つてそんなに氣を使つもの?」

「テレビドラマによくこる婿殿の待遇をみれば分かるでしょ?」

あー、それは確かに冷遇までは言わないが氣まずそつだ……俺もあんな感じになるのか。

現実問題として婿入りつてことは名字も変わるだらうし、立場的な物もある。

母さんが心配しているのはそういう現実の面の事なんだろうな。きっと、俺は勢いだけで、その現実をまだ理解しきれていないから。

「お嫁さんの実家を継ぐつていうのは大変なことよ。親戚関係とか、現実の問題もたくさんあるの。お義母さんはコキ君の事を新亞庇してからこそ厳しくなつているのを分かつてあげて

「……うん。分かつた」

とにかく、まずは母さんには和歌と会つてもいい。

そこからこじれるなら、また考へよ。」

「麻尋さんもフォローしてください」

「そうねえ。ソフトクリームで手を打つてあげましょ」

「うぐう……」

俺たちがフード「一トの前に差し掛かっていた。
ちょうど目の前にはソフトクリームのお店がある。
女人ってのはホントに甘いモノが好きだよな。
俺は仕方なく、麻尋さんにソフトクリームをおごしてあげる。

「ありがと、ユキ君。買い物の荷物持ち以外にこんなことまでしてくれること」

「その代わり、フォローはしてよ?」

「うん。私も和歌さんに会いたいわ。ユキ君が惚れた女の子がどんな子か楽しみだもの」

ソフトクリームを美味しそうに食べる麻尋さん。
その時の俺は明日の心配をしていた。
実はそれ以前に大きな危機が迫っている事も知らずに。

家に帰つてから夕食後、夜になつた頃に俺は和歌に電話をかけた。
何度目かのコールのあとに和歌は電話に出る。

「あつ、和歌。俺だけど。明日のことなんだけど、何時くらいに迎えに行こつか?」

『…………』

「和歌? 聞いてる?」

『……私はいけません。いえ、行きたいですけどいけないんです』

和歌は静かに拒絶の意思を示す。

「え? どういう意味だよ、和歌」

『それはこひらの台詞です、元雪様。私は……うつ……貴方を信じていいのか……分からなくて……』

電話越しの涙まじりの声に俺は正直、ドキッときすぎて身体が震えた。

和歌が……泣いてる?

『……元雪様、教えてください。私は元雪様の恋人なんですか。それとも……』

氣落ちして、ショックを受けている様子の和歌。

……俺よ、今度は和歌に一体、何をしてしまったのだ?

第21章・君、恋しくて

【SIDE・柊元雪】

不協和音は突然に、思わず展開が俺を待っていた。

それは俺と和歌との関係の間にできた初めての亀裂

涙ながらの和歌からの電話に俺は正直、焦った。

『元雪様。私は貴方を信じていいんですか。私は貴方の恋人なんですか、それとも』

彼女は涙ながらに電話越しに告げる。

「ま、待ってくれ？あ、あのさ、和歌？何があつた？」

当然、俺の方は状況が理解できずに戸惑うわけだ。
和歌を泣かせたつもりもないし、そんな話になつた記憶もない。
神社で「恋月桜花」の話をしてくれて、昼飯を食べてから別れた
のだ。

そこから後は、俺は麻尋さんに会い、夕食の材料やらを買いに行
つた。

分からん……なぜ、和歌が傷ついたのか。
俺と会わない数時間に何が起きたのだ？

『元雪様は私を裏切ったんですね……』

「へ？裏切ったって？」

『私はまだ子供ですし、女らしく魅力もないかもしれません。でも、

私の知らない所であんな事をしていたなんて……そんなのひどいです。私が何も知らないからって……他の人と付き合っていたなんて……』

俺を責める和歌の口調は意氣消沈している。

めつちや傷ついてる様子に俺はどうすることもできず。

「和歌……落ち着いてくれ。今は家にいるのか？俺、今から会いに行くから。だから、話をしよう。な？俺が悪いなら、何が悪いのか話を聞かせてくれ？いいか？」

『…………うつ…………』

彼女は返事の代わりに、電話をぶちと切ってしまった。

思わず、血の気が引いてしまう。

和歌は傷ついて怒っていた気がする。

俺よ、何をしちゃったのだ？

ほら、正直に吐けよ、思い出せ、何か思い当たることがあるだろ？何もないっす……分からないつてば。

「はあ。何だよ、どうことなんだ？」

俺はわざと事情が掴めずに、とにかく和歌に会いに行く事にした。

リビングでは兄貴と親父が酒盛りをしている。

仕事が休みの土日は親父は酒を酔いつぶれるほど飲むからな。

「おー、我が息子よ。こんな時間にどこかに行くのか？」

「ちよつと急用で出でぐる。家の鍵は閉めないでくれよ？」

「ふむ……。そんな時間でも和歌ちゃんに会いに行くのか。良い良い。
行って来い。ふと会いたくなるのも若さだの」

「こいつらがしゃい。元雪、夜道は気をつけてな

兄貴に心配される事に俺は苦笑にする。

「やここまで子供じゃないうて。それじゃ……」

「待てい。元雪、これだけは覚えておけ。女と言つのはやびしがり屋なんじやよ。他の女と一緒にいるだけでも傷ついてもある。想いが強ければ強いほどで、独占欲も強くなるのだ。些細なことかもしれんが、気をつけろよ」

「親父……」

親父は酔いながらも、俺にアドバイスをする。

和歌が何か傷つける事を無意識に俺がしてしまったのか。

「母さんも今こそアレだが、昔は独占欲バリバリで可愛くてなあ。当時、女子高生ながら、ワシの職場によくきては猛アタックをしてきて……ぐはあー?ま、待て、母さん。照れるのは分かるが、それはマズイじやろ……つづきやーー!?

親父は過去を暴露されて恥ずかしげる母さんの襲撃を受けてノックダウンする。

所詮はただの酔っ払いの言葉だったらしい。
まあいい、ここは放つておいて急いで和歌に会いに行かなないと。

家を出て全力で自転車をこいで最速タイムで俺は椎名神社に到着する。

ただいまの時刻は9時過ぎ。

まずは屋敷の方へと向かうが、どうやら、和歌は留守のようだつた。

「和歌ならさつき、神社の方に行くって出ていったわ。どうかしたの？」

小百合さんからの情報に俺は焦りが強くなる。

「そうなんですか？」

「うん。2人とも喧嘩でもした？なんか様子がおかしかったけど？」

「いえ、そういうわけでは。夜分、すみませんでした」

俺はそう言って和歌の家を後にし、神社の方へと向かつた。

「どーだ、和歌はどうしているんだ？」

周囲を探すが、すでに神社には人気もなく、誰もいない。灯籠の灯だけを頼りに進むが、和歌は神社の敷地内には見当たらぬ。

あと、探していない所は……『神木の付近か。

『いいか。』『神木の付近には近づくな。今度、引かれても助けてや

れないかもしれない』

俺はキヤサリンの言葉を思い出して、警戒はする。

……でも、和歌の事を無視なんてできない。

俺は深呼吸をひとつだけして、暗い夜道を歩きだす。

「……和歌つ……」

そして、案の定、和歌は『神木の近くにいた。

古い桜の木を見上げるようにして立ちつくしていた
月明かりが綺麗に俺達を照らす。

「和歌、来たよ。どうしたんだ？」

「……元雪様」

和歌の表情を見て愕然とした。

涙が瞳からあふれ出して頬を伝う。

彼女は泣いていたのだ。

「俺はキミに何をしてしまったんだ？」

「元雪様……私じゃダメですか？ 魅力が足りてませんか？」

「そんなことないよ。俺にとつては和歌だけが……」

「それならば、どうして他の女性と楽しそうにいるんですか。元雪様を信じたのに浮気されるなんて……」

信頼の破綻、裏切ったのは俺の行動が原因らしい。

待ってくれ、和歌は一体、何の話をしているのだ？
和歌は俺を責める口調を続けた。

「ひどいです。私がいるのに、それなのに……」

「わ、和歌？事情がよく分からぬ。最初から説明してくれないか？」

「言い訳ですか。……今日の夕方の事です。私はお母様に頼まれて駅前の大型スーパーに行つたんです。そうしたら、楽しそうに綺麗な女人人が元雪様と腕を組んで歩いてました。私と別れてからそんな時間も経つていないので、別の女性となんて……ひどい……」

泣き崩れそうになる和歌。

俺はハラハラしながら、その状況を考える。
……まさか、アレか？

「えっと、和歌。良く聞いてくれ。その相手は俺の恋人でも、何でもない」

「嘘ですっ。とっても仲がよさそうに見えました。それにソフトクリームも一緒に食べてました。あーんつしてました！私は元雪様とした事がなのに……羨ましかったです」

拗ねる和歌の言葉に俺は状況を理解した。

つまりは俺に過剰なスキンシップをする麻尋さんが原因なのだ。
確かにあの時、一口だけ、ソフトクリームを食べさせてもらつた。
……二つの意味で美味しい思いをしたな、と心の中で思つてしまつた、ごめんなさい。

「違つんだ。和歌、あの人は……」

「聞きたくないです。私は元雪様だけしかいないのに。元雪様には他に女性がいるなんて信じられなくて。でも、考えれば考えるほどに……辛くて、苦しくて……私が以外の人と楽しく過ごすなんて……」

それは嫉妬という感情。

和歌が泣いている……泣かせたのは状況がどうであれ俺の責任だ。勘違いをしているとはいえ、誤解するような状況を安易に作ったせいだ。

「ごめん。和歌……傷つけるつもりはなかつたんだ。ただ、いつも通りで気にしていなかつた」

俺は和歌に近付くが、警戒されてしまう。

こんなに和歌が傷ついてるとは想像以上だった。

……そりや、そうだよな。

俺も逆の立場なら気が氣でいられるはずがない。

見知らぬ異性と仲良くしていたら気にいらないのは当然だ。浮氣を疑われても仕方ない。

「……和歌。俺はキミが好きだ。その気持ちに偽りはない

「あの人は遊び相手つてことですか？元雪様はそんな人なんですか？」

？」

和歌の中で麻尋さんは完全に浮氣相手として確定してる模様。俺は小百合さんの台詞をふと今頃になつて思いだす。

『あの子って純粹だから、思い込みも激しいの。いつもて思いこんでしまうと周りが見えなくなるくらいにね。だからこそ、そこがたまに大変な場合もあるのよ。普段は素直な分、すつごく感情が溢れることがあるの』

……純粹ゆえ、か。

和歌の魅力とは言え、こんな形でその純真さがあだになるとは、いろいろと考えたんだろうな。

俺と彼女がどういう関係なのか、とか。

きっと逆なら俺も不安で仕方がない状況だろう。

「遊び相手でも何でもない。本当に関係自体はやましい事はない」

「だったら、どうして、あんなことを? 私じゃ不満なんですか?」

「違う。聞いてくれ。和歌。俺はキミを裏切っていらない」

「……え?」

傷つけてしまった。

大事で、可愛くて、守ろうと決めた子を……。

そんな現実が、俺はショックで……自分の軽はずみな行動を悔いた。

俺はそっと彼女を抱きしめながら耳元で囁く。

「よく聞いて欲しい。悪ふざけが過ぎた所もあるけども、仲が良すぎるよう見えたかもしれないけども、あの人は俺にとつて兄嫁に当たる人なんだ」

「兄嫁? 元雪様のお兄様のお嫁さんつてことですか?」

思わぬ相手の正体に啞然としている和歌に俺は頷いて答える。

「そうだ。あの人とは何もないんだよ。誤解させるような光景は見せたかもしれない。けれど、ただの仲の良い関係であつて、変な関係じゃない。俺信じて欲しい」

女の子はさびしがり屋で、些細なことで誤解してしまう。
だから、男の俺が誤解させないようこじつかりとしないといけないんだ。

初夏の夜の風は、少しだけひんやりとして冷たく感じた。

第22章・雨降つて地固まる

【SIDE・椎名和歌】

元雪様の裏切り、私以外の女性と楽しそうに笑う彼。その姿を見てしまい、私は愕然としていた。

素直にショックだつたの。

家に帰つてからも私は信じられなかつた。

自室にこもり、ぐるぐると頭の中で元雪様の事を考えてい。

「元雪様……」

初めて好きになつた男の人。

私は彼の事をほとんど知らないんだつて思い知る。

彼の性格が優しい事は知つていて。

和食が好きな事も知つていて。

けれど、元雪様の友好関係なんて知らないもの同然だつた。仲のいい女人人がいたことも知らず。

「……楽しそうだつたのが、嫌です」

私以外の人に優しい笑顔を向けて欲しくない。

この感情の名前は……嫉妬。

元雪様が私のものだつていう独占欲。

「和歌？部屋にいるの？」

お母様のノックがする音に「何でしょ?」と返事を返す。

「今日の和歌の様子がおかしかったから気になつて。どうしたの？」

「いえ、なんでもありません」

「本当? 和歌……元雪君と何かあつたんじゃないの?」

「何でもないです」

つい語氣を強く言い返してしまつた。

「もしかして、喧嘩でもしてるの? お皿はあんなに楽しそうだったのに」

「喧嘩なんてしてません……」

あれから、まだ元雪様とお話もしていない。
私が勝手に不機嫌になつているだけ。

「和歌が不機嫌になるのも珍しいわね。そんなに嫌な事でもあつたんだ?」

「違います! ……あつ」

「元雪君。和歌を大事に思つてくれてるわ。あんなに良い男の人はないわよね? 喧嘩しちゃったの?」

「……私だけを想つてくれているのなら、素敵ですね」

言葉に出せば不安が大きくなつてしまつ。

「どうぞ」とへ。

「……なんでもありません。少し頭を冷やしてきます。神社の方に行ってきますね」

「ちよっと和歌つてば? もうつ、何なの?」

お母様が心配してくれるけど、今はひとりになりたかった。

「はあ……」

夜の月明かりだけを頼りに私は、神木の近くに座る。
昔からこの木の近くは私の安心できる場所だった。
元雪様と喧嘩をしてしまった。

部屋を出てすぐに携帯電話に元雪様から電話がかかってきたの。
そこで私は自分勝手な言い分を相手にぶつけてしまった。
はぐらかすような口調の元雪様が許せなくて。

今も彼の横に、その女の人がいたらどうしようつて不安に潰され
そうで。

「……元雪様が悪いんだもの」

私がこんな気持ちになるのは元雪様が悪いの。
怒りと悲しみが入り混じる複雑な気持ち。

「でも、本当に元雪様は私を裏切ったの?」

私の勘違いだったら、どうしよう?

そんなことが頭をよぎるけども、その考えはすぐに消えていく。初めての嫉妬は予想以上に私の心を支配していた。

元雪様が許せない。

「和歌……」

人の気配に気づいて顔をあげると、いつの間にか元雪様がそこにいた。

びっくりするけども、私は彼の顔を見る事でふいに悲しみが強くなる。

いつもと変わらない元雪様。

それゆえに、私は悲しい。

初めて好きになった男の人裏切られてしまつた。元雪様が大好きなのに……。

「ひどいです。私がいるのに、それなのに……」

「わ、和歌?事情がよく分からぬ。最初から説明してくれないか?」

「今日の夕方の事です。私はお母様に頼まれて駅前の大型スーパーに行つたんです。そうしたら、楽しそうに綺麗な女人が元雪様と腕を組んで歩いてました。私と別れてからそんな時間も経つていないのに、別の女性となんてひどい……」

私は涙をこぼしながら元雪様に迫る。

事情が分からぬと言つた表情をする彼。

あの時のことが嘘だとは言わせない。

「……和歌。俺はキミが好きだ。その気持ちに偽りはない」

「あの人は遊び相手ってことですか？元雪様はそんな人なんですか？」

これは私達の初めての喧嘩。

元雪様と喧嘩なんてするはずがないと思つていた。

「遊び相手でも何でもない。本当に関係自体はやましい事はない」

「だったら、どうして、あんなことを？私じゃ不満なんですか？」

「違う。聞いてくれ。和歌。俺はキミを裏切つていない」

元雪様はカツコいいし、優しいからモテると思う。
彼の傍に綺麗な人がいても、仲のいい女の人気がいるのは不思議な
事じゃない。

目をそむけたくなる現実、悪いのは……誰なの？

「よく聞いて欲しい。悪ふざけが過ぎた所もあるけども、仲が良すぎる
ぎるよう見えたかもしれないけども、あの人は俺にとつて兄嫁に
当たる人なんだ」

「兄嫁？お兄さんのお嫁さんってことですか？」

「そうだ。あの人は何もないんだよ。誤解させるような光景は見
せたかもしれない。けれど、ただの仲の良い関係であつて、変な関
係じやない。俺信じて欲しい」

それが真実、怒りがさつと冷めていく。

元雪様と楽しそうにしていたのは、元雪様のお兄様の奥さん。彼は私を裏切っていない、裏切っていないのに疑ってしまった。大好きな人を何も信じてあげなかつた。

元雪様はそんな事をする人じやないつ、何かの間違いだつて。そう信じるべきなのに、私は最初から疑つていた。

彼が裏切り、他の人とこつそり付き合つてゐんじやないか。

信頼しているつもりで、心の底から信じていなかつたのかもしない。

「も、元雪様、ごめんなさいつ、ごめんなさいつ……私、私は……」

「わ、和歌。落ち着いて。泣かないでくれ」

「でも……私は……なんてひどい……あつ……」

冷静になれば分かること。

元雪様が私を愛してくれる気持ちも、彼が裏切るはずがない事も。少しでも疑つてしまつた私はまだ信じ切れていなかつたのかもしれない。

「ごめんなさい……嫌いに、ならないでください……ひくつ……」

「なるわけないだろ。和歌。俺は和歌が好きで、嫌いになるはずがない。俺は怒つてないから。和歌……俺も悪かつた。軽はずみな事をした反省もある。ごめんな?」

「ひくつ……えぐつ……ふええん」

私は元雪様に抱きしめられながら泣き続けた。

愚かな私を許してくれた彼の優しさは本物だと改めて感じた。私が落ち着くまで元雪様は私を慰めてくれていたの。

「……すべては嫉妬だつたんです。元雪様が他人と楽しそうだったので、嫌な気持ちになりました」

ようやく落ち着けた私は彼の腕の中に抱きしめられながら想いを告げる。

「和歌も焼きもちを妬いたりするんだな」

「そうみたいですね。今まで人を好きになつた事なんてなかつたから、こんな気持ちがあるなんて知りませんでした。それで元雪様を疑つてしまふなんて」

「仕方ないと思つ。俺も逆の立場なら当然怒るさ。もう不安にさせたりしない」

なんて、私はバカなんだろう……こんなにも優しい人の気持ちを疑うなんて。

私は何があつても元雪様を信じよう、もう一度と疑う事はない。

「小さな頃、恋月桜花のお話を聞いた時、私は思つたんです。こんな風に誰かを強く思えるようになりたいって……紫姫様が影綱様を慕い、想つたように」

「……影綱と紫姫の恋か。結局、恋は実らずだつたんだろ」

「いいえ。お互に想いは抱きあつていたはずです。来世では結ばれるよう願いを抱いて。この『』神木の桜を数百年前の2人も見ていたんですね。同じ光景を……今、見ているんです」

この場所で、かつて悲恋と呼ばれるひとつ恋があった。
恋月桜花、紫姫は影綱様に来世でめぐりあえたのかな。

「案外、俺と和歌がそのふたりの魂を受け継いでるのかもしれないぞ？」

「え？ やだ、元雪様つてば。もつ。【冗談が過ぎますよ】」

「ははっ。でも、『』うなる事が俺たちの運命だつて信じてる。可能性はあるだろ？」

「……そうですね。私達が出会つたのはそんな強い特別な何かがあつたのかもしません。彼らではないにしろ、私達はめぐりあう運命にあつたんだと思います」

遙か昔の恋のお話のように、同じ場所で私達も恋愛をしている。
私は元雪様に甘えるように抱きしめられながら夜空を見上げたの。

……。

和歌と元雪の抱擁しあつ姿を遠目に見つめている少女がいた。

「まったく、雨降つて地固まる、とはよく言つたものだ。『』神木に

向かつた柊元雪が気になつて来てみれば……ただの逢瀬じゃないか。それにしても、不思議な縁もあるものだ」

彼女は幸せそうに笑う2人に呴く。

「……影綱は柊元雪、紫姫は和歌。ふたりは互いに魂を受け継ぐ存在。それゆえにふたりはめぐりあい、恋をした。前世で結ばれなかつた恋愛を来世でもう一度、か。想いの力は未知数だ、生まれ変わつても続く想いはある」

それは数百年越しに実った恋愛。

果たして本当に想いは時を超えて、結ばれたのか。

「恋月桜花、それは悲しい恋の物語。しかし、“恋月桜花”という紫姫の視点で描かれた物語ではただの悲恋なのかもしないが、あれは単純な恋の話じゃない。物語には表があれば裏もある」

少女は静かに瞳を瞑り、夏の夜風を肌で感じる。

一度は運命が引き裂いたふたり、運命は再び結びつけてしまった。

「だが、運命とは恐ろしいものだ。数百年という年月を経て、本当に影綱と紫姫が再びめぐりあつてしまつたのだから」

灯籠にもたれかかるようにして不敵に笑う美少女は静かにその名を告げた。

「これでもまだ運命の邪魔をし続ける氣か。“椿姫（つばきひめ）”？」

椿姫とは誰なのか。

◦ 恋月桜花がただの悲恋の物語ではない事をまだ2人は知らない

【SHIDE・格元雪】

まさか、と書ひ葉があるように想定外の事態は起つた。まさか、和歌が焼きもちを妬いて、嫉妬するとは。

初めての喧嘩は和歌の勘違い。

麻尋さんと一緒にいた俺を誤解しただけとはいえ、原因は俺だ。そこには反省しよう。

和歌とも無事に仲直りできだし、田下の問題は母さんに関係を認めてもらつだけ。

朝から親父と俺の部屋で作戦会議をしていた。

「元雪よ、和歌ちゃんはいつ来るんだ？」

「毎週金曜日は迎えに行く。それよりも、母さんの反応が田口に悪くなっているのは親父せいだろ」

「ふむ、ワシもあそこまで反対されると……」

試練と言えばそなめかもしれない。

だが、これは親父が先に話を通してくれていたら試練じゃなかつた。

「母さんの件は親父が悪いんだからな

「はいはい、分かつておるわ。ワシのミスとも言えよう。だがな、ワシもお前と和歌ちゃんがこんなにも早く縁談がまとまるのは予想外だったのだ。まったく、母さんがいない間にちよこっと顔見せ程

度に挨拶させよつと思つただけなのに結婚まで話が進むとは……」

「俺のせいかよ？俺が和歌を好きになつたのはこゝことだろ」

和歌と出合つてしまつた。

神社を継ぐと言つ覚悟もあつさりと決めてしまつた。

その時間の短さは確かに普通ではないかもしない。

それゆえに昨日の喧嘩のような事が起きてしまつたわけだ。

和歌も俺も互いをまだ知らなさすぎる。

『元雪様の事を教えてください。私は貴方をもつと知りたいです』

和歌は昨日の別れ際に俺にそう言つた。

恋人になつてからたつた1週間しか経つていない。

それでも、和歌とはもうずいぶん前から一緒にいたような感覚になる。

「親父は俺の味方なんだよな？」

「……お前が決めた事だ。好きにせい。神職を継ぐ道を選んだ覚悟は本物だろ？ならば、ワシがどうこうこうべきものでもない。ワシは『俺は芸能人になつてビッグになる！』と元雪が言つても応援する決めておつたのだ」

「そんなことは言わないっての」

別にそんな夢は抱いてない。

「ただし、芸人になるつていうのは少し考えるかもな」

「……その基準がいまこち分からん」

「今日は元雪が母さんを説得せい。母さんも元雪が心配なのだ。分かるだろ?」

「うん……もう俺の問題だからな。俺が説得するのは理解してるさ」
和歌を家に連れてきただけなら「やだあ、可愛い彼女連れてきたの?」「とか明るく和やかな感じになつたはずだ。

そこに加えて「俺が神職を継いで、婿入りする」って将来の話がなければだが。

……やはり、親としては子の将来が気になるのも仕方ない。

「それじゃ、俺は和歌を迎えて行つてくるから。その間に親父は少しでも母さんの機嫌をよくしておいてくれよ」

「母さんはワシに惚れておるから。それに母さんの機嫌をよくすることくらい心得ておるわ。ワシに任せておけ」

「それが過去の話ではない」と、俺は切に願つわけだが

親父だけはいまいち信用できないんだよな。

俺は和歌を迎えて椎名神社に行き、彼女を我が家に連れてきた。

「……大きな家ですね?」これが元雪様の実家なんですか

「いやいや、和歌のお屋敷に比べたら小さいだら」

俺は緊張する和歌を連れて家の中に入る。

だが、玄関を抜けた先の廊下にはなぜか親父がぐつたりとして倒れていた。

うわあ、何だか嫌な予感がする……。

「親父？ なんでそこで倒れてる？」

「ぐ、ぐふつ。すまぬ、元雪……ワシは甘かった。母さんを余計に不機嫌にさせてしもうたわ。……アレか、今の母さんはブランド物じやないと機嫌がよくならないのか」

また親父が余計な事をしゃがつた！？

「お、おじ様？ 大丈夫ですか？」

「和歌ちゃんは優しいの。母さんには気をつけてな」

「……はい？」

「あー、和歌。その親父は放つておいていい。まったく……」

俺は呆れるしかない。

親父に期待した俺がバカだつた。

親父を放つておいて、俺は和歌と共にリビングに入る。ソファーアーに座つて静かに俺を待つていたのは母さんだ。

「は、はじめてまして、元雪様と交際させていただいている椎名和歌と申します」

「……元雪の母です。話は聞いているわ。礼儀正しい子なのね」

第1印象は良い方が、そこは心配してないけどな。
問題なのはこれからだ。

俺たちはソファーに座り、向き合いつ。
だが、そこには兄貴も麻尋さんもいない。
予定では兄貴夫婦が俺のフォローをしてくれることになつていて
のだが？

「あれ？ 兄貴たちは？」

「ああ、あのふたり？ 仲良くデートしにいったわよ。映画のチケットをあげたら、一緒に行つてくるでかけたわ。……元雪、それがどうかしたの？ 麻尋にでもフォローを頼んでいたのかしら？」

やられた……最後の希望、麻尋さんにも裏切られた！
前払いでのソフトクリームをおじつてあげたのに！
母さんも手ごわい、邪魔だとばかりに映画のチケットで追い出すとは……。

「そんなに警戒しなくてもいいわ。私も鬼ではないの。ふたりの将来の話をしつかりとしたいだけ。和歌さん」

「は、はい」

母さんの前で萎縮気味な和歌。

「元雪をどうして選んだの？ 話に聞けばたつた数十分で婚約まで決めたそ「うじゃない。結婚なんて大事な話でしょう？ どうして、元雪

でいいと思えたの？」「

「それはだな……」

「元雪。貴方には聞いてないの。しばらへ、黙つてなさい」

「うぐひ……」

母さんに威圧されて俺は黙り込む事にする。

すまない、和歌……。

和歌は背筋を伸ばした姿勢の良い態度で母さんに話を始める。

「元雪様とは縁談の前の日に偶然ながらも出会っていました。電車の中での私を助けてくれた彼に一目惚れしていました。その翌日、まさかとも思える偶然の再会にまずは驚きました。元雪様と再会できただことが嬉しかったんですね」

「……へえ、そんなことがあつたの？」

「はい。元雪様との縁談ですが、私の家は古くから続く神社の家系なのです」

「椎名神社は知ってるわよ。私もあの場所で結婚式をしたもの」

ナンデスト……そうだったのか？

あと、親父が復活したらしく、ドアからこいつぞのぞいてるのが目に入った。

親父でもいいから、のぞき見するくじにならひに来てフォローメンテしてくれ！

「両親には子が私しかおらずに後継者がいません。そこで、結婚相手にあとを継いでもらうために探していました」

「どうとも後継者不足に悩むのは分かるわ。それがどうして、元雪かといふことなの。貴方は誰でもいいわけでしょう？」

厳しい言葉で和歌が傷ついたらどうしてくれる。

母さんに文句は言いたいが言つてゐる事が間違いではないので黙つておく。

「……私は元雪様が好きです。人となり、性格や優しさに惹かれました。この人と一緒に生きていきたい。たった数十分の間の出来事ですが、そう強く思えたのです」

「元雪は優しい子だけど、決断力がなくてね。昔から選択肢を『えたら、悩みに悩み、決め切れない優柔不断な子なの」

「俺をへタレつて言づなー……言わないでください」

「……と、言つた感じに気にしてゐるくらい。それなのに、今回はあつさりと自分の将来を決断したわ。これから先、ずっとのことなのに。私が心配なのは和歌さんの事もそうだけど、神社なんて特別な職種についてもそうなのよ」

母さんは和歌にたたみかけるように話を続ける。

「神社の富司、職業の大変さを考えると、母親としてはすぐに認める気にはなれないのは和歌さんも分かるわよね？」

「はい……結婚ありきの交際ですし、おば様が心配なされるのは当

然だと思います。ですが、私には元雪様が必要なのです。神社を継いでほしい、傍にいて欲しい、私と共に生きて欲しいと思いました。この気持ちちは……本物なのです」

和歌がはつきりと言い切る。

そこまで好かれていると何だか照れくさい。

「ただの勢いではなく、ふたりが強い思いを抱いてるのは分かつたわ。でも、まだ高校生のふたりが結婚ありきに話を進めるのは納得しない。これは両家に対する大きな問題でもあるの。高校生ぐらいの子たちなら些細な喧嘩で破局するのも当然あるわ

「うぐつ……。

「ふたりはまだ喧嘩もしたことがないでしょ? けど、これから先は……」

和歌は俺の顔を見つめて、覚悟を決めたように告げた。

「……あります。喧嘩をしてしまったことは……あるんです」

「え? あるの? まだ1週間も経っていないのに?」

驚いたのは母さんの方だった。

和歌は素直に昨日の出来事を話しだす。

「昨夜、私は自分の身勝手な思い込みで元雪様と喧嘩をしてしまいました。勝手に嫉妬して、彼を傷つけるような暴言を口にしてしまった事を悔っています」

「……喧嘩してゐるんだ、ふたりとも。まだ田が浅いのにね？」

どうしようか、ソリで昨夜の喧嘩の事実を追求されるなんて。
会つてすぐに喧嘩なんてしちや、説得力もなくなる。
和歌も正直すぎるよ、ソリは誤魔化しても良い所なの。」

「貴方達……恋愛初心者なのに、結婚なんて決めるのは早すぎるわ
ね。そう思わない？」

現実主義者の母なんだからソリが、俺たちにはつまつとやうござた
んだ。

第24章・好きになる理由

【SHIDE・椎名和歌】

初めて元雪様のお母様にお会いした。
対面するには緊張するけども、元雪様も私の母と対面したから今
度は私の番だ。

おば様は本当に元雪様の事を大切に思つていてるのが言葉の節々に
感じる。

そして、私はある質問に戸惑つていた。

「ふたりはまだ喧嘩もした事がないと思つけど、これから先、……」

喧嘩なんてしたことがない。

それは交際して1週間ならば当然のことなのかもしない。

普通なら短期間で喧嘩などしているようでは、長続きしないこと思
われてしまう。

結婚とはこれから先、一生かけて傍にい続けると言つ意味だから。
私は昨夜の事を思い出しながら言つた。

「昨夜、私は自分の身勝手な思い込みで元雪様と喧嘩をしてしまいました。勝手に嫉妬して、彼を傷つけるような暴言を言つてしまつた事を悔っています」

「……喧嘩してるんだ、ふたりとも。まだ日が浅いのにね？」

少し驚かれた様子のおば様。

ないのが当然と思っていたからこそ、驚かれたのだ。

私は恋人失格なのかもしねり、それでも。

「貴方達……恋愛初心者なのに、結婚なんて決めるのは早すぎるわね。そう思わない？」

おば様の一言が胸に突き刺さる。

それが現実だと言われている気がして。

私達はまだ学生、そんな事を考えるには早すぎる年齢。

それでも、元雪様と将来にわたって長いお付き合いをしたいと私は本気で考えている。

「…… そなのかもせん。私達はあまりにもお互いを早くに好きになりすぎて、互いの事を知らなすぎたのです。些細な不和が誤解を生み、私達は喧嘩してしまいました。ですが、それは…… そういう現実を改めて知る機会になりました」

私はおば様に今の自分の想いを告げる。

「昨日の事です。元雪様が親しそうに女性と腕を組み歩いているところを目撃してしまいました。他の女性と交際してゐるのではないか。彼を信じずに疑惑を抱いてしまいました。そして、彼に確認する事もなく責めてしまつたのです」

「えっと、元雪。とりあえず、アンタがバカなの？ 恋人がいるのに他の子つてどうこうことよ？」

「俺が悪いけど勘違いだ。相手は麻尋さんだから。買い物に付き合つてる時にスキンシップがちょっと誤解を招いただけだ」

「…… 麻尋が？ あつ…… それはありえるかもしない」

「麻尋様と言つのは元雪様の兄嫁にあたる人のこと？」

「どうやら、おば様とも親しくしている様子。

昨日はその方がとても綺麗でスタイルもよくて……思わず嫉妬してしまった。

「元雪様から真相を聞かされるまで、私は疑つてしましました」

「その件は仕方ないわ。麻尋の場合はホントに元雪を弟扱いしているもの」

「…………どうしても、です。本来ならば、私は彼を信じなくてはいけない立場なのに。信じ切れず、疑いをかけてしまいました」

「当然よ。和歌さん…………貴方は嫉妬したのでしょうか？焼きもち妬いたり、浮氣だつて思つてしまふのは女として不思議なことじゃない。そこを我慢しろつて言つるのは無理な話ね。むしろ、やつは所は我慢じひやダメだわ」

女性としての気持ちは理解してもらえたようだ。

それでも、相手を信じ切れずにいたのは私のせいだ。

今度からは何としても元雪様を強く信じると決めている。

「一応言つておきますが、俺は浮氣していないぞ。そりゃ、麻尋さんはドキッときせりれることも多々ありますが

「分かつてゐるわよ。喧嘩とはいっても事情があつたのは分かつたわ

「…………元雪様の事は本当に慕いし、愛しているのです」

「和歌さんがうづきの元雪をホントに愛してくれてるのも分かつた。

実際のところ、喧嘩したって話を聞くまで、初恋って気持ちに浮かれているだけだと思ったのよ。元雪も和歌さんも、互いが好きすぎて周りが見えてないってね」

初恋に浮かれていた。

それは確かにそうだった。

昨日の喧嘩になるまでは、ただ幸せすぎて恋愛の現実を見よつとしていたもの。

それでも、元雪様の本当の心を知った今は違う。

「今はどんなことがあっても私の気持ちは変わりません」

「可愛いわね、和歌さん。大和撫子って言葉は貴方にあるような言葉に思えるわ。元雪にはもつたいない相手ね」

「余計なお世話だつての。母さん、俺は和歌が本気で好きだ。神職の事は母さんは反対かもしれないけど、俺なりに考えた事なんだよ。和歌の夢を叶えたい。一緒に生きていきたいって、俺がこの子を守りたいって思うんだ」

「元雪様……」

おば様の前で宣言してくれる彼の横顔を見つめる。

私は元雪様が好き。

彼に愛されている実感が私を幸せにしてくれるから。

「うわ、青臭いセリフ。どこの海外産ドラマ並に青臭いセリフをよく言えるわね」

「うるせー。いい加減、母さんも認めてくれるか?」

「仕方ないわ。私もふたりの気持ちを確認したかつただけだもの。元雪が覚悟決めてるなら、好きにしなさい」

「母さん……ありがとうございます」

元雪様がそつと私の手の上に自分の手を重ねてくる。
私も認めてもらえた嬉しさにホッと安堵した。

「和歌さんがあまりにもいい子過ぎ。私が文句言つ余地がないんだ
もの。認めるしかないないじゃない。和歌さん、元雪と良い恋人関
係を続けてあげて」

「はい。じゅうじゅう、よろしくお願ひします」

「近いうち貴方の両親ともお話をする機会を作つてもうわない
とね」

本当によかつた。

喧嘩してしまったといつ事実に負い田があつたので、反対されても仕方なかつたもの。

「喧嘩してもすぐに仲直りできる、それって本物の恋でしょ。認め
るわ」

おば様はふと過去を懐かしむように微笑み。

「私も貴方達みたいに恋愛してた頃があつたのが懐かしい。あの人
は、私の友達のお兄さんだったのよ。既に会つた時は仕事をして
いたけどね」

「母さんが親父に最初に出会つた時つていくつ？」

「私が高校1年の時よ。年上の男の人なんて周りにいなくてね。でも、年上の魅力に引かれたのが間違いだつた」

「間違いつていうなあ。ワシの何が悪い！？」

おじ様が行きよくドアを開けてリビングに現れる。
先ほどからずっとこちらをじっと伺つていたので出る機会を待つていたみたい。

「あら、静かだと思つていたら覗き見してたの？」

「それはおいといで。母さんよ、説明をもとめるぞ！」

「そうねえ。私の誤算というべきか……私、貴方の髭面が苦手なの。
そろそろ、寝てる間に剃ろうと計画してるわ」

「ガーンーーー？」

おば様の言葉にショックを受けたおじ様はつなだれでいる。

「親父がマジ凹みした。母さん、親父の髭は確かにうざいし剃りたいが、もひとつオブラーートに包んであげないとショック死する」

「……だって、ホントのことだもの。まさか、彼が髭を生やすなんてね。おじさん臭くて私は好きじゃないわ。本人が似合つていると思つてるのがわざとムカつく。髭さえなければ……私も愛してあげるわよ？」

「つぐおおおお……ワシを試しておるのか、母さん。ワシのプライドともいえる髪を剃れだと……誇りか、愛か、究極の2択だ」

元雪様とおば様に呆れられながら、悩みまくるおじ様。

それでも、おば様からはおじ様に対する確かな愛情がかい間見えた。

元雪様の家族は楽しくて、とても家族愛に溢れている良い家族だと思つ。

「無事に認めてもらえてよかったです。和歌……これからもよろしくな

「はい。じゅうじゅう、ふつつか者ですがよろしくお願ひします」

これからが本当の始まり、末永く続ける関係になれるように私は祈つた。

第25章・ホタルの光

【SIDE・柊元雪】

母さんという最大の障害を乗り越えた今、俺と和歌の将来を邪魔するものはないなった。

結局、そのあとは仲良くな一緒に夕食を食べたのだが。

「和歌さんはいい子ね。私も気にいったわ」

と、大方の予想通りに母さんもすっかりと和歌を気にいつてくれていた。

……相変わらず、可愛い女の子なら基本的に大好きな人なのだ。

「ただいま、元雪。今日はどうだつたんだい？」

「あ、兄貴だ。おかえり。なんとかなったよ。兄貴たちは映画を見に行つてきたの？」

「ああ。たまにはデートもしないとね。麻尋と2人になれる時間も作らないと」

「楽しかつたわよ、誠也さん。あと……ユキ君、無事に終わってよかつたね」

笑顔の麻尋さんに俺は言つてやる。

「誰かさんのフォローがなくて大変でしたが」

「その誰かさんって私? だとしたら心が痛むわ」

「ソフトクリームまでおいたの? …… そのおかげで喧嘩までしちゃったし」

あれがきつかけで和歌を不機嫌にさせてしまったわけで。ホントにまったくもつてついてない。麻尋さんは状況が分からずに「ユキ君?」と不思議そうだ。まあ、悪いのは浮かれていた俺なんだけだ。そして、あの喧嘩は起つるべくして起きた。俺と和歌はまだ互いを知らなさすぎるから。些細なことでも良い、お互いを理解して会つて行つと黙つている。

「その和歌ちゃんはまだ家にいるの?」

「つづelingで母さんとお話中。来週には向ひの家の挨拶もしくみたいだから、かなり良い方向に話は動いてる」

「ほう。よかつたじゃないか。それならば、今からアレを見に行くか?」

「アレってなんだ、兄貴?」

兄貴達と一緒にリビングに行くと、和歌もすっかりと母さんと打ち解けていた。

和歌を初めて見た麻尋さんは驚いた顔をする。

「うわあ、お人形さんみたい。綺麗な子だよね。この子がもユキ君の将来のお嫁さん?」

「和歌。紹介するよ、うちの兄貴と、その奥さんの麻尋さんだ」

「はじめまして。元雪の兄の誠也です」

「誠也さんの妻の麻尋よ。お話は聞いてるわ、和歌ちゃん。ホントに可愛い子ねー」

和歌は麻尋の方をみて、昨日の事を思い出したらしい。

「いらっしゃようしきお願ひします。あ、あの、あまり元雪様に…スキンシップでベタベタしないでくださいね」

「え？ あ、うん？」

あはは……麻尋さん、ごめん、あとで事情は話しておく。

「和歌さん。どうだろ？ 今日はこれから一緒にホタルを見に行かないか？ 実は麻尋と一緒に今からホタルを見に行こうって話をしていたんだ」

「ホタルですか？」

「ああ、ホタルは今が見頃の時期なんだよ」

アレってホタルの事だったのか。
兄貴の誘いに和歌は俺の方を見てくる。

「和歌。時間が大丈夫なら兄貴達と一緒に行くか？」

「あ、はい。時間は家に連絡をすれば問題はありません。ホタルですか。私は実物を見たことがないんですね」

「そりなんだ。ホタルの光は綺麗だよ」

小さい頃は年に一度はホタルの観賞につれていつてもらつたつけ。その帰りは山奥の森へカブトムシを捕りに行つたりした思い出がある。

「俺もホタルを見に行くのは久々だな」

といつわけで、俺たちはホタルを見に行く事にした。

兄貴が車を出してくれて、家からだと1時間ほど離れたホタルが見える場所に向かう。

車内では和歌のことを麻尋さんに話をして、主に昨日の触れ合いが誤解を招いた事を説明をした。

「あー、そりなんだ。ごめんね、和歌ちゃん。変に勘違いさせちゃつて」

「いえ、私が悪いんです。麻尋様との仲の良さに嫉妬として、元雪様を信じ切れていませんでした。私が悪いんです」

「ユキ君は純情だからからかうと面白に反応をしてくれるの。ついしちゃうんだよね」

デキッとして生きる事もあるから、からかわないで欲しい。」のお年頃の男の子には刺激がたまらんこともあるのです。

「でも、すげいわよね。偶然の出会いってあるものなんだ。まさに運命の恋つてやつ?」

「はい。私も運命的だと思っています」

「運命か。いいなあ、その響きの恋愛が私もしたかった」

「……麻尋、僕との結婚は運命的じゃなかつたのかい?」

車の運転をしている兄貴が苦笑いをしながら麻尋さんに言へ。

「そんなことないわよ。ただ、職場結婚だから運命の出会いっていうのとはまた違うじゃない。女の子は同じ恋愛でもシチュエーションが違うと憧れるものなの」

「シチュエーションか。麻尋の言つて女心は分かりにくいね」

「私は分かります。大切ですよね。あの、麻尋様はお年はいくつなんですか?」

「私は今年で22歳よ。誠也さんは4歳違いなの。高校を卒業して入社していた職場が誠也さんの会社ですね……」

楽しそうに女の子同士会話するふたり。

和歌も同じ女性と恋愛話をするのは楽しそうだ。
俺と兄貴は男同士の会話をすることにした。

「……可愛い子じゃないか。噂通りに良い子だな」

「でも、俺も和歌もまだまだお互いに知らない事だらけでさ。勘違いや思いこみで昨日は喧嘩しちゃって焦ったよ」

「それは誰にでもある」とだ。最初から理解しあえる相手なんていらない。これから時間を積み重ねていけばいいだけだ。元雪と和歌さんは相性がよれやうだし、これからも良い付き合いをしていくのはずだろ」

「うん……頑張つてみる」

まだまだこれからだよな。

時間の積み重ねつてのはホントに大事なものだと思える。

「……なあ、兄貴。前に俺は恋愛を知らないだけって言つただろ。その通りなんだって思い知らされたよ。喧嘩して、すれ違つて初めて分かる。俺は相手の事を考え過ぎていたつてこともな。バランスが難しいよ」

「そういつといふを楽しむのも恋愛だよ。元雪、経験を積んでいけばいい」

「そうだな。母さんもよつやく認めてくれたから、少しほんが楽にもなつたし」

俺自身も覚悟を改めました。

和歌との将来のために、頑張つて神職を継がないといけない。

「……ねえねえ、ユキ君。ちょっといい?」

「ん?なんだ、麻尋さん?」

後ろの席から麻尋さんに呼ばれたので振り向いた。

「和歌ちゃんともうチューはしたの?」

「 ぶはあつ!?」

思わず噴き出してしまう。

な、何を言つてくれてますか、このお姉さんは!?

和歌とキスだと……そんなのまだしてないよ!

……そりや、俺も男ですし、したい気持ちはあるんだが。まだそういう雰囲[氣]にもなってないし。

物事には順序と心構えが必要なんですよ。

「ありや……まだしてないんだ?」

「わ、和歌とはまだそつ言つ関係じゃないだけだ

「でも、和歌ちゃんはしたいんだよね?」

和歌に話を振られると、和歌は照れくわいに小さな声で言つ。

「そ、それは……私は元雪様を愛していますから」

「ほひ、みなさい。女の子にキスしたいって言わせるの?そういうところ、ユキ君は鈍感だから。しつかりとしないと、和歌ちゃんに愛想つかされちゃうわよ。初恋だからってのんびりしていいわけじゃないんだからね?」

「麻尋さん、そういう言い方されると俺がヘタレに思われてしまう。俺だつてしたいけど、ここでしてもいいのかなって思っちゃうんだよ。

「麻尋。あまりふたりをけしかけない。2人には2人の距離感と付き合ひ方があるんだ」

「えーっ。だつて、もつ付き合ひ始めて一週間でしょ？お互ひに手をつなぐだけなんて、中学生の恋愛じゃない。ここはもう一歩くらいい踏み込んで……霧囲気にはかせて、ね？」

「も、元雪様。私の覚悟はできますから」

「くつー？あ、あはは……」

和歌が勢いで口走つてしまひので俺は苦笑にするしかなかつた。ファーストキス、か。

考えてみれば、俺たちもそろそろ次のステップに進む頃あいではある。

「ちなみに、私と誠也さんの初めてのキスは……ある日の夜、仕事場に残つていたら、いきなり誠也さんから強引にキスされたんだよね。普段とのギャップもあって、あれは乙女心をドキッさせられてしまつたわ」

「麻尋。その当時は既に付き合つていたから強引でも問題はないだろ？」

「まあね。でも、いきなりだつたから。誠也さんもやるなあつて」

確かに、兄貴も意外と大胆なことをする。

見た目と違つて、兄貴はやる時はやる男ですか。
そんな兄貴に憧れます、俺も頑張らないとなあ。

雑談をしていたら、時間も早く流れで気がつけば山奥の方へと来て
いた。

「そろそろだな。 麻尋、懐中電灯は持つてきてるな？」

「ちやんと用意してるわよ。 昨日、買つてきたし」

「あ、100ショップで買い物してたのはそつこい」とか

「うふ。 はい、どうぞ。ちやんとコキ君達の分もあるからね」

あの時の買い物の謎が解け、俺は懐中電灯を手渡される。

「兄貴、ホタルって見頃は今の時期だけ」

「6月後半が見頃だな。 7月に入ると厳しくなるから時期的にはち
よづいいんだよ」

やがて、車は駐車場に止まる。

この付近は観光スポットとして、ホタルがよく見える場所がある
のだ。

「ああ、ついたよ。ここから少し歩くけど、和歌さんは大丈夫かい？」

「はい、私は大丈夫です」

「私もOKよ。そうだ。ユキ君、夜道を歩くんだからサンダルで来てないよね？」

「ははっ、何を言つんだよ、麻尋さん。ホタル観賞に行くつて言ってる人間がそんな初步的なミスなんてするはずがない。……兄貴、ここにある予備の運動靴を借りても良い？」

「…………いいよ。まったく、そう言ひちょっと抜けている所は父さんにそっくりだな」

やめてくれ、あの親父にそっくりとか言われたマジで泣きそうだ。
俺はサンダルから運動靴に履き替えて嘆くのだった。

第26章・初めてのキス

【SIDE・柊元雪】

ホタルを見に来た俺たちは和歌と兄貴、麻尋さんの4人で車から降りて山道を歩く。

「駐車場から離れた場所にホタルが見られるスポットがあるんだ」

「車が何台も止まっていたし、他にも人はいるんだ?」

「ああ、例年、この時期はそれなりに人が集まるはずだよ」

ホタルが見られるのは綺麗な水のある山奥でしかない。都会じゃ全くホタルなんて縁遠い存在だ。

「和歌はホタルを見た事がないって言つたよな?」

「はい。ありませんよ。尻尾が光る虫というのは知つてますけど」

「私も子供の頃以来かな。誠也さんは何度もあるんでしょ」

「親父に連れられてね。元雪も覚えてるだろ」

あの親父は小さな頃は休みのたびにいろんな所に連れて行つてくれたものだ。

長期休みが取れた時は「秘境の温泉に行くぞ」とどこかの山奥の温泉に連れていかれたこともある……あれは子供心に大変すぎて死ぬと思ったが。

カブトムシやクワガタ捕りは楽しかったけどな。

「ここの年になつてホタルを見に来るとは思わなかつた」

「ははつ。でも、子供のこゝと違つて今は感覚が変わつていて。きっと、ホタルをみれば昔とは違つと思つはずだよ。ここからは少し急だから足元に注意して」

俺は和歌を支えながら山道を上つていく。

やがて、開かれた場所に出ると、そこに広がつていたのは……。

「うわあ、綺麗です。これがホタルですか？」

辺り一面に小さな光が舞う。

幻想的な光跡を描いて飛ぶホタル達。

「兄貴、ここからは別行動でも良いか?」

「いいよ。それじゃ、麻尋。僕たちは向こうに行こうか」

「はーい。ユキ君、暗がりに連れ込んで変な事をしないように」とリリ

「しませんから。わざと兄貴と向こうに行つてください」

変な事を言わないで欲しい。

ただでさえ純粹な和歌が信じると困るじゃないか。

「……和歌、行こうか」

「はいっ」

和歌は自然に俺に寄り添つてくる。

ここにきて、彼女も俺によく甘えるようになつてきた。

俺達も恋人らしくなってきたかな。

腕を組みながら近くを歩き始める。

この場所は森の中にある展望台のよつた形でホタルを鑑賞できるスペースらしい。

自然にこれ以上、踏み込む事もないように、こういう形にしてい

るんだろう。

俺たち以外にも数組のカップルや家族連れが楽しそうにホタルを見ている。

「すゞく綺麗な光ですね」

「ああ、ホタルってこんなに綺麗だつたんだな」

兄貴の言つとおり、子供のころとは見方が違つた。
真つ暗な夜空を幾つも小さく柔らかな光が瞬いてる。

「近くで川のせせらぎが聞こえますね」

「川が近いんだろ。確かホタルつて綺麗な水がないと幼虫が育たないって聞いた」

「自然が残つていないとホタルも生きられないんですか」

「そうだな。それにホタルつてのは幼虫は水の中にいる巻貝を食べ
るけど、成虫になると水分攝取しかしないらしい」

だから、1～2週間で死んでしまうわけだ。

ホタルが見られる期間が限られているのはそのためだ。

「水だけで生きられるものなんですか？」

「成虫になると、幼虫時代に貯め込んだ栄養だけで生きるんだって」

「元雪様、すごいです。何でも知っているんですね」

和歌にすごいと思われるるのは心地よいです。

ただし、今の情報はここに来るまでに携帯のネットで調べた情報だ。

……せいかこと言ひつな、あらゆる情報は恋愛において必要なのだ。

「このひとつ、ひとつの光が星みたいですね」

星と比べると弱い光だが、ホタルは小さな光の点滅を繰り返している。

幻想的な光景に俺たちは見惚れていた。

「あつ……」

一匹のホタルが和歌の手のひらに飛んでくる。

間近でホタルを見たのは初めてなのか、楽しそうに和歌は言ひづ。

「これがホタル？案外、可愛らしいです」

「あれ？和歌は虫は大丈夫なのか？」

「黒い悪魔以外は大丈夫ですよ。家でも秋にはスズムシを飼っていますから。スズムシのエサ担当は毎年、私なんです。ホタルもテン

トウ虫みたいで可愛いです

和歌が虫〇〇なのはちょっと意外だ。

それにも、本当に和歌の実家は和風だな。あと、黒い悪魔は誰でも苦手です。

「 」の子たちはどうして光るんですか？

「えつと……それは……」

俺は調べた子を思い出しながらホタルの光を見つめる。

「やつだ、思い出した。ホタルって光りを放ちながら異性を探し求めているんだよ。ほら、セミの鳴き声と同じ。いつやつて光る事で他の異性にラブホールしてるわけ」

「ふふつ。それじゃ、これは愛の光なんですね

愛の光とか言ひ、ロマンチックだが、ナンパの光と混じり残念な気持ちになる。

『へいへい、 」の彼女。ちょっと俺の光に寄つてみない？』

『いや、俺の光の方がカッ『いいだろ？』にきなよ、彼女』

だ、ダメだ……ナンパ野郎どもでは幻想感がぶち壊されるので考えないようにしよう。

ちなみにオスもメスも光るので、ナンパ表現を使つとひどい事になる。

まあ、空を飛びまわり光るのは圧倒的にオスが多く、メスは数自

体が少ないそうだ。

なので、ここは脳内自主規制で、愛の光といふことにこだわっている。
和歌は自分の手元に止まつたホタルを眺めている。

「ホタルの光つて、神秘的です」

「そう言えばホタルつて種類ごとに光の点滅の間隔が違つらしきぞ」「どうですか？」

「そりやつて、違つ種類のホタルだつて自分達で見分けていんぢい」

意外と言つては何だが、ホタル達も賢い進化をしてゐると思つ。夜空の下で、異性を誘つための光があふれています。

「相手を求めて光を放ち合つ。素敵です」

和歌はそつと手に止まつっていたホタルを逃がしてあげる。再び、夜空を舞うホタルを空へと舞つた。

「あの子も、誰かいい相手を見つけられるといいですね」

「和歌は優しいな」

「そりですか？私が元雪様と出会えたよつて、ホタル達にも縁はあるはずです」

につこりと微笑む和歌。

俺は思わず、その和歌を抱きしめてしまつ。

「つひの彼女が可愛すぎなんですが、どうしてくれる。」

「も、元雪様？」

「……今はこいつをさせてくれ

俺は黙つて和歌を背後から抱きしめて、ホタル観賞を続ける。ドキドキ、と伝わる互いの鼓動に、ふんわりと香る和歌の香り。俺は周囲を見渡して、他に人がいないのを確認する。

「なあ、和歌……その、なんだ……今、ここでキスをしてもいいか？」

麻尋さんも言つてたけど、俺たちも次のステップに進むべきときだ。和歌の耳元に甘く囁く俺は緊張しそぎて足が思わず震えそうになる。

「……は、はい。私もして欲しいです。こいつ時は口を開くるんですよね？」

和歌はゆつくつと瞳を瞑つて薄桃色の唇を突き出す。
頑張るのだ、ここで俺も男を見せる時……！

「…………んうつ…………あつ…………」

ゆつくつと触れ合ひ唇と唇。

彼女の甘い吐息。

人生初めてのキスは……とても気持ちのよいものだつた。
互いに抱える想いが溶けるように交わりあう感じがする。

「元雪様、これがキスなのですね。心がひとつになるような感じがしました」

やがて、唇を離すと和歌は静かに嬉しそうに笑う。

薄暗いので見えにくいが、頬を赤く染めているに違いない。

「ああ。和歌とした初めてのキスだ」

「す」「ぐゞキゞキしてこまか……良い感じになりました」

高揚感に包まれて、初めてのキスの余韻にひたる俺たちは照れくささから互いの顔を見られない。

だが、その余韻をぶち壊す、空気が読めない人は世の中にはいるわけで。

「うわあ、初々しいキスしますよ？ 初キッス、おめでとー」

俺の兄嫁は見た、俺たちの初キスを最初から最後まで見てました。ガーン、麻尋さんに見られたあ！？

「ま、麻尋さん？ いつからそこそこなぜそこそこー？」

「ふふふつ。油断したわね、ユキ君。お姉さんは一部始終を見てしまったわ」

「ま、待ってくれ。麻尋さん。これは、その、あの……母さん達には内緒にして欲しい」

「そ・れ・は、無理。口の軽い私はつい、うつかり、お義母さんに

話してしまつかも

ひでえ、マジでひどいよ、」の兄嫁様。

俺は恥ずかしがる和歌を抱きしめながら言訳を探す。

「どうしてもとこいつのなら、次はチョコとバーレのミックス味がいいなあ」

「麻尋さん……今度、俺にソフトクリームをおねりせてくれださー」

「ふふつ。ありがとつ。でも、よかつたじやない。和歌ちゃんもキスしたかったんでしょう？初めてのキスの思い出がホタルに囲まれて幻想的だなあ」

麻尋さんはからかわれたが、確かに良い思い出にはなった。

「いいなあ。私も誠也さんとキスして」とようかな？」

「はいはい。やつわとしてきてください。思ひ存分してきて、こっちに来ないで」

俺は麻尋さんを向いて立っている兄貴の方へと追いやると、和歌と苦笑いを浮かべ会つ。

だが、和歌も「ファーストキスしちゃいました」と俺に強い想いを寄せてくる。

しばらくの間はこの胸の高鳴りはおさまらないかもしれない。

初夏の夜、ホタル達の光に包まれながら、人生で一度きりの思い出を作ったんだ。

【SIDE・椎名和歌】

その夜、初めてのキスを元雪様としました。

…心がとても、温かくなるような不思議な気持ち。心の奥底から全身を通じて愛情が満たされていく。初めて見た幻想的なホタルの光とファーストキス。私にとつて忘れられない大事な思い出ができた。

夜の9時過ぎになると、ホタル達は住みかに戻るようにならう。数が少なくなっていく。

そろそろ時間なので、私たちは家に帰る事にした。ホタル観賞の帰りの車の中でも、元雪様は麻尋様にからかわっていた。

「ねえねえ、ユキ君。もしかして、ホタルの光に当たられたの?あれは“愛の光”だもの。そう、溢れるばかりの愛の光の前だからついしちゃつても、仕方ないのよ」

「うぐぐ……麻尋さん、どこから見てた!…これ以上、俺たちをからかわないでくれ」

「あははっ。だって、照れるユキ君が可愛いんだもんっ」

お姉さんと弟、今なら元雪様と麻尋様の関係に嫉妬することはない。

純粋な意味で本当に仲が良いんだって……傍にいれば仲のよさを感じられる。

それは愛は愛でも、家族愛に近いものだった。

「なんだい、元雪？ 麻尋に何か弱みでも握られたのか？」

「聞いてよ、誠也さん。実はね……」の子たちが……

「ぎゃーーー！ 何でもない！ 兄貴は車の運転に集中してくれ

「ふふつ。コキ君、残念ね。私たち、夫婦の間には約束」として
隠し事をしないと結婚した時から決めているのよ」

「ナンデストー！ うちの兄嫁はマジでひどい……」

嘆く元雪様はうなだれていた。

「あらら、少し意地悪しそぎたかしら」

「……麻尋様は元雪様をからかうのが好きなんですね

「だつて、反応が可愛いじゃない？」

「俺は兄嫁にいじめられることに兄貴の抗議します

元雪様のお兄様である誠也様はとても穏やかな人だ。

「麻尋。その辺にしておいてあげて。それに、元雪もキスを見られ
たくないんで、おどおどしないように。男だろ？」

「それはそうなんだけどさ……って、何でキスしてた知ってるんだ
つ！？」

「いや、僕もお前たちの傍にいただろつ

「マジッすか。兄上様、この件はどうか両親には内密にしてください

い

そのようなやり取りをする彼らが私は面白かった。

元雪様も、麻尋様や誠也様の前では年相応に見える。

やがて、前の席にいるふたりは「親父の髪はいつ母さんにて削られる?」という話題で盛り上がっていた。

……おじ様も髪を粗われて何だかかわいそう。

微笑ましそうに眺めてる麻尋様に私は尋ねた。

「麻尋様は誠也様と結婚されて何年目になりますか?」

「今年で2年目かな。本当に私はいい結婚を出来たと思つているの。誠也さんのおかげで私は新しい家族もできたもの。結婚のおかげで幸せになれた事を感謝している」

「家族ですか……?」

何だかその家族と言つ言葉に麻尋様は特別な何かを感じているみたい。

麻尋様は私の疑問に言葉を選ぶよつに話し始める。

「私はね、いわゆる児童養護施設で育つたの。小さな頃に実親から虐待されていたらしくて、今は全然、連絡もつかないわ。こちらも会いたいとは思わないけど。まあ、施設育ちだからって全くの不幸つてわけじゃなかつたけどね」

「そんなことが……」

「今の時代は珍しくもないのよ。施設には私と同じ境遇の子なんていくらでもいたもの。でも、家族愛には憧れてたなあ。いつか自分はちゃんとした家族を持ちたいって思つていたら……私は誠也さんに出会つたの」

私にはちゃんとした良い家族がいる。

けれども、世の中には彼女のような人たちもいるんだ。

麻尋様は辛い過去があつたのにもかかわらず、その性格はどうでも明るい。

ポジティブな性格は彼女自身の強さだけでなく、支えてくれる人たちがいるらしい。

「お義母さん、あっ、誠也さんのお母さんね。の方は、私にとつて本当の母親みたいに接してくれているよ。誠也さんと結婚してから、私の全ての事情を彼女は受け入れたの。そして、私の母になつてくれた。とてもいい方なの。和歌ちゃんも愛を感じたでしょ？」

「…………はい。慈愛に満ちた優しい方だと思います」

「今ではお義母さんも私を実娘のように思つてくれている。それにユキ君つていう可愛い弟もいるしね。お義父さんは……何とも言えなけれども、面白い人だからOK。とにかく、私にとつては理想的な家族を誠也さんは与えてくれたのよ」

誠也様と結婚することで麻尋様は理想的な家族を手に入れた。

元雪様との関係を疑つてしまつほどに仲が良いと思えたのは、本当の姉弟のように見えるほどに家族として溶け込んでいるからなんだ。

ゆづくつと車体が揺れる夜道。

窓の外に視線を移しながら、麻尋様は語る。

「和歌むちゃんはコキ君と運命の恋をしたんでしょ?」

「はい。この出会いには運命だと思つてます。そうなる運命だつたと……」

「そつか。いいね、運命の恋つて……。それじゃ、将来もちゃんとと考えたりしている?」

「将来ですか? ある程度は考えています」

「元雪様が神社を継いでくれる、それは私の夢を叶えてくれると言う事。」

彼のおかげでこれからも大好きなあの場所を守り続けていく。それは私の小さな頃からの夢、元雪様がいなければ叶うことなきなかつた。

「結婚を前提にお付き合いつつです、この覚悟がいるじゃない?」

「いえ、私は……元雪様となら覚悟は既に既にあります」

「ふふっ。幸せをうでいいわね。それじゃ、赤ちゃんとかは考えたりする?」

「え?」「子供ですか? あ、いえ、それはまだ……」

私は軽く照れながら答える。

「いずれ結婚すれば元雪様との子供が欲しいと思つだりナビも、さすがに今はそこまではまだ考えていない。」

それに、元雪様との関係もまだそんなに深いわけでもない。ファーストキスをしただけで精一杯だ。

「まあ、和歌ちゃんは学生だし、当然か。でもね、結婚したら2人つきりって言うのも良いけど、赤ちゃんも欲しくなるのよ。可愛い自分の子供が欲しいわ」

「麻尋様は子供が好きなんですか？」

「大好き。私は自分の親みたいな事は絶対にしない。子供を愛せる自信がないなら、最初から子供なんて産んじゃダメよ」

「……そうですね。私もそう思います」

悲しい過去を持つ麻尋様は自分のような想いを子供にはさせたくない。

その強い気持ちが伝わってくる。

「 そろそろ、ホントに赤ちゃんが欲しいなあ

車の運転をしている誠也様を見つめながら呟く。
狭い車内だと当然、お話も聞こえてるわけで。

「 なあ、兄貴。後ろのお姉さんが妙に生々しいお話をしているけど？」

「 せうかい？僕には聞こえないなあ。それよりも父さんの髭の心配をしてあげよう。そもそも、本当に母さんに剃られてしまうのではないかと心配だ。もし、剃られたら、きっと多大なるショックを受けるだろ？」

「いや、親父の髭の心配なんてどうでもいいから、兄貴は自分の心配をした方が良いと思つ」

わざとはぐらかすあたり、誠也様も麻尋様の事をいろいろと考えてはいるみたい。

夫婦つて素敵だけど、大変もあるんだよね……。
そんな彼の態度に麻尋様は少し不満そうに言つ。

「……もひつ、誠也さんも眞面目に考えて欲しいわ」

「でも、子供を望む気持ちは普通は女性の方が強いものですから」

「んー、そうかもしないわね……私はできるだけ早く子供が欲しいんだけどなあ。娘だったら、なお嬉しい」

麻尋様のように歳が近い大人の女性とお話するのは楽しかった。

元雪様たちと別れてから私は自分の家に帰る。

今日は元雪様のお母様とお話をして認めてもらい、夜のホタル観賞では麻尋様とも仲良くなれた。

……本当に長い一日が終わろうとしている。

ふと、家の前にさしかかったところで私は気付いた。
ほのかな月明かりに照らされて、家の前には人影がいたの。

「あれは……お姉様？」

普段はあまり外には出たりしないお姉様がそこで夜空を眺めてい

た。

「「んばんは。」んな場所でお姉様は何をしてるんですか？」

「いや、特に意味はないよ。嫌な月が出ているから、気になつてみていただけさ」

「嫌な月？あつ、今日は赤い月ですね」

夜空にのぼる月は薄く赤い色に見える。

時々、月が赤く見えることがあるけれどもどこか不気味に思える。

「それよりも、こんな時間までどこにいたんだ？」

「あつ、はい。恋人と。そのご家族共にホタルを見に行つてきたんです。私に恋人ができた話はしましたよね？」

「ああ。あの“柊元雪”と恋人になつたんだろう。話は聞いているよ」

お姉様は元雪様の名を口にする。

私は名前までは言つた覚えがないので尋ね返した。

「あれ？私、元雪様の名前を言いましたつけ」

「別に不思議なことはあるまい。柊元雪とは因縁があつて、知つているだけさ」

「え？い、因縁ですか？」

因縁つて……つまりは元雪様もお姉様の事を知っているのかな？でも、そんな素振りを見せていないので、多分知らないはず。大体、普段から外に出ないお姉様と元雪様の接点が分からぬ。

「そんなに不思議そうな顔で見ないでくれ。心配はない。因縁という言葉は使つたが、難しい意味はないよ」

「そうなんですか。私は以前から彼を知つていたよ」

「せんでした」

「柊元雪……私は以前から彼を知つていたよ」

お姉様は赤い月を見上げて静かに咳く。

「…………そう、ずっと昔からね…………」

お姉様が見せたのは寂しそうな微笑みだつた。

今まで彼女が見せた事のないような表情だつたのでびっくりする。

「今日はもう遅い。明日も早いんだろう？私も部屋に戻るとしよう」

「あ、はい…………」

私は気になりながらも家の中に入ることにする。

初夏の夜空は赤い月に照らされて、どこか不気味なほどに暗く広がっていた。

お姉様と元雪様、2人の因縁つて一体何なんだろう…………？

【SIDE・柊元雪】

ファーストキスから一夜明け、俺たちは互いを意識し合ひ存在になっていた。

以前よりも強く結び付きを求めるように。

本当の意味での愛つてやつを心に自覚した俺と和歌。好きな子とはずつと一緒にいたい。

キスはきつかけだつたんだ。

俺と和歌が互いの気持ちに向き合つたためのきつかけ。

今では誰から見ても恋人に見えるように甘い関係になれた。たつたひとつの中でも堅苦しさがなくなつた。

それまでとは違い、もつと深い心の奥底から俺たちは気持ちを抱き合つ。

だが、そんな俺たちに思わぬ展開が待ち受けていた。

そう、あの“美少女”との出会いが。

教室で俺は気になる事があった。

それは自分の席の隣にいるはずの女の子のことだ。

篠原さんといふ子は病弱で、学校に登校できていないらしい。

「篠原さんは今日も来ず、か」

「んー。なんだ、柊。彼女が気になるのか?」

俺の前の席にいる黒沢が俺の独り言を拾つ。

「そりゃ、お隣さんだからな。そりそろ、出席日数もやばいんだろ？」

「来週までに来ないとダメっぽいぞ。身体が悪いとは言え、留年はキツイよな」

「でも、無理はできないだろ。1学期中に会えたらしいんだが」

お隣さんが気になりながら、俺は窓の外を眺める。
今日は雨が降りそうなお天氣だ。

「どんよりとした雲だな。雨がふりそうだ」

「今日の雨はちょっと厳しいらしきぞ。豪雨に注意せよって天氣予報で言っていたからな。傘は持ってきてるのか？」

「一応はな。でも、自転車じゃあまり変わらない。強い雨だと前が見にくいくらいだよ」

雨の日はバスを使つたりすることもあるが、今は和歌と一緒に登校しているので、バス停の道を使わないために、気軽にバス通学をできないでもいる……和歌を誘えばできない事もないだろうが。

「黒沢は電車通学だつけ。雨も関係ないだろ」

「いや、雨は嫌だな。ダイヤが乱れるし、人は多くなるし、雷なんて落ちたら電車自体がストップするからな。台風とか、ああいう時は電車通学はある意味、最悪だよ。行きならまだいい、帰りにそう

なつたら終わりだな

確かに、それが帰りとかだったら絶望的だよな。

「話は変わるが、柊は最近、恋人の子とはどうなんだ？」

「ふふふ。絶好調だ。もう、最大の障害もなくなり、あとはハッピーエンドを迎えるくらいな感じ? もはや敵なし、あとは関係を深めるだけさ。いい感じに恋愛できてるよ」

「そうか。よかつたじゃないか。でも、障害ってなんだよ?」

「うちの母親。俺と和歌の交際を認めつてくれていなくてね。今はようやく認めてもらえたけど、先週の土日は本当に大変だったのだ。前日に些細な誤解で喧嘩もしちゃうし。すぐに仲直りできただけどな」

土曜日は恋月桜花の話を和歌から聞いて、その夜には和歌と大喧嘩。

翌日の日曜日は母さんとの決戦を無事に乗り切り、ホタル観賞と共にファーストキス。

たった2日ながら、かなり大変な日になつたのだ。
だが、すべてをクリアした俺たちに待つていたのは幸せな日常だ。
……まあ、何もかも問題がなくなつたってわけじゃないんだが。
俺には気になる事がひとつだけある。

それは椎名神社に俺が“引かれている”ということだ。

不思議な現象が起きたあの時以来、特に何も起きていない。

けれども、俺と椎名神社には何かしらの因果関係があるのではないか。

例えば、これは俺の仮定だが子供の頃にあの石碑に悪戯をして呪われた。

俺の子供時代の悪事を思い出せば、それもありうる。

キヤサリンに会えば、それも判明するかもしないのだが、毎朝のようすに社務所をのぞいても会つ事がない。

あの子は今、どこにいるんだろう?

「あー、やっぱり、大雨になってきたな」

学校帰りの帰り道、俺と和歌は自転車に乗りながら雨に耐える。傘が風でしなり、制服が濡れ始めた。

「もうすぐ、私の家に着きます。元雪様、よっていきませんか?」

「悪い、やうやくせてもいい。これが噂のゲリラ豪雨か」

どしゃ降りの雨を前にすると、人は何とも無力だ。

何とか本格的に濡れる前に俺は和歌のお屋敷にたどり着けた。

「和歌、制服は濡れなかつたのか?」

「私は大丈夫ですよ。元雪様は少し髪の毛も濡れていますね」

「まあ、制服も軽く濡れた程度だし、放つておけば乾くだろ」

「そう言つわけにもこきません。タオルで拭いた方がいいです

家に上ると、お屋敷の中は今日は静まり返つている。

気になった俺は和歌に尋ねる。

「おじさんたちはないのか？」

「今日は両親共に出かけているんです。遠縁の親戚の結婚式だそうですよ」

「そりゃ。雨の影響がないと良いな。それにしても大きな屋敷だよな」

和風建築のお屋敷は広さもかなりある。

「古いだけの家ですけどね。元雪様の家のよつた洋風な家も私は良いと思います」

「うーん。俺はこういう和風な屋敷の方がすごいと思うナビ

結局は“ないものねだり”という奴だらう。互いに新鮮味がないから大切には思えないだけだ。

「タオルはお風呂場にあります。好きな物を使ってください」

「ああ、そりゃせんせう。和歌も早く制服から着替えてくるといい」

「はい。では、リビングの方で待っていてくださいね」

和歌が部屋に行ってしまうのを見送って、俺はお風呂場に向かう。廊下を突き当たればお風呂場らしい。恋人の家っていうだけで緊張するよな。

「……いざれ和歌と結婚するならここに暮らす事になるんだりつか

ついそんな事を考えしまひ。

俺は和歌を愛してゐし、彼女の夢を叶えたい。
つまり、それは結婚を意味している。

「結婚か。する氣はあるけども、まだまだ実感がわかないな」

覚悟は決めていても、子供である俺には実感がない。
そういう実感がわき始めた時、俺は大人になれるのかもしない。
俺は考え事をしながら、お風呂場らしき扉を開ける。
油断してたと言えば、そうだ。
俺は完全に油断していた。

「え？」

お風呂場にはいるや、綺麗な白い肌とお尻が見えた。
いやいや、お尻……って、はいつ！？

「……あつ……！？」

俺は慌てて顔をあげると、そこにいたのは。

「……格元雪……？」

「あや、キヤサリンっ！？」

ありえない展開、思わぬ女の子がそこにいたのだ。
いつもやの電波系美少女、キヤサリンが肢体をあらわにしていた。

「え？え？えーっ？！」

動搖しまくる俺は思考が停止しそうになる。
目の前にいるのはタオル姿のキャサリン。
これは和歌の家なのに、どうしてキャサリンがいるんだ

！？

第29章・キヤサリン、再び

【SIDE・柊元雪】

例えば、街中を歩いてたりして「あつ、あの人会うかも」とか、ふと思つたりする。

そうしたら、ホントに会つてしまつたことがたまにあったりしないだろうか。

俺もそうだった。

俺の過去を知りうると思われるキヤサリンに会いたかった。だが、それは思わぬ形での再会になる。

大雨のために和歌の家に立ち寄つた。

タオルを取るためにお風呂場の扉を開けたその先にいたのは。

「柊元雪……？」

「きや、キヤサリンっ！」

濡れた髪、頬を伝う水の滴……艶やかな魅力を持つ肢体。電波系少女、キヤサリンがなぜかそこにいた。

「驚くのは良いが、こちらを向かないでくれ。こうみえても、私も女でね。別に柊元雪に見られてもかまいはしないが、ある程度の羞恥心くらいはあるのだよ。事故だと分かっていてもね」

「す、すまない！？」

俺は慌てて視線をそらす。

つい見てしまった、お尻のラインは非常に良い身体つきをしており

りました。

それにしても、本当に色々あるへうへうに色が白かった。

「あまり大声は出さない方がいいぞ。この事がヒメに知られたら大変なんだろう」

動搖しまくる俺とは違い、裸を見られても冷静なキャサリン。
大声出すのは女の子であるキミの方のはずだらうが……どんな状況でも冷静すぎてびっくりだ。

……っていうか、ヒメって誰？

「柊元雪……髪が濡れているな。この大雨に濡れたのか？風邪をひくぞ」

彼女は俺にタオルを手渡すので受け取ると、「すまん」と脱衣所から急いで出た。

扉を閉めて俺は大きくなめ息をつく。
とんでもない場面に出くわしてしまった。

まさか、誰かがあ風呂に入ってるとは思わなかつたのだ。

「それにしても、どうして……あの子が？」

俺は髪をタオルで拭きながら、考えていた。

ここは和歌の家で、そこにキャラサリンがいる理由。

「もしかして、和歌のお姉ちゃん？」

でも、和歌自身が姉妹がいる事を否定している。
ということは何かしらの事情があつて同居しているとか?
考え方をしていると、和歌が俺を探しに来た。

「元雪様？まだここにいらしたんですか？」

「わ、和歌！？ち、違うんだ、これはね？」

「……はい？どうかしました？」

きょとんとする和歌、俺は気まずくなりながら、感づ。
そこへタイミングが悪く、俺の後ろの扉が開く。

「あっ、お、お姉様？いらしたのですか」

「やあ、ヒメ。別に大したことないさ。お風呂に入つて着替えて
いた私と終元雪が鉢合せをしてしまつただけだよ」

「鉢合せって……え？え？」

軽く頬を赤らめる和歌、想像しないで！？

このままでは嫉妬しやすい和歌と、再び修羅場が……！

「そんなに心配しなくても、私も裸をさらしたわけじゃない。幸い
にも着替え終わつたあとだつたからね」

そう言つた彼女は淡い桃色の浴衣を着ていた。
どこまでも和服好きなのね。

「そ、そなんですか？よかつた……」

俺もホントによかつたよ。

修羅場回避とばかりに、キャサリンがフォローしてくれた。

「うん、ここの子は意外と良い奴だな。

「終元雪、奇妙な因縁だ。こんな場所で会う事になるとは……」

「俺もだよ。キヤサリンと会うとは思つてもいなかつた。探していたんだぞ」

俺の台詞が気になつたのか、「きやさりん？」と和歌が尋ねる。
「……ふむ。こんな場所ではなんだ、場所を変えて話をする必要がありそうだ」

電波系美少女ながら雰囲気を読む事はできるらしい。
俺たちはリビングの方へと案内される。

「……私は昼食をとるから適当に紹介してくれ」

そう言つてカップラーメンを作り出す、キヤサリン。
今時間、お昼の4時過ぎに昼飯つて遅いだり。
ていうか、マイペースなのは相変わらずか。

「元雪様、紹介します。彼女は私の従姉なんです。1年ほど前からからここの家で同居しています」

「そつだつたのか。で、キヤサリン。そろそろ本名を教えてくれ

「……だから、私は貴夜沙凜だと名乗つたはずだ」

「どじが本名だよ！？和歌がワケも分からぬって顔をしてるじゃないか。和歌、彼女の本当の名前を教えてくれ。キヤサリンではな

「なんだね…ひやんとした名前があるさあだ」

和歌はどういう事情か分からなつて、素直に答えてくれる。

「あやわつと…えつと、お姉様のお名前は篠原唯羽（しのはら ゆいは）と言います」

「唯羽？なんだよ、ちやんと可愛く名前があるじやないか」

キャサリン、改めて、篠原唯羽が本名りこ。

少なくとも貴夜沙凜といつ名前よりは良ことと思つ。

「やれやれ、隠していたのに本名を知られたか」

「え？隠していたんですか？」

彼女はカツプラー門にお湯を注ぎながら嘆ぐ。

「ヒメ、私の本名をうかつに終元雪に教えてはいけない。もしも、彼が私のストーカーだったらどうしてくれる。名前ひとつで、ひどい目に会わされるかも知れないんだぞ」

「も、元雪様はそんなことしませんっ…」

「いや、安心するな。現にこの町は私のはだ……」

裸を見た、と言われそうになり俺は慌てて言葉を放つ。

アレは事故だ、フォローしてくれたんだから蒸し返さないでくれ。

「俺は変態じやないから。そんなことしないし。ていうが、和歌の

従姉だつたんだな。姉妹はいなつて言ってたし

「はい。……元雪様は唯羽お姉様を『存じだつたんですね?』

「あ、うん。ちょっと前に神社であつた。ほら、おみくじをせひつた事があるだろ」

軽く和歌には事情をはぐらかしながらも俺は答える。

「なるほど。そう言つ事ですか。お姉様はお手伝いをしていますか
ら

俺もこれで納得がいった。

和歌の親戚だつたから、この椎名神社に出入りが自由だつたわけ
だ。

「唯羽はここに住んでいたのか

「やうだ。……終元雪とヒメが交際してると言つは知つていたが

唯羽はラーメンを食べ始めながら俺に言つ。

「ヒメが最近、可愛く着飾つたり、マイクをしたりするのも彼の影
響か?人は変われば変わるものだよ」

「は、はい。唯羽お姉様」

ふと、俺は“和歌”を“ヒメ”と呼ぶ唯羽の事が気になつた。

「なんでヒメなんだ?」

「……？ヒメはヒメだから、ヒメなんだ」「何を言つてる」

素で返されたよ、電波系め。

「お姉様には小さな頃からヒメと呼ばれているんです」

「お姉様つてこと？唯羽、その理由は？」

「ん……ヒメはヒメだからヒメだと何度も言わせや」

「……深くは追求するな」といつとか

唯羽にしては歯切れが悪い感じがしたので、それ以上は聞かない。

「あと、唯羽に関して気になる事があるんだが、これを言つていいかどうか」

どうして、唯羽はこの時間帯に既に家にいたのか。

同じ年くらいなのに、学校から直帰の俺たちよりも早い理由。それと遅い昼食の事を考えて導かれる結論はひとつ。

唯羽は学校に通つていない。

「柊元雪。別に空気を読まなくて良い。聞きたい事があるなら答えて」

食事を終えた唯羽は静かに呟いた。

「ストレートに聞くぞ。その……学校には行つていなか？」

「いわゆる、不登校と言つやつでね。たびたび、学校を休んでいるんだ」

「……その理由を聞いても良いか?」

「前にも言つただろう。私は魂の色が見える、と」

彼女が以前に俺の魂の色は灰色だつて言つていた。

半信半疑だつたが、神社の家系なら絵空事ではないように思える。「生まれつきの異能と言つべきか。私はそう言つものが見えるのだよ。そして、この魂の色が見える力は万能ではない。見ないと見て見えなくなるものじゃない」

常に彼女には他人の魂の色、オーラが見えるそうだ。

他の人には見えないものだと自覚した時から、彼女は自分が人と違つと思つた。

「嫌でも、私は人の多い場所ではそれを感じてしまう。人酔いするというのかな、あまり好ましくない状況にも陥る事があるんだ。魂の色が見える、これはただ色が見えるだけじゃなく、その色によって相手の事がなんとなく分かると言つ事もある」

「つまり、見ず知らずの人の事でも、なんとなく、その人の事が分かるのか?」

「すべてではないけども、分かるよ。例えば、格元雪……今、思い悩んでいる事がある。それは、最近、自分が他人から父親に似てると言われる事を気にしているだろう?」

「……ま、待て！？何も言わないで！？あと、俺は母さん似だからつー！」

親父に似ているなんて、全力で否定させてもらひつ。
最近は親父に似てる、と他人に指摘されることを嫌がるのをなぜわかつた？

「他人の全てが分かるわけじゃないが、こうして人の“悩み”はよく分かる。負の感情は表にでやすいから。私はそんなに強くない。他人の悩みや感情、それらを受け止め続けるほどにはな。無視できないからこそ、人の多い場所にはいけない」

唯羽はいつもは感情を見せないが、今はどこか寂しさを表情に見せる。

「こういう力を持つていると、他人からは電波系だ、変だと思われる事が多い。人は自分の持っていない事は知らない。魂の色が見えるなど信じられないものだろう。私の親もそうだ、気味悪がり、傍に置きたいとは思わないのを感じていた」

「それって……唯羽がここに暮らしているのは追い出されたつてことか？」

「似たようなものだ。ありていに言えば私は持つて生まれた力のせいで、親や姉妹からも気味悪がられているのだよ」

静かにつなずいた彼女。

……ごめん、俺も電波系だつて思つてた。

この子も思い悩むそんな事情があるのだと全然知らなかつた。

「そんな顔をするな。こうしてヒメの家族と楽しく暮らしている現状に不満はないからね」

篠原唯羽、生まれ持つ力ゆえに、孤独に生きる少女か。

第30章・和歌のお願い

【SIDE・柊元雪】

唯羽には特別な力があるゆえに悩みがあつたと言つ。

部屋に戻つてしまつた唯羽。

俺と和歌はお茶を飲みながら黙り込んでいた。

「……唯羽があんなに思い悩んでいたとはな」

「え、えつと……」

「俺、全然知らない。アイツのこと、電波系とか思つてたし。思
いこみはいけないな。俺もまだまだ視野が狭い」

そんな自分の考えを唯羽は「それが普通だから気にするな」と言
つた。

自分は普通ではない、と言わせてることが悲しく思える。
アイツにはアイツなりの事情があるんだ。

「学校を休んでいるつて、大変なんだな」

「……あ、あのですね、元雪様」

「ん? なんだ、和歌?」

「お姉様の言葉は、その……全てが真実ではないんですが」

はつきつと言つにいくのだろう。

ものす」へ困った顔をして、和歌は俺に言つ。

「……はい？」

「お姉様は確かに魂の色が見えますし、不登校気味です。でも、その不登校理由は別の所にあるんです」

彼女は視線をうつむかせてしまう。

唯羽の不登校には何か他に事情がある？

「私はお姉様には普通の生活をして欲しいと思つています。あのままの不健康な生活を続けていれば、身体だつて壊してしまいます。私は心配しているんです」

和歌のこの心配ようは何だ？

「不健康な生活？魂の色が見えても不健康な暮らしをする理由にはならないよな？」

「実家から追い出されたのは、おば様達がお姉様を嫌つたりしたわけじやないんです。ただ、誰にも止められなくて……」

「止める？……なんだか別の事情つてのは、大きい問題のようだな

「どういふことなのか分からぬが、和歌も悩んでるよ」

俺は和歌に唯羽の部屋へと案内される。

「お姉様を救つてください、元雪様。こんな事を頼めるのは貴方しかいないんです」

「……よく分からんが、俺にできぬ」となりじよつ

アイツにもう一度会って、話をする必要がありそうだな。
俺は唯羽の部屋の扉をゆっくりとノックする。

「元雪だ、入るぞ。唯羽」

「ん？ 好きに」しお

俺は扉をひらいて愕然とした。

國朝詩

「なんじゃこりやー!?

穂かれた布団の周囲を足の踏み場もなしほどにお菓子やヘッドホ
トルの空が転がる。

いわゆる、ネットゲームとこうやつだ。

「んー。どうした、柊元雪？」

「待て、ちょっと待て。なんだ、この一人暮らしの男のような部屋

10?

「失礼だな。乙女の部屋に向かつてなんて事を言つ」

「ビ」が乙女だよ！？全然、乙女チックじゃない！」

唯羽の部屋の汚さは俺の想像を超えていた。

生じみはないようだが、それでも汚い……正直、俺の部屋より汚い。

そして、パソコンにも大きな問題がある。

大画面の液晶パネルに表示されるのはRPGのゲーム画面。

力チカチとマウスをクリックする和服美人に違和感がありすぎる。

「ネトゲって、お前はどうぞの引きこもりさんか！」

「……柊元雪」

刹那、空気が凍るよつに雰囲気がガラツと変わる。ゆつくつと立ち上がり、唯羽は俺を睨みつける。

「！」の私に言つてはいけない事がふたつある

「い、言つてはいけないこと？」

これほどの威圧感を放つ唯羽。

この子は確かに常人ではない、何か特別な力があるんだろう。俺は息を飲みながら、彼女の言葉を待つ。

「…………私を“一ート”、“ネトゲ廃人”と呼ぶ事だ！」

「…………思いつきり、どちらにも自覚があるんだなあつ……」

もう一つの事情つてそういう事情かよ！？

電波系美少女、篠原唯羽。

その正体は引きこもりのネトゲ廃人だった……マジかよ。

というわけで、唯羽はただの引きこもりだった。

彼女の部屋から抜け出してリビングに戻ると俺は和歌から詳しい話を聞く。

「和歌。唯羽の魂の色、うんぬん不登校なのは嘘つてことか？」

「いえ、全くのウソでもないようです。小さな頃にその力のせいで傷ついたことはあるようですし。ただ、親や姉妹から嫌われるわけじゃありません。お姉様が私の家にきたのはネトゲというものにはまりすぎたせいです」

「……ネトゲ廃人寸前。ていうか、すでに廃人かもしけんが。ゲームのやりすぎで、こっちに追い出されたってことなのか？」

「というか、家のネット環境が止められてしまつたので、逃げてきたというのが正しいかもしません。うちのお父様は唯羽お姉様に甘いですから。おみくじ作りをするのなら、別にゲームくらいって許してしまつています」

ダメ人間だ……唯羽はホントにダメすぎる。

「おみくじくらいで、許しからやつおじさんもダメなのでは？」

「お姉様がおみくじ作りをすると、とてもよく当たるんです。その結果、お父様も認めざるをえないところもあって……」

ちなみに作った本人はこう言つてゐるらしい。

『おみくじなんて、ただの紙だ。信じる信じないは個人の自由。おみくじなんて引かなくても、良いこと、悪いことは常にあるよ。ただ、それを人はおみくじを引いた結果のおかげだと信じる。人間とは、特別な何かを感じなくなる弱い生き物だ』

……やはり、唯羽におみくじを作らせちゃダメだと思つんだ。朝に出会つていたのは唯羽はある時間におみくじを作り、それが終わると眠らうとしている。

「高校2年生になつてからは学校にも行かないあります……私の言つ事にも耳もかさず、朝方までゲームをしてから、お昼に睡眠。その繰り返しの不健康な生活を送つているんです。このままだと身体が心配です」

「……和歌の心配はよく分かる。ホント、和服美人なくせに相当な残念女子だな」

高校2年つてことは俺と同級生か。

篠原唯羽……篠原……どこで聞き覚えがあるような……？

「あ、あーっ！？和歌、もしかして唯羽つて俺たちと同じ学校に通つてる？」

「はい、そうですけど？」

「……ほほ間違いない、俺の隣の席に篠原つて不登校の子がいるんだ。だけど、あの子は病弱だから休んでいるって聞いてるぞ？」

「そつなんですか？」

病弱欠席の篠原さん＝キヤサリン＝篠原唯羽。全てが同一人物だつたということか。驚きの真実、そして明らかになる嘘。

「ちょっと唯羽の所にいつてくる。確認したい事があるんだ」

俺は再度、彼女の部屋を訪れて事の真相を尋ねてみた。

「……病弱設定？ああ、面倒だからそつこつ」としている

「面倒だからって、魂うんぬんの話を学校にもしてるのか？」

「表立つた理由はそれだからな。人の多いところは苦手だし……当時の担任教師たちの魂の色や悩みを言い当てたら、さすがに変だと気付いたらしい。それ以来、私の問題には口を出せないようにしてくれている。それが何か？」

しつと放つ唯羽、高校にも行かずにゲーム三昧とは……。

「今の不登校の理由はネトゲがしたいからだろ？がー・ネトゲ廃人め

「

「その何が悪い。あと、ネトゲ廃人言つなーあまり私を愚弄すると呪うぞ？」

「逆切れ！？怖いから呪わないで！？」

「」の子なら平氣で呪術も使えそうで怖い。

唯羽はパソコンから視線をそらさず、マウスをクリックし続ける。ゲームでは次々と強敵と思われる敵が倒されていく。

「」のままじや留年するかもしれないんだろ？」

「私の事は放つておいてくれ。別にいいじゃないか。私の人生だ。適当に生きて、思う存分にネットゲをする。この人生に悔いはない」

「少しは後悔しろっ！ネットゲ人生を送るな」

……だ、ダメだ、こいつ……早く何とかしないと。

「うひひひひなあ。説教はもういい。これをやるから向こうひひひ」

唯羽が俺に放ってきたのはおみくじだった。

「はつ……えうせ、また大凶だろ？ 分かつてるんだよ、お前のしきうなことだ」

「一度も同じネタを続けるほど私も暇ではない。今日の運勢、試してみればどうだ？私の作るおみくじはよく当たるらしい。ただの印刷物を適当に折りたたんでいるだけなのだがな。当たるも八卦、当たらぬも八卦。信じるのはお前次第だ」

俺は唯羽に追い出されてしまい、再び、リビングに戻る。

「元雪様、お姉様はどうでした？」

「ダメだ。唯羽の残念つぶりがこじままでとな.....。」それを渡された
よ

俺は渡されたおみくじを期待せずに開いてみると、そこに書かれていたのは衝撃的な内容だった。

最凶

つて、待てい、最凶つてなんだあ！？

力図をえた量図

それに唯羽の手書きで
かなり違筆な文字で一行の文章が書かれ
ている。

『貴方の前世…ダンゴムシ』

達筆な文字ゆえにさらにムカつく。

ほ、ほう……やまあみろ、とな……?

俺の魂の色が灰色だから、その繋がり

普段はそれなりに温厚を自負する俺も切れる時はある。

「ふふふ、あはは……唯羽め、許さん、許さんぞ!」

「元雪様。どうしました？」

「もう許さない、あのダメ人間め。この俺が修正してやるつ！」

引きこもりでネット廃人寸前の残念な電波美少女、椎名唯羽。アイツは俺を怒らせた！

「和歌にもお願いされたからな。なんとしても、唯羽を真人間に戻す」

「できるんですか？」

「和歌。できる、できないんじゃない。絶対に……するんだよ」

「…………う、元雪様の気持ちは嬉しいけど顔が怖いです」

俺をダンゴムシと言った唯羽の腐った性根からたき直す。和服美人だからって良い氣になるなよ。ホント、どうにかしてやらないとな。

第3-1章：プロジェクトD

【SIDE・柊元雪】

和歌の従姉、唯羽の正体を知った俺は衝撃を受けていた。魂が見えるゆえの孤独、それに同情していた矢先。

あの子のダメっぷりをみせつけられた。

ネトゲ三昧で引きこもり。

俺は別にネトゲが悪いとは言わない。

だが、学校にも行かずによるということは限度を決めろと言ったい。

実の両親からも呆れられ、和歌も不健康な生活に心配する毎日。俺はそんなダメっぷりの唯羽をどうにかしようと考えていた。

別に……前世がダンゴムシと言わたした事に怒ってるからじゃない。ダンゴムシ……この俺が……？

はつ、いかん……ここは冷静にならないとな。

私怨もあるが、アイツにはまともな生活を送つて欲しいとも思つのだ。

俺は唯羽には助けられた借りがある、その借りをここで返しておきたい。

「それを本人が望んでいないのが問題か」

翌日、俺は朝から降り続く雨にうんざりしながら窓の外を眺めていた。

学校に登校して教室の自分の隣の席を見るも、当然ない。

不登校を続けている唯羽、その理由が病弱ではなくネトゲがしたいからだとは……。

「なんだ、今度は何か悩みか？」

俺の態度が気になつたのか黒沢が声をかけてきた。

「黒沢は確かネトゲに詳しかつたよな」

「ああ。なんだ、格もゲームをする気になつたのか？」

「逆だ。俺の知り合いにネトゲ三昧で引きこもり氣味なやつがいてな。そいつをどうにかしてほしいと、家族から頼まれた」

「なるほどなあ。ネトゲ廃人か……氣をつけた方がいいぞ？」

黒沢は神妙な面持ちでそう告げる。

「どういひことだ？」

「いや、ネトゲで引きこもりってのは珍しくない。ネトゲは依存度が高いからさ。下手に手を打つと、とんでもないことになる事もある」

「おいおい、たかがゲームをやめさせただけだぞ？」

俺はそれなりに気軽な気持ちでいたのだが、ネトゲ依存者は相当、大変らしい。

「……そこが問題だ。家族はやめさせるのを簡単だと思い込んでる。ネトゲの依存度にもよるだろうが、煙草やお酒みたいにやめさせるのが大変だつてことだよ」

黒沢いわく、例えば、ネトゲをやめさせよ!として、インターネットをできなくさせる、パソコンを取り上げるなどしたら、家を放火したという事件さえ起きたらしい。

もちろん、それがすべてのネトゲユーザーに当てはまるわけじゃない。

だが、ネトゲに依存する人間は「このネトゲの世界を自分の世界だ」と思い込んでいる。

それゆえに、抜け出させるのは難しそうだ。

「事件を起こすってマジかよ」

「たまにテレビで報道される事件とかあるだろ。ネトゲごとき、とか言つけども。そいつらにとつては大事な世界だ。否定や下手に対処すると余計にこじれる」

「どうすればいいんだ?」

「そうだな。まあ、難しいかもしねないが、ネトゲ以外の事に興味を持たせることが一番の方法だつて言われている。普通なら飽ければネトゲをやめるが、大抵はヘビーコーザになると飽きることもないうだろ!」。そうするのが近道だらうな」

他の事に興味を持たせる、か。

今の唯羽の情報は少ない。

「これは本格的に行動してみる必要がありそつだ。

昼休憩、俺は屋上で和歌の手作りお弁当を食べながら至福のひと

時を味わっていた。

口に広がる奥深い味わい、よく味が染み込んだ煮物ほど美味しいものはない。

「つまい、うますぎる……和歌。素晴らしい」

「ふふっ。元雪様は本当に和食がお好きなんですね」

「ああ、好きだぞ。それに和歌の料理が好きと言う事もある。この煮物とか最高だ。相変わらず、和歌は料理が上手だな」

和歌を褒めると嬉しそうに笑みを見せる。

うちの恋人は可愛すぎる恋人です。

「と、そうだ。唯羽のことなんだが、俺なりに計画を考えてみた」

「作戦ですか?」

「その名もプロジェクトDだ」

なお、某有名な公道をレースする車の漫画とは一切関係ありません。

「元雪様、Dってなんですか?」

「……Dは『ダメな唯羽をマジでビリヤシにする』の略だ」

「ううつ。唯羽お姉様がひどい言われようです」

「唯羽の事は甘やかしてはいけない。時には厳しくするのも大切だ」

……俺の前世をダンゴムシと言つたから許さん。

「それで、具体的にはどうするんですか？」

「それはな……これから考えるんだ」

……だつて、俺は唯羽の事を電波系美少女と書つこと以外、何も知らないのだ。

まずは情報を得ることが大切だ。

俺は和歌に出来る限りの唯羽の情報を教えてもらつておいた。

「唯羽って何かできるのか？」

「えつと、その言い方には問題があるように思います。お姉様はああみえて本当はなんでもできる人なんですよ。お料理だつて、私よりも上手なんです」

「嘘だ、ありえない！？だつて、昨日だつてカツラーメンを食べていただじやないか」

「……自分のために作るのは面倒だそうです」

和歌の料理の腕前も相当だが、それ以上だと？

……ぜひ、今度、俺のために里芋の煮物を作つてください。

「私は趣味で生け花をしてるんです。お姉様は私と流派は違いますが、小さな頃から生け花をしていて、すごい才能があるって言われています」

「……ほ、他には?」

「あとは……お姉様はスポーツも万能で、運動神経がすげいいんです。中学の頃はテニス部でしたが、個人レベルでは全国区だって言われてました。団体で全国制覇の経験もあります」

「ま、マジックか。実はテニスのお姫様の経験もあったとか……今と比べるとどうにもならない」

ホントに今の唯羽は残念な子だよな。
いろんな才能があるのに、もったいない。

「今のお姉様は全てを放棄してしまってこようともみえるんです」

「本人は楽しんでるから問題ないって言つてたぞ。適当に生きて、思つ存分にネトゲ人生を送りたいんだとや。やれやれだ」

「疲れてしまつたのでしょうか。私なりに考えたんですけど、お姉様は基本的に優しすぎるくらいに優しい方なんですね」

「待て、激しく待て。ホントに優しい人は『最凶』なんておみくじを渡しません」

そこだけは完全に否定させてもらひ。和歌は苦笑いをしながら、昔の事を語る。

「お姉様の実家はあの神社からも近いので私たちは幼馴染のように仲が良かつたんですね。昔のお姉様は本当にすごい人でした。魂の色が見える、靈感がものすごくあって、他人の悩みとかもすぐに分かってしまうんです」

「ああ。そのせいで孤独になつたんだよな」

「……はい。それでも、昔のお姉様は他人から尊敬されていました。どんな人にも優しく接して、人の痛みを分かつてあげようとする。悩みを抱えている人には適切なアドバイスを与え、物事を解決させます。そんな役回りに皆が望んでいたんです」

人は自分勝手だ。

勝手に期待を押し付けて、その期待が崩れた時にはあっさりと手のひらを返す。

唯羽はそう言つ辛い想いをしたのではないか。
それが和歌の考えだった。

学校が終わると、俺は唯羽に会いに椎名神社を訪れる。
とりあえず、和歌には3口ほど、唯羽に専念させてもらえるように話をしておいた。

『元雪様と触れあえないのは寂しいですが、お姉様をよろしくお願
いします』

和歌の協力も得て、俺はプロジェクトDを本格始動させる。
まずは本人の話を聞くのが一番だろう。

「……小百合さんかも頼まれてしまつた」

唯羽の事は和歌経由で昨日のうちに和歌のお母さんである小百合

さんにも伝わっていたらしく、家に行くとすぐに唯羽の事を頼まれた。

小百合さんも以前から、唯羽のことを持て余しかしたこと考えていたらしい。

「ああて、と。唯羽、いるか。入るぞ」

「……柊元雪か？」

俺は部屋にはいると相変わらず汚い部屋だ。

そして、唯羽は案の定、ネットゲームをしていた。

……寝転がってるせいで和服が乱れて、ちょっと色っぽいじゃないか。

「なあ、唯羽。お前、ネットゲ以外の趣味はないのか？」

「……今はしない」

「中学の時にやつてたテニスは？生け花も相当な腕前らしいな」

「テニスは全国大会を制覇して飽きた。生け花は母の影響でやってただけで、私自身が興味のあるものじゃない。他に趣味らしいものはないな。ヒメから聞いたのか？」

唯羽は基本的にネットゲ以外に興味があるものがないらしい。

「そつだ。唯羽、ネットゲをやめるところ選択肢はないか」

「あるはずがない。まさか……柊元雪、私にネットゲをやめさせようとか、そんなおぞましい事を考へているのではない」

「その通りだ。俺はお前をネトゲ生活から脱却をせしめる」

「……出ていけ。私の敵に用はない。本気で睨つぞ」

「俺を敵とみなした唯羽は威嚇する猫のよつに警戒される。

「お前なあ。自分でモネトゲ廃人がダメ人間つて分かってるんだろ」

「ネトゲ廃人と呼ぶな。ダメとか決めつけるな」

唯羽も今のはまじやダメだつてことは分かっているはずなんだ。
一ート、ネトゲ廃人、残念女子……誰だつて言われたくないから
な。

「……唯羽、俺はお前に借りがある。その借りを返すぞ」

「以前に私が助けたことか。あんなことは忘れる。気にするな」

「いや、俺に前世をダンゴムシと言わたしたことだ。あれだけは許さ
ない」

「……かわいそつに。ダンゴムシを侮辱した事を謝れ。土下座して
謝罪しろ」

違つだろ、お前が俺に謝れ！

この椎名唯羽という女は一筋縄にはいきそうにない。

第32章・計憶の邂逅

【SHIDE・柊元雪】

プロジェクトロ、『ダメな唯羽をマジでどうにかしよう』作戦。俺は唯羽には普通の生活を送って欲しい。

それは和歌の願いでもあり、俺の願いでもあった。唯羽の部屋で説得を続けて30分が経過した。

「よしつ。久々に良いアイテムをゲット。これでアラロンの卵が生まれる」

「…………あのせあ、唯羽。俺を無視するのはやめよ」

「んー。まだそこ伺いたのか、柊元雪…………？」

「素で忘れられた!?」

俺は悲しくなりながら、部屋を片付け始める事にする。とりあえずは換気のために窓を開けて、部屋のごみを袋に入れていく。

「ホントに汚いなあ。俺の部屋より汚いぞ」

「汚くない。3ヶ月前よりはまだ綺麗な方だ」

「その3カ月前がよほど汚すぎたんだろうな。お前の感覚はマヒってる」

「……女の子の部屋を汚いとか言つた。私のか弱い心が傷つくじやないか」

嘘つけ、どこがか弱いのか教えてくれよ。

「それに汚いと言つても、一人暮らしの女の子の部屋はこんなものだ」

「やうだとしたら俺の幻想をマジでぶち壊されるわ」

「幻想なんて抱かない方がいいぞ。男も女も、じょせんは……」

「だあーそんなことはない。唯羽、論点をすり替えるな」

唯羽を相手にするのは、うちの親父並に精神力を必要とする。俺は「ハリ袋がいっぱいになつたので袋をしばり、廊下に置いておく。

ホントにだけハリ袋があるのやア……今日せこの辺にしておこう。

「よし、唯羽。たまには気分転換に外にでないか?」

「この大雨の中をか?ひとりで行け、止めはしない

「やうだった……雨のバカ野郎」

空氣読んで晴れておけよ、ちくしょつめ。

口のつまみ唯羽が手ごわ過ぎて、戦つのが辛いです。

「……そうだ、唯羽。少し話を変えよ。俺の事について聞いても

良いか

忘れていたが、唯羽には聞きたい事もあつたのだ。
俺が椎名神社で経験した不可思議な出来事。
あの時の事をちゃんと聞いておきたかった。

「お前は俺がひかれていたと言つていたな」

「……引かれる、文字どおりの意味だよ。強い何かに引っ張られていた。私がお前を見つけた時、人ならざる何かに連れていかれているように見えた」

「マジで、そんなことつてあつづるのか」

「柊元雪、お前自身が経験したことを探うのか？」

幻覚を見ていた事はあまり記憶もない。

「……俺はいまだに信じられないだけだ」

「別に信じなくても良い。ただ、私がいなければ……今頃、お前はあの場所で冷たい身体になっていたかもしだれないが」

「マジで? そんなに危険な状況だったのかよ」

死の一歩手前とか笑えないんですけど。

「えっと、子供の頃に石碑に悪戯をしたせいとか?」

「ふつ……そんなに可愛いモノじゃない」

あつさつと否定して唯羽は鼻で笑った。
鼻で笑う事に定評のある唯羽さんです、マジでムカツクのでやめて。

「格元雪。お前には前世の記憶があるか

「また変な事を言つ。そんなものはない」

「……わざがにダンゴムシの頃の記憶はないか」

「だから、本氣で怒るぞー！」

俺は唯羽の肩を掴むと、すくなく細い事に気付く。
そういうや、風呂場で田撲した時もスレンダーと云つより、かなり
痩せ細かつた気がした。

「……唯羽、お前、細すぎないか」

「別にいいだろ。太った女の方が好みなのか

「茶化すな。そりゃ、こんな生活していればこうなるわな」

「うるせー。私の事は放つておけ。……今はお前の話だろ」

無理に話題を戻さうとする唯羽。

痩せ細るほどにネトゲ三昧とは……どうかしてくる。
本気でこいつをどうにかしてやりたいと俺は思った。

「で、ダンゴムシの時の記憶はなこと

「そこに戻すなよ！？そんな記憶ねえよ！前世つていうのを俺はそもそも信じてない」

「……ほう。前にヒメと一緒にいた時は恋月桜花の影綱は俺だと言つていたじゃないか。終元雪の前世は影綱、ヒメは紫姫。そんな幻想を思い描いてたわりによく言つ」

「うぐつ。なぜ、それを知つている？」

まさか、唯羽め、あの時の事を見ていたのか。
俺と和歌が喧嘩してしまったあの日の夜。

俺たちは恋月桜花のお話のように恋をしたいと思った。
和歌が望むように俺は答えただけにすぎない。

「IJの際だ、お前にいい情報を与えてあげよう」

「前世がダンゴムシのネタはやめるよ？」

「冗談だ。前世論つて言つのは、人の魂は繰り返し、人に宿るものとされている。人ではないものに、人の魂は入らない」

前世とか来世とか、俺は特に信じていない。

そう言つ世界があるのかもしれない、とは思うけどな。
だが、唯羽は衝撃的な事を口走る。

「 はつかり言おつ。お前の前世は……本当に影綱なんだよ、終元雪」

全身を駆け抜ける衝撃。

「いや、今度は本気だ。そして私がなぜ椎名和歌をヒメと呼ぶのか気になつていただろう。その理由は単純だ。彼女こそが、紫姫の生まれ変わりなのだよ」

「な、ナンデストー？」

あまりにもあつさりと衝撃の事実を告げられて戸惑う。
俺が影綱で、和歌が紫姫だつて？
ははつ、そんなこと……ありえないだろ？

「終元雪、10年前に私とお前はこの椎名神社で会つてている。その記憶はないか？」

「…………うつすらとなら。それが唯羽だとは確信がないが

「当時、私は2人目の妹が生まれるので、ヒメの家に預けられていた。10年前の春、わずか数日程度だったが、お前とこの椎名神社で遊んだことがある」

「えつと、そうなのか？」

その頃に和歌と唯羽に会つたのか。
俺はわずかに残る記憶をたどる。

「そうだ、確か占いが得意な女の子がいた気がする。それが唯羽か

り響く。

「…………いつもの冗談だよな？」

「

？」

「正解だ。少しは覚えているようだな」

「……唯羽は前世とか分かつちゃつたりするのか？」

「ヒメの場合はすぐに分かつたよ。彼女の中には強い魂がある。紫姫の転生で間違いない。『恋月桜花』という伝承を好むのも、この神社を大切に思う気持ち、その根本は前世の強い想いによるところが大きい。ヒメに自覚はないけどね」

和歌が紫姫だと言うのは別段、信じられない話ではない。
親の小百合さんですらも驚くほどに、和歌はこの神社に異常に固執している。

その理由が前世と繋がっているのだとしたら？

恋月桜花、紫姫、椎名神社……繋がる何かが和歌を突き動かしているのではないか。

「和歌の事は分かった。でも、俺が影綱って本当か？」

「本当だよ。それは10年前に確認済みだ。お前が今になつてなぜ、この椎名神社に惹かれたのか。その理由はさだかではない。多分、と思つ」とはあるがまだ確証がないのだ。その話はおことして、お前の前世が影綱であると言う証拠はある

「……どう？」

「終元雪、お前の右肩には“あざ”があるだろう。まるで矢の矢に射られ刺された傷のような“あざ”がな。生まれ付いたそのあざが分かりやすい証拠だ。前世の因果がそういうものをつける場合があ

る

「えつ、あれか？あるにはあるが、それだけで前世つて言えるのか？」

そんなもの、偶然だと言われたらそれまでだ。

「この場所に引かれた時に、あざが痛まなかつたか？」

「そういうや、和歌に影綱が致命傷を負つた時の矢つて言つのを見せてもらつたことがある。その時に妙に肩に違和感があつた気がする。痛むと言つか、火傷みたいな感じだつた」

「……魂が覚えていんんだよ。自分を殺した矢のこととな

信じられない話に俺は身体がゾクツとする。
ただの偶然、ありえない妄想だと笑うことは誰にでもできる。
だが、それを信じてみるのは、どうだらうか？」

「俺が影綱だとしたら、和歌に出会い、惹かれたのも偶然じゃない

？」

「偶然なんて言葉はこの世にはない。あるのは必然、ただ一つだけの道だ」

唯羽はそうはつきりと言い放つと、ネトゲをする手を止めた。
「ひりひりひりひりと振り向くと不敵な笑みを見せる。

「終元雪、お前は影綱だと言われてどう思つ？まだダンゴムシの方がマジだつたか？」

「さすがにダンゴムシよりマシな前世だと想ひや」

「……私はこの話をお前にはしたくなかった。それが分かるか？」

唯羽にしては珍しく弱気な物言いをする。

「全然、分からん」

「だらうな。だが、あえて今は語るまい。これだけは覚えておけ。お前は影綱で、ヒメが紫姫だとしても、それは過去の話だ。輪廻転生、めぐりめぐつて今世で再会したふたりが恋をしたことの意味はある。だが、それ以上の事を考えるな」

「それ以上って何だよ？」

唯羽は俺に釘をさすよつて、しつかりとした言葉で囁く。

「……お前たちはお前たちの恋をしていく。その気持ちを失うな」とこゝ「ことだ」

その警告の意味を俺が理解するのはまだ先の話になる。

「そういや、なんで俺の右肩にあざがあるのを知ってるんだ？」

「んつ……それか。それは10年前にお前と一緒にお風呂にまいった事があるのだ。裸の付き合いとこりやつだな。その時に私はあざを見つけ、お前が影綱の魂を受け継いでるのではないかと気づいたのだ」

「ま、待て……え？ マジで？ 僕にそんな記憶はいじりこませんよ？」

田の前にいる唯羽と、そんなイベントを体験した記憶がない。

「そうだ、あの時の事を思い出した。あの頃の柊元雪は子供のくせにヒッチでな。私の身体に興味本位でベタベタ触つてきたのだよ。まったく、いやらしき……」

「そ、そんなバカな……」の紳士である俺がそんなことをするはずがない

「やれやれ。一緒に風呂に入った記憶がないと言つて誤魔化すのか。幼い頃とはいえ、柊元雪に身体を弄ばれたあの記憶を涙を飲んで我慢しろ、と？ か弱き乙女を弄び、泣き寝入りさせるとはお前もひどいやつだな」

「そ、それは何かの間違いだ、違うんだよ。俺はしないっつ！？」

結局、そのまま唯羽にからかわれ続けることになるのだった。

それにして、俺の前世はホントに影綱なんだろうか。

和歌が紫姫で、その縁が今の俺たちの関係に影響していると云つづりのか？

さらに、10年前に唯羽と会っていたとは……。

「う、一緒にお風呂に入つて色々とじつめつたのはホントなのがいいじゃない気がした。

ただ、昔の話をする唯羽は普段よりも楽しそうに見えたのは気の

せいじやない気がした。

第33章・涙のあと

【SIDE・終元雪】

唯羽いわく、俺の前世は“恋月桜花”と言ひ伝承に出てくる影綱らしい。

そして、和歌の前世は影綱と悲恋の運命に引き裂かれた紫姫だと言つのだ。

信じるか信じないかは俺次第。

だが、信じられるだけの理由はある気がした。

俺の右肩にあるあざも、和歌が椎名神社に固執する理由も。それぞれが一因惚れという強い何かに惹きつけられたことも。……特別な縁があるとしか思えない。

「和歌、これに恋月桜花の詳しいお話がのつてるのか？」

「はい。椎名神社についてのパンフレットです」

学校が終わると俺は和歌と一緒に神社の方にいた。
平日だというのに、人の賑わいがある神社。

縁結びの神社はだてじゃない。

俺は社務所の横に置かれていたパンフレットを読むことにした。そこには恋月桜花についての話ものつており、詳しく知りたくなつたのだ。

だが、パンフレットには和歌の話してくれた以上の事はのつていない。

「恋月桜花。それは戦国乱世が引き裂いた悲しい恋の物語、か」

「元雪様は恋月桜花に興味があるんですか？」

「ちょっとね。それにいづれはこの神社を継ぐんだからよく知つておかないと」

和歌は互いの前世が影綱と紫姫だと知つたら驚くだろうか。
それとも信じてくれないかもしれない。

結局、確たる証拠がないのだから信じるのは気持ち次第なんだよ
な。

「紫姫は元々、この地を支配していた大名の娘だつたんだよな」

「はい。それゆえに、この椎名神社を大きな神社にするだけの力も
あつたんだと思います。影綱様と紫姫様が出会わなければ、椎名神
社は今の姿ではなかつたかもしません」

「……影綱つていう武将については詳しく分からぬのか？」

「敵国の武将、と言つ事以外にはこの神社では分かつてませんね。
古い文献を調べれば出てくるとは思いますけども。当時も、敵国の
武将と恋をした紫姫様を責める声も当然にあつたそうです」

「そりや、そりやうな。自分を捕らえていた男と恋をしたうえに、
その死を悲しんで、こんな神社を建立するくらいだ。反対の声があ
つてもおかしくない」

だが、それらの声を無視してまで紫姫には権力があつたのだろう。
そして、影綱に対する強い想いも……。

「その後、紫姫はどうなつたんだ？別の男性に嫁いだのか？」

「いえ、それが……数年後に流行の病で亡くなつたそうです。最後まで影綱様を想つていたそうですよ」

「そうか。何とも言えないな」

「ですが、紫姫様の亡き後も彼女の意思を尊重して、この神社が潰されることはありませんでした。敵国の武将を想う姫君が建立した神社。時代的な背景を考えれば、潰されなかつたのは寛大な処置です。そして、椎名神社は縁結びの神様を祀り、今まで続けています」

影綱も紫姫に幸せに生きて欲しいと願つたはずだ。
彼女にとつての恋はその3日だけの影綱とのひと時だけだったのか。

「……和歌は紫姫のお話が好きなんだろ?」

「はいっ。小さな頃から聞いてるお話ですから」

唯羽からは前世の話を聞いてない様子。
もちろん、彼女の話が本当かどうかは分からぬ。
それでも、紫姫の魂が和歌に引き継がれているつて言えば……和歌は喜ぶんじゃないだろうか。

「さて、今日もプロジェクトRを始めますか」

「頑張つてくださいね」

和歌にも応援されて、唯羽の脱ひきこもりを何としても実行する。

あんなに痩せ細り、身体に悪影響がでているのを見てしまつたら、心配にもなる。

和歌が心配する意味をよづやく理解した。

「あら、元雪君。今日も唯羽のためにきててくれたの？」

和歌と別れてすぐ廊下で会つたのは小百合さんだ。
相変わらずお綺麗な人です。

「はい。俺としてもアイツをなんとかしてやりたいので」

「学校からも言われているの。来週までに来ないと、留年してしま
うかもしぬないって。あの子の家族の話は聞いてる？」

「実家とは仲があまり良くないとは聞いてます」

唯羽は小百合さんのお姉さんの子供らしい。

「姉も心配していたわ。あの子には2人の妹がいるんだけど、姉妹
とも関係があまりよくないみたい。昔は唯羽もしつかりとしたすご
い子だったから皿漫のお姉ちゃんだつて妹達も黙つていたのにね。
ホントに唯羽は変わつてしまつたわ」

「……実家を追い出されたのっていつ話はじつなんですか？」

「それは違うわ。唯羽が家出してきたの。ネット回線を切られて、
ネットゲームができないからここに遊びさせて欲しいって」

本当にダメダメな子だな、唯羽は……ダメ過ぎる。

「でも……今にして思えば、あの子にも悩みがあったのかもしれないわ」

「悩みですか？」

「ええ。ゲームに依存する前の唯羽はスポーツにも熱中していたし、和歌とも本物の姉妹のように仲が良くてね。それが、今ではあんな感じでしょ。何が彼女を変えてしまったのか私には分からないうわ」

いやいや、俺の想像では単純にネットゲーリフ存在が唯羽に悪影響を与えただけな気がする。

もちろん、きっかけとして、ひきこもりになる理由があったかもしないが。

「……あの、唯羽はホントに魂の色が見えるんでしょうか？」

俺の質問に小百合さんはあっさりと認める。

「見えるわよ？あの子の母である、私の姉も子供のころは見えてたみたい」

「……マジなんですか？」

「あっ、そうか。元雪君にはいってなかつたわね。私の方の実家も代々、神職に関わる一族なの。ここから少し離れた場所にある神社をしているわ。ここほどは大きくないけど」

「小百合さんも巫女さんだつて言つてましたからね」

と言つことは、血筋的にも本当に唯羽には力があり、その力で苦

しんだ過去もあるわけか。

とりあえず今はネットゲをやめさせた事に専念しよう。

ここに来るのは数回目、今日ここはと意気込んで、俺は唯羽の部屋に入ろうとノックをする。

「唯羽、俺だ。入るぞ？」

だが、いつもなら面倒くさいひつな声で聞こえる返事がない。

「唯羽？ いないのか？」

また寝起きのシャワーか、それとも遅すぎる昼食か。
それとも、ネットに集中しそぎて気づいていないのか。

「……唯羽あ？」

俺はゆっくりと扉を開けると、俺が片付けて少しはマシになつた部屋がある。

そして、布団のまゝにして唯羽がぐっすりと寝ていた。

「なんだ、まだ寝てるのかよ。良い御身分だな」

「す、う……」

心地良さそうな寝息を立てる唯羽。

普段の生意気な態度もなりをひそめ、寝ている時は美少女そのも

のだ。

「……窓でもあけるか」

寝かせておくしかないの、適当に窓を開ける。
そつと風が吹き込んでくる。

「部屋でも掃除しよう」

自分の部屋もろくに掃除しない俺が他人の部屋を掃除してやると
は……。

それほどまでに汚いのだから仕方ない。

「ん、これはなんだ？」

お菓子のパッケージを手付けてると、赤と白の紐に鈴がついたものが出てくる。

大事にしているのか、その周囲だけは綺麗にされている。

「鈴か？何の鈴だらう？」

やけに古い鈴を俺はチリンッと鳴らしてみる。

……そういうや、前に唯羽に助けられた時にも鈴の音が聞こえた気がする。

唯羽と鈴、その関係は一体何なのか。

だが、俺はそれを探る前に唯羽の異変に気付いた。

心地よさそうに寝ていた、その寝顔がやがて苦しそうになる。

「……唯羽？」

悪い夢でも見ていいのか。

顔色も悪く、ひたいには汗があふれ、息も苦しそうにしている。

「…………どうして……貴方が、私を……」

寝言なのか、苦しそうに呟く唯羽。

俺は心配になり近づくと彼女は苦しそうな顔を見せる。

「…………私を、捨てないで……あつ、ひとりはいや……」

捨てる、ひとりにしないで？

一体、唯羽は何の夢を見ているんだ？

「…………私は…………“影綱”様をつ…………」

その言葉に思わず、ゾクッとする。

唯羽の口から聞こえたのは影綱と言つ名前。
なぜ、彼女が影綱の夢を見ているのか。

「唯羽、おい、大丈夫か…………？」

俺は肩を揺らすと、唯羽はゆっくりと目を覚ませる。
その瞳には涙があふれて、頬を伝う。
あの唯羽が泣いてる？

「…………唯羽？」

「ふわあ、なんだ？ 栄元雪、女性の寝込みでも襲いにきたか。 言つておぐが、私の身体にそんな価値はないと思うが。 スタイルにだけは自信がないのでな」

「違うわ。お前、何か悪夢でも見てたのか？泣いてたぞ」

「いつものように茶化す唯羽だが、涙はこぼれたままだ。俺はティッシュを取つて、彼女に差し出す。

「涙？……本当に。どうして？」

「俺が知るか。何の夢を見ていたんだ？」

「……分からぬ。ただ、悲しい夢をみていた気がする。夢を見るほど、ぐつすり寝たのは久しぶりだ」

唯羽は涙をぬぐつと、落ち着きを取り戻していた。
涙のあと。

誰でも悪夢は見る事がある。

だが、その時の唯羽の様子は今までどおりか違つ気がした。

「寝汗をかいだからシャワーを浴びてくる。覗くなよ、終元雪」

「のぞきません。この前のは事故だ、忘れてくれ」

「……たまには此のまま一緒に風呂に入れるか？」

「え、遠慮させてもいい。そつちも忘れてくれ」

だが、部屋を出でていへ唯羽の背中はいつもよりも小さく見えたんだ。

第34章・呪いと魂の色

【SHIDE・柊元雪】

唯羽の涙、そして寝言ながらも呟いた一言。

『私は……影綱様を……』

夢とはいえ、彼女と影綱を結びつけさせるものはないはずだ。
それとも俺がら知らないだけで何かあるのだろうか。

恋月桜花に隠された真実とは一体　？

シャワーを浴び終わった唯羽はカロリーメートをかじりながらネ
トゲをしようつとする。

もはや、どこから突っ込むべきか悩むわ。

「唯羽。こんな意味でお前はダメすぎだ」

「んう、カリーメイトのことか？私はチーズ味が苦手だ。好きな
のはチヨコ味だな」

「知るか。ちやんとした飯を食え。あと、ネットゲしすぎ」

そんなものばかり食べているかい、唯羽は瘦せているのだ。
唯羽には健全な生活を送つてもいい。

「よし、決めたぞ。唯羽、明日の土曜日は俺が一日付き合つてやる

「断る。何でせつかくの休日をお前と過ごさなければいけないんだ」

「今のお前に休日と言つ概念があつた方が驚きだ

なんだかんだと文句を言つ唯羽。

このままじやダメなんだ。

「格元雪……お前はおせつかいすぎる

「分かつてゐる。それでも、少しでも健全な生活をだなあ

「健全と言つて健全とか言ってみ

「毎日、普通に学校に行くことだら。朝に起きて、夜に寝る。3食しつかうと食べる」

俺の言葉に唯羽は耳をふさいで抵抗する。

「やーめーーー。お前は私の妹たちか。人の顔を見るたびに文句ばかり言つ。やれ、不健康だ、やれ、ネトゲをやめろだ。余計な御世話だ、つまらないと言いたくなる」

妹たちと仲が悪い理由はそういうことがよ。お姉ちゃんとして恥ずかしくないのか。

「自覚があるなら直せっての。唯羽、俺もお前の事を心配してるんだぞ」「ただ、ヒメとの約束があるから頑張つてるだけだろ？

「それもあるが、俺自身もお前を心配してる

痩せ細った身体、あまり顔色も良くないし、肌も白すぎる。
不健康の固まりとも言える、いつか本格的に身体を壊してしまつ
だろう。

唯羽のためにも、せめてネットゲからの脱却をさせよ。

「私はいらないおせつかいされるのは嫌いだ

「……そうか。分かった」

「分かつてくれたか？」

「明日は俺と出かけるために、今日は早く寝ろ。いいな？」

「なつ！？柊元雪、全然、分かつてないじゃないか！」

強引な話の持つていき方ながら、彼女は困った表情を見せている。
……案外、根は素直な奴かもしない。

「もういい、私はネットゲをする。その邪魔をするな

唯羽は嘆きながら、パソコンの方へと向かう。

「待てい。今日からネットゲ禁止だ！」

「はあ。柊元雪、あまり私を怒らせると……本気で呪うぞ」

「うぐつ。び、びびらないからな。呪えるものなら呪つて見せろー。」

いくら唯羽が靈感持ちの電波系美少女でも呪いなどできるはずがない。

ここで引くわけにはいかないのだ。

黙りながら、にらみ合つ両者。

根負けした方が敗者だ、俺は負けない。

「そうか。残念だよ、柊元雪……呪いなんて手段は取りたくないがな」

「ほ、ほう。呪い発動か。できるものない、してみろ！俺は逃げも隠れもしないが、痛いのだけは勘弁な」

「痛いのが望みか。それならば心配ない、この呪いは精神的にも肉体的にも痛みを伴つものだ」

不気味に微笑む唯羽、じつやうり本氣で俺を呪づりじこ。

どうなる、俺！？

ぐいっと唯羽は俺との距離を縮める。

冷たい表情に見つめられて身動きできない俺。

「……ちゅっ」

そして、唯羽はためらうことなく俺の頬に唇を触れされた。柔らかな唇の感触にドキッとする。

「な、なあつ、何をするつー！？」

思いもしない行動にあ然としてしまつ。

そして、カシャつという何かの音がする。

いきなり頬にキスをしてきた唯羽は満足げに言った。

「……呪い完了。柊元雪。自分の行いと発言を悔いる覚悟はできて

いるのか?」

「い、今のキスは、何しやがったのですか?」

「ふふつ。呪いと言つのはな、悪意を持った災厄だ。もはや、逃げる事はできない」

彼女の手に握られていたのは携帯電話だつた。

……すみません、意味が分かりません。

頬にキスされた理由も分からず、呆然と立ち尽くす俺。

やがて、唯羽の呪いの意味を知る。

「元雪様つ！！」

いきなり、唯羽の部屋の扉を開けてすごい勢いで和歌が部屋に入つてきた。

その表情はかなりご機嫌ななめ。

「…………はい?」

「ひどいじゃないですか!こんなのが、あまりにもひどい……許しません

「え? ちよ、ちよつと待つて。和歌?」

理解不能の俺をよそに和歌は何やらかなり不機嫌な様子。
彼女は頬を膨らませながら俺を責める。

「大丈夫ですか、お姉様。ひどい……唯羽お姉様を襲うなんて、ひどすぎます!」

「……え？」

彼女が俺に見せつけたのは自分の携帯電話だつた。
そこには俺が襲つてゐる（よつに見える）唯羽がキスをした写真
が……。

先程のカシヤつて言つ音は携帯のカメラの撮影音、そして唯羽は
それを和歌に転送したということらしい。
……つて、ええええ！？

「呪いつて、これがよ！？」

「……何が呪いですか。誤魔化さないでください。元雪様！…」

「ち、違う、和歌、誤解なんだ。話せば分かる」

「ぐすつ……元雪様は女の子なら誰でもいいんですか？」

和歌の嫉妬しやすさは想いが強いだけ、本気で怖いつす。
そして、人の話を聞いてくれない。

「和歌。落ち着け。これは罷だ、勘違いしてはいけな……」
「うぎやーつ！？」

思いつきり俺の頬を打つ平手。

和歌の怒りの一撃。

俺は女の子の怒りをもろにぶつけられるのだつた。

そんな俺と和歌のやり取りをやりと口元に笑みを浮かべてみて
いる、唯羽がいた。

ちくしょう、覚えておけよ……ま、待つて、和歌、一度目は……

ぐあーー!?

十数分が経過して、俺は痛む頬を押さえ、リビングに撤退していった。

俺は和歌に膝枕されて、氷で頬を冷やしていた。

「う、うう……痛いよお」

「う、ごめんなさい、元雪様。まだ痛みますか?」

「……和歌つて、怒ると容赦ないんだよな」

「すみません。まさかお姉様の悪戯だつたなんて……」

ショーンとしてしまう和歌。

怒りの和歌に見事すぎる往復ビンタをされたのだ。

この子、怒ると怖い……俺、結婚しても怒らせないようになります。和歌が誤解だと気付いてくれた時には俺は痛みに倒れていた。

「私……元雪様を信じじるって決めたのに。それなのに、こんなことを……」

「あー、勘違いさせのような事をさせた唯羽が悪いんだ。だから、和歌は悪くない」

「元雪様……それでも、私は……信じているなんて口だけで……自分が情けないです」

涙ぐんだ和歌を見ていたら責められるはずもなく。

そもそも、頬にキスしたような写真を送った唯羽が悪い。その諸悪の根源、呪いを発動した唯羽は楽しそうに部屋でネットゲをしている。

『邪魔者はさつた。私の呪いは少しばかり痛いだろ?』

くつ、唯羽め……自らの唇を使い、こんなひどい目にあわせるとは……。

「唯羽も唯羽だ。乙女の唇をあんなに簡単に使うとは……」

「お姉様にキスされて、ちょっと良い思いをしたとか思いました?」

「いえ、思いませんでした。だからね、和歌?俺の頬に爪を食いつませるのはやめて!?」

嫉妬した和歌が怖すぎる。

普段は従順で大人しいだけあって……大和撫子を怒らせてはいけない。

俺は和歌の太ももの感触を味わいながら、

「唯羽つてホントに呪いとか使えるのか?俺はこれを呪いだとは認めないが」

「さあ?でも、呪術に似たことはできるかもしません。お姉様は魂の色を見る事ができます。それは相手の苦手とすることも分かるみたいですし」

「なるほどね。わつこや、和歌の魂の色って何色なんだ？」

唯羽と付き合ひがないのなら色へらこは聞いたことがあるだろ？

「私ですか？私はピンク色だつて言われた事があります」

「ピンク……？」

「はい。薄桃色のオーラは愛を表しているそつです。お姉様には『ヒメは愛に溢れているね』と言われました。元雪様は何色だつて言われたんですか？」

忘れもしない、初めてあつた頃に知つた衝撃の事実。

俺の魂の色はダンゴムシ色、訂正、灰色だといつこと。

「……どす黒い灰色らじー」

「は、灰色？お姉様がそう言つたんですか？」

「ああ。どんよつとした曇り空のような灰色だしさ」

それにどんな意味があるのか知らないが、灰色といつ中途半端な色だからな。

「ちなみに唯羽自身は何色とか分かるのかな？」

「……お姉様は白いの色は見えないそつです」

そういうものなのか。

本当に唯羽つて不思議な奴だよな。

「元雪様、唯羽お姉様は手ごわいでしょう?」

「……だが、諦めんぞ。プロジェクトもそろそろ佳境だ、俺に任せてくれ

こんなことくらいで凹む俺ではない。

唯羽も自分の行いがよくない事は理解している。

あとはきっかけさえ与えれば脱却できると思うのだ。
そのきっかけ作りが大変なんだけどな……。

【SIDE・篠原唯羽】

私にとって、現実は幻想と同じような物だ。小さな頃から人の周囲に何か変な光が見えていた。それは人ぞれぞ違う魂の色だと気付いた。魂の色は特徴的で、なんとなく相手の悩みや痛みを分かつてしまう。

昔の私はそれを人のために役立てていた。

だが、それは面倒なほどに自分の負荷になる。

他人の想いを一方的に押しつけられるようなもので、私はそれを無意識とは言え受け止め続けるほどに強くはなかつた。

私は人が多い場所を避けるようになり、高校に入つてから学校に行かない日も多くなつていた矢先、ネットゲームに出会う。別に他人が嫌いなわけでもないし、コミニケーションが嫌いなわけでもない。

ネトゲの世界では直接相手の魂の色を感じないので、相手と話す事は楽しい。

まあ、どっぷりとネトゲの世界につかりすぎたせいで、家族からは見放されてしまった。

それでもいい、ネトゲさえあれば……。

そう思つていたのに、私の前に再びあの男が現れたのだ。

柊元雪、私は10年前に彼と出会つている。

私の人生で彼ほど、不思議な魂を持った男はいない。

その正体を知つたのも、あの当時だが……彼は私を忘れていた。

当然かもしれない、あの10年前に起きた事件を考えれば……。

そして、10年の月日がヒメの恋人になつていた彼はさらに魂が不安定になつっていた。

直感的に危機を感じた、こいつはやばい。

柊元雪はある災いに触れており、その災いはいずれ彼の命を狙うだろう。

……何とかしようと思った。

それが間違いでもあつたのは、彼の優しさを知った時だ。あろうことか、アイツはこの私に深入りし始めた。まったく、ネトゲ廃人脱却とか余計なお世話だ。

お前はお前の心配をした方がいいと言うのに。

だが、彼の優しいところは昔から変わっていない……。

本当に柊元雪と言う男は変わっている。

私の憂鬱……それは、私自身、彼の余計なおせっかいを嫌と思わなくなり始めていたことだった。

久しぶりに夜に寝て、朝に起きる経験をした気がする。

その日は仕方なく彼の言う通りにしてやつた。

ネトゲ日和だというのに、柊元雪と一日をすこさなければいけないとは。

だが、この1日で彼が諦めてくれれば、私の平穏な日々は取り戻せる。

私を迎えて来た柊元雪は私の恰好を見て言う。

「へえ、唯羽つて私服はちゃんと洋服なんだな」

「……和服は楽でいい。だが、田立つゆえに普段着にはしない」

「そつか。それじゃ、今から目的地に行くぞ」

仕方なく彼の後ろをついていく。

だが、そこは私の想像していない場所だった。

「……柊元雪。私に満足のいく説明を求める」

そこはスーパー、なぜかそこで私たちは買い物をしていた。
意味が分からぬ。

「唯羽が料理上手だと聞いたから、この際、昼食を作つてもらおう
かな、と」

「……お前は馬鹿かだろ？ どうして、私が柊元雪のために料理を作らなくてはいけない。その理由がまず分からぬ。それに、それは恋人であるヒメの役目だ。私がする義理はない」

「いいじゃないか。それにお前の部屋を綺麗にしてやつただろ？ ？」

確かに彼が私の部屋を綺麗にしてくれていたのは認めよ。足の踏み場があるのは久しぶりで、余計な物を踏まずに済む。
……面倒くさい借りを作つてしまつた。

「グチグチとなつこく言われ続けるのも気にいらない。私が作ればいいんだろ？ それで、何が食べたい？」

「和食メインで。俺は和食が好きなんだ」

「……和食か。肉と魚はどちらが好きだ？」

「俺は肉かな。魚も嫌いではないけど」

人のために料理をするのはいつ以来だろうか。

ヒメの家にお世話になつてからは調理した覚えがほとんどない。

「……メニューは肉じゃがでいいか。面倒だから手軽な方がいい」

「いいよ。肉じゃがも好きだ。味は濃いめで頼む。あと、里芋の煮物を作つてくれ」

「里芋が好物なのか？意外と古風と言つか、じじくさー」

「うるせー、自分でも分かつてゐから、余計なことは言わなくていいよ」

「里芋の煮物か……あとは適当に得意料理でも作ればいいだらう。

「材料費はもちろん、お前持ちだな？私は出さないぞ」

「ああ。予算はこれだけで適当にお願いする」

「ふむ……」れだけあれば十分だな。まあ、たまには作つてやるのもいいだらう

「ここ最近、余計なおせつかいながらも私に介入してくる柊元雪。別に恩など感じていなが、ここで借りは返すか。

「和歌も昔から唯羽に料理を教えてもらつていたそうだ。そんなに唯羽は料理が上手らしいが、ここで覚えてんだ？」

「……ほぼ独学だ。小さな頃から料理の本を読むのが好きで作つていた。それについては共働き似たようなものだ。私が妹達の食事を作

つていたのだよ

私の両親は和歌の家族のように規模は小さいが神社の神主をしている。

だが、ほぼ共働きに近いために小さな頃から妹達の面倒は私がしてきた。

必然的に料理をするのも私の役目になっていた。

「へえ、そうなのか。それじゃ、妹たちはどうしているんだ?」

「……今は自分達で作ってるよ。もう、放つても良い年齢ではあるし」

私がいなくても、彼女達だけでも家のことは大丈夫な年齢だ。

「ちなみに唯羽の妹の年齢って?」

「真ん中の妹が中学2年生、下の妹が小学3年生。どちらも姉を敬う事を知らない、生意気な妹達だ。本当に可愛げがない」

「それは姉が尊敬できる人物ではないからでは?」

「失礼だな。これでも、昔は妹達から尊敬のまなざしで見られていたのだよ。ただ、優秀すぎる姉として振る舞つていたゆえに、やがて、妹たちとも壁は作つてしまつていたが……」

「優秀つて自分で言つか?そして、今は墮落した意味で嫌われているか。ダメじやん。唯羽も自分で望んでるとは言え、転落人生を送つてるしな。もつたいない」

本当に人間関係とは難しい。

私は別に妹達を嫌つていないのだが、うまくいかないものだ。家族ですら溝を深めるばかりで、近づけないのだから。

「なんていうか、唯羽つて不器用だな」

「柊元雪に言われるとは……なんとも嘆かわしい」

彼にまで同情されると泣きたくなる。

「そこまでショック受けるなよ。俺も悲しくなるわ」

私が落ち込んだ素振りを見せると彼は苦笑い気味に言った。

「……柊元雪には兄弟がいるのか？」

「いるよ。歳の離れた兄貴がひとり。兄弟仲も良いし、兄嫁とも仲良くやれてる」

兄が姉、私にも頼れる年上の相手がいれば少しばわっていたと思う。

私の性格のようなタイプは姉に向いていない。

適当に材料を買いそろえると私たちはそのまま柊元雪の家に行く事にした。

「柊元雪……家族は誰もいないのか？」

思ったよりも彼の家は広い上に、キッチンスペースも大きく使いやすそうだ。

「兄夫婦はデートに出て行った。両親も日帰り温泉旅行にでかけてるのだ」

「……それで、私に昼食を作らせよ」としていたのか

「正解。キッチンや冷蔵庫にある物は適当につかっていいよ」

私はキッチン周りの確認をする。

圧力鍋まであるうえに、特に必要なものでないモノはないので、困る事もない。

「今から料理をつくる。作ってる間は決して、こちらを見るな」

「お前はどこの鶴の恩返しだ」

「人の視線が気になるだけだ。不味い料理にされたくないなら大人しくしておけ」

柊元雪がリビングでくつろいでるのを確認してから私は料理を始める。

基本的に自分のために料理をすることはない。

「……まあ、誰かのために作つてあげるのは嫌いではないけどな

私は包丁をとりだして、野菜を切り始めた。

料理は趣味みたいなものだから得意な方だ。

やがて、出来上がった料理を並べると柊元雪は感嘆の声をあげる。

「おー、すい。ホントに美味しそうだ」

今日のメニューは肉じゃがに里芋の煮物、それに山芋の鉄板焼きにお味噌汁。

昼食としては十分だろう。

「いただきます」

彼はまず、里芋の煮物を食べ始める。

美味しいことは美味しいが、これが好物の男は今時あまりいない気がする。

「……どうだ？」

一口食べた柊元雪は何とも言えない顔をしていた。
マズイと言われるようなものを作った覚えはない。
さすがに料理の腕もそこまではなまつていはないはずだ。

「つぐつ、美味しい、美味すぎる事に驚きだ。本気で驚きました。ここまで美味しい煮物が作れるって……。どうしよう、和歌の手料理の味を超える事を認めるに浮氣になつたりしないだろうか？」

「しないだろ？。それにヒメは私の弟子みたいなものだ。美味しいなら素直に言え」

「美味しいです、美味しいすぎるよ。唯羽つてネトゲをしてなかつたら実はかなり良い女じゃないだろ？」

「料理一つで私の評価を変えすぎだ。あと、私からネトゲを取るな

まあ、美味しいと言われるのは嬉しい事ではあるが。
美味しそうに柊元雪は料理を食べていく。

「「」の味噌汁も美味しい。これはなんだ？お好み焼き風？」

「それは山芋の鉄板焼きだ」

「おおっ、これも美味だ。中にも小さな山芋が入っていて触感が良い。お好み焼きみたいで味も抜群だし」

作った料理を美味しく食べてもうれるのは、何だか照れくさくなるな。

それは過去の妹達の反応を思い出す。

『 お姉ちゃんは性格悪いけど、料理だけは美味しいよねー』

小さな頃のあの子達のために料理を覚えたのも事実ではあるが。
自分で作った料理を私も食べてみる。
ん……美味しい、料理の腕前が伸びている事はないようだ。

「唯羽も自分で作った料理を食べていれば、栄養もあるし、痩せたりもしないだろうに」

「基本的に自分のために作るのは面倒だからな」

「そこが問題だ。こんなに美味しいのに……。なあ、唯羽。また作ってくれよ」

「……調子に乗るな。そんなセリフを私にはくと、恋人のヒメが拗

ねるぞ」

だが、柊元雪からそう言われて嫌な気分ではない。
普段はあまり笑わない私の口元に自然と笑みが浮かんでいた

。

【SIDE・柊元雪】

唯羽の手作り料理がまさか和歌以上だったとは……。
お昼ご飯をつくつてもらつたが、想像以上の美味しさに驚愕した。
……自分のために作らないつてもつたいない腕前だ。

その後、唯羽を連れて俺は椎名神社に戻つていた。

俺達は街を歩こうとしたのだが、途中で偶然にも唯羽の妹達に出会つてしまつたのだ。

遊びに出ていたらしく、2人とも歳はまだ子供なのに将来が楽し
みな超絶美人だつた。

『唯羽姉さんが昼間から外に出てる……そんなのありえないわ』

『えーっ。お姉ちゃんが！？これから雨が降るの？私、傘を持つて
きてないよ』

平氣で妹達にそんな事を言われる唯羽がちょっとかわいそうだつ
た。

そのあとも、『あの唯羽姉さんが男を連れてる！？冗談でしょ？』
など、と騒がれたため、恥ずかしさに負けた唯羽が敵前逃亡の如く、
神社まで逃げてきたのだ。

「くつ、妹達め。この私を何だと思っているんだ。恥ずかしい

「お前でも恥ずかしがるんだな。それにあの子達も可愛い妹たちじ
やないか」

「『ど』がだ。見た目はアレだが、私の妹だぞ。性格は悪いんだ」

「んー、俺には挨拶もきつちつしてくれたし、良い子たちだと思つぞ」

真ん中の妹、中学2年の美羽（みわ）ちゃんは礼儀正しく「うちの姉がお世話になつてます。自堕落な人ですけど、見捨てずに仲良くしてあげてください」と挨拶された。

末妹の日羽（ひわ）ちゃんは小学生らしく可愛らしい笑顔で「お姉ちゃん、ネトゲは卒業できたの？早く卒業して帰つてきて」と姉の心配をちゃんとしていた。

一言目には「ネトゲがしたい」、「私の人生の邪魔をするな」と文句ばかり言う姉の唯羽よりも全然、いい子達でした。

「それにしても、妹達も名前に羽がついてるんだな？」

「空も飛べないのに、名前に羽なんて共通点を持たすなど、我が親の名前センスを疑う」

「可愛いからいいじゃないか。女の子らしい名前だな」

「『ど』がだ。私の真名、貴夜沙凜キャナソンの方が可愛いだろ」

「それだけはないと全力で否定しておいつ」

もう外には出たくないと唯羽が『』ねるので、俺たちは椎名神社を散策する。

今日も神社は縁を求める人々でにぎわっている。

「さすがに土日だと人も多いな。しかも、女人ばかりだ」

「縁結びの神に祈る奴らの多いこと。神に祈るより、地道に合コンでもしき」

「はあ……唯羽さんよ、それは禁句だ」

ホントに唯羽って根もふたもない事を言つよな。
神社の娘なのに少しさらしくしろ。

「唯羽は人の魂の色が見えるんだよな？」

「それがどうした？ 探ろうと思えば人の魂で何となく、相手の事も分かる」

「例えば、あの子とかどうなんだ？」

「あまり人のプライバシーを覗くのは嫌いなんだがな」

神社を参拝しているのは女子高生っぽい女の子のグループだ。
3人組の子達を唯羽はジッと見つめる。

やがて、分かったのかそれぞれの子について話します。

「右端の子は最近、彼氏と別れた。真ん中の子は幼馴染に恋をしている。左端の子は……いわゆる、百合つて言うのか、同性である女の子が好きらしい。右端の子が失恋しているのを機に狙おうとしている。こういう恋愛の形もありかい」

「ナンデスト！？そこまで分かるのか？」

「問題はここからだ。3人とも後ろに人ならざるものが憑いてる。

最近にでも心靈スポットに行つたのか？あんな場所に興味本位で行くとはバカだな。憑かれている状態では恋愛どころではないぞ」

「お、お祓いして～っ！？」

その後は責任を持つて宮司のおじさんに相談するように彼女達に言いました。

唯羽はホントにそういう力があるのでどうか。

その後は唯羽と共にご神木のある方向へと歩き出す。
そこは俺は近付かない方がいいと警告されている場所だ。

どうしても、そこに行つて話がしたいのだと呟つ。

「唯羽。本当にいいのか？」

「別に私がいれば大丈夫だ。いざといつ時は引っ張つてやる」

「お前の場合、その手を離しそうで怖い」

「そうかな。こぞといつ時のためにも、私に媚を売つておいて損はないぞ？」

自分で言つなよ。

今度、お菓子の差し入れでもしておこう。

人間、何事も、相手の袖の下に……が大事だと思います。

「……唯羽、まだ俺はここに近付いたらいいのか？」

「今はまだ、何も解決していない。死にたければどうぞお好きに」

「縁起でもない事を。まだ……どうこうことだ?」

唯羽と共に訪れた石碑の前で立ち止まる。

今日は何人かの参拝客らしき人も見える。

普通にしていれば、ちょっとしたパワースポットなのだ。

「古い木だねー、樹齢は何年くらいかなあ?」

前にいる女人達が楽しそうに笑う。

数日前に俺が引き込まれた場所だとは思えない。

「そういうや、和歌がこの場所がお気に入りだつて言つていたよ」

「あの子にとつてはこの場所は安心できる場所なんだ。ヒメの魂、つまりは紫姫に縁のある場所ゆえな」

唯羽は誰もいなくなつたのを見計らつてさらに奥へと進む。石碑の裏にはさらに森へと続く道があつた。

「こんな道があつたのか?知らなかつた」

「(+)から先は絶対に普段は近付くな。……柊元雪、手を差し出せ」

「へ?あ、ああ?」

俺は手を差し出すと、その手を唯羽は握り締める。

「いりしておけば引き込まれない」

「確信を持つて言えるのか？」

「……」

お願ひだから、黙り込まないで！？
不思議な雰囲氣のする森。
ジメツとした空氣が肌にまとわりつく。
唯羽と共に奥へと足を踏み出す。

「奥には何があるんだ？」

「ついてくれば分かる」

あまり何も語ろうとしない唯羽。
会話も少ないので不安だけが倍増していくぞ。

「前に唯羽が俺を助けてくれた時があるじゃないか。 その時に鈴の音がしたんだが、アレって何だろう？俺の空耳？」

「いや、これの事だろ？？」

唯羽が取り出したのは以前に部屋で見た鈴だった。

「それだよ、それ。なんだ、それは？」

「人が引き込まれるとき」に、どうすればいいか。 意識を田覚めさせればいい。 例えば、寝ている時に田覚まし時計の音があれば人は起きるだろ？ それと同じだ。 この鈴の音色がお前の意識をこちらに

引き戻した

田覚まし時計と一緒にって……そんな単純な原理だったのか。
確かに抗えないものに支配されている時はそう言つのも有効かも
しないが。

「それって、やつぱり特別なものだつたりするのか？」

「いや、靈験あらたかな“魔よけの鈴”と言つ風に見えてただの鈴
だ。お値段500円（税込）。椎名神社の売店で販売してる。月に
数十個は売れているようだぞ」

「マジッすか！？」

「ただの鈴に祈願をしただけなのに、『出合いを招く鈴』という肩
がきをつけられている。神社とはホントにじょったぐり商売だよ。私
はそういうセコイ所が嫌いだ」

「だから、唯羽はもつと神社側に立つて発言してくれ

この子は本当に神社側の田覚がないのが怖い。

そんな雑談をしながら歩くと、道の行き止まりまでくる。

「……だ。連れてきたかったのは……」

「なんだ？ ただの開けた場所でしかないぞ？」

「……地面を見てみれば分かる。何かが焦げたあとが見えないか？」

言われてみれば風化はしているが、地面には消し炭のような感じ

が残っている。

「今から10年前だ。ここには大きな社があった。だが、火災により焼失している」

「和歌から聞いていたが、ここにあつたんだな」

「……10年前の不審火。怪しいとは思わなかつたか？火の氣もないこの場所で、なぜ火災が起きたのか。その理由は……お前の記憶だけが知つている」

唯羽が俺の方を見上げて、真顔で呟く。
綺麗な顔つきに思わず見とれる。

「……俺の記憶？」

「そうだ。思い出せないだらうが、お前は10年前にもここにきている。まだ社があつた頃にな。そして、火災のあつた日、私は終元雪をここで発見した」

「え……へど、どういうことだよ？俺が放火したとでも？」

「そんなことは言つてない。子供だったお前は、ここで何かを見たはずだ」

「何かを見たつて……？」

俺は数日前の幻覚を思い出す。

「炎の記憶と、睨みつける女人の人　？」

「幻覚を見たと言つたな。私はお前の幻覚がどういうものかは分からなんだ。魂の色を見ても、何も分からない。お前の過去に、何があつたのかは知らない」

唯羽にも分からぬ事があるのか……そりや、そつだよな。

「だが、私が知つてゐる事はひとつある。それは10年前、燃え盛る社の中で私はお前の叫ぶ声を聞いた。なんとか中に入つた時にはお前は意識を失う寸前で倒れていた。そのまま、炎の中から救出されたのは私だ」

「お、おい、ちょっと待つてくれ？俺が炎の中にいたのか？」

「そうだ、お前はここにいたんだ。どうしてかは分からぬ。それから先、お前は記憶を失い、この神社にも無意識に近づくのをやめたからな。それなのに、今になつて呼ばれるよつてこの神社にお前は縁を作つた。それに私は興味がある」

唯羽が助けてくれなければ俺は死んでいた？

この今は何もない焦げ跡がかすかに残るこの場所で……。

「火災理由も分かつていない不審火。そこでお前は何を見たんだ？」

「わ、分からぬ……俺は何も覚えていない」

「何か思い出せないか？それが思い出せれば、私にも対処ができる」

「……すまん。何一つ、思い出せないんだ」

この場所の記憶すらもないのだ、社があつた記憶さえも。

「なるほどな。記憶障害……これも、やはり“呪い”なのか」

彼女はポツリと小声で呟く。

「は？呪い？呪いつてなんだよ？」

俺が思わず唯羽の肩を押さえて尋ねた時だった。

「あつ……ー？」

唯羽がいきなりバランスを崩すように俺にもたれかかってくる。はじめは何かの冗談かと思いきや、何か様子がおかしい。

「お、おい、唯羽ー？」

「…………違つ、私は…………私はつ……」

頭を押さえ込むように苦しむ彼女はそのまま、力なく足から崩れた。

「ううう……あつ……ー」

「ゆ、唯羽ー？お、おいつー！しつかりしつ、唯羽つ……？」

かつて社があつたその場所で、顔色を青ざめさせて唯羽が倒れた。俺の過去、その10年前に何があり、俺は何を見たのか。体調を崩し倒れた唯羽がここが尋常ではない事を証明している。「ここで一体、何があつたっていうんだよー？」

第37章・背中の温もり

【SIDE・柊元雪】

かつて、不審火で燃えたという社のあとを訪れた俺達。昼間なのに薄暗く、どこかよどんだ空気が漂う社跡。

今は地面がところどころで焼け焦げた後が微かに残るだけの場所こそが、10年前の火災が起きた社があつた場所だった。

俺は10年前にここで何を見たんだ？

炎の記憶、今は何も思い出せない。

だが、唯羽の話では10年前の俺はこの場所にいたらしい。何のために……？

そんな事を思案している中で異変は起じる。

「ゆ、唯羽……？」

いきなり唯羽は倒れるように俺にもたれかかる。

「大丈夫か、お、おいつ」

「…………」

この場所は危険だと唯羽は俺に警告した。

その意味を俺は実感がわいていなかつたのだ。ぐつたりと顔色を青ざめさせる唯羽。

俺は心配になつて彼女の身体を支える。

「……心配ない、ただの貧血、立ちくらみだ」

「え？ あ、いや、違うだろ？」

さすがにこの状況で立ちくらみだと言えるか？

貧血なんて先程までしてこんなふうには見えなかつた。

「本当に……普段から外に出ないからな。私の限界がきたようだ」

「どれだけ体力がないんだ。元スポーツ少女だつ。これくらいダメってど引きこもりで体力低下させすぎだー？」

「うるせー。私の過去の栄光など、今はもはや見る影もない

「自分で言ひちやつた！？」

「冗談まじりの会話をするが、唯羽は本当に辛そうにしている。それが体力切れなのか、この場所に影響されてなのかは分からない。

「とりあえず、ここから戻る。ほら、唯羽

俺は唯羽を背負つたためにしゃがみこむ。

「……なんだ？」

「唯羽。背中に乗れよ。家まで背負つてやるかい」

「必要ない。一人でも歩ける。つまらないおせつかいはやめや

「……無理をするな。つかまれよ。辛いんだろ？」

俺は無理やりでも唯羽をつかまらせて俺はここから逃げるみつに立ち去る。

唯羽は想像通りに同年代の女の子としては軽い。

「……柊元雪、あの場所には近づくな」

「分かった。でも、これだけは教えてくれ。10年前、どうやって俺は助かつたんだ?」「

唯羽の証言だと燃える社の中から俺はどうやって抜け出せたのか。

「私が助けたんだよ。今のようにお前を背負つて。いや、私も子供だからな。ほぼ引きずる形に近かつたが、こんな風に森を抜けた。あの時は必死だつたよ。お前を助けたい一心だつた

そのおかげで俺は唯羽に助けられたわけか。
だが、火事ならば人も大勢きたはずだ。

「そのあとはどうした?誰にも見つからなかつたのか?」

「ああ。森を抜けた先でお前は正気に戻つたように、ひとりで家に帰つてしまつた。全ての記憶を忘れたのだと思ったよ。その後は音さたなし、もう余うことないと思つていた。それがまたこの場所で出会う事になるとはな……」

今の俺には唯羽の事も、あの社の事も思い出せない。
だが、これだけは言つておきたかった。

「唯羽、ありがとう」

「……礼を言われる事ではないさ。私は“友達だった”男の子を守りたかつただけだ」

「だつた？」

「ああ。今は違うからな」

背中越しに唯羽はそんな風に寂しそうに呟く。

そうか、この子と俺は10年前は友達のよつに仲のいい関係だったわけだ。

彼女の話では俺はその事件の記憶を失っている。

唯羽にとっては裏切られたよつな感覚なのかもしれない。

「悪かつたな、全部忘れてしまつていて」

「別にいいや。それは終元雪のためでもある。忘れた方がいいことも世の中にはある。それほど、お前にとっても衝撃的な出来事だったんだ。そもそも、人生で数日間の出来事だ。気にする必要はない」「どうしても、恋月桜花のよつにたつた数日でも忘れられない思いもある。友達の事を忘れるつてのはいいことじやない」

俺が覚えてるのは唯羽は昔から占いの類が好きだった事くらいだ。

それ以上のこと�이いろいろとあつたはずなんだ。

「なあ、唯羽。俺達は友達じゃないのか？」

「友達？私とお前がか。何度も言つが、今は違うだろ？」

「唯羽……」

「それにお前は私にネトゲをやめさせようとする敵だからな。仲良くなはできないや」

俺はお前の敵になつた覚えない。

何かに悩み続ける唯羽の心の奥底にあるものは何なのか。
それを救つてやることは俺にはできないのか。

「敵じゃねえよ。俺は仲良くしたいぞ。唯羽、俺の友達だつて思つてるのに」

「やめておけ。私に深入りするな。私と友達になつてもメリットなどない。ただネトゲに人生を費やすだけの女だかな」

「その自覚があるなら少しは改善しなさい。『友達』としての忠告だぞ」

「…………」

俺の一言に唯羽なぜか黙り込んでしまう。

「どうした?」

「つぐづぐ柊[元雪]と言つ男は不思議な男だと考えていた」

「不思議? 唯羽にだけは言われたくないが」

「今私は過去の名譽も、築いていた人間関係も何もない。ネトゲのために自分で捨てたからな」

そんな大切な物を捨ててまでゲームしなくてもいいだろうに。違うのか、それを捨てるだけのことが本当に何かあつたのか？

「だが、お前は私の友人になろうとしてくれている。私にはそれが不思議だ。私には何の魅力もないのにな。過去の借りを返すためか、和歌に頼まれているのか？」

「そんな事を彼女が頼むわけないだろ。あの子はいつだってお前の身体の心配をしている。唯羽、俺は何度もお前に助けられた借りがある。だがな、そんなものはなしで友人になりたいと俺は思う。過去の俺達のようにな」

唯羽と友達だったのなら、また友達関係をやり直せるはずだ。別に深い理由もメリットとかそんな打算も関係ない。

俺は彼女と親しくなりたい、それだけだ。

「今からでもいいじゃないか。改めて言う。俺がお前の友達になる。だから、ネトゲで引きこもるのはやめて、学校にも行つて、今だけしかない青春を謳歌しようぜ。知ってるか？俺と唯羽は同じクラスで隣の席同士なんだ」

「そうなのか……？」

「ああ。俺の隣はいつも誰もいなくて、その子が病弱だったて聞いて俺は心配していた。早く来れるようになつて欲しいって。まあ、それが唯羽で理由がネトゲだった時はショックだったんだけどな」

噂の篠原さんはまさか唯羽と同一人物とは思わなかつたが……。

「柊元雪、お前は会つたことのない人間を心配してくれていたのか？」

「ああ。クラスメイトとして心配してた。留年が近いとか噂されていて、早く来てほしこと願っていたよ」

しばらく黙りこむ唯羽だがやがてこう言つた。

「お前は本当に変な奴だな。少しだけ考え方させてくれ……友達の事も、学校の事も……」

彼女にしては珍しく前向きな回答がえられた。
これは他人にとつては小さな一步に見えるだろうが、唯羽にとっては大きな一步だ。

「分かった。期待しておくな」

懐に入らないと分からぬこともある。
俺は唯羽をもつと知りたい、恋愛つて意味ではなく、友達となる。

唯羽を背負いながら、俺はようやく「神木のところまでやつてきた。

後ろを振り返ると、近付きにくく雰囲気がある。

「なるほど。雰囲気からしてやばいのは分かる。今まで意識しなかつたけども、そこに社に行く道はあつたんだな」

「意識しなければ気付かない。いいや、違うな。気づけないと書つた方が正しい」

俺の背中につかまる唯羽は弱々しい声で囁いた。

「終元雪。もしも、運命の相手がヒメではなく私だとしてもお前は惹かれていたか？」

「へ？ それは……」

「……冗談だ、氣にするな。深い意味はない。それよりも、早く家に連れて行ってくれ。多分、滅多にしない早起きをしたせいだな。昨日も早めに寝たし。人間、生活リズムを変えると体調を崩すものだ」

「いやいや、その生活リズムが間違っていることにまず気付け」

俺の言葉に苦笑する唯羽。

運命の相手がヒメではなく、唯羽だったら？

その言葉に込められた唯羽の想い。

背中越しに伝わる唯羽の温もりだけを俺は感じていた。

唯羽は和歌の家に着く頃には本格的にダウンしてしまい、本日は解散となつた。
家には和歌がいたので彼女にあとは任せて、俺は帰る事にした。
「引きこもりに無理をさせすぎたか」

ホントにただの体力不足で倒れたのだろうか、心配だ。

俺にはどうしても、あの場所との因果関係を考えてしまつ。

かつて大きな社があつた場所、10年前の焼失の時に俺はあの場所にいた。

「何かがあつたのは間違いないんだけどな

悩んでも解決はせず、俺はひとり家までの道を帰る。

「なにはともあれ。関係は前進したからいいか。これで唯羽がちゃんと学校に通えるようになつてくれたらいいんだけどな」

今はまだそこまで期待はできない。

けれども、唯羽と親しくなれて彼女の事が分かり始めた。唯羽は決して、他人に興味のない冷たい人間ではない。和歌が以前に言つていたように“優しい”女の子なんだろ。時にその優しさに自分自身が傷つくことがあっても。

「……友達だった奴にいきなり忘れられるってどんな気持ちだろうな」

幼い頃の唯羽はある程度の事情を知り、受け入れて、俺が去つていくのを見ていたのではないだろうか。

だとしても、当時の唯羽の寂しさは……想像に難くない。

「唯羽も言つていたが、あの時に何が起きたんだろうか」

俺は自分の身に起きた出来事を思いだせない事が不安になる。

10年前のあの日……あの場所で何が起きたのだろうか?

それを思い出せた時、俺と唯羽の関係も何か変わってしまうのか。

第38章・今、Uの瞬間を

【SHIDE・柊元雪】

日曜日の朝、俺は和歌と待ち合わせていた。
デートの約束をしているのだ。

最近は唯羽にばかりかまつっていたので、和歌が寂しく思うような
事があつてはいけない。

俺達は恋人なんだからな。

デートと言つても、これが初めてなんだよな。
ホタル観賞は兄貴達と一緒にだつたし。

駅前で待つていると見知った顔が駆から出てきた。

「ん？ 桜か、最近は外でよく会うつな？」

「なんだ、黒沢かよ。お前はまだバイトか？」

「おうよ。今日もしつかり稼いでくるぜ。お前は彼女とデートか？」

「ああ。その予定だ。黒沢、何だか顔色が悪いようだが？」

「どーとなく、寝ていないとこった顔をする黒沢。

「いやあ、ネトゲだよ、ネトゲ。前にも話しただろ、凄腕プレイヤー
ーがいるって話だ」

「ああ、生きる伝説がどうのこうのって、あの話か？」

「そのプレイヤーとまたクエストを組めてな。いやあ、参った。実

力を改めて思い知られたよ。結局、昨日は徹夜だった

「ネトゲねえ、唯羽もそつだがそんなにハマるものなのかな。

「そのネトゲにもよるだろうが、今やつてるゲームは楽しいのか？」

「楽しげだ。そのＲＰＧはキャラがカッコ良かつたり、可愛かつたりして、女の子にも人気でな。うちのクラスの女の子も何人かやつてる人気ゲームだ。気になるなら、お前もやってみればいいぞ」

「ふむ……よく分からん世界だ」

「ははっ。でも、やすがは“嵐の魔女、キヤサリン”って呼ばれているだけあってす」かつたよ。まさか、ひとりで上位レベルのドラゴンを瞬殺するとは……並大抵のプレイヤーじゃ逆に瞬殺されてしまつからな

「嵐の魔女、キヤサリン……はて、キヤサリンってどこかで聞いたよつな？」

「……あつーキヤサリンって唯羽かつ！」

唯羽が自分をキヤサリンだと呼んでいたのを思い出した、最初はキヤサリンって名乗つていたくらいだ。
確認はしていないが、アイツもかなりのやりこみ具合だし、ほほ間違いないだろう。

ネトゲＲＰＧの世界で生きる伝説と呼ばれる嵐の魔女、キヤサリンは唯羽だという事実につなだれる。

そもそも、昨日、倒れたくせに徹夜でゲームとは……どこのまで依存してるのや。ひ。

「どうした、柊？」

「いや、何でもない。世間は思いの他、せま」と思つただけさ」

唯羽からネトゲを切り離すのはどれだけ難しいのだ。

ちょっとそんな事を不安になりつつ、俺は黒沢と別れた。

「お待たせしました、元雪様」

その後、和歌と合流した俺は初デートに期待を膨らませる。

「ああ。今日はどこに行こうか？」

「元雪様とならいでもいいですよ」

「……と言われてもな。俺もデートらじこ『デートなんてしたことがない』

「そんなに気負わなくとも、私は元雪様と一緒にいられるだけ幸せですから」

デート初体験同士、ここはのんびりと行くとしよう。
和歌の方から腕を組むような形で身体を寄せてくる。

……恋人つて本当に良いですね！」

俺達は本当に特に目的地を決めることもなく繁華街を歩いていく。
普段と違つて和歌と一緒にいろんなことが楽しく思える。

見える世界が変わっていくと言う奴だろうか。

しばらくして、いろんなところを回った俺達は喫茶店で昼食を食べていた。

和歌はホットケーキに甘そうなシロップをかけながら嬉しそうに言つ。

「このホットケーキ、美味しそうですね」

「……女の子の好きそうな感じだよな。フルーツも乗ってるし」

俺は腹がすいたので、オムライスにしておいた。

「それにしても、和歌があんなに歌が上手だとは……しかも、流行のアイドルの曲を歌えるなんて思わなかつたぞ」

「ふふつ。意外でしたか？」

あれから和歌とふたりでカラオケに行つたのだが、これがまた和歌の歌声の綺麗なこと。

声色が綺麗なだけあって、ホントに歌手みたいな歌唱力がある。

「元雪様も、私の知らない歌でしたけどお上手でした」

「まあ、俺は適当に好きな男性歌手の歌を歌つただけだから。和歌は知らないだろ?」

あとでちょっと後悔、恋人といふ時は相手も知っている歌にすればよかつた。

俺はオムライスを食べながらふと気になつた事を聞く。

「そりゃ、カラオケの時に和歌は俺の声を聞いて何か言つてなかつたか？」

「良い声だつて思つただけです。声を出すことは富司にも必要なんですよ」

「あー、祝詞だつて。おじさんからもいつかは覚えなきゃいけないつて聞いてる」

祝詞つて言うのは神職が神事とか結婚式で読むやつだ。

おじさんに書いてる紙を見せてもらつた事があるが、アレを暗唱するには大変だろう。

書かれていた漢字ばかりだつたのでふりがなないと読めないと書いた。

アレを全文覚えるのは大変だ……まだまだ神職になるには道のりが遠そうだな。

「祝詞に限らず神道は言靈を大事にします。言靈の力。元雪様もいすれば祝詞を覚えてくださいね」

それも和歌のために俺が選んだ道だ、頑張りましょ。

食事を終えた俺達は近くにあるゲームセンターにやつてきた。

「和歌はこういう場所は初めてなのか？」

「そうですね。お父様もあまりこういう場所には連れてきてくれま

せんでした。悪い人がいそうなイメージがありますから

「今は不良のたまり場つて言つより、意外とお年寄りがいたりするんだぜ。プリント系とかは女の子が集まつてゐるし」

休日なのでカップルで遊びに来ている子達も多い。

「定番のiTFTのキャラだな。こいつらぬいぐるみは好きか?」

「可愛いものは好きですよ」

一見、和風な印象の和歌だが、ファンシーな物が好きだつたり、ケーキが好きだつたりと今時の女の子らしい一面もある。ただのイメージの思い込みなだけなんだよな。

「何か欲しいものでもあれば、取つてあげよつか?」

「ホントですか?」

「ああ。iTFTのキャラは得意なんだ」

「それじゃ、これとか取れます?」

和歌が指をさしたのはウサギのぬいぐるみだつた。

今、女子高生の間で流行つてゐる「かまつてくれないと拗ねるウサギ」、通称、「かまうさ」と呼ばれるキャラクターのシリーズだ。拗ねてる表情が可愛いと評判らしい。

「いいよ。かまうさ相手なら不覚はない。さて、やりますか」

恋人の田の前なので、やる気もヒヤ。俺は手慣れた手つきで、ボタンを押しながらタイミングを見計らう。

「白と黒のウサギがいるけど、まずは黒の方が取りやすいか」

和歌が指をさしたのは白い方だが、前の黒色が取った方が取りやすいです。

「はい、まずは黒ウサギ。次は……この角度からの方が狙いやすいな」

あつさりと取れた黒ウサギを和歌に手渡すと、白ウサギの攻略に入る。

アームで挟んで取るには場所が悪い、こじはひつかけてみるか。最初の一度失敗はしたが、2度目はヒモに引っ掛け取りれた。

「はい、どうぞ。和歌が気にいってくれると嬉しいな」

「ありがとうございます、元雪様。そうだ、こっちの黒いウサギの方はお姉様にあげてもいいですか？ああみえて、お姉様もぬいぐるみとか好きなんですね」

「へえ、唯羽が？あの部屋には置いてなかつたけど？」

「実家のお部屋はぬいぐるみだらけだそうですよ。お姉様もこいつらぬいぐるみを取るゲームが得意だそうです」

あの唯羽ならありえそうだ。

基本的にやる気さえ出せば才能もあるし、ハマると怖いほどに力

を発揮する。

スポーツをすれば全国制覇、ネットをすれば生きる伝説。

後者はホントに才能の無駄遣いと言いたいが……何でもやれば一
流、ホント、もっとやる気を出してくれ。

「お姉様は元雪様に出会ってから変わりました。雰囲気も柔らかく
なりましたから。以前のお姉様に戻りつつある気がします」

「ネットゲ廃人になる前？」

「中学生の頃のお姉様は面倒見も良くて、皆さんから慕われていた
んです。誰もが憧れるような人だったのに、今は家にこもってしま
っています。お姉様の心を私は分かつてあげられませんでした」

和歌はぬいぐるみを抱きしめて囁いた。

「お姉様の自分の事を理解してもらえる人を求めていたんだと思いま
す。そして、元雪様と出会い、お姉様もよつやく誰かに頼れる相
手を見つけられたんだと思います」

「そういうものか？まあ、俺といふ時の唯羽は自然体に見えるが…

…

「はい。だから、これからもお姉様をよろしくお願ひしますね」

俺と触れ合いで少しづつ唯羽が変わりつつあるのは良い事だと思
う。

俺にどこまでできるか分からないけどな。

「もちろん……恋人である私も元雪様には甘えていきたいです」

「うん。和歌には甘えてもらえると俺も嬉しいぞ」

可愛い恋人がいてくれるのはそれだけで和む。

俺達はその後もカツプル向けのプリクラに挑戦したりしてゲームセンターを楽しむ。

和歌との初めてのデートは繁華街を回るだけのものだったが、とても満足できた。

恋人がいるってことはこんなにも良い事なんだな。

デートを満喫した俺は和歌を神社まで送ると、考えていた作戦を話す。

プロジェクトDは最終局面を迎えた、ファイナルフェイズを実行する。

「明日は唯羽を学校に誘つてみようと思つ」

「お姉様をですか？でも、お姉様は……」

「いい加減、ネトゲから引き離さないといけない。やめろとは言わないが制限させる事くらいはできるはずだ。アイツに普通の生活をさせないと痩せ細つたままだしな。健全な生活に引きもどしてやる」

「……お姉様のこと、心配してくださっているんですね。元雪様は本当に優しいです」

俺がアイツを心配するのは身体の問題だけじゃない。

唯羽は俺を何度も助けてくれている。

それは最近のことだけでなく、10年前の事もそうだ。

他人を想うこととはできるくせに、唯羽は自分をもつと大事にしろといいたい。

「和歌の言つとおりだつた。唯羽は優しい子だよ。だから、俺もアイツを変えてやりたいと思つた。今ままじゃダメだ。唯羽も、夏を前にして変わってくれることを期待している」

「私に出ることなら協力しますね」

「ああ。和歌の協力も不可欠だ。まずは明日の朝だな」

唯羽が留年するか、しないかの瀬戸際だ。

何としてもこのプロジェクトには成功させないと云ひない。唯羽のためにも、俺達もできる限り頑張るつ。

第39章・笑顔のキミに

【SIDE・柊元雪】

和歌との出会いから2週間。

この2週間は長く、そして俺にとつて、大きな意味のある出会いをもたらせた。

和歌と唯羽、2人の出会い。

恋人である和歌はもちろんだが、唯羽との出会いも俺にとつては意味があった。

彼女から教えられた俺と和歌の本当の関係。

俺達の前世は数百年前の戦国時代の影綱と紫姫だということ。そして、10年前に俺は椎名神社の火災に巻き込まれていたこと。それらがすべて真実かどうかは分からぬ。

謎は謎のままで何一つ明らかにはなっていない。

だが、俺達が出会った時も感じた特別な縁は本当の意味で繋がっているかもしねりない。

月曜日、俺はいつもよりも早く登校への準備をしていた。リビングに降りると、兄貴達が出勤の支度をしている。

「……元雪、今日は早いな

「まあね。兄貴も毎朝、早いから大変そうだ」

俺も兄貴同様に朝食を食べる事にする。

せつせと食べて、唯羽を迎えるにいかなくてはいけない。

「今日は何かあるのかい？」

「んー、引きこもりの友人を学校に連れ出す計画だ」

「引きこもり？」

「唯羽って言う、和歌の従姉。彼女の家に同居してる子なんだけど」

兄貴も一週間前に和歌と会つてるので、和歌の事は知つていて。
「へえ、従姉の子も一緒に暮らしているのかいのか？ 可愛い子かい？」

「色々と残念な性格をしているけど、美人な子だよ」

「和歌さんもずいぶんと綺麗な女の子だし、可愛い子に囲まれて元雪が羨ましい」

唯羽も見た目だけなら一流の美少女なのに、ホント残念だ。

「あらあ、気になる発言ね。誠也さん、ユキ君」

「麻尋？ い、いや、可愛いとか気になるのは別に変な事じや」

「そつだよ、麻尋さん。別に浮気発言でもないし」

俺たち兄弟は麻尋さんの登場にびびる。

「ふーん。誠也さんが女の子と言えば、可愛い子なんか気になるのもどうかと思うし、コキ君は和歌ちゃんがいるのに……」

「『』誤解です。おつと、いけない。俺はもつ行くよ」

「あつ、『』、『』、元雪一僕も、そろそろ、仕事の準備を……

すまない、兄貴。

麻尋さんは兄貴の嫁なので自分で頑張つてくれ。

「ま、麻尋？なんか怒つてる？」

「別に怒つてないわよ。誠也さんも真面目な顔をして男の子なのねえ、とか思つてないし。綺麗な子が気になるのも仕方ないのかも、とか。実は会社でも新人の子に言い寄られている事を聞いてる、とか。……いい機会だからお話しよ、誠也さん？」

「……は、はい」

麻尋さんは朝から不機嫌な顔を見せて兄貴に迫つてゐる。
頑張れ、兄貴……俺はそんな兄貴を応援してます。

「い、いってきます～」

俺は逃げ出すよつに、リビングから抜け出して和歌の家に向かつ
事にした。

朝の7時15分、和歌の家に到着。

普段なら全然早い時間だが、今日は和歌が家の前で待ってくれていた。

「おはようございます、元雪様」

「ああ、おはよう。唯羽の様子はどうだ?」

「いつも通りみたいです。お母様が朝食を食べに来たお姉様を見かけたそうです。それに、話では昨日はちゃんと夜には寝ていたようです。これは、お姉様も学校に行く気があるのかもしれません」

「それはどうかな。アイツも自分に素直な子だから」

「ここまできたら、唯羽を無理に説得しても、不登校をやめさせる。

プロジェクトD、最終局面……ファイナルフェイズを開始する。俺は和歌の案内で唯羽の部屋の前へとやってきた。もしも、中で着替え中だつたりする場合を考え、最初に部屋に入る時は和歌の役目だ。

「お姉様、朝から失礼します」

和歌は扉をノックして開けて中をのぞく。

「お姉様?……あれ?」

「どうだ、和歌?」

「元雪様。それが……お姉様が部屋にいません」

和歌が不思議そうに言つので、俺も部屋をのぞきこんだ。
そこにはいつもパソコンと布団があるだけの部屋だ。
どこにも、唯羽の姿はなかつた。

リビングには既にいなかつたので、まだ部屋には戻つていないと
言つ事か？

「ここにいなつてことは、社務所の方か？」

「さうかもしませんね。この時間なら可能性はあります」

朝からおみくじ作りをしているのかもしれない。
俺達はそちらの方にも向かつてみる。
だが、社務所も鍵がかかつたままで誰もいない。

「……お姉様、いませんね？」

「まさか、逃げたか？俺達の行動を予測していたのかもしれない」

「そこまではしますか？」

あの唯羽ならしかねない。

「ちなみに唯羽を最後に見たのはいつだ？」

「昨日は元雪様のデーターもあつましたから、見ていません。私が最
後に見たのは一昨日になります」

「調子を崩した時以来か。おばさんの話では今朝はここにいたのは
間違いないんだろう？どこにいったんだ？」

唯羽を探してついでにちよりとするが、神社のどっこにも姿はない。

「唯羽はどこに消えたんだ？」

「もしかして……」

和歌は心当たりがあつたのか、自転車置き場の方へと俺を誘う。

「家にも社務所にもいない。だとしたら……」

「他に唯羽の行きそうな居場所があるのか？」

「可能性は少ないので、唯羽お姉様の実家かもしません。ここから自転車で10分程度離れています。でも、現実問題として、お姉様が実家に戻る可能性は低いんですね」

俺達は唯羽搜索をしようと和歌の家の自転車置き場にたどり着く。だが、そこには既に先客がいた。

「遅いぞ、ふたりとも。私を待たせないでくれ」

爽やかな風に髪がなびく。

だが、そこにいた少女は俺達が知っている彼女の髪色ではなかつた。

「ゆ、唯羽……！？」

ミニスカートの制服姿の唯羽が自転車置き場に立っている。驚くべきなのは、その髪型だった。

先日までセミロングの黒髪だった唯羽は茶髪のツーサイドアップに髪をまとめた。

印象的なのは髪色が黒から明るめの茶色に変わっているところだ。唯羽や和歌は黒髪がよく似合っていただけに、かなりのイメチェンと言える。

「ゆ、唯羽？髪を染めたのか？」

「……久々の登校だからな。少し気合いをいれてみた。どうだ、似合つか？」

「ああ。びっくりしたけど、唯羽によく似合っているよ」

暗い雰囲気を持つ唯羽の印象を大きく変える印象を受ける。昨日のうちに美容室に行き、髪を染めて髪型を変えたんだわ。お姉様の変化に驚きましたけど、学校にも行く気になられたんですか？」

「そうだ。わざわざ、朝早くから実家に制服を取りに行つてきた。妹達からも驚かれたけどね」

唯羽の制服姿なんて初めてみるが、和服以外にも洋服も似合っている。

それに今の髪の毛の雰囲気では女子高生らしくも思える。

「私はネトゲをしている方が好きだよ。人の多い所に行くのは今も気は乗らない。だが、私には“友達”がいる。友達から学校に行けと誘われたのだから、無視もできまい」

「唯羽……」

一昨日の俺がした質問の答え、唯羽は出してくれたのだ。自らの意思で学校に登校すると決め、彼女は俺を友人だと再び認めてくれた。

「私たちは友達なんだから、柊元雪？」

「当然だ。せっかくの高校生活、青春の謡歌を楽しむなきやな。ネトゲも卒業か？」

「ネトゲをやめたわけではない。どうせ、しばらくすれば夏休みにもなる。今はただ、ネトゲといつ“仮想現実”よりも“現実”を楽しんでみよつと思つたのさ」

唯羽そつと俺に近づくと身体をすり寄せる。

「いろいろと頼りにしているよ、柊元雪」

思わぬ彼女の行動にドキッさせられる。

その態度に俺よりも先に和歌が反応を見せる。

「な、なつー? お、お姉様?」

「どうした、ヒメ?」

「元雪様に何をしてるんですかー! そ、そんなに近づかなくてもいいじゃありませんか」

「別に? 友人としての距離だ。これくらいが普通だろ?」

和歌は啞然とした表情を浮かべながら、俺に寄り添う唯羽に抗議する。

「ち、違います。お姉様、それは友達の距離じゃありません～」

「そつか？私には普通の距離感に思えるが

「近すぎですつ。うう、私の元雪様を取らないでくださいつ」

しつと唯羽に和歌は抗議するが、そんなものは彼女に通じない。

「ふふつ。行こうか、柊元雪」

そう言つて、唯羽がふつと笑つ。

彼女の本物の笑顔はとても綺麗で、俺はその笑みを初めて見た。

「……ああ、行こう。ほら、和歌も拗ねてないで行くよ」

「うう、元雪様。お姉様は私のライバルになりうるかもしません。お姉様、元雪様が優しいからって惹かれてませんか？ダメですよ、私の大切な人なんですつ！」

「分かっているよ。だけど、ヒメ。私にとつても柊元雪は大切な人だからね」

「え？え？ど、どういうことなんですか、お姉様！？元雪様！？」

和歌の悲痛な叫びと、唯羽の明るい笑い声が朝の椎名神社に響く。

「……こんな風にまた学校に行く日がくるとはな」

蒼い空を見上げて微笑む唯羽。

彼女の抱える心の闇や問題がすべて解決したわけじゃないだろ？
だが、こうして唯羽は最初の一歩を踏み出した。

「くすっ。せいぜい、私を楽しませてくれよ。終元雪？」

その横顔はとても晴れやかな笑顔だった。

そして、俺と和歌、唯羽の3人が揃う事で、本当の意味での新たな日常が始まったんだ。

【 1 SEASON END 】

第39章・笑顔のキミに（後書き）

恋月桜花、第1部、終了です。第2部からは前世の話へ。物語の核心に近づいていきます。元雪、和歌、唯羽。この3人が出会ったことの意味とは？

第40章・唯羽、復活！

【SHIDE・柊元雪】

新たなる日常。

唯羽の学園生活の復帰。

ついにネトゲ廃人をやめ、彼女は再び学校に登校する事になった。

「それでも、髪まで染めてくるとはな」

「気になるものか？私は気にいつてるけどね」

唯羽は黒髪のイメージが強かつたからな。

今のように茶髪になると、イメージが変わる。

もちろん、美少女であると言つ事實が変わることはない。

「……髪や見た目なんて、ゲームのアバターと一緒に気分次第で変えられる」

「ゲームと一緒にするな」

やはり、ネトゲ依存の一面はまだ変わっていないかも知れない。
まあ、じつして学校に出てこようとする気持ちになつてくれただけマシだ。

プロジェクトD、無事に達成をした事を喜ぼう。
教室に入ると、唯羽の存在に大きくざわめく。

「綺麗～、あの子、誰だ？」

「え？ もしかして、篠原さん？」

「嘘！？ すぐイメージが変わったかも」

かつて、同じクラスだったのか、唯羽の事を知ってるクラスメイトは何人かいた。

彼女たちは唯羽に近付いて挨拶をしてくる。

「久しぶりだね、篠原さん。イメージ、全然違うからびっくりしたわ」

「……せっかく、学校に出てこられるようになったからな。少し変えてみた」

「身体の方はもう大丈夫？ 病気でずっと休んでいたんじよ」

「大丈夫だ。辛かったが、闘病生活も終えた。もう、普通の生活ができるよ」

闘病生活してる人に謝りなさい。

全然違います、昼夜逆転生活でネトゲをずっとしてただけです。

「本当？ よかつたあ。留年しちゃう噂もあって心配してたのよ」

「ありがとう。心配をかけたが、これからは普通に通える。ただ、病院に長くいたせいでこんなに瘦せてしまったけどね」

「うわあ、腕細い……。本当に大変だったんだね、篠原さん」

だから、ネトゲしてただけだっての。

その痩せ細つた身体は病院生活ではなく、自堕落なネトゲ廃人生
活の代償だ。

真実を声に出して言いたかったが、ここは我慢しておこう。

心配してくれるクラスメイト達に囲まれる唯羽。

……俺が思つてゐるよりも、唯羽は皆から慕われていたらしい。

「篠原さん、ようやく来たのか」

黒沢が隣の席に唯羽を見ながらさう言った。

「……唯羽を学校に連れてくるのに苦労したが

「唯羽?なんだよ、名前で呼んでる仲か?どこで知り合った?

「俺の恋人の家に同居してる従姉なんだよ。まさか、病弱クラスメイトの篠原さんと同一人物とは思つていなかつたが

そもそも、唯羽は病弱じゃないからな。
肩をすくめて答える俺に黒沢は笑う。

「そうだつたのか。でも、よかつたじゃないか。こうして、また学校に来れて。篠原さんの事を終も心配していたんだろ」「

「まあな。……結果オーライか。それにしても、唯羽は何気に入望
があるのか?」

「女の子にはそれなりに。面倒見のいい性格だし、姉御肌っていう
のか、女の子としては頼りにしたくなる存在だそうだ。今でこそ病
気がちだが、中学時代はテニスをしていて、全国区のプレイヤーだ
つたそだぞ」

「知ってる。唯羽は器用で頭もいいし、要領もいい。やる気になればなんでもできる、天才タイプなんだよな。……それがネットゲ三昧だとは才能の無駄使いだ」

そして、何より料理がうまい。

……唯羽の手作りの料理はまた食べてみたいです。

「そうだ、黒沢。お前がやつてたネットゲ、嵐の魔女とか呼ばれたプレイヤーがいただろ」

「嵐の魔女、キャサリンか？ああ、生きる伝説だな。それがどうした？」

「ま、マジックすか！？」

黒沢の驚きっぷりが半端ない。
そこまで驚く事なのだろうか。

「本人が認めたから間違いない。暇つぶしにネットゲをしてたんだと

れ」

「そつかあ。身体が悪いと外にも出られないからな」

ホントは身体はどこも悪くないけどな。

ただ、ネットゲにどっぷりはまつていただけで不健康な生活をして、
ああ見えるだけだ。

唯羽はハマれば何でもすごいんだよな。

「でも、篠原さんが本当に嵐の魔女なのか？」

「気になるなら本人に聞いてみろ」

「お、おう。そつする……篠原さん、ちょっとといいか？」

黒沢が緊張した面持ちで唯羽に話しかける。

「篠原さんってネトゲで嵐の魔女、キヤサリンって呼ばれるプレイヤーなのか？」

「ん？……ああ、キヤサリンは私の使っているハンドルネームだが？確かに……前に同じクラスだった黒沢君だったな。あのゲームをしているのか？」

唯羽が認めた瞬間、クラスのざわめきはMAXになる。

「なんてことだ……伝説のプレイヤーが俺の目の前に！」

「嵐の魔女！？ウソでしょ？」

「えー？ホントに？篠原さん、あのキヤサリンなのー？」「——」

女の子からも驚嘆の声。

どうやら女の子にも人気のゲームだと言つのは本当らしい。

その後は、唯羽はネトゲをしてるクラスメイト達から尊敬のまなざしで見られながら、クラスにあつという間に馴染んでいた。

ゲームがきっかけと言つのもなんだが、唯羽の性格ゆえのところもあるだろう。

最初は冷たい印象を受けるかもしれないが、接してみれば優しさや温かさが分かる。

唯羽つて女の子はあらゆる意味で、すうじ子だと思ひ。

電撃的に学園生活復帰をはたした唯羽。

昼休憩になる頃には唯羽の周囲にはネットをする生徒から尊敬と憧れから、取り巻きができていた。

まったくもって、俺が心配するまでもなかつたようである。

唯羽自身も人と接するのは苦手と言つていたようだが、ゲームといつ共通話題があるためか比較的彼らとは話しもはずんでいるように見える。

ネットも全てが悪ではなかつたといつ事か……何事も限度が大事だと言う事だな。

昼休憩に、俺は屋上で和歌と食事をしていた。

「お姉様、そんなに人気なんですか？」

「クラスメイトの大半とはすっかり打ち解けてるが。なにはともあれ、無事に皆と仲良くやれていてよかつたよ。また不登校になつたらだじつじよつて思つていた」

「はい。でも、元雪様はお姉様に優しすぎる気がします」

「そ、そつか？」

「お姉様が学校に来れるようになったのは良いことですけど、何だか複雑です」

どこか拗ねた口調の和歌。

今朝の件でどうやら唯羽に警戒してゐるらしい。

「心配しなくとも俺は和歌一筋だから……」

「本当ですか？浮氣とか、しないでくださいね」

今にも捨てられそうな子犬が浮かべる表情をする和歌。あまりにも可愛かつたのでつい抱きしめてしまつ。

「あっ……元雪様。人に見られてします」

「俺が和歌を大事に思つてるのはホントなんだから。いつでもしないと和歌は信じてくれないだろ？」

和歌は照れ屋で、すぐ赤くなるのが可愛くて。

俺達が2人つきりの世界を満喫していると、背後から声がする。
「……そこ、私が入りにくい雰囲気を作らないでくれ。あまり見せつけると呪うよ？」

「調子に乗つてすみませんでした。ちょっと恋人っぽい雰囲気にひとりたかつただけなんだよ。……それで、唯羽。目的のパンは買えたのか？」

「人が多かつたが、なんとかな」

唯羽は昼食を買いに出かけていたのだ。

この時間の購買は人が多いから大変だつただろ？

「明日から面倒だが自分で弁当でも作るといひ」

「唯羽の手作りか……アレはよい味でした」

「元雪様？」

「ん？あ、いや。何でもないよ。あはは……」

思わず苦笑いで誤魔化す。

和歌の前ではこいついう話題はやめた方がよさそうだ。
女の子に立場が弱いのは我が家のか家系か。

「唯羽の昼飯はメロンパンか？」

「これが好きなんだ。ボロボロとこぼれるのだけは嫌いだが」

「……湿氣てるといふか、しつとりしたメロンパンは蛇道だい？」

「確かに。それは言えていた」

唯羽はメロンパンを食べながら頷いた。

「お姉様。久しぶりの学校はどうでしたか？」

「まあまあだな。思っていた以上に受け入れられていい」

「……ネトゲのおかげだと云つのが何とも言えん」

「ふつ。話題が合つとこつ意味では私は気が楽だよ。それに、魂の

色も意識せずに済んでいいからな。こんな状況が続くのなら、また学校にも通えそうだ」

唯羽からの前向きな言葉にホッとする。

最悪のシナリオは『やつぱり学校に行かず、ネットゲする』と言う事だ。

それだけは何としても避けでもらいたい。

「授業の方はどうなんだ?はたから見ている限り、ついていくてる
ように見えたが」

「学力は当然下がっているよ。まあ、適当に頑張れば適当にじつ
でもなるわ」

「適当じゃなくて真剣にすれば、天下も狙えるのこ……」

もしも、唯羽が本気になつたら何でもできるのこもつたいない。

「……どうかしたか、終元雪?」

不思議そうにメロンパンを食べながら「いかつを見つめる唯羽。
俺は「何でもないよ」と苦笑いをしながら答えたんだ。

【SHIDE・椎名和歌】

満月と満開の桜が目の前に広がっていた。
私の隣には見知らぬ男性が微笑んでいる。

「今宵の月は綺麗だ。お前もそつ思わないか？」

「本当ですね、とても綺麗です」

夜桜を照らす月明かり、美しさに魅入ってしまう。
この桜は……」神木の桜の木によく似てる気がする。

でも、ここはどこなの？

私が座っているのは神社の建物だけれど、見覚えがない建物なので不思議に思う。

「……あつ……」

それでも、私にはひとつだけ分かつている事がある。

“私”はこの男性を“愛している”と言つ気持ちだ。
どうして、私は彼を愛しく思うの？

貴方は誰なの？

疑問に思いつつも、私は声を出せなかつた。
桜を眺めながら、寄り添つふたり。

私は不思議な気持ちになりながら、散る桜を見ていたの。

「……ふわあ」

私は小さく欠伸をしながら、田が覚める。
今のは夢？

「ここ最近、妙に変な夢を見ている気がする。
夢の事だから、覚えてる事は少ないけども。
桜の花を誰かと二人で見ていた、そんな記憶が残っている。

「恋月桜花の伝承を意識しそぎてるのかな」

小さな頃から好きだった物語。

元雪様と出会ってから、私はここにこの夢をよくみるようになつた。
それが何かの意味を持っているような気がしてならない。
お姉様に相談してみようかな。

「あら、お姉様？今日はお弁当作りですか？」

キッチンに向かうと唯羽お姉様が料理をしている最中だつた。
最近は学校にもちゃんと行つてくれるようになつた。

元雪様のおかげだけど、少しばかり複雑な心中ではある。

……お姉様つて、元雪様に氣があるのかも？

なんて思つてしまつたりするくらいに、お姉様も元雪様に心を許
しているみたいだし。

「自分のために料理をするのは面倒なんだけれどね。ついでだ、ヒメ
の分のお弁当も作つていい。ヒメは苦手なものは辛いもの以外はな
かつたよね？」

「あ、はい。あつません。ありがとうございます、お姉様」

「ふつ……かまわないよ。ただのついでだから」

「面倒くさい」と何事にも興味をあまり持たないお姉様だけ、優しい人ではある。

優しすぎるがゆえに、自分が潰れてしまつこともあるみたいだ。

「お姉様の料理は私も好きですよ」

「そうか。それならよかつた。先日、柊元雪にも手料理をふるまい機会があつてね、その時も彼にも気にいつてもらえたようだ」

「……へ、へえ、そうだったんですねか」

何だらう、このチクチクとした小さな胸の痛みは……。

元雪様もお姉様の料理を食べたんだ。

きっと、味がとても美味しくて、気にいつたはず。

私の料理は基本的にお姉様から教えてもらつたもの。

それゆえに、師匠である彼女の味はまだまだ超えていない。

もしも、元雪様に味比べされたら……ちょっと凹むかもしねり。

「お姉様は本気を出せば何でもできるからすゞいですよね」

「それは私を過大評価しそうだ。私は何でもできる人間ではないよ

「そんな事ありません。お姉様はやればできる子なんです

「……やればできる子と云つのは何にもできない子の意味合いが強いのでやめてもらいたい。そこまでひどくないぞ」

苦笑いを浮かべるお姉様。

話しながらも、器用に卵焼きを包んでいく。

「そうだ、お姉様。相談にのってもらいたいんです。お昼にいいですか？」

「別にかまわないよ。ヒメが私に相談か。人生相談はこんなダメ人間の私にしても無駄だし、恋愛相談は経験がほとんどない私には難しい。まあ、恋愛成就くらいならお呪いで何とかするが？」

「恋愛相談の悩みだつたらどうします」

「やめてくれ。柊元雪との惚気なんてされても困るよ」

今この段階で元雪様との交際は順調そのもの。何一つ困っていることも悩みもない、幸せな関係を続けられる。

「何であれ、ヒメが悩みを抱えているのなら、いつだつて私や柊元雪が力になるよ」

お姉様は本当に優しい人だ。

せめてその優しさをもう少し自分にも向けてあげて欲しい。

お昼時になると、私達はいつものように屋上へと集まる。

お昼ご飯を食べるには本当にいい場所だと思つ。

ただひとり、文句を言つ人はいるけども。

「うう、太陽の下にいると溶けそうだ。日陰とはいって、外で食べる
のは嫌になるな」

「どんだけ体力低下をさせてるんだよ、唯羽。元スポーツ少女だ
頑張れ。夏の暑さに負けるな」

「そのセリフを言われるのは一度田だけ、私が元スポーツ少女だ
としてもそれは過去の話だ。無駄に体力を一気に低下させる、引き
こもりをなめるなよ」

「じ、自信を持つて言わると何も言い返せねえ」

元雪様と唯羽お姉様は仲よさそうに話をしている。

「……お姉様達って仲が良いですよね？」

「友達だからな。仲がいいのは認めるよ」

あつさりと認められて、私は意外に感じた。
お姉様がこんなにも誰かに心を許すことなんて今までなかったの
に。

元雪様との友情、それが引きこもり脱出のきっかけになつたかも
しれない。

「……いただきます」

「おひ、今日は唯羽と和歌は同じ弁当なんだな？」

「はい、お姉様が作ってくれたんです」

お弁当の中身はいたって普通の料理が並ぶけれども、どの味も美味しい。

その味を元雪様も知つてゐるようで、「唯羽もす」「よな」と感心していた。

「……柊元雪、これをあげよ!」

お姉様は自分のお弁当箱から煮物を取り出して、元雪様に分け与える。

それは里芋の煮物……元雪様の好物だ。

「お、おおつー?」これは……いいのか? 食べちゃつていいのか?」

「ああ。元々、柊元雪のために作つてきただからな。好きなんだろう?」

お姉様は口元に笑みを浮かべてそう呟いた。

「ありがと、唯羽。ありがと、マジで感謝します

彼は美味しそうに食べ始める。

「うむ、相変わらず、美味しい。最高だぞ、唯羽つ。料理の腕前はホントに関心するわ」

「ふふつ。世辞として受け取つてもいい。柊元雪は単純だな

「それだけ美味いってことなんだよ。唯羽の煮物は本当に美味しいさる」

わ、私の元雪様が餌付けされてる！？
ダメ～っ、餌付けしちゃダメなの！

お姉様の料理は危険、勝手に元雪様に美味しい食べ物を『えちや
ダメ～。

「元雪様、そんなに美味しいですか？」

「ああ、これは美味しい。煮物としての完成度の高さ、味の染み込み
具合、柔らかさ、触感、味付け、全てが最高だ！」

……なんだか、ムツと胸に込み上げてくる感情がある。
この感情は以前に麻尋様と仲良くしてた光景を見たときに感じた
もの。

そう、“嫉妬”といつ名の2文字の感情が再び　。

「　へえ……それじゃ、元雪様。私の料理とどちらが美味しい
ですか？」

さりげない私の一言に元雪様の笑顔が突如、強張る。

「え、えっと……それは……どちらかと言えば、和歌といつか、唯
羽といつか」

「どちらですか？私の料理と、唯羽お姉様の料理。どちらが美味しい
ですか？はつきりしてください」

「あ、あのですね、和歌……これは……そういう勝負じゃなくて、
あの、うう……」

私の態度に顔色を変えてしまつ元雪様。

少しキツイことを言いすぎたかも知れない。

私は反省していると彼は私の手を握つて落ち込んだ表情で言つ。

「すまん、和歌。料理の腕は唯羽の方が上です。だからつてこれは浮気じやなくて、和歌の料理も十分美味しいんだけど、唯羽がそれを上回つてしまつているのを認めずに嘘をつく事も出来ず。それで和歌が一番だと言つてあげたい、愛がこもった料理が最高だと言いたい。でも、そんな嘘をついてしまうわけにもいかない。こんな情けない俺は彼氏として失格だと、そんな風に嫌わないでくれ。『めんなさい』

「…………」「めんなさい、元雪様。私が意地悪しそぎました。お願ひだから顔をあげてください。ね？私もお姉様の料理が私以上に美味しいのを分かつていますし、まだまだ勝てませんから。ちょっと嫉妬して意地悪してしまつたんです」

「和歌…………」んなダメ彼氏の俺を許してくれるのか？

「許すも何も元雪様は悪くありません。悪いのは私なんです。これからもつと頑張つてお姉様を追い越せるように努力します」

元雪様を傷つけてしまつた事を悔いる。

こんなにも彼は私を愛し、大事に思つてくれているのに。いつも、どうして、私は心が狭く、小さいんだろう……。

「おい、ふたりで変な空氣を作るな。気にすることはないぞ、ヒメ。柊元雪は簡単に餌付けされやすいだけだ」

「え、餌付け！？俺はシカせんべいを求める奈良のシカ扱いですか

！？

「……くすり」

唯羽お姉様は思わず笑みをこぼす。

「今の唯羽の笑みに傷ついたわ。俺、シカと同等ですか。シカせんべい、食べますか？」

落ち込む元雪様を慰める。

いつか、私も頑張って元雪様に認められる料理を作れるようになりたいな。

食後になつて、落ち着いたので、私はふたりに相談することにした。

「最近によく見る夢の話、あれは一体何なのか？」

「おふたりとも聞いて欲しいんです。私は最近、変な夢をよく見るんです」

「夢？具体的にはどんな夢なんだ、和歌？」

「……分かりません。ただ、誰かと一緒に桜を見ている、それだけの夢なんです。その相手が誰なのか、分かりません。ぼやけている感じがするんです。それでも、同じ夢を繰り返しみてしまつ、こういつのは何か特別なんでしょうか？」

「同じ夢を繰り返す、か。実は夢は現実と繋がっていることが多い。
何か意味があるのは間違いない」

お姉様は「他に何か覚えてる事はないか?」と問う。

「……いえ、他には何も。情報が少なすぎますよね。ですが、ただの偶然にしては不思議な気がして」

本当はその相手を私が愛してるらしい、と言つ感情がある。
でも、元雪様の手前、そう言つことは言えなかつた。
私が好きなのは元雪様だけなのに、どうして?

「なるほどな。今はまだ問題はないと思つ。ただ、その相手の顔が
はっきりと見えだすような事があれば言つてくれ。何となく検討は
ついてるが、今は言えないな。確証がない……それでも、何かヒメ
に起つてているのは間違いない」

お姉様はそう言つと元雪様に協力を求める。

「柊元雪、もしもの場合はお前も協力してくれ

「ん……俺にできる事があるのか?心霊系は残念ながら俺には靈感
がないぞ」

「心配するな。単純に柊元雪の存在が必要なんだ」

お姉様にはある程度の検討がついてるみたい。

「一体、それは何なんだろう?」

私が見続ける夢に何か大きな意味があるのかな。

【SHIDE・赤木影綱】

戦国時代、とある地方に赤木影綱（あかぎ かげつな）と書ひ若き武将がいた。

代々、当主に仕える名家の跡を継ぎ、戦においては負けを知らず、一五歳と言ひ年齢でその国の主君に認められるほどの男だった。

「まさに連戦連勝ですなあ、影綱殿」

「さすがは影綱殿。城を陥落させ、敵国の兵が蹴散らかされていくのには驚きました」

「御館様からも一田置かれる存在だ。次の戦も期待しておりますぞ」

周囲からの期待され、順調に出世する影綱。
だが、彼には思いもよらない出会いが待っていた。

……。

春の季節、隣国との戦が始まり、俺は焦りを感じていた。
思わぬ敵の奇襲に、本陣と分断されたのだ。

「……影綱殿！」

「ひりひり慌てて駆け寄る配下の者からの報告。」

それは俺達にとって、よくない報告だった。

「御館様と合流できない？それはどうしたことだ？」

「敵の奇襲を受けた本陣はこいつとの合流に遅れています。合流するには、三日ばかりかかるかと。我々には待機せよと御館様からの伝令が」

「三日か。仕方ない、この社の付近に陣を張り、御館様の本陣を待つ。すぐに支度せよ」

「まつー。」

隣国に攻め入るまでは良かつたが、頭を悩ませる問題が続く。御館様の主力となる戦力がなければ城は落とせない。

「待つしかないか……」

だが、既に敵国に侵入しているという危機感もある。

「警戒は怠るな。よいが、ここが敵国である事を忘れるなよ

俺は副官である狩野高久（かのう たかひさ）に視線を向ける。愚直とも言える生真面目な性格をしているが、意外にも情があり男だ。

俺の幼馴染でもあり、初陣以来、ずっと共に戦いを続いている。

「」の戦況をじっと見る、高久？」

「待てと言われたら、待つしかあるまい。それとも何か、影綱は御

館様を放つて先陣を切ると?」の戦力で城落としは無理だ

「今は待つのみ、か……」

「お主の性分は分かつている。今にも敵の城を落としたいのだう? 焦るな。ここは焦るべき時ではない。のんびりと桜見物でもしてようではないか」

陣を張った神社には綺麗な桜の木があつた。咲き乱れる桜の花びらが風に舞う。

「桜か……。もひ、そういう季節なのだな」

「戦ばかりしてると、そのようなことも忘れてします。時には休息も必要だ」

高久の言つ通り、ここで急いても意味はない。だが、新たな問題が俺達に迫る。

「……か、影綱殿!」

「なんだ、騒がしい。今度はなんだ?」

陣をしき終わり、高久と次なる城攻めの策を立てていた時のことが、慌てて社に入ってきた配下の者がとんでもない事を告げる。

「申し上げます。先程、斥候に出していた者達が戻つてまいりまして

「敵の兵でも見つけたか?」

「い、いえ、それが……敵国の姫を捕縛したとのことです」

「は？ 敵国の姫だと？」

俺と高久は顔を見合させて疑問に思つと、その場に向かつ事にした。

滞在している神社からさほど離れていない距離。

壊れた籠に乗つていたのは一人の少女が怯えていた。

歳はまだ一五、一六と言つたところか。

「は、離しなしさ」、無礼でしょ、う

「大人しくしろ……影綱殿、こちらがその姫です」

「……周囲の者は？」

辺りを見渡すが、男が一人倒れているだけで他に姿はない。

敵国とはいへ、この時期に姫を一人で行動させるはずもあるまい。

「従者の一人は切り捨てましたが、侍女達は逃げ出しました」

「己の命を賭して守るべき姫を放つて逃げるとは……愚かな」

「それまでの関係と“う”とか。影綱、ここは田立つ。とりあえず、本當に戻ろう」

高久に俺は頷くと女を連れて神社へと戻ることにした。

神社に戻り、華やかな着物姿の少女は俺達の前に座らせるといひに怯えた顔を見せた。

「某は赤木影綱だ。そなたの名は？」

「……私は紫です。貴方達は隣国の？」

「そうだ。今、まさに戦をしている相手だよ。紫姫か。敵方の姫が我らの手に落ちるとはな」

「わ、私をどうするおつもりですか？」

弱り切つた紫の言葉に高久は冷酷に答えた。

「分かりきつた事を言つな。見せしめに切り捨てる」

「……うつ……」

彼女の表情が強張り、恐怖を浮かべて涙を我慢しているようだ。切り捨てると言われば、女子供なら涙くらいみせるだろう。刀をちらつかせる高久に怯える紫姫。

「待て、高久。切り捨てるわけにはいかない。御館様の指示をあおぐ

「何を言つ、影綱？」「こがどこか分かつているのか。敵の領内だぞ？」

？」

「確かにこの姫を生かしておく理由はない。逆に奪い返そうとここが狙われるかもしれないからな。だが、我らの主君である御館様は義にお厚いお方。意見を聞かずに切り捨てるのはいかがなものか」

切り捨てるだけならすぐできるが、それでは意味がない。

「……ふう、好きにしろ。影綱、ただし、お主が責任を持つな、と」

「分かった。そうしよう。皆に伝えてくれ、この姫に一切手は出さないだまつたく、お主と言つ男は……。いや、そう言つ所が御館様に気に入られているのだらう。仕方あるまい。近くにもうひとつ社があつたな、そちらに移そう」

俺は捕られた紫姫を連れて、本営の隣にある社へ移した。社を閉めると、後の事は高久に任せて、俺は紫姫に向き合つ。

「紫姫と言つたな。大人しくしておけ。ここから逃げないと誓うなら命の保証はしよう」

「貴方様の主君は私を殺すつもりでしょ？」

「どうだらうな。御館様は無駄な殺生はするお方ではない。そちらとの交渉をするか、あるいは……。どちらにしても、死ぬことはないだらう。ただし、ここから逃げだせば、容赦なく切り捨てる。そうされたくなれば大人しくしておいてくれ」

彼女は驚いた顔をしていた。

「どうした？」

「敵将に捕まり、」この命、すぐにも奪われるものだと思つておつま
した。命を助けられるとは思いもしませんでしたから」「

「時と場合によるだろ？　あいにくといひかうに事情がある」

本陣との合流にまでは三日猶予がある。
生かすにしろ、殺すにしろ、結論を急ぐものではないだろう。

「……外に出でくる。見張りを付けている、くれぐれも外には出で
くれるなよ。俺は無意味にそなたを殺したくないのでな」

女子供が死ぬ所を見るのは嫌いだ、例え、戦だとしても。

「ま、待つてください」……影綱、様

紫姫は声を上擦らせて俺の名前を呼ぶ。

「貴方様はどうして、私を生かすのですか？」

「御館様の指示を待つ、それだけだ。深い理由などない」

「……貴方様は優しいお方なのですね」

なぜか、紫姫は微笑していた。

俺は内心を見すかされた気がして恥ずかしくなる。

「……そんなものではないわ」

俺は社を出ると見張りの者に「逃げたら斬れ」と告げておく。

あの様子なら逃げることはないと思いたいが……。

本當に使用している社に入ると高久が鋭い視線を向ける。

「どうこいつもりだ、影綱?」

「高久……、どう、とは何がだ」

「しらばつくれるな。敵国の姫を生かしておく理由はどこにある。御館様の指示? そんなものはいらない。余計な物を背負いこむことは我々の命を脅かすかもしない。あの女をここで切り捨ててればそれで済む話だ」

高久の考えは正しい。

危険を考えればそれも必要な事だろ?」

「影綱、あの女を生かした理由を答える」

「……理由? 同じ事をあの姫にも聞かれたがあつてないようなものだ」

「まさか惚れたのか?」

「違う。惚れたとか、そんな話ではない。余計な血を流さずに済むならそれがいい」

武士としての誇り、主君のため、国のために人を殺す事にためらいはない。

だが、無駄に血は流すべきではないと考えている。

「影綱。女子供を切りたくない気持ちも分かるが、時を選べ。お主のその優しさはいざれお主自身を殺すぞ」

「おーおー、高久。怖い事を言つな」

「冗談ではない。お主の心配をしておるんだ。影綱は武士にしては優しそうだ」

眞面目な高久の忠告に俺は頷いて答えた。

「心配は感謝するよ。俺は死ぬつもりはない、故郷に守るべき者もいるからな」

「そうだといいが。今回の一件は御館様に判断を任せよう。だが、影綱。あまりあの姫に深入りするなよ。義を重んじる御館様ではありえないと思いたいが、考え次第では……死ぬことになる」

「分かつていい。それは彼女自身も分かつていいだろう。しかし、御館様ならいい解決策を見出してくれるはずだ。それよりも俺達が考えるのはこれから先の戦の事だ」

俺達は地図を眺めながら、城落としの策を考えることにした。

「戻候の話ではこの辺りの地形は……」

御館様との合流の遅れ、目先に迫る戦、そして、捕らえた姫。いろいろと考えなければいけないことがだらけ。本当に頭の痛い問題だ。

「……まったく……ただの桜の花見をしている方がよほど気楽であ

つ
たな

度重なる悩みに思わずため息がもれた。
俺にとって長い二日が始まろうとしていた。

【SHIDE・紫】

隣国との戦が近付く春の最中。私、紫（ゆかり）は京の都から父上に急いで帰郷せよと命ぜられ、籠に乗つて帰つていた。

「……もう少し、京を楽しみたかったのに」

京は着物や装飾品、菓子に花や茶、あらゆるもののが揃つてゐる。京の都は華やかでとても素晴らしい時を満喫できた。

「戦が近いから戻つてここ、と血のまじりの戦いとかじり。京の都の方がよほど安心できるところだ」

戦は嫌いだ、町を焼き、民を苦しめるだけの意味のない行為だと考へてゐる。

「……ひ、姫様つーお逃げくださいー。」

それは突然の事だつた。

従者の騒ぐ声に慌てて籠をおつると周囲を武士達に囲まれていた。

「これは……野武士ー？」

「違います。あの旗は……くつ、姫様だけでも」

従者のひとりが刀を抜いて応戦する。

だが、無残にも切り捨てられてしまう。

「ひ、ひいいい！？」

その恐怖に怯えた他の従者や侍女たちが私を置いて逃げ出したのだ。

「え？」

思わぬ事に私は驚きを隠せなかつた。

「な、なぜ……？」

ありえるはずがない、裏切り。

私は皆にあっけなく見捨てられて彼らの前に置き去りにされた。

「そ、そんない、いやあああーつ！？」

私の周囲を囲む刀を持った武士達。

恐怖に足がすくみ、身動きができない。

そして、私は彼らに捕らわれてしまつたの。

古い神社に陣を敷いている彼らが隣国の敵の軍だと氣付いたのは旗印。

野武士の集団かと思つていたので、私は唇を噛みしめる。
私は自分の死を覚悟した。
まだ一五になつたばかりだというのに死にたくない。

それでも、敵軍に捕まれば命はないのは容易に想像できた。

だが、そんな私を救ってくれたのは敵将の影綱様だった。

彼は他の武士が私を切る事を進言しても、断つたのだ。

年齢は二十の前半と言つたところか。

若いながらもこれだけの隊を任せられている所をみると将としても偉い方らしい。

私の命は彼の主君次第、それまでは生かされる事になった。

「母上、父上……どうして、こんなことに……」

私は閉じ込められていた社の中でひとりで落ち込む。

「……それにしても、本陣との合流まで三日とは。その間に攻められたらどうする？」

社の外から兵の声が聞こえてくる。

私はそつと聞き耳を立てて彼らの会話を聞いてみる。

「その時はその時だらう。何にせよ、三日後に御館様と合流できれば、すぐにも本格的な戦にならう。影綱殿が城攻めの策を考えているそうだ。今のうちに休息できると思えば楽なものだ。ここのことより、戦続きだつたからな」

「なるほど。だが、影綱殿は甘い。姫を生かしておくれなど……」

「だが、無闇に殺せばいいものでもないだらう」

話声から察するに、彼の主君の本隊と合流待ちをしているらしい。ここはその別働隊の陣になるようだ。

「たつた三日、それが私の猶予……」

影綱様の主君が私を斬れと言われれば、私の命は潰えてしまつ。そう考えると怖くて、身体がすくむ。それでも、すぐに斬られなかつたのは幸いだ。

「……今は私にできることはない」

大人しくしている他にすることもない。

私は暇を持て余しながら、ただ社の中でうずくまつっていた。

夜になり、食事も終えて、私は捕らわれの身の自覚を強くしていった。

ひとりでいると、不安に押しつぶされそつになる。

るうそくの明かりだけに照らされる部屋。

怖さに負けそうになつていた、そんな時だった。

「……入るぞ、紫姫」

社に入ってきたのは影綱様だった。

先程の鎧姿ではなく、楽な着物姿の彼は社の扉を開けっぱなしにする。

「影綱様？」

「」のよつな場所では気が滅入る一方で、氣も休まぬだろう。それを無理強いさせている俺が言つ言葉ではないが

彼は酒を飲みながら、私の前に淡い朱色の袋を置く。

「それは籠の中から拾い集めてきたものだ。そなたのものであら」

「……これは、私のものです」

袋の中には京の都で買つたかんざしなどが入つていた。
そして、私の前にもうひとつ、箱を置いた。

「ひらは菓子のようだな。食べなければ食べると思ふ」

「は、はい」

菓子は京の都を出る時に買つたものだ。
甘い菓子が私は好きだった。
影綱様の顔色をつかがいながら口に含む。
甘く広がる味に私はホッとする。

「酒は飲まぬだらうと思ふ、茶を用意した」

「……いただきます」

考えてみれば、不思議な光景だと思つ。
酒を飲む敵将の前で、素直に菓子を食べる敵の姫。

「良い風だな……」

影綱様はそうつぶやいて酒を飲む。
社に吹き込んでくるそよ風。

田の前に広がるのは満開の桜の花だった。

ひらひらと花びらが舞う姿は、優美な世界を感じる。綺麗な夜桜に私は魅入られる。

「夜の花見をするには良い夜だ。そつは思わぬか？」

彼は私に向けて言葉を放つ。

影綱様は私にこの光景を見せるために?
そんなはずがない。

だって、彼は私とは敵対同士の存在。
本来であれば、命を奪われてもおかしくない状況。
それなのに、私を気にかけてくれているように、彼はその場にたたずむ。

「……綺麗な桜ですね」

「ああ。桜をこんなにもゆっくりと楽しむのは久しぶりだ」

影綱様は盃を傾けながら桜を見つめていた。

「なぜ、影綱様は私にこのような光景を見せようと思われたのですか。私は捕らわれの身、貴方様が気にすることはないでしょう。なのに、なぜ？」

「それこそ、そなたが気にする事ではない」

「分かりませぬ。貴方様は敵なのに、私にお優しくされる理由などないはず」

田の前にいる彼が考えている事が分からない。

私を殺す気もなく、生かしている事すらも。
彼はそっと私の髪に触れてくる。

影綱様のその手はとても温かいものだつた。

「……人とは呆氣なく死ぬものだ。この桜の花のように、命すらも
儚く散つてしまつ。戦ばかりしてきた俺の人生も、いつかは死ぬ時
が訪れよう。別に死は恐ろしくはない。大切なのは人として、武士
として、どう生きたかということだ」

「……どう、生きたか」

「女子であるそなには分からぬだろうがな。俺は武士としての誇
りを持つて死にたい。最後のその時が来るまでな。だが、それゆえ
に今と言う時を楽しむべきだとも考えている。敵国の姫と桜を眺め
るのもまた一興だろ」

私に微笑む影綱様につられて私も笑みを浮かべた。

彼という人となりが少し分かった。

影綱様は誰よりもお優しい人なのだ、と。

「少し、冷えたな……春とはいえ、夜はまだ冷える」

彼はもう一度、私の髪を撫でる。

「……風邪をひかぬようこしろ」

私は去りゆく彼の後姿を見いる。

その優しさに惹かれる自分がいる事に気付く。

「の方は敵将、それなのに……」

心の奥底から何かが湧き上がるのを感じていた。

心細さを忘れさせてくれるような温もり。

まだ恋を知らぬ私に、運命は不思議な縁を与える。

赤木影綱。

私とは敵対する者同士。

それなのに、なぜ……私はこんなにも彼に惹かれてしまうの？

第44章・夢の在り処

【SHIDE・椎名和歌】

夢に出てくるあの人は誰なの？

毎日のよつに夢に見る光景、誰かと共に桜を眺めている夢だ。でも、その夢はある田を境に変わり始める。

私は泣いていた。

桜の木の下で倒れる男の人に抱きつくような形で泣いている。どうして、こんなにも胸が締め付けられるほどに悲しいの？

「いやです、逝かないでください……あっ……」

ゆつくつと田を瞑る彼は深手を負つた侍のよつに見える。今までにはつきりとその人の事が誰なのか分からなかつた。けれど、その田の夢はいつもよりもはつきりと分かる。

彼は侍姿をしていたの。

そして、彼に泣き叫んでいる私もまた着物姿だった。

「…………ゆかり…………泣かないでくれ」

ゆかり？

彼は私をそう呼ぶと、そつと腕で抱きしめる。

「俺はそなたに巡り合えてよかつたと思つていい」

「できれば次はこのよつな形で会いたくはない。できる限りなら、

「…………」

そなたの傍に共にい続けられる関係でいられる事を望む

私は涙ぐみながら叫んだ、彼の名前を。

「私も、同じ想いです。影綱様」

影綱？

初めて彼の名前を知り、私は衝撃を受けたの。だつて、今の私は紫姫様で、目の前にいる人こそが影綱様。これは“恋月桜花”の夢なんだつて。

「影綱様……うつ……」

暗転していく世界、私は夢から覚める瞬間まで不思議な感覚を抱き続けていた。

「あつ……！？」

ハツと目が覚めて、私はベッドから軽く起きあがる。また夢を見ていた。

それでも、いつもと違うのは夢の記憶を覚えている事だ。

「私はあの方を影綱様って呼んでた。それって、どうこうこと？」

毎夜のように見続けてた不思議な夢。

それが“恋月桜花”的お話そつくりだつたんだもの。

矢傷を受けて亡くなる影綱様、それを最後まで看取る紫姫様。

互いに愛しあいながらも敵国同士の関係ゆえに結ばれなかつた悲恋。

その物語をこんな風に夢に見るなんて変だ。

「あれ？」

私は自分の瞳が涙でうるんでいる事に気付く。
自分でもきづかぬうちに涙を流していたみたい。
涙をぬぐいながら私は起き上がる。

「……唯羽お姉様、まだ起きてるかな」

時計を見れば深夜の1時過ぎ。
お姉様はきっとまだネットゲをして起きてこるのはず。
学校に行くようになつてもゲームをする日々をやめたわけじゃないもの。

私は相談をするために部屋を出て、彼女の部屋の扉をノックする。

「お姉様、和歌です。深夜ですけど、いいですか？」

「ヒメ? どうしたんだい? 入つてくれ

部屋に入るとお姉様はいつものように布団に寝転がりながら、畳の上に置いたパソコンの画面を眺めていたの。

「またゲームですか?」

「心配せぬとも、ちゃんと睡眠時間を決めてやつているよ。適度にする程度なら別にいいって、柊元雪からも言われてゐるし。それで、ヒメは何かあったのかな?」

「……お話したい事があるんですね。いいですか？」

お姉様は私の態度から察してくれたのか、ゲームをやめて「ひひひ
に向き合ってくれる。

「大事な話があるようだね。いいよ、この部屋は汚いし、外に出よ
うか」

お姉様……自分の部屋が汚いと分かっているなら掃除くらいして
ください。

私はお姉様と共に深夜の神社の方にまでやつてくれる。
この時間なら参拝客は滅多にいない。

「さすがに誰もいませんね」

「たまに夜に参る人もいるみたいだ。丑の刻参りにな」

「お、お姉様、変な事を言わないでください」

いきなり呪いの話に変わつてびっくりする。
あまり怖い話は得意じゃないもの。

「うちの神社の話だが、子供の頃に変な女性が奥の森で金づちを持つて釘をさしてたのを見た事がある。ここにもそういう類の人は稀に来るんじゃないかな」

「……えっと、『冗談ですよね？』

「まあ、」この話はおいておいた。それで、ヒメの話と言つのは？」

「うう、変な所で話題を変えられてしまった。

そちらの方が気になるんですけど。

私はお姉様に夢の話をすることにしたの。

誰もいない境内、私達は神社の階段に腰をかけながら話をする。

「……夢を見たんです」

「また例の夢？」

「ええ、でも、今日は違いました。はっきりと相手の顔と名前が分かつたんです」

お姉様の顔色が変わる。

それはどこか焦りのよくなものが感じられた。

「……そうか。前にも言ったはずだ、ヒメ。はっきりと見えるようになつてきたり、それは問題かもしれない、と」

「はい。だから、お姉様に相談したんです。その夢で見た相手、彼は……」

「……赤木影綱、恋月桜花の影綱だろ？？」

「えー？ ど、どうして分かるんですか、お姉様？」

私は驚きを隠せずに、お姉様の顔を見つめた。

「……なるほどな。やはり、影綱の夢だつたか」

お姉様はなぜ、私の夢の相手が影綱様だと気が付いていたの？

「私は恋月桜花のお話が好きですから、それを夢に見ただけですよね」

「違つんだ。ヒメ、その夢は見るべくして見たものだ」

「え？」

彼女は小さな声で「これが運命か」と呟いた。
私は理解できずに戸惑つばかり。

「お姉様？」

「ヒメは小さな頃から恋月桜花が好きだ。あの物語に惹かれ、この椎名神社に異常なまでに執着心がある。ここを守りつと婚約者まで選んだくらいだからな」

「うう、それはそうですけど」

それだけ聞いてると私がちょっと変わった子みみたいな気がする。
恋月桜花、数百年前にあつた悲恋の物語を好きなワケ。

「ヒメ。自分で不思議に思つたことはないか？」「ううして、自分はこれまでに“恋月桜花”に惹かれて、この神社を愛し守ろうとしてるんだって」

「不思議に思ったことはありません。恋月桜花が好きなのも、この神社を大切に思う事も、自分にとっては自然の事です」

「それだ、それが問題とも言える。これから話す事は落ち着いて聞いて欲しい。ヒメはそれらを不思議と思わない理由。それはヒメの魂が望んでいることなんだ」

思わぬ言葉を口にするお姉様。

「私の魂？」

「……何をバカな事を、とは思わないで聞いてくれ」

真面目な顔をするお姉様にそんな事は言えない。
だって、お姉様は魂の色が見えるんだもの。

「ヒメ。今まで黙っていた事があるんだ」

「何ですか？」

私は緊張した面持ちで彼女に向き合つと、衝撃的な事を告げたの。

「　ヒメの前世は恋月桜花の紫姫なんだ」

「私が、紫姫……？」

「そうだ。ヒメがそこまでこの物語に固執するのも、神社を守りたい気持ちもすべてはそこから影響されてる。夢を見たのも当然なんだ」

「……信じられません。私の前世が紫姫様なんて」

彼女が嘘を言つてゐるよつとも、面白がつてからかつてゐるよつとも思えない。

でも、お姉様が言つた事が本当だつて信じるのはできない。
私は自分の手が震えている事に気付く。

「夢で見た光景は、きっと紫姫の記憶だ」

「ち、違います、絶対に違うんです」

「ヒメ……」

私は自分がそうであると認めたくなくて思わず語氣を強くしてしまつ。

「私は以前から氣づいていた。私が和歌をヒメと呼ぶ理由もそれに由来する」

「そんな!? だつてお姉様にそう呼ばれたのはもつと小さな頃です
よ?」

「初めて和歌と会つた時、私は魂の色が不思議な色をしてると氣付いたからな」

そんな昔からお姉様は……。

昔から不思議な雰囲気を持つていたお姉様。
ヒメと呼ばれ続けてきた事に特に疑問は抱いていなかつた。
でも、混乱していた私は“お姉様”すら“否定”してしまつ。

「そんなのはお姉様の妄想です、現実的じゃないです」

私は彼女を“否定”する、そうしないとどうにかなってしまうから。

「お姉様。私は紫姫様ではありません。ぜ、前世とか信じませんから！」

「……以前に柊元雪と語り合っていたよね。もしも、私達の前世が……と」

「それはただのロマンチックな妄想ですっ。恋月桜花みたいに互いを強く想いあえるような恋愛がしたいっ、ただ、それだけなんです。私自身が紫姫なんて事はありません」

私は立ちあがると自分の指先の震えが止まらない。

「……お姉様。私は前世なんて信じていません。だから、私は紫姫じゃありません。この夢も、ただの変な妄想みたいなもの。恋月桜花を強く意識しすぎてるだけです。きっと、そうなんです。大体、前世なんてこの世にはありません！」

「紫姫ではない事を信じられないのは仕方ない。けれど、前世すらも否定するのかい？」

私が否定する言葉に寂しそうな顔を見せるお姉様。

「ありえません。お姉様の言つ不可思議な話は面白いですね。私の前世が紫姫？そんな話を信じられると思いますか？そもそも、前世

や来世なんてありえるはずがないです」

お姉様は静かに「そうか」と頷いた。

私は自分が今言った言葉のひどさに気付いた。

「ヒメがそう思いたいのなら、それでいい。私は事実を述べたけども、その事実をどう受け止めるかはヒメ次第だ。私の妄言だと言い張るのならそれでもいい。当然だ、どう現実を受け止め考えるのかは自由なんだから」

「…………」「めんなさい。お姉様、私から相談したのに」

「別にかまわないさ。前世も来世も、ありえないと思つ人間はどこにでもいる。でもね、ヒメ。私は少しばかりショックでもある」

彼女はそつと私の肩を叩いて立ち上がった。

「恋月桜花、紫姫様は影綱の死の間際に来世での再会と恋愛成就を願つた。その想いすらも、ヒメは否定する事になる。ヒメだけはそうしてほしくなかつた」

「…………あつ…………」

失望感、お姉様の表情は失望感で溢れている。

そうだ、紫姫様と影綱様の恋の結末。

来世の恋愛成就を願い合つたことすら私は否定してしまつていてる。

「ヒメ。今、私が言つたことは忘れてくれていい。ただの妄言だ」

「ち、違うんです、私はそう言つてもつじじゃなくて……」

「ヒメの言ひ通り、前世なんていのよつにはない。特別だと感じる縁も、ただの偶然にすぎない。夢も恋月桜花に影響されて見ていただけだ。何も不思議な事はない。気にせずに落ちついたら眠ると良い。きっと普段のような良い夢を見られる」

「お、お姉様……！？」

お姉様に拒絶された、突き放されたような感覚に私は怖くなる。私の心配をしてくれた彼女に、私が変な事を言ってしまったからだ。

「お姉様、私、私はっ……！」

お姉様の寝巻である浴衣のすそを掴んで引きとめる。けれど、彼女は優しい微笑みを浮かべてから、

「　おやすみ、『和歌』。良い夢を」

ヒメと呼んでいたはずのお姉様から和歌と名前で呼ばれた事に違和感がある。

「唯羽……お姉様……？」

突き放された、見放された、そんな感じを受けた。

お姉様の言葉を、想いを、すべてを、信じず否定してしまったから？

私はお姉様が立ち去る後姿を見ているだけしかできなかつたの。

【SIDE・柊元雪】

人の雰囲気つて目に見えて感じられるものだ。

落ち込んでたり、険悪だつたり、幸せそそうだつたり。

……今朝からの和歌と唯羽の雰囲気はこれまでにないほどに暗いものだつた。

『「めんなさい。元雪様、今日の昼食は一緒に食べられません』

そんなメールが和歌から届いたので、余計に怪しい。

今日は屋上ではなく、教室で唯羽とふたりでお弁当を食べていた。

「なあ、唯羽?ちょっとといいか?」

「ん?味付けが気に入らなかつたか?」

「いえ、煮物の味付けは大変美味しいわですよ」

毎回、俺のために唯羽は煮物を作ってくれて俺にくれるのだ。

本日はシイタケの煮物、これもまた美味である。

味付けのセンスが抜群、本当に唯羽の料理の腕はすばらしい。

そこに一切の文句もなく、感謝してます。

「そうじゃなくて、和歌と何があつただろ?」

「あつたと言えば、あつたし。なかつたと言えばない。ヒメは私を嫌つた、それだけだ」

「嫌つたつて喧嘩でもしたのか？」

首を横に振る唯羽。

「喧嘩したつもりはないよ。でも、それに似た感じではあるかもしれない」

「悩みがあるなら俺に相談しろよ。友達だろ、俺達は……」

「……柊元雪」

彼女は困った顔を見せている。

唯羽って人に頼つたり、甘えたりするのが苦手だ。

何でも一人で背負いこもうとする所がある。

友達として、俺はそういう唯羽が心配なのだ。

「本当にお前と言つ奴は不思議な奴だな」

微笑する唯羽は食事を終えてから昨夜の出来事を語り始める。昨夜、和歌が見た夢の正体がはつきりした。

恋月桜花、和歌は前世の記憶を夢で見ていたらしい。

問題はここからだ、和歌に対して唯羽は前世が紫姫である事を告げた。

だが、唯羽の言葉に和歌は完全な拒絶と否定。

自らの前世など信じない。

そう、唯羽に言い放つた和歌。

「前世を信じろ、といきなり言われて信じる人間は多くはない。ヒメは信じなかつた。私も話が急すぎたと反省している。不思議な夢

「前世の記憶だと言われて素直に信じるわけもないからな」

「俺は信じてるぞ？俺が影綱の生まれ変わりだって、唯羽が言った」と

「

「ふつ……柊元雪は単純だからな

そんな悪態をつきながらも唯羽はどこか嬉しそうだった。和歌が前世を信じなかつたのは意外でもあつた。

あの子ならそういうものを信じていい見えたからだ。

「紫姫が好きな和歌なら喜ぶと思つたが

「……好きゆえに、だよ。ヒメにてとて紫姫が自分の前世だと信じたくない気持ちがあるんだろう。誰もが自らの前世など向き合いつゝは勇気がいる事だ。私には分かる、あの子の気持ちが分かるんだ」

「自分の前世を信じたくないか

唯羽もそれが分かると言つた。

つまり彼女も自分の前世が何か分かっているのか？

「……変な事を聞くけどな、唯羽は自分の前世を知つていいの？」

「知つているよ。私の前世は……数百年前のフランス、パリの大富豪の娘だった

「マジで！？フランス人ですか！？」

「かの有名なナポレオンが活躍した時代。カトリー・ヌと云う見目美

しい女性だ」

唯羽の前世は日本人ですらなく、しかも富豪の娘と来た。うむ……カトリー・ヌという金髪美人のお嬢様だったのか。

「つて、それはいくらなんでも嘘だろ?」

「人の前世を疑うとはひどい奴だ。何を不思議に思う? 当時に身にまとつていた高貴な雰囲気が現世の私にもあるだろ?」

「いや、全然。ネトゲのやり過ぎで負のオーラなら伝わるが。夜ふかし過ぎだろ?」

俺の言葉に唯羽は「……ふ、負のオーラか」と凹んだ顔を見せる。
……まずい、俺も彼女を傷つけてしまったのだろうか。

「ゆ、唯羽。心配するな、冗談だ。フランスの大富豪の娘の前世のオーラは伝わるぞ?」

「慰めはいい。所詮、前世は前世にすぎない。私にもカトリー・ヌと呼ばれた前世があつた事だけは覚えておいてくれ」

「おいおい、地味に落ち込んでるんだろ?
彼女は見た目以上に弱い所がある。

今回の事もそうだ。

和歌が前世を信じてくれない。
それにショックを受けているに違いない。

「私の前世はともかく、柊元雪とヒメのことが問題だよ。あの子が自らを紫姫だと受け入れない限りは夢を見つづける」

「その夢なんだが、どうすれば見なくなるんだ？」

「原因が今回のはつきりとしている。何と説明すれば分かりやすかな。紫姫の魂が影綱の魂に会いたがっていると言えばいいのか。柊元雪とヒメ、ふたりが出会った事により、魂同士が強く引き付けあつていいるんだ」

「引き付けあつた今になつてか？」

「俺達が出会つてからもうすぐ3週間程度にならつとしている。だが、ここにきて夢を見続ける理由は何だろつか。

「ただ、お前とヒメが出会うだけじゃダメなんだ。ヒメが見る夢はその影響のためだよ。ヒメが紫姫の魂を受け継いでいると、己の前世であることを認めてもらわなければいけない。今の状況からみれば難しいけどね」

「……和歌に夢を見続ける事をやめさせないとどうなる？」

「別に。どうにもならない。ただの自分の前世の記憶だ。現状維持で和歌に悪影響やら、どうにかなる心配はない。ただ、恋月桜花の話をお前も知つていいだろ？ 和歌の様子だと、影綱の死の間際の夢を見ているのかもしない」

「なるほど。毎夜見る夢にしては気持ちのいいものではないな

和歌にとっては辛い夢だわ。いつまでも見続けるのは心苦しいはずだ。

「……確實ではないが、夢を見ないようにするにはどうするのが方法はある。でも、それにはヒメ自身の協力が不可欠だ」

「几の前世に向かわなければ何も解決しないってことか。俺からも話してみるか」

「説得するのはいいが、影綱である事は伏せておけ。いいな？」

唯羽は念を押してくるので俺は頷いておく。

「恋月桜花の話が好きだから、ヒメなら受け入れてくれると思ったんだがな。私の見込み違いだったようだ」

彼女は視線を俯かせて呟いた。

落ち込んだ唯羽の様子を見ていると、慰めてやりたくなる。

「和歌と喧嘩なんて珍しいのか？」

「した事なんて一度もなかつたよ。うちの妹達と違い、あの子は昔から素直でね。魂の色が見える私を特別扱いせずに付き合つてくれていた。ある意味、本当の姉妹のように付き合つてきただんだ」

「姉妹の喧嘩か。今回の事はどうちらが悪いワケでもない。話せば分かりあえるはずだ」

和歌も彼女をお姉様と慕うくらいに仲がいいんだろう。

唯羽と和歌、すれ違う2人の心。

ただ、和歌は理解できなかつただけではないだろうか。

俺の場合は信じるに足りつる出来事があつたから、自分の前世を信じた。

けれども、普通の人間がいきなり「お前の前世がどひのひつ」と言われて、すぐに信じるのは難しいと感づつ。

「元気出せよ、唯羽。お前は悪くない」

「格元雪……」

「お前はホントに人に頼らないよな。もつもつと俺に甘えていいんだぞ。友達に甘えるのは普通のことだ。俺じゃダメか?男としても、友達としても、頼ってくれよ。一人で何でも抱え込むんじゃない」

俺は唯羽の頭を撫でながら慰めてやる。

茶髪に染めた髪に手で触れるとくすぐったそつにする。

「や、やめひ。恥ずかしいじやないか」

唯羽の頬が薄く赤く染まつた。

……思つていた以上に可愛いんですけど。

普段は無表情に近く、感情が表にでない子だけに照れる姿は新鮮だ。

「…………、お前は時々、変に大胆な男だな」

「唯羽ひや、照れると可愛い所もあるな」

「なつ……失礼な、私もこいつ見えても女だ。恥じらひこともある」

彼女は唇を尖らせて見せる。

だが、落ち込んでいた気持ちが多少は楽になつたのか、

「……ありがとう、柊元雪。少しだけ元気は出た。ヒメとほむつ一度、話し合つてみる」

「ああ。俺も力になるよ」

一人で抱え込まずに俺も積極的に力になつてあげないとな。

唯羽は優しい、それゆえに苦しむ事もある。

今回も善意で和歌の相談にのつてあげたつもりだったはずなんだ。

「それにしても、ヒメが夢にまで見るとはな。柊元雪は最近、変な夢を見るのか？」

「普通の夢しかみないよ」

「それはよかつた。ちなみに男の子は常にエッチな夢を見ると云つのは本当か？」

「常じやなくて、たまにあるけど……って、変な事を言わせるなー」

いつも通りの唯羽にからかわれてしまつた。

「ぐすつ。本当に柊元雪はからかいがいのある面白い男だね。私はそういう所が好きだよ」

「……からかわれる俺は微妙なのだが

ほんの少しでも、俺と話していく元気が出たのは良いことだな。
俺との話を終えた彼女はクラスメイトと会話をし始める。
最近の唯羽はずいぶんとクラスにも馴染んできたな。

「おいおい、柊。見せつけてくれるじゃないか」

「は？ 何が？」

離れていた黒沢がにやけ顔で俺に詰め寄る。

「ここが教室だと言うのに、さも斷に見せつけるような甘つたることをしやがって。見てるクラスメイト達の方が赤面しそうだ。まったく、あんな美人相手にけしからん。恋人がいるのに浮氣か。それとも二股ルートか？」

「唯羽のことか？ 違うって、ただ、ちょっとした事情で落ち込んでから慰めただけだ。俺と唯羽は友達関係でそれ以上ではない。変な噂を流すんじゃないぞ。特に下級生には流さないでください」

「ははっ。年下の恋人にバレるのが怖いんだろ。残念だがどうかな？ 以前から篠原さんは柊と仲がいい。それが今回の事もあれば、噂になるのも当然だろ。俺じゃなくても、他の誰かが流すかもな」

お願ひだからやめてくれ。

和歌の耳に余計な噂が入らない事を祈りう、うん……。

【SIDE・赤木影綱】

敵国の姫、紫姫を捕らえた日の翌日。

御館様との合流まで残り一日。

俺は朝から紫姫を閉じ込めていた社にいた。何もすることができないので、紫姫の話相手をしていたのだ。心細かろうと言う理由の他に、逃亡されても困るゆえに見張つているとと言う理由もある。

幸いにも向こうも俺に対しては警戒心を緩めていた。

紫姫の顔色は捕まつた時よりも遙かに良い。

「一晩たつたが、逃亡の気配がないようで何よりだ」

「私は逃げたりしません。ここで逃げても、捕まれば貴方達に殺されてしまう。私は生きたいのです。まだ死にたくありませんから、今は影綱様達に捕まつておく事にします。この先を生き残れるかは私の運次第でしょうが」

「賢明だな。俺もそなたを死なせたくない。大人しくしていれば、手荒な事もせぬ」

御館様の気持ち次第で彼女の命運は決まる。

交渉材料、人質、様々な思惑があるだろうが、命だけは救つて見せよう。

「あの、”そなた”ではなく名前でもうえませんか？」

紫姫は赤面ながらに小さな声で囁つ。

「そなたを名で呼べと？」

「私はそちらの方がよいのです。紫と呼んでもらいたいのです」

敵の本陣の真ん中、孤独ゆえに親近感を抱かれたようだ。
互いに敵同士ながら、これほど親しくして良いのかと思つ。
高久の警告、我らは近づきすぎているのではないか。
そのような事も考えはしたが……。

「影綱様……いけませんか？」

そのような愛らしげ瞳で言われてしまつぱりとも拒絕はできな
い。
色仕掛けをするほどの年齢でもなく、純粹に俺を信用しての行動
だろうか。
まつたく、彼女と話をしているとつこお互いの立場を忘れてしま
う。

「分かつた。そなたがいいのならば、紫と呼ぶ事にしよう

「はいっ」

たつた一言で紫には微笑みが浮かぶ。
まだ歳も一五、幼さの残る所があるみつだ。

「影綱様はかなりの戦上手だそうですね。外の人気が話しているのを
聞きました」

「我が赤木家は代々、御館様に仕える家臣の一族だ。いつのまにか、自然に俺も戦の場にいた」

一五での初陣以来、戦に身を置いている。

父上は御館様の重臣ゆえに、俺も戦で活躍しようと躍起になつていた。

御館様に、父上に、周囲に認めてもらいたくて、必死に戦を続けてきた十年。

まだまだ若輩ながらも、それなりに俺も戦では評価をされている。

「私は戦は好みません。人が人を殺し合ひ、それをどうしても良しとは思えないのです」

「……姫としての考えならばそれも仕方あるまい。だが、俺は武士だ。武士は戦の中でしか生きていけぬ」

平穏の世ならば、戦に命を賭ける事もないのだろうが。

「(+)の乱世、平穏などどこにもない。戦のない場所などない」

「それでも、私は……この田か、そのような日が来る事を望みます」

紫はこじらを真正面から向き合い囁いた。

戦のない世など、いつか来るのだろうか。
想像すらつかぬ。

我らが語りあつてゐると、高久が社に顔をのぞかせる。

「……影綱、よいか?」

「高久か。すぐに行く。紫よ、俺はしばし外す

「はー……」

寂しそうに顔色を曇らせる紫。

この狭い社にひとりで閉じ込められていては気も滅入る。

「少し待て」

俺は刀を抜くと外の桜の枝を切る。

幾つもの小さな桜の花が咲く枝を俺は紫に手渡した。

「……紫。これでも眺めて気を休めてあると……」

「とても美しい桜の花ですね……感謝します」

桜の枝を手にして嬉しそうに笑う彼女。

花を見ていれば多少は気がまぎれるであろう。

社から出ると高久に呆れられてしまう。

「……近付き過ぎるな、と言つたはずだが?」

「自分でも不思議なのだ。なぜか、あの者を放つてはおけない」

「影綱には妹がおつただろ?その妹と重ねあわせているのではない
か」

「どうなのだうつな。自分でもこの気持ちは分からぬのだ」

同じ歳いりの妹はあるが、それだけではない気がする。

何か田には見えないものに惹かれておるのやもしけぬ。

「それで話とは何だ？今はすべき事もないだろ？」

「御館様についてだ。どうやら、御館様は隣国とこれ以上の戦は行わないかもしだれぬ、といつて耳にしてな。御館様は隣国と和睦を結ぼうとしているようだ」

「和睦？分からぬな、このよつな時期に和平など結んでどうするへ？」

「この世は戦の世、隣国を力づくで支配してではなく、和睦という意味は大きい。

御館様は戦力を温存し、別の相手と戦をするおつもりか。

「影綱も噂には聞き及んでいるはずだ。勢いを増しておる織田勢のことを見たまふ」

「尾張の織田信長、か。織田勢がこちらに来るのか？」

「そのよつだ。織田勢と言えば各地の武将を次々と討ち、攻め滅ぼしておる。我らが御館様は隣国と同盟し、織田勢を迎撃つ策を立てておるのも知れぬ。各地でも織田を包围する動きがあるようだ」

名のある大名同士が手を組み合ひ、共に織田を討つか。

今回の出陣にそのよつな意味合ひがあつたとは……。

「同盟に応じれば和睦、応じねば戦と言う流れになるのは明白。何にせよ、御館様も隣国同士の戦を長引かせるつもりはないのである

「

「なるほど。そういう事なら納得もこゝへ

どうにも普段とは違つ戦の氣配がしていたが、そのよつた意味があつたとは……。

顔をしかめる俺に高久は現実を突き付ける。

「……やつなると、わざに、あの紫姫の遭遇については厳しくなつたな」「…………やつなるな」

同盟のために、和睦の条件を交渉する上で紫姫の身柄を拘束しておるのは都合がよい。

いかに義にお厚い御館様と言えど、利用するべきものは利用するだらう。

紫の事を憂い、俺はため息をつく。

「だから、先にお主には申したであつた。あの女子には深入りするなど」

「……分かつてある」

「それでも放つておけないのが影綱か。一度しか言わぬ。あの者には深いりするな。そもそも、お主には……」

「高久よ。だとしても、俺はあの子の傍にいてやりたいのだ」

紫の寂しげな顔を見るのは心が苦しい。

「呆れて言葉も出ぬわ。まつたく……敵国の姫に心を奪われおつて

「わかつて意味ではない」

「いいや、そうだ。影綱、お主はあるの女に惚れておるのだろう? 状況次第では命を落とすかもしけぬ相手を好いてビリする。まあ、御館様が隣国との和睦を結べば、敵国同士の者として敵対することはないやもしけぬが」

和睦、今はその二文字が己の胸に強くわいてくる。

「戦ではなく話し合いで和平がなれば、か」

「……あくまでも尊は尊、現状では戦をするために我らはここでいる。それを忘れるな」

高久は肩をすくめると、「また姫の所に戻つてやれ」と呟いた。幼馴染ゆえの氣づかいに感謝する。

「……かたじけない」

紫の傍にあると、心が和むのだ。

俺は紫に惹かれているのかもしれない。

その夜も、酒を飲みながら俺は紫と共に社にいた。
社の外を眺めながら紫は不思議そつて尋ねる。

「何やう今宵は賑やかですね?」

「高久が皆に酒をふるまい、花見をしておるようだからな」

「」の社から離れた所には桜並木があり、そちらで皆は花見をしている。

あちらこちらで笑い声がしているのがこぢらにも聞こえる。

戦と言つ緊張感の中での、わずかな癒しと言ひべきか。

明日の夕刻には御館様との合流もある。

今宵だけでも気を休めよと高久が考えついたものだ。

「高久様が？」

「意外であろう？あ奴は堅物に見えるが、人情に厚い男もある。兵は休める時には休めさせるのも必要だ。いつの戦でも、俺は高久に支えられておる」

「高久様を信頼されておられるのですね」

「高久とは幼馴染ゆえに、ずっとと共にあつた仲だ。時に俺にも厳しい事を言う事もあるが、誰よりも信頼できる親友だ。高久は御館様に認められて、智将としての器がある。それゆえに、高久は俺の下にいつまでもいるべきではないとも思つてゐる」

俺は酒の入つた盃に口をつける。

満開の夜桜を眺めながら、俺は隣の紫に言つた。

「……紫、今度はお主の話を聞かせてくれ」

「私の話ですか？私はつい先日まで京の都で暮らしておりました

「京にいたのか。京の都はどうだつた？」

「人々で賑わい、不思議な魅力にあふれておりました。京の都は本当にいい町でした」

楽しそうに京での思い出を語る紫。

もし、俺達に捕まらなければ紫には姫としての華やかな生活をしていたのだろう。

俺は紫の笑顔を守つてやりたい。

敵、味方と言つ事を関係なく、俺は紫を……。

「影綱様？ どうなさいました？」

「……紫、いらっしゃいに来い」

そつと、俺は紫の身体を引き寄せた。

「か、影綱様？」

慌てふためき顔を赤く染める紫。

「 紫、今宵だけで良い。夢を見させてくれ」

俺はこの子を好いてしまった。

かけがえのない愛しさを抱いている……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9045w/>

恋月桜花～巫女と花嫁と大和撫子～

2011年10月10日15時17分発行